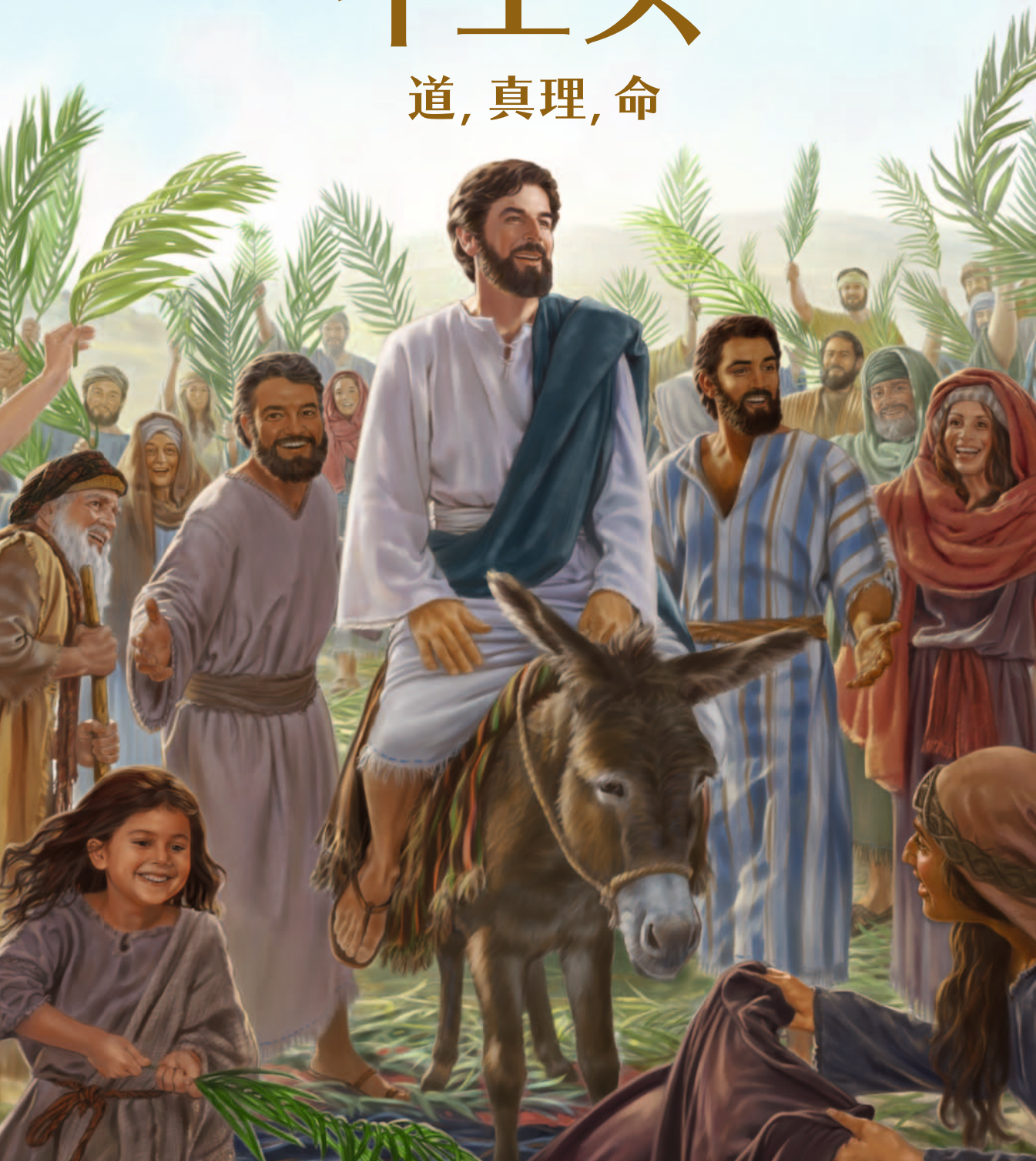


# イエス

道, 真理, 命









この出版物は販売を目的としたものではありません。世界的な聖書教育活動の一環として提供されており、その活動は自発的な寄付によって支えられています。

寄付をしたいと思われる方は [donate.jw.org](https://donate.jw.org) をご覧ください。

聖句は、特に注記がない限り、現代語による「新世界訳聖書」改訂版(英語)からの翻訳です。

イエス 道、真理、命  
Jesus—The Way, the Truth, the Life  
2020年12月印刷版  
Japanese (jy-J)

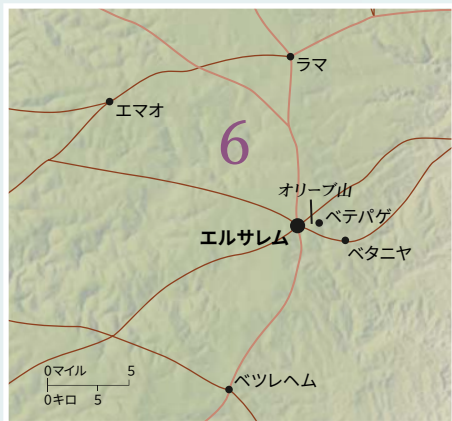
© 2017  
WATCH TOWER BIBLE AND TRACT  
SOCIETY OF PENNSYLVANIA

発行者  
ものみの塔聖書冊子協会  
Made in Japan

# イエスが生活し、 教えた地域







エルサレム周辺

## イエスが生活し、 教えた地域





# イエス

## 道, 真理, 命

イエスの地上での生涯しょうがいと伝道の記述は、  
イエスがどんな人だったのか、何を教え何を行ったのかを明らかにしています。  
私たちはそこから多くのことを学べます。





# 目次

1	伝道を開始するまで	ページ
1	神からの2つの知らせ	10
2	イエスは生まれる前から敬意を払われる	12
3	道を整える者が生まれる	14
4	結婚していないのに妊娠しているマリア	16
5	イエスはいつ、どこで生まれたか	18
6	約束されていた子	20
7	占星術師たちがイエスに会いにやってくる	22
8	邪悪な支配者から逃げる	24
9	ナザレで成長する	26
10	イエスの家族はエルサレムに旅をする	28
11	バプテストのヨハネは道を整える	30
2	伝道を開始する	
12	バプテスマを受ける	34
13	誘惑に抵抗したイエスから学ぶ	36
14	人々を弟子とする活動を始める	38
15	最初の奇跡を行う	40
16	真の崇拜への熱心さを示す	42
17	夜にニコデモを教える	44
18	イエスは盛んになっていき、ヨハネは衰えていく	46
19	サマリア人の女性を教える	48
3	ガリラヤでの大規模な伝道活動	
20	カナでの2度目の奇跡	54
21	ナザレの会堂で	56
22	4人の漁師が人を集める漁師になる	58
23	カペルナウムで大勢の人を癒やす	60
24	ガリラヤ中で伝道する	62
25	思いやりに動かされて重い皮膚病の人を癒やす	64
26	「あなたの罪は許されています」	66
27	マタイが加わる	68
28	イエスの弟子たちが断食をしない理由	70
29	安息日に良いことを行えるか	72



30	イエスは神の子	74
31	安息日に穀物をむしる	76
32	安息日に関する正しい見方	78
33	イザヤの預言を実現する	80
34	12使徒を選ぶ	82
35	有名な山上の垂訓	84
36	百人隊長の立派な信仰 <sup>しんこう</sup>	92
37	やもめの息子を復活させる	94
38	ヨハネはイエスに質問する	96
39	鈍感な世代は悲惨 <sup>どんかん ひさん</sup>	98
40	許しについて教える	100
41	奇跡 <sup>きせき</sup> は誰 <sup>だれ</sup> の力によるものか	102
42	パリサイ派の人々に強く警告する <sup>ひとひと</sup>	104
43	王国に関する例え	106
44	海の嵐を静める <sup>あらし</sup>	112
45	大勢の邪悪な天使を追い出す <sup>じゃあく</sup>	114
46	イエスの外衣 <sup>さわ</sup> に触 <sup>い</sup> って癒やされる	116
47	少女が復活する	118
48	奇跡 <sup>きせき</sup> を行うが、ナザレで退けられる	120
49	ガリラヤで伝道し、使徒たちを訓練する	122
50	迫害 <sup>はくがい</sup> されても伝道続けるための準備	124
51	誕生パーティーの裏で行われた殺人	126
52	少しのパンと魚で非常に大勢の人に食事をさせる	128
53	風と海をコントロールする支配者	130
54	イエスは「命のパン」	132
55	大勢の人がイエスの言葉に衝撃 <sup>しょうげき</sup> を受ける	134
56	人を本当に汚すものとは何か <sup>けが</sup>	136
57	女の子と耳が聞こえない人を癒やす <sup>い</sup>	138
58	パンを増やし、パン種について警告する	140
59	人の子とは誰 <sup>だれ</sup> のことか	142
60	栄光のうちにキリストの姿が変わる	144
61	邪悪な天使に取りつかれた男の子を癒やす <sup>じゃあく</sup>	146
62	謙遜 <sup>けんそん</sup> さについての大切な教え	148
63	信仰 <sup>しんこう</sup> を妨 <sup>さまた</sup> げるものと罪について教える	150
64	許すことの大切さ	152
65	エルサレムへの旅の途中 <sup>とちゅう</sup> で教える	154





## 4 ユダヤでの伝道活動

ページ

66	エルサレムでの幕屋の祭り	158
67	「あのように話した人はこれまでにいませんでした」	160
68	神の子は「世の光」	162
69	アブラハムと悪魔 <sup>あくま</sup> のどちらが父なのか	164
70	生まれつき盲目 <sup>もうもく</sup> の男性を癒やす	166
71	パリサイ派の人たちが盲目 <sup>もうもく</sup> だった男性に詰め寄る <sup>つ</sup>	168
72	70人を伝道に送り出す	170
73	本当の隣人 <sup>りんじん</sup> となったサマリア人	172
74	もてなしと祈りについての教え	174
75	本当に幸福なのはどんな人か	176
76	パリサイ派の人と食事をする	178
77	財産に対する見方を教える	180
78	忠実な管理人は用意をしていなければならない	182
79	信仰 <sup>しんこう</sup> のないユダヤ人が滅び <sup>ほろ</sup> びてしまうのはなぜか	184
80	立派な羊飼いと羊の困い	186
81	父と一つであっても神ではない	188

## 5 ヨルダンの東側での伝道活動

82	ペレアでの伝道	192
83	食事に招く	194
84	キリストの弟子であることの責任	196
85	悔い改める罪人のことを喜ぶ <sup>く</sup>	198
86	いなくなっていた息子が戻ってくる <sup>もと</sup>	200
87	実質的な知恵を働かせ、前もって計画する	204
88	裕福 <sup>ゆうふく</sup> な男性とラザロは変化を経験する	206
89	ユダヤに行く前にペレアで教える	210
90	「私は復活であり、命です」	212
91	ラザロの復活	214
92	重い皮膚病 <sup>ひふびょう</sup> を癒やされた1人の人が感謝を示す	216
93	人の子が現れる	218
94	祈り <sup>いの</sup> と謙遜 <sup>けんそん</sup> さは大切	220
95	離婚 <sup>りこん</sup> と子供たちへの愛について教える	222
96	若くて裕福な支配者の質問に答える	224
97	ブドウ園の労働者の例え話	226
98	使徒たちは再び目立った立場を求める	228
99	盲目 <sup>もうもく</sup> の男性を癒やし、ザアカイを助ける	230
100	10ミナの例え話	232



## 6 最後の伝道活動

## ページ

101	ベタニヤのシモンの家で食事をする	236
102	子ロバに乗り、王としてエルサレムに入る	238
103	神殿を再び清める	240
104	ユダヤ人は神の声を聞いて信仰を示すか	242
105	イチジクの木を使って信仰について教える	244
106	ブドウ園についての2つの例え話	246
107	王は披露宴に招いた人たちを呼ぶ	248
108	仕掛けられたわなを見破る	250
109	イエスは敵対者たちを非難する	252
110	イエスが神殿で過ごす最後の日	254
111	使徒たちはしるしについて尋ねる	256
112	乙女たちの例え話から学ぶ	260
113	タラントの例え話から学ぶ	262
114	キリストは王として羊とヤギを裁く	264
115	最後の過ぎ越しが近づく	266
116	最後の過ぎ越しで謙遜さを教える	268
117	主の晩餐	270
118	誰が一番偉いかで口論が起きる	272
119	イエスは道、真理、命	274
120	枝として実を結び、イエスの友であり続ける	276
121	「勇気を出しなさい! 私は世を征服したのです」	278
122	階上の部屋でイエスがささげた最後の祈り	280
123	深い悲しみの中で祈る	282
124	キリストは裏切られ逮捕される	284
125	まずアンナスの所へ、その後カヤファの所へ	286
126	ペテロはイエスのことを知らないと言う	288
127	サンヘドリンでの裁判の後、ピラトの所へ連れていかれる	290
128	ピラトもヘロデもイエスが無実であると認める	292
129	ピラトは「見なさい、この人だ!」と宣言する	294
130	イエスは引き渡され、処刑場所へ連れていかれる	296
131	無実の王が杭の上で苦しむ	298
132	「確かにこの人は神の子だった」	300
133	イエスは葬られる	302
134	イエスは生きている!	304
135	復活したイエスがさらに大勢の人に現れる	306
136	ガリラヤの海の浜辺で	308
137	ペンテコステの前に数百人の人がイエスに会う	310
138	神の右にいるキリスト	312
139	イエスはパラダイスを回復し、神からの任務を全て果たす	314

□ ニサン 8,9日

□ ニサン 9日

□ ニサン 10日

□ ニサン 11日

□ ニサン 12,13日

□ ニサン 14日  
(晩)

□ ニサン 14日  
(日中)

□ ニサン 15日

□ ニサン 16日

## 道, 真理, 命

良い知らせを聞くとうれしくなるものです。あなたとあなたの大切な人にとって、とても良い知らせがあります。

その知らせは、宇宙を創造したエホバ神がずっと昔に人間に書かせた聖書に収められています。この本では、良い知らせを含んでいる聖書の4つの書に注目します。それぞれの書には神が選んだ筆者たち、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの名前が付いています。

これらの書は4福音書として知られています。4つとも、イエスについての福音つまり良い知らせを伝えていますが。その知らせとは、イエスが人類を救うために神から遣わされた方であり、神の天の王国の王として、自分に信仰を抱く人に永遠に続く祝福を与える、というものです。(マルコ 10:17, 30; 13:13)

### 福音書が4つあるのはなぜか

神がイエスの地上での生涯と教えについて4人の人に書かせたのはなぜだろうと思うかもしれません。

複数の書がイエスの言葉や活動を記録していること

には利点があります。例えば、有名な教師の周りに4人の人がいるとしましょう。教師の前にいるのは、税務署の人です。右側には医師が、左側にはこの教師の親しい友人である漁師がいます。教師の後ろにいるのは、4人の中で一番若い人です。4人とも正直で、その人なりの視点を持っていて、興味を抱くポイントもさまざまです。それぞれが教師の言葉と活動を書き記すなら、詳しく書く点や取り上げる出来事は違っているでしょう。観点の違いを意識しながらその4人が書いたものを読むなら、教師が話したことや行動の全体像をより正確に把握できます。ですから、素晴らしい教師であるイエスの地上での生涯について4つの記述を読めることには、確かに利点があります。

もう少し考えてみましょう。税務署の人は、ユダヤ人の心に響く内容にしたいと思い、教師の教えや出来事をユダヤ人に分かりやすいようにまとめます。医師は、病気の人や手足の不自由な人が癒やされた出来事を強調します。それで、税務署の人が書いている事柄を省いたり、税





務署の人とは違う順番で記したりします。教師の親しい友人は、教師の気持ちや人柄をメインに描写します。一番若い人の記述は、さらに簡潔で明快です。このように違いはありますが、内容は正確です。4福音書を読むなら、私たちはイエスの活動や教えや人柄をよく知ることができます。

「マタイによる福音書」、「ヨハネの福音書」という呼び方があります。それは間違っています。なぜなら、各書は「イエス・キリストについての**良い知らせ**」つまり福音を収めているからです。(マルコ 1:1) しかし見方を変えるなら、4福音書全体で1つの本であり、イエスについての良い知らせを私たちに伝えているのです。

聖書を熱心に学ぶ大勢の人たちは、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの書に出てくる出来事や事実を比較したり、内容をまとめたりしてきました。西暦170年ごろ、シリアの著述家タティアノスはそうした努力を払いました。タティアノスは4福音書が正確で神の聖霊の導きを受けて書かれたものだとし、イエスの地上での生涯と伝道活動をまとめた「ディアテッサロン」という作品を書き上げました。

「イエス 道、真理、命」というこの本は、内容がより正確で充実しています。なぜなら、今ではイエスの預言や例え話の多くが実現し、それらについての理解が深まっているからです。そうした理解によって、イエスの言葉や活動の意味や出来事の起きた順番が明確になっています。考古学上の発見によっても、特定の詳細な点や筆者の観点が明らかになりました。とはいえ、一つ一つの出来事が起きた順番を断定することはできません。それでも、「イエス 道、真理、命」では、出来事を可能な限り論理的な順で紹介しています。

## 道、真理、命

この本を読む時、一番重要なメッセージを心に留めておきましょう。それは、イエス・キリストがトマスに話した次の言葉に要約されています。「私は道であり、真理であり、命です。私を通してでなければ、誰も父の元に来ることはできません」。(ヨハネ 14:6)

この本は、イエスが「道」であることをよく理解するのに役立つでしょう。イエスを通してでなければ、祈りでエホバ神に近づくことはできません。また、イエスは神と和解するための道です。(ヨハネ 16:23。ローマ 5:8) ですから、イエスなしでは神との友情を築くことはできません。

イエスは「真理」です。イエスの話すことや生き方は真理と調和していました。まるで生きた真理のような存在でした。数多くの預言を実現させたので、「キリストによって『はい』となった」という聖句通りになりました。(コリント第二 1:20。ヨハネ 1:14) そうした預言を考えると、神の目的が達成されていく中でイエスが中心的な役割を果たしていることを理解できるでしょう。(啓示 19:10)

そして、イエスは「命」です。イエスが自分の完全な命と血を差し出して贖いとなったおかげで、私たちは「真の命」つまり「永遠の命」を得られるようになりました。(テモテ第一 6:12, 19。エフェソス 1:7。ヨハネ第一 1:7) また、すでに亡くなったものの、将来復活し、パラダイスで永遠に生きる希望を持つようになる非常に大勢の人たちにとっても、イエスは「命」となります。(ヨハネ 5:28, 29)

私たちは神の目的の中でのイエスの役割をよく理解し認めなければなりません。皆さんが、「道であり、真理であり、命」であるイエスについて学ぶことを楽しめるよう願っています。







セクション

# 1

伝道を  
開始するまで

「その子は  
い だい  
偉大な者とな[る]」。

ルカ 1:32



## 神からの2つの知らせ

ルカ 1:5-33

聖書全体は、神からのメッセージです。神は私たちを教えるために聖書を準備しました。これから、2000年以上前に伝えられた2つの特別な知らせについて考えましょう。それらの重要な知らせは、「神のすぐ前に立つ者」であるガブリエルという天使によって伝えられました。(ルカ 1:19) その時の状況を調べてみましょう。

西暦前3年ごろのことです。ガブリエルは最初の知らせを誰に伝えるのでしょうか。エルサレムからそれほど遠くないと思われるユダヤの山地に、エホバの祭司であるゼカリヤという人が住んでいます。ゼカリヤも妻エリサベツも高齢になっていて、子供がいません。ある日、ゼカリヤが当番のためエルサレムの神殿で祭司の仕事をしていると、突然、ガブリエルが香壇の近くに現れます。

ゼカリヤは恐れを感じます。それも当然でしょう。しかしガブリエルは次のように述べて安心させます。「ゼカリヤ、恐れることはありません。あなたの祈願は聞き入れられたからです。妻のエリサベツは男の子を産みます。その子をヨハネと名付けなさい」。それだけでなくガブリエルは、ヨハネが「エホバの前で偉大な人」となり、「準備ができた民をエホバのために整え」ることになると言います。(ルカ 1:13-17)

でも、ゼカリヤにはとても信じられないことのように思えます。自分もエリサベツも高齢だからです。すると

ガブリエルは、「これらの事が起きる日まで、あなたは口が利けなくなり、話すことができません。私の言葉を信じなかったからです」と話します。(ルカ 1:20)

外で待っている人々は、ゼカリヤがなかなか出てこないで不思議に思っています。やっと出てきたと思ったら、ゼカリヤは身ぶりをするだけで、全く話すことができません。きっと、神殿の中で何かの奇跡を見たのでしょう。

ゼカリヤは神殿での仕事を終えると、家に帰ります。それから間もなく、エリサベツは妊娠します。そして、安静にするため5カ月の間、家で過ごします。

ガブリエルは次に、誰に現れましたか。マリアという若い女性にです。マリアはまだ結婚しておらず、北方のガリラヤという地域にある町ナザレに住んでいます。ガブリエルはどんな知らせを伝えるのでしょうか。こう言います。「あなたは神の恵みを得ました。あなたは妊娠して男の子を産みます。イエスと名付けなさい。その子は偉大な者となり、至高の子と呼ばれます。……彼は王としてヤコブの家を永久に支配します。その王国に終わりはありません」。(ルカ 1:30-33)

ガブリエルはこれら2つの知らせを伝えることを大切な割り当てだと感じたに違いありません。ヨハネとイエスについてももう少し調べていくなら、それらの知らせがどれほど重要なものかが分かるでしょう。

- 
- ◇ 誰が天からの2つの重要な知らせを伝えましたか。
  - ◇ それらの知らせは誰に伝えられましたか。
  - ◇ それらの知らせを信じるのがとても難しかったのはなぜですか。

- 天使ガブリエルはバプテストのヨハネの誕生を予告する
- ガブリエルはマリアにイエスの誕生について話す



# イエスは生まれる前から敬意を払われる<sup>はら</sup>

ルカ 1:34-56

天使ガブリエルは若い女性マリアに、あなたはイエスという名前の男の子を産み、その子は永遠に王として支配する、と話します。すると、マリアはこう尋ねます。「どうしてそのようなことがあるのでしょうか。私は男の人と関係を持ったことはありませんのに」。(ルカ 1:34)

ガブリエルは次のように答えます。「聖霊<sup>せいれい</sup>があなたに下り、至高者の力があなたを覆<sup>おお</sup>います。それで、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれます」。(ルカ 1:35)

この知らせを受け入れやすくするためだと思われるですが、ガブリエルはこう続けます。「何と、親族のエリサベツもあの年で妊娠し、子供ができないといわれていたのが今では6カ月目になります。神にとっては、どんな宣言も不可能ではないのです」。(ルカ 1:36, 37)

マリアはガブリエルの知らせを受け入れます。それは、マリアの返事から分かります。「ご覧ください、私はエホバの奴隷<sup>どれい</sup>でございます！ あなたの宣言通りのことが私に起きますように」。(ルカ 1:38)

ガブリエルが去ると、マリアはエリサベツを訪ねる準備を始めます。エリサベツは夫のゼカリヤと、エルサレムに近いユダヤの山地に住んでいます。マリアの家があるナザレからは3日から4日かかります。

ゼカリヤの家に到着<sup>とうちやく</sup>したマリアは、中に入ってエリサベツにあいさつをします。するとエリサベツは聖霊<sup>せいれい</sup>に満たされ、マリアにこう言います。「あなたは女性の中で祝福された者、あなたのおなかの子も祝福されています！ 私の主の母親に来ていただけたとは何と光栄なことでしょう。私があなたのあいさつを聞くと、私のおなかの子は喜んで躍<sup>おど</sup>り上がりました」。(ルカ 1:42-44)

マリアはそれを聞き、心から感謝して言います。「私

はエホバをあがめ、私の心は救い主である神のおかげで喜びにあふれます。神は低い立場にある奴隷<sup>どれい</sup>の私に目を留めてくださったからです。今後、あらゆる世代の人々が私を幸せな人と言います。強力な神が素晴らしいことをしてくださったからです[す]」。大きな祝福を受けたマリアが、神をたたえたことに注目してください。こう言ったのです。「その方の名は聖なるものです。いつの時代も、神の憐れみ<sup>あわ</sup>がその方を畏れる人々に示されます」。(ルカ 1:46-50)

聖霊<sup>せいれい</sup>の導きを受けたマリアは、預言的な言葉でエホバを賛美し続けます。「神は力強い腕<sup>うで</sup>で物事を行い、傲慢<sup>ごうまん</sup>な心を持つ者たちを散らされました。権力を持つ人々をその座から下ろし、身分の低い人々を高くしました。飢えた人々を良いもので十分に満ち、裕福な人々を手ぶらで去らせました。神はご自分に仕えるイスラエルを助けにられました。憐れみ<sup>あわ</sup>をお忘れになりません。父祖たちにお告げになった通り、アブラハムとその子孫<sup>あわ</sup>に憐れみを永久に示されるのです」。(ルカ 1:51-55)

マリアは約3カ月滞<sup>たいざい</sup>在します。その間、出産が間近いエリサベツを支えたことでしょう。神の力によって妊娠<sup>にんしん</sup>している2人の忠実な女性が、この時期を一緒<sup>いっしょ</sup>に過ごせるのは素晴らしいことです。

イエスが生まれる前から敬意を払<sup>はら</sup>われたことに注目してください。エリサベツはイエスを「私の主」と呼びました。また、マリアが初めて訪問してきた時、エリサベツのおなかの子は「喜んで躍<sup>おど</sup>り上がりました」。しかし多く<sup>ちが</sup>の人は、マリアと生まれてくる子に対して全く違う態度を取ります。そのことは後の章で取り上げます。





- ◇ ガブリエルはマリアが妊娠<sup>にんしん</sup>することを理解できるよう何と述べましたか。
- ◇ イエスは生まれる前からどのように敬意<sup>けいぎ</sup>を払<sup>はら</sup>われましたか。
- ◇ マリアはどれくらいエリサベツの元に滞在<sup>たいざい</sup>しましたか。なぜそうしましたか。

## 道を整える者が生まれる

ルカ 1:57-79

エリサベツの出産の日が近づいています。これまで3カ月の間、マリアはエリサベツの所で過ごしていました。しかし、別れの時がやって来ます。マリアは長い旅をして、北にあるナザレの家に帰らなければなりません。あと半年ほどで、マリアにも息子が生まれる予定です。

マリアが出発してから間もなく、エリサベツに子供が生まれます。うれしいことに出産は無事に終わり、母親も赤ちゃんも健康です。エリサベツが生まれたばかりの息子を近所の人や親族に見せると、皆一緒に喜んでくれます。

神がイスラエルに与えた律法によると、男の子が生まれたなら、8日目に割礼を受けさせる必要がありました。それから名前を付けました。(レビ記 12:2, 3) ある人々は、ゼカリヤの息子なのだからゼカリヤという名前にするべきだ、と言います。しかし、エリサベツは、「いいえ! この子はヨハネと呼ばれるのです」と言います。

(ルカ 1:60) 生まれてくる子をヨハネと名付けるよう天使ガブリエルから命じられていたからです。

近所の人や親族は反対し、「親族の中に、そう呼ばれている人は一人もいません」と言います。(ルカ 1:61) そして、その子にどんな名前を付けたいか、身ぶりでゼカリヤに尋ねます。するとゼカリヤは書き板を求め、「名前はヨハネ」と書きます。(ルカ 1:63)

その時、奇跡が起きます。ゼカリヤが再び話せるようになったのです。ゼカリヤは、エリサベツに子供が生まれるという天使ガブリエルの言葉を信じなかったため、話す能力を失っていました。ですから、近所の人たちは大変驚きます。そして、「この子はどんな人になるのだろうか」と考えます。(ルカ 1:66) 人々は、ヨハネという名前が付けられたことに神の導きを感じます。

ゼカリヤは聖霊に満たされてこう言います。「イスラエルの神エホバが賛美されますように。ご自分の民に





- ・ バプテストのヨハネが生まれ、名前を付けられる
- ・ ゼカリヤはヨハネが将来果たす役割について予告する

3

注意を向け、救出されたからです。そして、ご自分に仕えたダビデの家に救いの角が現れるようにしてくださいました」。(ルカ 1:68, 69)「救いの角」と言った時、ゼカリヤはこれから生まれる主イエスのことを述べていました。そしてさらに、「神は[その方によって]私たちを敵から救い出した後、<sup>おそ</sup>恐れずに神聖な<sup>ほうし</sup>奉仕を行えるようにしてくださいます。私たちはいつの日も神の前で忠節で正しくあるのです」と続けます。(ルカ 1:74, 75)

ゼカリヤは自分の息子について次のような予告をします。「わが子よ、おまえは至高者の預言者と呼ばれ

る。道を整えるためにエホバの前に行くからだ。そして、罪の許しによる救いについて民に知らせる。それは神の温かい思いやりによるのであり、この思いやりによって、高い所から私たちに夜明けが訪れ、闇と死の陰<sup>あやみ</sup>にいる人たちに光を与え、私たちを平和の道に導く」。(ルカ 1:76-79) 希望<sup>あた</sup>を与える何と素晴らしい預言でしょう。

このころには、マリアはナザレの自宅<sup>どうちやく</sup>に到着しています。でも、まだ結婚<sup>けっこん</sup>はしていません。もし妊娠<sup>にんしん</sup>していることが<sup>みな</sup>皆に知られたら、マリアはいったいどうなってしまうのでしょうか。

- 
- ◇ ヨハネの誕生後、どれくらいたってからイエスが生まれましたか。
  - ◇ ヨハネが生まれてから8日目に、どんな出来事がありましたか。
  - ◇ ヨハネは神からどんな仕事<sup>あた</sup>を与えられることになりますか。





## 結婚していないのに妊娠しているマリア

マタイ 1:18-25 ルカ 1:56

マリアは妊娠4か月です。すでに学んだように、マリアは妊娠して間もなく、南のユダヤの山地に住む親族のエリサベツを訪ね、そこで一緒に過ごしました。でも今は、ナザレの自分の家に帰ってきています。妊娠していることは、すぐ多くの人に知られてしまうでしょう。とても困ったことになりました。

マリアは地元の木工であるヨセフと婚約しています。それに、神がイスラエルに与えた律法では、婚約中に別の異性と性関係を持つなら石打ちにされることを知っています。(申命記 22:23, 24) マリア自身は不道徳なことをしたわけではありません。それでも、妊娠していることをヨセフにどのように説明したらよいだろう、これから先どうになってしまうのだろうと悩んだことでしょう。

マリアが3か月留守にしていたので、ヨセフはマリアに会いたがっていたに違いありません。マリアはヨセフに会って、自分の状況を話したはずですが、妊娠しているのは聖霊の働きによるということを知ったか分かってもらおうと説明します。しかし当然ながら、ヨセフはその話を理解することも信じることもできません。

ヨセフはマリアが立派な女性で良い評判を得ていることを知っており、マリアを深く愛しています。とはいえ、どんなに説明されても、別の男性によって妊娠したとは思えません。ヨセフは、マリアが石打ちにされて殺されたり人々の前で恥をかかされたりすることを望みません。それで、ひそかに離婚することに決めます。当時、婚約している人は結婚していると見なされ、婚約を解消するには離婚しなければならませんでした。



- ヨセフはマリアが妊娠<sup>にんしん</sup>していることを知る
- マリアはヨセフの妻になる

ヨセフは頭の中でいろいろなことを考えながら眠<sup>ねむ</sup>ります。すると、エホバの天使が夢の中で現れ、こう言います。「妻マリアを迎え入れることを恐<sup>おそ</sup>れてはなりません。妊娠<sup>にんしん</sup>しているのは聖霊<sup>せいれい</sup>によるのです。彼女<sup>かのじょ</sup>は男の子を産みます。イエスと名付けなさい。その子は民を罪から救うからです」。(マタイ 1:20, 21)

ヨセフは目が覚めた時、事情が分かってどんなにすっきりしたでしょう。天使が言った通り、早速マリアを正式

に家に迎え入れます。これは結婚<sup>けっこん</sup>式<sup>しき</sup>を意味しており、ヨセフとマリアが夫婦<sup>ひとびと</sup>になったことを人々に明らかにするものです。しかし、ヨセフはマリアがイエスを妊娠<sup>にんしん</sup>している間、マリアと性関係を持ちません。

数カ月後、ヨセフとおなかの大きくなったマリアは自宅があるナザレから旅に出る準備をしなければなりません。マリアの出産が近づいているというのに、いったいどこへ行くのでしょうか。

- 
- ◇ マリアが妊娠<sup>にんしん</sup>していると知った時、ヨセフはどう思ったのでしょうか。なぜそう言えますか。
  - ◇ ヨセフが、まだ結婚<sup>けっこん</sup>していないのにマリアと離婚<sup>りこん</sup>しようとしたのはなぜですか。
  - ◇ ヨセフとマリアが夫婦<sup>ひとびと</sup>になったことを人々に明らかにするとどんな出来事がありましたか。



# イエスはいつ、どこで生まれたか

ルカ 2:1-20

ローマ皇帝カエサル・アウグスツスから、全ての人に登録の命令が出されます。それでヨセフとマリアは、ヨセフが生まれた町ベツレヘムに旅をします。エルサレムの南にある町です。

ベツレヘムは、登録のためにやって来た人で混み合っています。ヨセフとマリアが泊まれる所は家畜小屋しか



ありません。ロバなどの動物がいる場所です。イエスはそこで生まれます。マリアはイエスを布の帯でくるみ、動物の餌を入れる飼ひ葉おけに寝かせます。

カエサル・アウグスツスが登録を命じる法律を作ったことには、神の導きがあったに違いありません。なぜなら、その命令のおかげで、イエスは先祖であるダビデ王が生まれ育ったベツレヘムで誕生することになったからです。聖書はずっと昔に、このベツレヘムで約束の支配者が生まれることを予告していました。(ミカ 5:2)

その日の夜は特別な夜でした。野原にいる羊飼いたちの周りに明るい光がきらめきます。それはエホバの栄光です。神の天使の1人が現れ、こう言います。「恐れる

ことはありません。聞きなさい。民の全てにとって大きな喜びとなる良い知らせをあなた方に告げます。今日、ダビデの町で、皆さんの救い主、主であるキリストが生まれました。その子は布の帯にくるまって飼ひ葉おけに寝ているので、すぐに分かります」。すると突然、さらに多くの天使が現れ、次のように言います。「この上なく高い所では神に栄光が、地上では神に喜ばれる人々の間に平和がありますように」。(ルカ 2:10-14)

天使たちが去った後、羊飼いたちは互いに、「ぜひ、エホバが知らせてくださった出来事をベツレヘムまで見に行きましょう」と言います。(ルカ 2:15) そして急いで出掛けていき、天使が語った通りの場所で、生まれたばかりのイエスを見つめます。羊飼いたちが天使から聞いたことを話すと、そこにいる人たちはとても驚きます。マリアは一つ一つの言葉を真剣に受け止め、じつくりと考えます。

現代の多くの人は、イエスは12月25日に生まれたと思っています。しかし、ベツレヘムやその周辺の12月は、雨が多く寒い季節です。雪が降る場合もあります。そのような時期に、羊飼いが羊の群れと一晩中、野原で過ごすことなどなかったはずです。また、ローマ皇帝が登録のため真冬に旅をするよう命令したとは考えられません。ユダヤ人は皇帝に対して反抗的だったからです。イエスが生まれたのは、気候がもっと穏やかな10月だったと思われます。

- ◇ なぜヨセフとマリアはベツレヘムに行く必要がありましたか。
- ◇ イエスが生まれた夜、どんな素晴らしい出来事がありましたか。
- ◇ イエスが12月25日に生まれたと考えにくいのはなぜですか。



- イエスがベツレヘムで生まれる
- 羊飼いたちが、生まれたばかりのイエスに会いに来る



## 約束されていた子

ルカ 2:21-39

ヨセフとマリアはナザレに<sup>もと</sup>戻らず、ベツレヘムにとどまります。そして、イエスが生まれてから8日目に、イスラエルに<sup>あた</sup>与えられた神の律法に従ってイエスに割礼を受けさせます。(レビ記 12:2, 3) また、男の赤ちゃんに8日目に名前を付けるという習慣があったので、天使ガブリエルから言われていた通り、息子をイエスと名付けます。

イエスが生まれてから40日になりました。ヨセフとマリアは、イエスを連れて数キロ離れたエルサレムの神殿に向かいます。律法によれば、男の子を産んだ母親は出産から40日後に、<sup>しんてん</sup>神殿で清めの<sup>ささ</sup>捧げ物<sup>もの</sup>をしなければなりません。(レビ記 12:4-8)

マリアはそれに従い、<sup>ささ</sup>捧げ物<sup>もの</sup>とするために2羽の鳥を

持っていきます。このことから、ヨセフとマリアの暮らし向きが分かります。律法では、1匹の若い雄羊と1羽の鳥をささげるよう規定されていました。しかし、若い雄羊をささげる余裕がない場合は、2羽のヤマバトか2羽のイエバトでもよいとされています。マリアの捧げ物には、そういう背景があります。

ヨセフとマリアが<sup>しんてん</sup>神殿に行くと、ある老人が近づいてきます。シメオンという名前の人です。シメオンは、死ぬまでには神の約束されたキリストつまりメシアを見る、と神から告げられていました。この日、シメオンは<sup>せいれい</sup>聖霊に導かれて<sup>しんてん</sup>神殿にやって来て、ヨセフとマリアと幼い息子を見つけたのです。シメオンはその子<sup>うで</sup>を腕<sup>だ</sup>に抱きます。

イエスを抱きながら、シメオンは神に感謝してこう言います。「主権者である主よ、今あなたは宣言通り、この<sup>ど</sup>奴隷<sup>れい</sup>を安らかに行かせてくださいます。私の目は救いの手段を見たからです。それはあなたが用意され、全ての国の人々が見ることのできるものであり、異国の<sup>ひと</sup>人々<sup>ひと</sup>からバベルを取り除くための光、あなたの民イスラエルの栄光です」。(ルカ 2:29-32)

ヨセフとマリアはそれを聞いて<sup>おどろ</sup>驚きます。シメオンは2人を祝福します。さらにマリアに対し、この子が「選ばれたのは、イスラエルの多くの人が<sup>たお</sup>倒れ、あるいは立ち上がるため」であり、<sup>するど</sup>悲しみ<sup>つるぎ</sup>が鋭い剣のようにあなたを<sup>つらぬ</sup>貫く、とも話します。(ルカ 2:34)

ちょうどこの時、ヨセフとマリアとイエスの所に、別の人がやって来ます。その人はアンナという84歳の女預言者で、<sup>しんてん</sup>神殿を離れたことがありません。アンナは神に感謝をささげ始め、人々にイエスについて語りだします。

ヨセフとマリアはどれほどうれしく思ったでしょう。これら全ては、自分たちの息子が神の約束された者であることを証明する出来事だったのです。

**「自分たちを清める時が来る」** イスラエル人の女性は出産すると、しばらくは<sup>ぎしきじょうけが</sup>儀式上汚れた人と見なされました。その期間の終わりには、清めの犠牲として全焼の捧げ物をささげることになっています。それは、不完全さと罪を持つ命が子孫に伝えられたことを思い出させるためでした。イエスは生まれた時から完全で聖なる者でした。(ルカ 1:35) それでも、ヨセフとマリアはイエスを<sup>しんてん</sup>神殿に連れていき、2人は律法に従って清められました。(ルカ 2:22)







- ◇ イスラエル人の習慣では、男の赤ちゃんにいつ名前を付けましたか。
- ◇ 男の子を産んだ母親は出産から40日後に何をしなければなりませんでしたか。マリアの<sup>ささ</sup>捧げ物から、マリアの暮らし向きについて何が分かりますか。
- ◇ <sup>しんでん</sup>神殿で、イエスが約束されていたメシアであることを<sup>だれ</sup>誰が認めましたか。どのようにそれを示しましたか。



# 占星術師たちがイエスに会いにやって来る

マタイ 2:1-12

東の方から何人かの人がやって来ます。占星術師です。占星術師とは、星の位置を調べれば、人生の中で起きるさまざまな出来事の意味を理解し説明できると考える人たちです。(イザヤ 47:13) 彼らは自分の国にいる時、ある「星」を見て何百キロもの距離を旅行し、ベツレヘムではなくエルサレムにやって来ました。

エルサレムに到着すると、占星術師たちは人々にこう尋ねます。「ユダヤ人の王として生まれた方はどこにおられますか。東方にいた時にその方の星を見たので、敬意を表すために来ました」。(マタイ 2:1, 2)

エルサレムにいるヘロデ王は、占星術師たちのことを聞いてとても取り乱します。それで、祭司長と宗教指導者たちを呼び、キリストはどこで生まれることになっているのか、と尋ねます。彼らは聖書に基づいて、「ベツレヘムです」と答えます。(マタイ 2:5。ミカ 5:2) その後、ヘロデは占星術師たちを自分の所にこっそり連れてこさせ、次のように命じます。「行ってその子を注意深く捜

し、見つけたら、報告しなさい。私も行って、敬意を表すためだ」。(マタイ 2:8) しかしそれは、ヘロデの本心ではありません。本当は、その子を見つけて殺すことをたくらんでいるのです。

占星術師たちが出発すると、何と、東の方で見たあの「星」が先導し始めます。これは明らかに普通の星ではありません。彼らを導くための星です。占星術師たちが付いていくと、「星」はヨセフとマリアと幼い息子が住んでいる家のちょうど真上で止まります。

その家に入った占星術師たちは、マリアとイエスに会い、イエスにひれ伏します。そして、金、乳香、没薬を贈ります。その後、ヘロデの所に戻ろうとしたところ、夢の中で神から、そうしてはならないと命じられます。それで、別の道を通して自分たちの国へ帰っていきます。

いったい誰がその「星」を使って占星術師たちを導いたのでしょうか。「星」がベツレヘムにいるイエスの所へ直接導かなかったことに注目してください。むしろ、エルサレムに導きました。占星術師たちはそこでヘロデに会います。ヘロデはイエスを殺そうとしました。もし神が事態に介入せず、イエスの居場所をヘロデに教えてはならないと占星術師たちに命じていなかったとしたら、ヘロデはイエスを殺していたに違いありません。ですから、神の敵であるサタンが、この「星」を利用して自分の目的を遂げようとしていたことは明らかです。



- ◇ 占星術師たちの見た「星」が普通の星ではなかったと言えるのはなぜですか。
- ◇ 占星術師たちがイエスを見つけた時、イエスはどこにいましたか。
- ◇ サタンが占星術師たちを導いていたと言えるのはなぜですか。





## じゃ あく に 邪悪な支配者から逃げる

マタイ 2:13-23

きんきゅう  
緊急な事態です。ヨセフは急いでマリアを起こします。たった今エホバの天使が夢でヨセフに現れてこう言ったのです。「起きて、子供とその母親を連れてエジプトに逃げ、私が知らせるまでとどまりなさい。ヘロデがこの子をさがして殺そうとしています」。(マタイ 2:13)

すぐその夜のうちに、ヨセフとマリアはイエスを連れて逃げます。本当に危ないところでした。ヘロデが占星術師たちに期待を裏切られたことに気付いたからです。ヘロデは彼らに、イエスを見つけたなら戻ってきて報告するようにと命じていました。ところが、占星術師たちはそうせずに自分たちの国へ帰ってしまったのです。そこでヘロデは激怒します。何とかしてイエスを殺そうとします。そしてベツレヘムとその周辺にいる2歳以下の男の子を全員殺せ、と命じます。その年齢は、東の方から来た占星術師たちの話を基に割り出したものです。

ぞっとするような出来事です。何人の男の子が殺されたのかは分かりませんが、子供を奪われた母親たちは悲痛な泣き声を上げます。こうして、神の預言者エ



レミヤが語った聖書預言が実現します。(エレミヤ 31:15)

一方、ヨセフとその家族はエジプトに逃げ、そこでしばらく暮らすことにします。ある晩、エホバの天使が再び夢の中に現れ、ヨセフにこう告げます。「起きて、子供とその母親を連れてイスラエルに行きなさい。子供の命を狙っていた者たちは死にました」。(マタイ 2:20) そこでヨセフは、やっと家族で故郷に帰れると考えます。このようにして、神の子がエジプトから呼び出される、という別の聖書預言が実現します。(ホセア 11:1)

ヨセフは、家族とユダヤのベツレヘムの近くに落ち着





- イエスの家族はエジプトに逃げる
- ヨセフは家族とナザレに引っ越す

## 8



こう考えているようです。ベツレヘムはエジプトに逃げる前に住んでいた場所でした。しかし、今ユダヤの王として支配しているのはヘロデの邪悪な息子アケラオです。それで神は、再びヨセフに夢の中で警告を与えます。そのため、ヨセフと家族はさらに北へ向かい、ガリラ

ヤ地方のナザレという町にやって来ます。ナザレはユダヤ人の崇拜の中心地であったエルサレムからかなり離れた所です。イエスはその町で育ちます。こうして、「彼はナザレ人と呼ばれる」というもう1つの預言が実現します。(マタイ 2:23)

- 
- ◇ 占星術師たちが戻ってこなかったため、ヘロデ王はどうしましたか。イエスはどのように守られましたか。
  - ◇ エジプトを出たヨセフとその家族がベツレヘムに行かなかったのはなぜですか。
  - ◇ この時期に、どんな聖書預言が実現しましたか。

## ナザレで成長する

マタイ 13:55, 56    マルコ 6:3

イエスが育ったのはナザレです。<sup>ひかくてき</sup>比較的小さな、<sup>ふつう</sup>普通の町です。ガリラヤと呼ばれる北の地域の<sup>きゅうりょう</sup>丘陵地帯にあり、ガリラヤの海として知られる大きな湖の西側に位置しています。

イエスは2歳<sup>さい</sup>ぐらいの時、ヨセフとマリアに連れられてエジプトからナザレにやって来ました。その時点で、イエスには弟や妹がいなかったようです。しかしその後、異父兄弟である、ヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダが生まれます。さらに女の子も何人か生まれます。こうして、イエスには少なくとも6人の弟や妹ができます。

イエスの親族はほかにもいます。エリサベツと息子のヨハネはすでに前の方の章で登場しました。2人は

何十キロも南のユダヤに住んでいます。近くのガリラヤには、イエスの母方のおばと思われるサロメが暮らしています。サロメの夫はゼベダイで、ヤコブとヨハネという息子たちがいます。サロメがイエスのおばであれば、2人はイエスのいとこに当たります。イエスが子供時代にこの2人と多くの時間を過ごしたかどうかは分かりません。それでも、3人は親しくなり、ヤコブとヨハネはイエスの使徒<sup>ほうし</sup>として奉仕するようになります。

ヨセフは増えていく家族を支えるために一生懸命働かなければなりません。ヨセフは大工で、イエスを自分の本当の息子として育てます。それで、イエスは「大工の息子」と呼ばれます。(マタイ 13:55) ヨセフはイエ





スに大工仕事を教え、イエスもどんどん腕<sup>うで</sup>を上げていきます。そして、「この人は大工[だ]」と言われるようになります。(マルコ 6:3)

ヨセフと家族は生活の中でエホバの崇拜<sup>すうはい</sup>を第一にしています。ヨセフとマリアは律法に従い、「家で座るときも、道を歩くときも、寝<sup>ね</sup>るときも、起きるときも」子供たちにエホバについて教えます。(申命記 6:6-9) ナザ

レには会堂があるので、ヨセフは定期的に家族みんなをそこに連れていき、崇拜<sup>すうはい</sup>をささげ<sup>ちが</sup>たに違いありません。その後の聖書の記述には、イエスが「安息日の自分の習慣通り」会堂へ行った、とあります。(ルカ 4:16) さらに、ヨセフの家族は、毎年旅をしてエルサレムにあるエホバの神殿<sup>しんでん</sup>に行くことをとても楽しみにしていました。

- ◇ イエスには少なくとも何人の弟と妹がいましたか。
- ◇ イエスはどんな仕事の技術を身に付けましたか。どのようにしてそれを学びましたか。
- ◇ ヨセフは家族にどんな大切なことを教えましたか。





# イエスの家族はエルサレムに旅をする

ルカ 2:40-52

今は春です。ヨセフの家族が友達や親族と一緒に例年通りエルサレムに旅をする時がやって来しました。律法の指示通り、過ぎ越しを祝うためです。(申命記 16:16) ナザレからエルサレムまでは約120<sup>き</sup>あります。皆、準備で忙しくしていますが、とても楽しそうな雰囲気です。12歳になったイエスは、祭りを心待ちにしており、再び神殿に行けるのでわくわくしています。

イエスとその家族にとって、過ぎ越しは1日限りのイベントではありません。翌日から無酵母パンの祭りが始まり、7日間続きます。(マルコ 14:1) この祭りは過ぎ越しの期間の一部と見なされています。ですから、ナザレの家を出発してエルサレムへ行き、そこに滞在して家に戻るまで、合計約2週間が必要になります。でも今年はまだもう少し長くなりました。エルサレムから帰る途中で、イエスに関連したある出来事が生じたのです。

旅の帰り道、ヨセフとマリアはイエスが親族や友人たちと一緒にいるものと思っていました。ところが、途中で一晩泊まる時になっても、イエスは見つかりません。一緒にいる人たちの中を捜しますが、やはり見当たりませ

ん。どこにもいないのです。それで、ヨセフとマリアはイエスを捜しにエルサレムへ戻ります。

2人は1日中捜し回りますが、見つけることができません。2日目も駄目でした。しかし3日目になって、ついに見つけます。神殿にたくさんある広間の1つにいたので。イエスはユダヤ人の教師たちの真ん中に座って話を聞いたりいろいろな質問したりしています。教師たちはその理解力にすっかり驚いています。

マリアはこう言います。「どうしてこんなことをしたの。お父さんもお母さんも必死に捜したのよ」。(ルカ 2:48)

イエスは自分がどこにいるのか親が分からなかったと知ってびっくりします。そしてこう尋ねます。「なぜ捜されたのですか。私が父の家にいるはずだと思われなかったのですか」。(ルカ 2:49)

こうして再び3人そろい、イエスは両親と一緒にナザレに帰り、その後もヨセフとマリアに従い続けます。そして、引き続き成長し、ますます賢くなっていきます。まだ若くても、神と人からの恵みを受けます。イエスは子供の頃から、エホバの崇拜に対する熱心さと親への敬意という面で立派な手本を示していたのです。



**楽しい旅** 年に3回、祭りのためにエルサレムへ行く旅は、皆が楽しみにしているイベントでした。(申命記 16:15) イエスは旅行中、いろいろな景色を見たり、地理を学んだり、ほかの地域から来た仲間の崇拝者たちと出会ったりしたことでしょう。それは良い思い出になったに違いないありません。

- 12歳のイエスは教師たちに質問する
- イエスはエホバを「父」と呼ぶ

# 10



- ◇ イエスは毎年春に、家族とどこに旅をしましたか。なぜですか。
- ◇ イエスが12歳の時、ヨセフとマリアはエルサレムから帰る途中<sup>とちゅう</sup>でどんなことに気付きましたか。その後、神殿<sup>しんてん</sup>で何を見ましたか。
- ◇ 若い人たちはイエスのどんな点<sup>なら</sup>に倣えますか。

# バプテストのヨハネは道を整える

マタイ 3:1-12    マルコ 1:1-8    ルカ 3:1-18    ヨハネ 1:6-8, 15-28

12歳のイエスが神殿で教師たちに質問した時から17年ほどたった西暦29年の春です。イエスの親族ヨハネのことがうわさになっています。ヨハネはヨルダン川の西の地域一帯で伝道しています。

ヨハネは見た目も話すことも、かなりインパクトの強い人です。らくだの毛の服を着て、腰に革の帯を締めています。食べ物はいなごと野蜜です。そして、「悔い改めなさい。天の王国は近づいたからです」というメッセージを伝えています。(マタイ 3:2)

それを聞く人たちは元気づけられ、悔い改めなければならないということに気がきます。心を入れ替え、生き方を変える必要があるのです。「エルサレムとユダヤ全土とヨルダン川一帯の人々」がヨハネの話を聞きにやって来ました。(マタイ 3:5) そのうちの大勢が悔い改めます。それでヨハネはその人たちをヨルダン川の水に浸し、バプテスマを施します。なぜでしょうか。

ヨハネは、人々が神の律法契約に対する罪を心から悔い改めたことの象徴としてバプテスマを施しているのです。(使徒 19:4) しかし、全員がバプテスマにふさわしかったわけではありません。パリサイ派とサドカイ派の宗教指導者たちがやって来た時、ヨハネは彼らを「マムシのような者たち」と呼び、こう言います。「悔い改めていることを示す行動を取りなさい。『私たちには父アブラハムがいる』などと心の中で言うてはなりません。神はこれらの石からアブラハムのために子供を生じさせることもできるのです。すでに木の根元におのが置かれています。立派な実を結ばない木は皆、切り倒されて火に投げ込まれます」。(マタイ 3:7-10)

ヨハネが大きな注目を集め、強力なメッセージを伝え、大勢の人にバプテスマを施しているのです。祭司とレビ族の人たちが派遣されます。彼らはヨハネに尋ねます。「あなたは誰ですか」。

「私はキリストではありません」とヨハネ。

彼らは、「では何ですか、エリヤですか」と聞きます。

ヨハネは、「そうではありません」と答えます。

そこで祭司とレビ族の人たちは、「例の預言者ですか」と尋ねます。これはつまり、モーセが予告した偉大な預言者のことです。(申命記 18:15, 18)

ヨハネは、「いいえ!」と言います。

彼らはしつこく尋ねます。「あなたは誰ですか。私たちを遣わした人たちに答えられるように教えてください。あなたは何者なのですか」。ヨハネは答えます。「私は、預言者イザヤが言った通り、『エホバの道を真つぐにきなさい』と荒野で叫ぶ者です」。(ヨハネ 1:19-23)

さらに質問は続きます。「では、キリストでもエリヤでも例の預言者でもないなら、なぜバプテスマを施すのですか」。そこでヨハネは興味をそそることを言います。「私は水でバプテスマを施します。あなた方の間に、あなた方の知らない方がいます。私の後から来る方です」。(ヨハネ 1:25-27)

ヨハネはここで自分の任務を明らかにしています。それは、予告されたメシアを受け入れるよう正しい心の人々を助けて、道を整えることです。ヨハネは、将来王となるメシアについて次のように言います。「私の後から来る方は私より強く、私はその方のサンダルを脱がせるにも値しません」。(マタイ 3:11) こう言ったこともあります。「私の後から来る方は私より優れている。私より先に存在したからである」。(ヨハネ 1:15)

ですからヨハネが、「悔い改めなさい。天の王国は近づいたからです」と伝えたのはタイムリーでした。(マタイ 3:2) これは、エホバから王として任命を受けるイエス・キリストが伝道を始めようとしていることを人々に知らせるメッセージでした。



- ヨハネは伝道し、バプテスマを<sup>ほどこ</sup>施す
- 多くの人がバプテスマを受けるが、そうしない人もいる

# 11



- ◇ ヨハネはどんな人ですか。どんなことをしていますか。
- ◇ ヨハネが人々にバプテスマを<sup>ほどこ</sup>施しているのはなぜですか。
- ◇ ヨハネはどんなメッセージを伝えましたか。そのメッセージにはどんな目的がありましたか。







セクション

# 2

## 伝道を 開始する

「見なさい、  
……罪を取り去る、  
神の子羊です!」

ヨハネ 1:29



## バプテスマを受ける

マタイ 3:13-17   マルコ 1:9-11   ルカ 3:21, 22   ヨハネ 1:32-34

バプテストのヨハネが伝道を始めてから約半年がたちました。イエスはおよそ30歳<sup>さい</sup>になっています。そして、ヨルダン川にいるヨハネの所へやって来ます。何のためでしょうか。ただヨハネの所に立ち寄ったのでも、その活動の進み具合を見に来たのでもありません。バプテスマを受けようとして来たのです。

当然のことながらヨハネは、「私こそあなたからバプテスマを受ける必要があるのに、あなたが私の所に来られるのですか」と言って、イエスを止めます。(マタイ 3:14) ヨハネはイエスが神の子であることを知っています。母親エリサベツのおなかの中にいたヨハネは、イエスを妊娠<sup>にんしん</sup>したマリアが訪ねて来た時、喜んで跳<sup>と</sup>びはねました。ヨハネは、そのことをエリサベツから教えてもらったに違<sup>ちが</sup>いありません。また、ガブリエルがマリアにイエスの誕生を予告したことや、イエスが生まれた晩に天使たちが羊飼いに現れたことも聞いたでしょう。

ヨハネは自分のバプテスマが罪<sup>く</sup>を悔い改めた人のためのものであり、イエスに罪がないことを知っています。それでヨハネが止めても、イエスは譲<sup>ゆず</sup>らず、「このたびは

そうさせてください。このようにして、正しいことを全て果たすのは、私たちにとってふさわしいことです」と言います。(マタイ 3:15)

イエスがバプテスマを受けるのはなぜ正しいことですか。イエスのバプテスマは、罪を悔い改めたことではなく、エホバの意志を行うために自分を差し出すことを表しています。(ヘブライ 10:5-7) イエスはこれまで大工でした。しかし、伝道を始める時が来たのです。それは、天の父がイエスを地上に遣<sup>つか</sup>わした本来の目的です。ヨハネは、イエスにバプテスマを施<sup>ほどこ</sup>す際に何か特別なことが起きるのではないか、と期待しています。なぜでしょうか。

ヨハネは後に次のように語りました。「水でバプテスマを施<sup>ほどこ</sup>すように私を遣<sup>つか</sup>わした神が言いました。『聖霊<sup>せいれい</sup>が下<sup>だ</sup>って誰かの上にとどまるのを見たら、それこそ聖霊<sup>せいれい</sup>でバプテスマを施<sup>ほどこ</sup>す者である』」。(ヨハネ 1:33) つまりヨハネは、自分がバプテスマを施<sup>ほどこ</sup>す誰か<sup>だれ</sup>に聖霊<sup>せいれい</sup>が下ることを予想していたのです。ですから、イエスが水から上がった時に「神の聖霊<sup>せいれい</sup>がハトのように下ってイエスの上に来



るのを」見ても、驚<sup>おどろ</sup>かなかったでしょう。(マタイ 3:16)

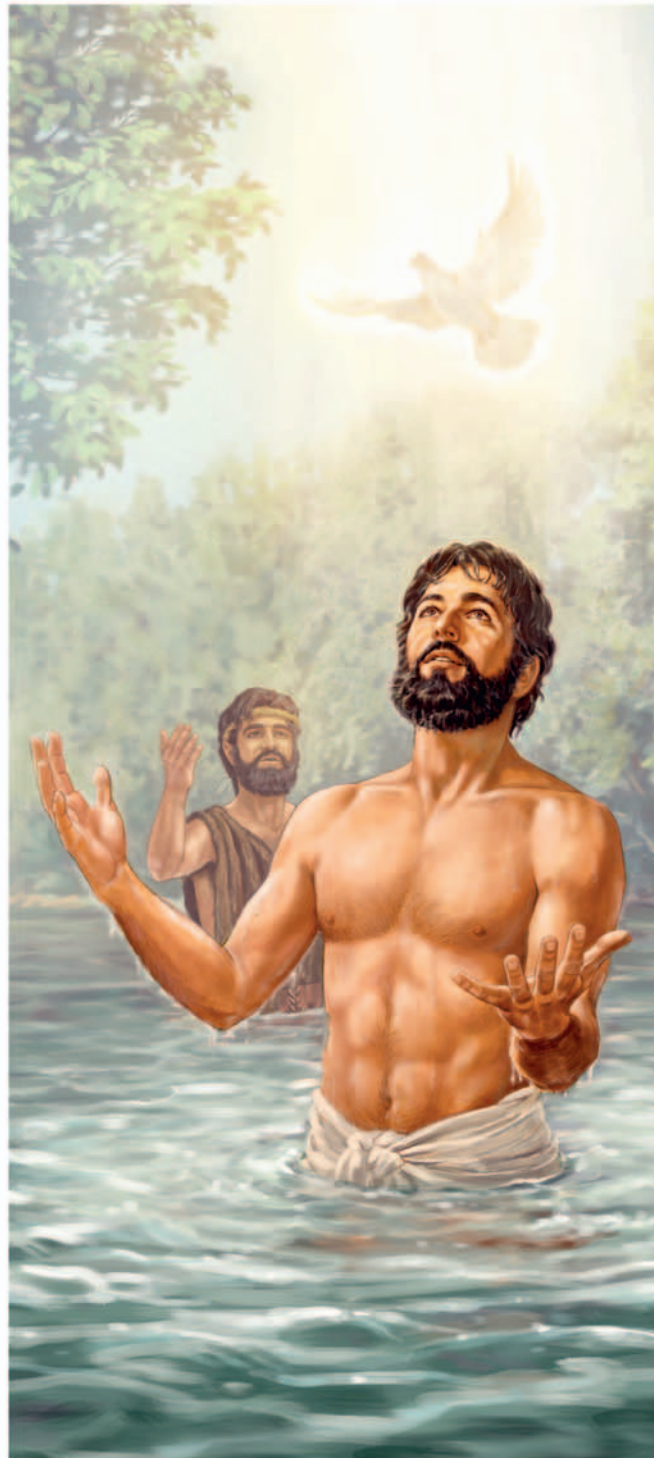
しかしこの時、別のことも生じます。「天が開[いた]」のです。これは、イエスがバプテスマの時に、天での記憶<sup>きき</sup>を取り戻したことを意味しているようです。イエスは、地上に来る前に神から教えられた真理や、天でどんな生活を送っていたかを思い出しました。

さらに、天から、「これは私の愛する子、私はこの子のことを喜んでいる」と宣言する声が聞こえました。(マタイ 3:17) イエスはヨハネの目の前にいたので、イエスの声ではありません。それは神の声でした。ですからイエスが神の子であり、神でないことは明らかです。

地上にいた時のイエスは、アダムと同じで、神の子であっても人間でした。弟子ルカは、イエスのバプテスマについて書いた後、こう記しています。「イエスは活動を開始した時、およそ30歳<sup>さい</sup>で、人々<sup>ひとびと</sup>の意見では、ヨセフの子であった。ヨセフの父はヘリで、さかのぼると、……ダビデ……アブラハム……ノア……アダムに至る。そしてアダムは神の子であった」。(ルカ 3:23-38)

イエスはアダムと同じく、「神の子」であり人間でもありました。しかし、バプテスマを受けた時に、神との新しい関係に入り、聖霊<sup>せいれい</sup>によって生み出された神の子になりました。そのようなわけで、イエスは神の真理を教え、命への道を示すのにふさわしい方です。この後イエスは、罪深い人類のために、自分の人間としての命を犠牲<sup>ぎ</sup>として差し出す道を歩み始めます。

- 
- ◇ ヨハネがイエスのことを知っているのはなぜですか。
  - ◇ 罪がないのに、イエスがヨハネからバプテスマを受けるのはなぜですか。
  - ◇ 神の聖霊<sup>せいれい</sup>がイエスの上<sup>おどろ</sup>に下ってくるのを見てもヨハネが驚かなかったのはなぜですか。
- 



## 誘惑に抵抗したイエスから学ぶ

マタイ 4:1-11 マルコ 1:12, 13 ルカ 4:1-13

ヨハネからバプテスマを受けた後すぐ、イエスは聖霊によってユダの荒野に導かれます。イエスにはたくさん考えることがあります。バプテスマの時、「天が開いた」からです。(マタイ 3:16) つまり、天で学んだことや行ってきたことの記憶を取り戻したのです。黙想することがたくさんあるのも不思議ではありません。

イエスは荒野で何も食べずに40日間過ごしました。そのため、とてもおなかがかすいています。そこへ悪魔サタンが近づいてきて誘惑し、「神の子なら、これらの石に、パンになるように命じなさい」と言います。(マタイ 4:3) イエスは、自分の欲求を満たすために奇跡を行うのは間違いであると知っています。それで、その誘惑を退けます。

ところが、悪魔は諦めません。別のアプローチをし、神殿の最上部から飛び降りて天使に助けてもらうように、とイエスに勧めます。しかしイエスは、そのような派手なパフォーマンスをしようとは思いません。聖書の言葉を引用し、神をそうした仕方ですすことは間違いである、と言います。

すると、悪魔は3つ目の誘惑を仕掛けます。何らかの方法で「世界の全ての王国とその栄光」をイエスに見せ、こう言います。「ひれ伏して私を1度崇拜するなら、これら全てをあげましょう」。イエスはこの申し出もきけば

りと拒否し、「離れ去れ、サタン!」と言います。(マタイ 4:8-10) イエスは、間違ったことをさせようとする誘惑に負けませんでした。エホバだけに神聖な奉仕をささげなければならないことが分かっていたからです。そのようにして、イエスは神への忠実を保ちます。

これらの誘惑と、イエスが誘惑にどう抵抗したかを考えるなら、大切なことを学べます。この誘惑は作り話などではなく、現実起きたものでした。ですから、悪魔は悪魔の象徴ではありません。目には見えなくても、確かに実在しています。さらに、この記述から、世界中の政府は悪魔のものであり、悪魔によって支配されていることが分かります。そうでなければ、悪魔からの誘惑は本当の意味での誘惑とはならなかったでしょう。

別の点として、悪魔は、自分を1度崇拜するなら、世界の全ての王国を与えようとまで言いました。悪魔は似たような方法で私たちを誘惑してきます。富や権力や良い地位が手に入るという魅力的な話を持ち掛けてくるかもしれません。誘惑がどんなものであろうと、イエスの模範に倣って神への忠実を保つのは賢明なことです。さらに、悪魔がイエスから離れたのは、「別の都合の良い時まで」だったことにも注目してください。(ルカ 4:13) 私たちについても同じことが言えます。決して警戒を緩めてはならないのです。

◇ イエスは40日間荒野にいて、どんなことを黙想したかもしれませんか。

◇ 悪魔はイエスをどのように誘惑しようとしたか。

◇ 悪魔の誘惑と、それに対してイエスがどのように抵抗したかを考えるなら、どんなことを学べますか。





# 人々を弟子とする活動始める

ヨハネ 1:29-51

イエスは荒野で40日間過ごした後、ガリラヤに向かいます。しかしまず、バプテスマを施してくれたヨハネの所に戻ります。イエスが近づいてくると、ヨハネはイエスを指さし、人々に大きな声でこう言います。「見なさい、世の罪を取り去る、神の子羊です！ これこそ私が言っていた方です。『私の後から来る方がいる。私より優れた方である。私より先に存在したからである』と」。(ヨハネ 1:29, 30) ヨハネはイエスよりも少し年上ですが、自分が生まれる前からイエスが天で生きていたことを知っています。

数週間前にイエスがバプテスマを受けにやって来た時、ヨハネにはイエスがメシアになるという確信がなかったようです。それでヨハネは、「私もこの方を知りませんでしたが、私が水でバプテスマを施したのは、この方がイスラエルにはっきり知られるためでした」と言いました。(ヨハネ 1:31)

それから、イエスにバプテスマを施した時にどんなことが起きたかを話し始めます。「聖霊が天からハトのように下ってくるのを見ましたが、それはこの方の上にとどまりました。私もその方を知りませんでしたが、水でバプテスマを施すように私を遣わした神が言いました。『聖霊が下って誰かの上にとどまるのを見たら、それこそ聖霊でバプテスマを施す者である』。私はそれを見たので、この方こそ神の子だと証言したのです」。(ヨハネ 1:32-34)

次の日、ヨハネが弟子2人と一緒にいると、再びイエスが近づいてきます。それでヨハネは、「見なさい、神の子羊です！」と言います。(ヨハネ 1:36) すると、バプテストのヨハネの弟子2人はイエスの後に付いていきます。1人はアンデレという名前で、もう1人はこの出来事を記録したヨハネ本人のようです。このヨハネはイエスのいとこで、サロメの息子と思われます。サロメは



おそらくマリアの姉妹であり、夫はゼベダイといます。

イエスはアンデレとヨハネが付いてくるのに気付いて振り返り、「何の用でしょうか」と尋ねます。

2人は、「ラビ、どこに滞在しているのですか」と聞きます。

するとイエスは、「一緒に来なさい。そうすれば分かります」と答えます。(ヨハネ 1:37-39)

時刻は午後4時ごろで、アンデレとヨハネはその日の残りの時間をイエスと一緒に過ごします。アンデレは興奮のあまり、自分の兄弟でペテロとも呼ばれるシモンを見つけると、「私たちはメシアを見つけた」と話します。(ヨハネ 1:41) そしてペテロをイエスの所に連れていきます。ヨハネも自分の兄弟ヤコブを見つけてイエスの所に連れてきたようですが、ヨハネはそうした個人的な事柄を記録していません。

翌日、イエスはベツサイダ出身のフィリポに会います。





ベツサイダはガリラヤの海の北の岸に近い町で、アンデレとペテロの生まれ育った所です。イエスはフィリポに、「私の弟子になりなさい」と言います。(ヨハネ 1:43)

フィリポは、バルトロマイとも呼ばれるナタナエルを見つけ、次のように話します。「私たちは、モーセの律法と預言者の書に記されている人を見つけた。ヨセフの子で、ナザレから来たイエスだ」。するとナタナエルは疑わしうに、「何か良いものがナザレから出るだろうか」と言います。

フィリポは、「来れば分かる」と誘います。イエスはナタナエルが近づいてくるのを見て、「見なさい、まさにイスラエル人、心に偽りがありません」と言います。

「どうして私のことを知っているのですか」とナタナエルは尋ねます。

イエスは、「フィリポがあなたを呼ぶ前に、あなたがイチジクの下にいるのを見ました」と答えます。

ナタナエルは驚き、「ラビ、あなたは神の子です。イスラエルの王です」と言います。

するとイエスはこう話します。「イチジクの下にいるのを見たと言ったから信じるのですか。あなたはもっと驚くような事を目にします」。そして、次のように約束します。「はっきり言っておきますが、あなたたちは、天が開いて神の天使たちが人の子の元に上り下りするのを見ます」。(ヨハネ 1:45-51)

このすぐ後、イエスと新しい弟子たちはヨルダン渓谷を出発し、ガリラヤに向かいます。

- ◇ どんな人たちが最初にイエスの弟子となりましたか。
- ◇ ペテロは、そして恐らくヤコブも、どのようにしてイエスの所に連れていかれましたか。
- ◇ ナタナエルはどのようにしてイエスが神の子であると確信するようになりましたか。



# 最初の奇跡<sup>きせき</sup>を行う

ヨハネ 2:1-12



ナタナエルがイエスの最初の弟子の1人になってから3日目のことです。イエスと弟子たちの何人かは、北にあるガリラヤ地域に向かいます。そこは、自分たちが生まれ育った場所です。イエスと弟子たちは、ナタナエルの地元の町カナで開かれる結婚式の披露宴に招待されているのです。カナは、イエスが育ったナザレの北に位置する山地の中にあります。

イエスの母親マリアも来ています。新郎新婦の家族の友人として、大勢の客をもてなす手伝いをしているようです。それでマリアは足りないものにすぐ気づき、イエスに、「ぶどう酒がありません」と言います。(ヨハネ 2:3)

この時マリアがイエスに言っていたのは、ぶどう酒が足りないので何とかしてほしいということでした。イエスは母親が間違いに自分で気付くように、慣用句を使って、「それは私とあなたが心配することですか」と言います。(ヨハネ 2:4) イエスは神から任命された王なので、自分の行動に関する指示を家族や友人からではなく、天の父から受けることになっています。マリアは賢明にもその問題を息子に任せ、給仕の者たちに、「彼が言うことは何でもしてください」とだけ言います。(ヨハネ 2:5)

そこには石の水がめが6つ置いてあり、1つのかめには40ℓ以上の水が入ります。イエスは給仕たちに、「かめいっぱい水を入れなさい」と指示します。そしてその後、「さあ、少しくんで、宴会の幹事の所に持っていきなさい」と言います。(ヨハネ 2:7, 8)

幹事はぶどう酒の品質が高いことに驚きますが、それが奇跡によって造られたものだとは気付きません。幹事は花婿を呼んで言います。「普通は最初に上等のぶどう酒を出し、みんなが酔ったところに、劣ったのを出しますが、あなたは上等のぶどう酒を今まで取っておいたのですね」。(ヨハネ 2:10)

これはイエスが行った最初の奇跡です。弟子たちはこの奇跡を見て、イエスに対する信仰を強められます。この後、イエスとマリアとイエスの異父兄弟たちは、ガリラヤの海の北西の沿岸にある町カペルナウムに旅をします。



- ◇ カナでの披露宴はいつ開かれましたか。
- ◇ ぶどう酒について母親が言った言葉に、イエスは何と答えましたか。
- ◇ イエスはどんな奇跡を行いましたか。人々はどんな反応をしましたか。



真の崇拝<sup>すうはい</sup>への熱心さを示す

ヨハネ 2:12-22





カナでの披露宴の後、イエスはカペルナウムに向かいます。母親マリアと異父兄弟のヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダも一緒です。

イエスはなぜカペルナウムに行くのでしょうか。カペルナウムは、ナザレやカナと比べて便利な場所にあり、大きな町だからです。しかも、新しい弟子たちの多くはカペルナウムやその周辺で暮らしているので、地元で訓練を与えることができます。

カペルナウムに滞在中、イエスは非常に多くのことを成し遂げます。それで、この町と周辺地域に住む大勢の人たちがイエスの活動について聞きます。しかし間もなく、献身したユダヤ人の男性であるイエスと弟子たちは、西暦30年の過ぎ越しの祭りに出席するため、エルサレムに行かなければなりません。

エルサレムの神殿に着くと、弟子たちは今まで見たことがないようなイエスの衝撃的な一面を見ます。

神の律法によれば、イスラエル人は神殿で動物の犠牲をささげなければなりません。また、神殿を訪れる人は滞在中に自分で食事を準備する必要があります。それで、遠くからやって来る人たちは「牛、羊、ヤギ」を買ったり滞在中に必要なものを購入したりするため、お金を持ってきたてもよいことになっています。(申

命記 14:24-26) エルサレムの商人たちはそうした状況を利用して、神殿の大きな庭で動物や鳥を売っています。人をだまして高額な値段を吹っ掛ける者たちもいます。

イエスはそれを見て強い憤りを感じます。そして、両替屋の硬貨をまき散らし、彼らの台を倒し、商人たちを追いついてこう言います。「これらの物を運び出しなさい! 私の父の家を商売の家にするのはやめなさい!」(ヨハネ 2:16)

これを見た弟子たちは、神の子について述べた、「私はあなたの家に対する熱い思いを抑え切れない」という預言を思い出します。しかし、ユダヤ人たちはイエスに、「こうした事をするからには、どんなしるしを見せてくれるのか」と詰め寄ります。するとイエスは答えます。「この神殿を壊してみなさい。3日で建て直します」。(ヨハネ 2:17-19。詩編 69:9)

ユダヤ人たちは、イエスがエルサレムの神殿のことを言っていると思い、「この神殿は46年かけて建てられたのに、3日で建て直すのか」と尋ねます。(ヨハネ 2:20) でもイエスが言っていたのは、自分の体という神殿のことです。3年後、弟子たちはイエスが復活した時にこの言葉を思い出します。

- ◇ カナでの披露宴の後、イエスはどこに向かいますか。
- ◇ イエスが神殿で目にした光景に憤りを感じたのはなぜですか。それでどうしましたか。
- ◇ イエスが述べた「神殿」とは何のことでしたか。イエスの言葉にはどんな意味がありましたか。

## 夜にニコデモを教える

ヨハネ 2:23-3:21

イエスは西暦30年の過ぎ越しの祭りでエルサレムに  
いる間、目覚ましいしるし、つまり奇跡を行います。その結  
果、たくさんの人がイエスに信仰を持ちます。パリサイ  
派の人で、ユダヤ人の高等法廷サンヘドリンの一員で  
あるニコデモも、心を動かされます。そして、もっと学び  
たいと思い、暗くなってからイエスを訪問します。誰か  
に見られて、ユダヤ人の指導者たちからの良い評判を  
失ってしまうのを恐れたからでしょう。

ニコデモはこう言います。「ラビ、私たちは、あなたが  
教師として神の元から来たことを知っています。神が共  
にいない限り、あなたがするようなしるしは行えないか  
らです」。するとイエスは、神の王国に入るには「再び生  
まれなければ」ならない、と話します。(ヨハネ 3:2, 3)

でも、人が再び生まれることなどあるでしょうか。ニ  
コデモは、「母親の腹にもう一度入って生まれてくるこ  
となどでできません」と言います。(ヨハネ 3:4)

もちろん、再び生まれるとは、そのような意味ではあ  
りません。イエスは、「水と聖霊によって生まれなければ  
、誰も神の王国に入ることはできません」と説明しま  
す。(ヨハネ 3:5) イエスはバプテスマを受けて聖霊が  
下ってきた時に、「水と聖霊によって」生まれました。そ  
の時、「これは私の愛する子、私はこの子のことを喜ん  
でいる」という天からの宣言がありました。(マタイ 3:  
16, 17) 神は、イエスが天の王国に入る希望を持つ、  
聖霊によって生み出された子になった、と宣言したので  
す。後に、西暦33年のペンテコステにおいて、バプテ  
スマを受けた他の人たちに聖霊が注ぎ出され、その人た  
ちも神の子として再び生まれることになります。(使徒  
2:1-4)

ニコデモは、神の王国についてのイエスの話をなか  
なか理解できません。それでイエスは、自分が果たす

特別な役割について、さらに  
説明します。「モーセが荒野  
で蛇をさおに掲げたのと同  
じように、人の子も掲げられ  
なければなりません。彼を  
信じる人が皆、永遠の命を  
受けるためです」。(ヨハネ  
3:14, 15)



ずっと昔、毒蛇にかまれたイスラエル人は生き延びる  
ために銅の蛇を見なければならませんでした。(民数記  
21:9) 私たちの場合は、罪と死から救われ永遠の命を  
得るため、神の子に信仰を抱かなければなりません。こ  
の点でエホバがどのように大きな愛を示しているかを  
強調するため、イエスは次のように話します。「神は、自  
分の独り子を与えるほどに人類を愛したのです。そのよ  
うにして、彼に信仰を抱く人が皆、滅ぼされないで永遠  
の命を受けられるようにしました」。(ヨハネ 3:16) こ  
のように、イエスは伝道開始から半年ほどたった時に、  
自分は人類が救われるための道であるということを明  
らかにされました。

さらにイエスは、「神が自分の子を世に遣わしたのは  
、彼が世を裁くため」ではないと話します。子が遣わ  
されたのは、人類に滅びを宣告して、世に不利な裁き  
をもたらすためではありません。むしろ、「世が彼を通し  
て救われる」ためなのです。(ヨハネ 3:17)

ニコデモは夜になってから恐る恐るイエスの所へやっ  
て来ました。ですから、イエスがニコデモとの会話の最  
後で次のように言ったのは興味深いことです。「さて、裁  
きの根拠は次の通りです。光[イエスの生き方と教え]  
が世に來ているのに、人々は光ではなく闇を愛しまし  
た。邪悪なことを行っていたからです。悪を行っている  
人は、光を憎んで、光の所に來ません。自分の行いが暴



ろ  
露されないようにするためです。しかし、正しいことを行  
う人は光の所に来ます。自分の行いが神の意志に沿っ  
ていることが明らかになるようにするためです」。(ヨハ  
ネ 3:19-21)

パリサイ派でイスラエルの教師でもあるニコデモは、  
この時にイエスから聞いた神の目的におけるイエスの  
役割について熟考するでしょうか。それは、ニコデモ次  
第です。

- 
- ◇ ニコデモがイエスを訪問したのはなぜですか。それが夜だったのはなぜでしたか。
  - ◇ 再び生まれる、とはどういう意味ですか。
  - ◇ イエスは「世を裁くため」に来たのではない、とはどういう意味ですか。



# イエスは盛んになっていき、ヨハネは衰えていく

マタイ 4:12    マルコ 6:17-20    ルカ 3:19, 20    ヨハネ 3:22-4:3

西暦30年春の過ぎ越しの祭りの後、イエスと弟子たちはエルサレムを出発します。とはいえ、ガリラヤにある自分たちの家に真っすぐ帰るわけではありません。ユダヤ地方に向かい、そこで多くの人にバプテスマを施します。バプテストのヨハネは約1年にわたり、恐らくヨルダン川流域で同じ活動をしてきました。ヨハネは今も自分の何人かの弟子たちと一緒にいます。

イエスはバプテスマを施さず、イエスの指示を受けた弟子たちがそれを行います。この時期、イエスとヨハネは2人とも、律法契約に対する罪を悔い改めたユダヤ人たちに教えます。(使徒 19:4)

ところが、ヨハネの弟子たちはイエスに嫉妬し、ヨハネにこう言います。「ヨルダン川の向こうで一緒にいた人[イエス]……がバプテスマを施していて、みんながその元に行っています」。(ヨハネ 3:26) もちろん、ヨハネは嫉妬していません。イエスの成功を喜んでおり、自分の弟子たちにも喜んでほしいと思っています。それで、次の点を思い起こさせます。『私はキリストではなく、その方より前に遣わされた者だ』と私が言ったことを、あなたたち自身が証言できます。そして、皆がこのことを理解できるように、例えを用いてこう説明します。「花嫁を迎えるのは花婿です。しかし花婿の友人も、そばに立って花婿の言葉を聞くと、非常に喜びます。それで、私は喜びに満たされています」。(ヨハネ 3:28, 29)

数カ月前にもヨハネは、自分の弟子たちをイエスに

紹介し、花婿の友人のように喜んでいることを示しました。そのうちの何人かはイエスに従うようになり、やがて聖霊によって油を注がれます。ヨハネは、いま自分と一緒にいる弟子たちにもイエスに従ってほしいと願っています。結局のところ、ヨハネの任務はキリストによる伝道のために道を整えることなのです。ヨハネは、「あの方は盛んになっていき、私は衰えていかなければなりません」と話します。(ヨハネ 3:30)

すでにイエスの弟子となっていたもう1人のヨハネは、イエスがどこから来たのか、人類を救うためにどんな重要な役割を果たすのかについて、次のように記しています。「上から来る者は他の全ての者の上にいる。……父は子を愛していて、全てのものを子に委ねた。子に信仰を抱く人は永遠の命を受ける。子に従わない人は命を得ず、神の憤りがその人の上にとどまる」。(ヨハネ 3:31, 35, 36) これは人々が知るべき大切な真理です。

バプテストのヨハネは、自分の役割と活動が衰えていくと話してから間もなく、ヘロデ王の命令で逮捕されます。ヘロデは異母兄弟フィリポの妻ヘロデアを奪い取って結婚しました。ヨハネが人々の前で2人の姦淫を暴露したため、ヘロデはヨハネを牢屋に入れます。それを聞いたイエスは、弟子たちと一緒にユダヤ地方を離れ、「ガリラヤに去って」いきます。(マタイ 4:12。マルコ 1:14)

- イエスの弟子たちはバプテスマを施す
- バプテストのヨハネが牢屋に入れられる

# 18



- ◇ ヨハネによるバプテスマと、イエスの伝道期間中にイエスの弟子たちが施したバプテスマには、どんな意味がありますか。
- ◇ ヨハネは自分の弟子たちに、イエスの活動に嫉妬すべきでないことをどのように教えましたか。
- ◇ ヨハネが牢屋に入れられたのはなぜですか。

## サマリア人の女性を教える

ヨハネ 4:3-43

ユダヤから北のガリラヤに向かう途中、イエスと弟子たちはサマリア地方を通ります。皆、旅で疲れています。それで正午ごろ、スカルという町のそばにある井戸の所で休憩します。その井戸は、何世紀も前にヤコブが掘ったか、お金を払って掘らせたようです。現在でも、その井戸はナブルスという都市の近くに残っています。

イエスが井戸のそばで休憩している間、弟子たちは近くの町へ食べ物を買に行きます。弟子たちが出掛けた後、サマリア人の女性が水をくみにやって来ます。イエスはその女性に、「水を飲ませてください」と言います。(ヨハネ 4:7)

ユダヤ人とサマリア人の間には根深い偏見があるので、普通は関わりを持ちません。それで、女性はびっくりし、「ユダヤ人のあなたが、サマリア人で女性の私に、水を飲ませてほしいと言うのはどうですか」と尋ねます。イエスはこう答えます。「もしあなたが神の無償の贈り物について知っていて、『水を飲ませてください』と言ったのが誰なのか分かっていたなら、あなたはその人に求め、その人は生きた水を与えたことでしょう」。すると、女性は言います。「旦那さま、あなたは水をくむ物も持っていませんし、この井戸は深いです。その生きた水をどこから持ってくるのですか。あなたは私たちの父祖ヤコブより偉い方ではありませんよね。ヤコブはこの井戸を私たちに与え、息子や家畜たちと一緒にここから飲みました」。(ヨハネ 4:9-12)

それに対しイエスは、「この水を飲む人は皆、再び喉が渇きます。しかし、私が与える水を飲む人は決して喉が渇くことがなく、私が与える水はその人の中で泉となって、永遠の命を与える水を湧き上がらせます」と話します。(ヨハネ 4:13, 14) イエスは疲れています。それでも、命を与える真理の言葉を喜んで語ります。



女性が、「旦那さま、その水を下さい。もう喉が渇かないように、ここまで水をくみに来なくてもいいようにしてください」と頼むと、イエスは話題を変え、「行って、夫を呼んできなさい」と言います。女性は、「夫はいません」と答えます。次にイエスが述べた言葉に、この女性は衝撃を受けたに違いありません。イエスはこう言ったのです。『夫はいません』とあなたは正しく答えました。5人の夫がいましたが、今いるのは夫ではないからです」。(ヨハネ 4:15-18)

その言葉からイエスがどんな人かを理解した女性はすっかり驚き、「旦那さま、あなたは預言者ですね」と言います。そして、神への崇拝に関心があることを示し、こう続けます。「私たち[サマリア人]の父祖はこの山[近くにあるゲリジム山]で崇拝しましたが、あなた方[ユダヤ人]は、エルサレムで崇拝しなければならないと言います」。(ヨハネ 4:19, 20)

しかしイエスは、どこで崇拝を行うかは重要でないことを示し、「あなた方がこの山でもエルサレムでもない所で天の父を崇拝する時が来ます」と話します。そして、さらにこう言います。「真の崇拝者が聖霊と真理に導かれて父を崇拝する時が来ます。今がその時です。





- ◇ サマリア人の女性がイエスから話し掛けられて驚いたのはなぜですか。
- ◇ イエスはその女性に、生きた水と、どこで崇拝をささげるべきかについて、どんなことを教えましたか。
- ◇ イエスはサマリア人の女性に対し、自分が誰であるかをどのように明らかにしましたか。イエスはその女性に、どのような崇拝をささげるよう勧めましたか。

**サマリア人とは？** サマリアとは、北のガリラヤと南のユダヤの間にある地域を指しています。

ソロモン王の死後、イスラエルは分裂し、北の10部族はユダとベニヤミンから離れました。その後、北の10部族はサマリアと呼ばれるようになり、彼らは子牛崇拝を行い始めます。そのため西暦前740年、エホバはアッシリア人がサマリアを滅ぼすことを許されます。アッシリア人は住民の多くを連れ去り、その代わりに帝国のほかの場所から人々を連れてきてそこに住まわせました。異教の神々を崇拝するそれらの新たな住民は、その地に残っていたイスラエル人と結婚するようになります。時たつうちに、その土地の住民は神の律法で定められていた信条や割礼などの慣行を取り入れた崇拝を行い始めましたが、彼らの宗教的慣行は真の崇拝と呼べるものではありませんでした。(列王第二 17:9-33。イザヤ 9:9)

イエスの時代、サマリア人はモーセ五書を受け入れてはいましたが、エルサレムの神殿での崇拝は行っていませんでした。そして長い間、スカルの近くにあるゲリジム山に建てられた神殿で崇拝をささげていました。神殿が破壊された後も、サマリア人はその山で崇拝を行っていました。サマリア人とユダヤ人の間には敵意があり、イエスの伝道期間中にもはっきり見られました。(ヨハネ 8:48)

実際、父は、自分をそのように崇拝する人たちを求めています」。(ヨハネ 4:21, 23, 24)

神が真の崇拝で重要視しているのは、どこで崇拝するかではなく、どのように崇拝するかです。女性は感激して言います。「私は、メシアが来ることを知っています。キリストと呼ばれる方です。その方が来たら、全てのことをはっきり知らせてくださいます」。(ヨハネ 4:25)

ここでイエスは大切な真理を明らかにし、「あなたと話している私がそうです」と告げます。(ヨハネ 4:26) 考えてみてください。この女性は真昼に水をくみに来て、イエスがメシアだということを教えられたのです。これは本当に特別なことです。イエスがまだ人々の前ではっきりと教えていないことだからです。

### 多くのサマリア人が信じる

イエスの弟子たちが食べ物を買ってスカルから帰ってきます。すると、ヤコブの井戸の所で、イエスがサマリア人の女性と話しています。その女性は弟子たちが戻ってくると、水がめを残したまま町に行きます。

女性はスカルに行くと、イエスから聞いたことを人々に詳しく話します。そして、「見に来てください。私がした事を全て言い当てた人がいます」と強く勧めます。そして、好奇心を刺激して、「もしかしたら、この人がキリストではないでしょうか」と言います。(ヨハネ 4:29) この質問は重要なテーマに触れていました。モーセの時代から、このテーマは関心の的だったからです。(申命記 18:18) 町の人たちはイエスに会いに行きます。

弟子たちは買ってきた食べ物をイエスに勧めます。しかしイエスが、「私にはあなたたちが知らない食べ物があります」と言ったため、弟子たちは互いに、「誰も食べる物を渡していないはずだが」と言います。そこでイエスはその言葉の意味を親切に説明します。イエスの弟子全てに大きな影響を与える説明です。「私の食べ物とは、私を遣わした方の意志を行い、与えられた仕事を成し遂げることです」。(ヨハネ 4:32-34)





イエスのしようとしていた仕事は、穀物の収穫<sup>しゅうかく</sup>のことではありません。それは4カ月も先のことからです。イエスは比喩<sup>ひよ</sup>的な収穫<sup>しゅうかく</sup>について話していたのです。こう説明しています。「目を上げて畑を見なさい。もう色づいて収穫<sup>しゅうかく</sup>できます。すでに、刈り取る人は報酬<sup>ほうしゅう</sup>を受け取って、永遠<sup>えいゑん</sup>の命に至る実を集めています。こうして、多く<sup>おほく</sup>人と刈り取る人は共に喜びます」。(ヨハネ 4:35, 36)

イエスは、サマリア人の女性に出会ったことが実を結びつつあることに気付いているようです。スカルの大勢の人たちはイエスに信仰<sup>しんこう</sup>を持ち始めます。その女性が、イエスは「私がした事を全て言い当てました」と証言したからです。(ヨハネ 4:39) それで、スカルの人たちは井戸<sup>いど</sup>のそばにやって来た時、もっと長くいて話をしてほしい、とイエスに頼<sup>たの</sup>みます。イエスはその申し出を受け入れ、さらに2日サマリアにとどまります。

イエスの話を聞き、さらに多くのサマリア人がイエスに信仰<sup>しんこう</sup>を持ちます。人々は例<sup>れい</sup>の女性に、「もう、あなたが言ったから信じているのではない。自分で聞いて、この人は確かに人類の救い主だということが分かったのだ」と言います。(ヨハネ 4:42) サマリア人の女性の立派<sup>もはん</sup>な模範から、キリストについてどのように証言すればよいかを学べます。もっと話を聞きたいと思ってもらえるように、人々の好奇心<sup>ひとびと こうきしん</sup>を刺激<sup>しげき</sup>するのです。

大麦<sup>しゅうかく</sup>の収穫までは、まだ4カ月あります。この地域では大麦の収穫<sup>しゅうかく</sup>が春に行われるので、今は11月か12月くらいでしょう。ですから、イエスと弟子たちは西暦<sup>せいれき</sup>30年の過ぎ越し<sup>すこ</sup>の後、ユダヤで教えたりバプテスマ<sup>ばどこ</sup>を施したりしながら8カ月ほど過ごしたことが分かります。これから、彼らは地元である北のガリラヤに向かいます。そこではどんなことが待ち受けているのでしょうか。

- ◇ サマリア人の女性はイエスについてどんな結論を下しましたか。それでどうしましたか。
- ◇ 西暦<sup>せいれき</sup>30年の過ぎ越し<sup>すこ</sup>の後、イエスと弟子たちは何をしていましたか。







セクション

# 3

## ガリラヤでの 大規模な伝道活動

「イエスは伝道を開始して、  
『……天の王国は近づいた  
からです』と言い始めた」。

マタイ 4:17



## カナでの2度目の奇跡

マルコ 1:14, 15 ルカ 4:14, 15 ヨハネ 4:43-54

サマリアで2日過ごした後、イエスは自分の故郷に移動します。ユダヤ地方で伝道活動を熱心に行っていました。ガリラヤへ戻るのは休息するためではありません。むしろ、さらに熱意を込めて伝道を行います。イエスは自分が歓迎されないことを予想しています。「預言者が自分の故郷では敬われない」と述べたことがあるからです。(ヨハネ 4:44) 弟子たちはイエスと一緒に行動せず、自宅に帰って以前の仕事を再開します。

イエスが伝えるメッセージは次のようなものです。「神の王国は近づきました。悔い改めて、良い知らせに信仰を持ちなさい」。(マルコ 1:15) ガリラヤの人たちはどんな反応をしますか。大勢の人がイエスを喜んで迎え、敬意を払います。ただ単にそのメッセージを聞いたからではなく、何カ月も前の過ぎ越しの祭りの時、エルサレムでイエスの目覚ましい奇跡を目撃していたからです。(ヨハネ 2:23)

イエスはガリラヤでの伝道を恐らくカナで始めます。披露宴で水をぶどう酒に変えるという奇跡を行った場所です。今回2度目に訪れると、イエスはある若者が重い病気で死にそうになっていることを知ります。その子は王ヘロデ・アンテパスに仕える役人の息子です。ヘロデ・アンテパスは後にパテスタのヨハネを斬首刑にした人です。役人はイエスがユダヤからカナに來たと聞き、カペルナウムの自宅からイエスを捜しにやってきました。その人は必死にこう頼みます。「主よ、私の子

供が死なないうちに來てください」。(ヨハネ 4:49)

イエスは、役人が驚くような返事をし、「行きなさい。あなたの息子は治ります」と言います。(ヨハネ 4:50) その人はイエスの言葉を信じて、自宅に向かいます。すると途中で、役人に良い知らせを伝えようとして急ぐ自分の奴隷たちに出会います。息子は生き延び、元気になったのです。役人は事の次第を知ろうとして、いつ回復したのかと尋ねます。

「昨日の午後1時ごろに熱が下がりました」と奴隷たちは答えます。(ヨハネ 4:52)

役人は、イエスが「あなたの息子は治ります」と言っただけにその時刻だ、と気付きます。その後、奴隷を所有するほど裕福なこの男性と、家族全員がキリストの弟子になります。

こうしてイエスはカナで2度奇跡を行いました。水をぶどう酒に変え、約25<sup>はな</sup>離れた所にいた若者を癒やしたのです。イエスがこの時までに行った奇跡はそれだけではありません。とはいえ、今回の奇跡は重要な意味を持っています。イエスが明らかに神からの預言者としてガリラヤに戻ってきたことを示すものだからです。しかし、イエスは、「預言者が自分の故郷では敬われない」と言いました。それは、どの程度のことなのでしょう。

イエスが故郷のナザレに行くと明らかになります。何が起きるのでしょうか。

- 
- ◇ イエスはガリラヤに戻って、どんなメッセージを伝えますか。人々はどう反応しますか。
  - ◇ イエスがカナで行った2番目の奇跡とはどんなものですか。役人の家族全体はどうしましたか。
  - ◇ カペルナウムにいる若者を癒やしたことにはどんな重要な意味がありましたか。



- イエスは「神の王国は近づきました」というメッセージを伝える
- イエスは遠く離れた所にいる若者を癒やす



## ナザレの会堂で

ルカ 4:16-31

ナザレの町は興奮に包まれています。イエスがヨハネによるバプテスマを受けてから1年以上がたちました。それよりも前、イエスはこの町の木工でした。でも今は、強力な行いをすることで有名です。地元の人たちはイエスが何かしてくれるのではないかと期待しています。

イエスが習慣通り会堂に入ると、人々の期待は高まります。会堂での崇拜では祈りとモーセの書の朗読があり、「安息日ごとに会堂で」行われていました。(使徒15:21) 預言書の一部も朗読されていました。イエスは、朗読のために立ち上がった時、昔から知っている人がたくさんいることに気付いたかもしれません。そして、預言者イザヤの巻物が渡されると、エホバの聖霊によって油を注がれた者について述べている聖句を見つめます。現在のイザヤ 61章1, 2節です。

イエスが読んだその部分には、ある人物が、捕らわれている人の釈放、盲人の視力の回復、エホバに受け入れられる年の到来について伝える、と予告されています。イエスはその聖句を読んでから巻物を係の人に返し、椅子に座ると、全ての人の目がイエスに向けられます。それから、イエスは話し始めます。かなり長い話だったようです。その時に、「皆さんがいま聞いたこの聖句は、今日実現しています」という重要な言葉を語りました。(ルカ 4:21)

人々はイエスの「口から出る魅力ある言葉」に大変

驚き、「これはヨセフの子ではないか」と互いに言い始めます。しかしイエスは、人々が強力な行いを見たがっていることに気づき、こう言います。「きっと皆さんは、『医者よ、自分を治せ』という言葉を私に当てはめてこう言うでしょう。『私たちはカペルナウムでなされた事を聞いた。それを郷里のここでも行え』」。(ルカ 4:22, 23) 昔からイエスを知っている人たちは、イエスはまず地元で癒やしを行うべきだ、と考えているのでしょうか。イエスから軽く見られたと感じているのかもしれませんが。

それでイエスは、イスラエルの歴史における幾つかの出来事を取り上げます。エリヤの時代、イスラエルにはやもめが大勢いましたが、エリヤはその女性たちの元には遣わされませんでした。むしろ、シドンに近い町ザレパテに住む、イスラエル人ではないやもめの所に遣わされ、そこで命を救う奇跡を行いました。(列王第一17:8-16) またエリシャの時代、イスラエルには重い皮膚病の人が大勢いましたが、エリシャが癒やしたのはシリア人ナアマンだけでした。(列王第二 5:1, 8-14)

自分たちの身勝手さや信仰の欠如を暴露する話を聞いて、人々はどう反応するでしょうか。会堂にいた人たちは怒って立ち上がり、イエスを町の外へ追い立てます。そしてイエスを崖から突き落とそうとします。しかしイエスは無事に人々の手を逃れ、ガリラヤ湖の北西の沿岸にある町カペルナウムに行きます。

- 
- ◇ イエスの故郷の町ナザレが興奮に包まれていたのはなぜですか。
  - ◇ イエスの話を聞いた人々はどんな反応をしますか。人々が怒ったのはなぜですか。
  - ◇ ナザレの人たちはイエスに何をしようとしたか。



- イエスはイザヤの巻物を読む
- ナザレの人たちがイエスを殺そうとする





## 4人の漁師が人を集める漁師になる

マタイ 4:13-22   マルコ 1:16-20   ルカ 5:1-11



イエスはナザレの人たちに殺されそうになった後、ガリラヤの海(「ゲネサレ湖」とも呼ばれる)の近くにある町カペルナウムにやって来ます。(ルカ 5:1) これにより、海沿いに住むガリラヤの人々は大きな光を見た、というイザヤの預言が実現します。(イザヤ 9:1, 2)

イエスはガリラヤでも、「天の王国は近づいた」というメッセージを伝えます。(マタイ 4:17) イエスは弟子のうちの4人を見つけます。以前、4人はイエスと旅をしていましたが、イエスと一緒にユダヤから戻ってきた後、漁の仕事を再開していました。(ヨハネ 1:35-42) しかし、イエスのそばにずっといて訓練を受ける時がやって来ました。そうすれば、イエスがなくなった後も伝道を継続できます。

イエスが海辺を歩いていると、シモン・ペテロと兄弟のアンデレが仲間と網を洗っています。イエスは彼らに近づいてペテロの舟に乗り、陸から少し離すよう頼みます。少し岸から離れると、イエスは舟の中に座り、岸にいる群衆に王国についての真理を教え始めます。

その後、イエスはペテロに、「沖に乗り出し、網を下ろして漁をしなさい」と言います。ペテロは、「先生、一晩中働いて何も捕れませんでした。それでも、おっしゃる通り、網を下ろしてみます」と答えます。(ルカ 5:4, 5)

漁師たちが網を下ろしたところ、非常に多くの魚が掛かり、網が裂け始めます。それで急いで、そばの舟にいる仲間たちに身ぶりで合図をし、助けに来てもらいま

す。間もなく両方の舟は魚でいっぱいになったため、沈みかけます。これを見たペテロはイエスの前にひれ伏し、「私から離れてください、主よ。私は罪深い男なのです」と言います。するとイエスはこう答えます。「恐れることはありません。今後、あなたは人を生きたまま捕めるのです」。(ルカ 5:8, 10)



イエスはペテロとアンデレに、「私に付いてきなさい。魚ではなく人を集める漁師にしてあげましょう」と約束します。(マタイ 4:19) イエスは他の2人の漁師、ゼベダイの息子であるヤコブとヨハネにも声を掛けます。彼らもためらいません。これら4人は漁業をやめ、弟子としてイエスと一緒に行動するようになります。

- ◇ イエスはどんな職業の人たちに自分と一緒に行動するよう勧めましたか。それは誰でしたか。
- ◇ ペテロはどんな奇跡を見て恐れを感じましたか。
- ◇ 4人の弟子たちはどんな漁をするようになりますか。

## カペルナウムで大勢の人を癒やす

マタイ 8:14-17 マルコ 1:21-34 ルカ 4:31-41

ペテロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネの4人は、人を集める漁師になるようにとのイエスの勧めに応じました。そして、安息日に全員でカペルナウムの会堂に行きます。イエスがそこで教えると、人々はその教え方に驚きます。イエスは律法学者たちのようではなく、権威を授かった人のように教えていたからです。

この日、会堂には邪悪な天使に取りつかれた男性が来ています。その人は大声で叫びます。「ナザレ人イエス、何をしに来たのですか。私たちを滅ぼすのですか。あなたが誰かはよく分かっています。神の聖なる者です」。イエスは、その人を操っている邪悪な天使を吐りつけ、黙りなさい。その人から出なさい!」と命じます。(マルコ 1:24, 25)

すると邪悪な天使は、その男性を地面に投げ倒してけいれんを起こさせ、力の限りわめきますが、男性に「傷を負わせることなく」出てきます。(ルカ 4:35) 周り

**邪悪な天使に取りつかれる** 邪悪な天使に取りつかれた人は、ひどく苦しめられました。(マタイ 17:14-18) しかし、そうした天使から解放されると、正常な精神状態に戻り、体調も回復しました。イエスは、神の聖霊の助けによって邪悪な天使を何度も追い出しました。(ルカ 8:39; 11:20)

にいた人たちは仰天し、「どうのことだ」と言います。そして、「邪悪な天使たちにさえ権威をもって命じ、それらは従うのだ」と話します。(マルコ 1:27) 当然、この目覚ましい出来事についての話はガリラヤ中に広まります。

イエスと弟子たちは会堂を出て、ペテロの家に行きます。ペテロのしゅうとめが重い病氣にかかり高熱を出していたため、人々はイエスに何とか助けてほしいと頼みます。それでイエスは彼女の所へ行き、その手を取って起こします。しゅうとめはたちまち癒やされ、イエスと弟子たちをもてなし始めます。食事を出す準備を始めたのでしょうか。

夕方ごろ、いろいろな場所から、病氣の人を連れた人たちがペテロの家を訪れます。間もなく、町中の人々が玄関前に集まったようです。なぜでしょうか。治療を望んでいたのです。「人々が皆、家にいるさまざまな病氣の人をイエスの元に連れて」きます。そして、「イエスは一人一人に手を置いて治し」ます。(ルカ 4:40) イエスは予告されていた通り、どんな病氣でも癒やしました。(イザヤ 53:4) 邪悪な天使に取りつかれている人をさえ解放します。邪悪な天使たちは出てくる時に、「あなたは神の子です」と叫びます。(ルカ 4:41) しかしイエスは吐りつけ、それ以上話さないようにと命じます。邪悪な天使たちはイエスがキリストであることを知っていたからです。イエスは彼らが真の神に仕えているような印象を与えたくありませんでした。

- ◇ 安息日に、カペルナウムの会堂でどんなことがありましたか。
- ◇ 会堂を出た後、イエスはどこに行き、何をしましたか。
- ◇ そこでのイエスの奇跡を知ると、町の人々はどうしましたか。



- イエスは邪悪な天使を追い出す
- ペテロのしゅうとめが癒やされる



## ガリラヤ中で伝道する

マタイ 4:23-25 マルコ 1:35-39 ルカ 4:42, 43

イエスは4人の弟子たちとカペルナウムで忙しい1日を過ごしています。夕方にはその町の人々が病氣の人を癒やしてもらおうとしてやって来ます。独りになれる時間はほとんどありません。

翌日の朝早く、イエスはまだ暗いうちに起きて外に出ます。そして、父に祈るため、独りになれる静かな場所に行きます。ところが、そうできたのも少しの間です。イエスがいなかったことに気が付いた「シモンたち」が捜しに来たからです。イエスはシモン、つまりペテロの家に泊まっていたので、ペテロが中心となって捜したのでしょう。(マルコ 1:36。ルカ 4:38)

イエスを見つけたペテロは、「みんなが捜しています」と言います。(マルコ 1:37) 当然ながら、カペルナウムの人たちはイエスにもっと長くいてほしいと思っています。イエスにしてもらったことに深く感謝しているため、イエスが「自分たちの所から去っていくのを引き留めよう」とします。(ルカ 4:42) でも、イエスが地上に来たのは、主に奇跡的な癒やしをするためでしたか。イエスの活動はこの地域だけに限られるのでしょうか。イエスは何と言いますか。

イエスは弟子たちに言います。「どこかほかの所、近くの町に行きましょう。そこでも伝道するためです。私はそのために来たからです」。もっと長くいてほしいと願っている人々に対し、イエスはこうも話します。「私はほか

の町にも神の王国の良い知らせを広めなければなりません。そのために遣わされたからです」。(マルコ 1:38。ルカ 4:43)

イエスが地上に来た主な目的は、神の王国を知らせることでした。その王国は神の名を神聖なものとし、人類の問題全てを永遠に解決します。イエスは奇跡的な癒やしを行うことにより、自分が神から遣わされた者であることを示します。モーセが何世紀も前に、神から遣わされたことの証明として奇跡を行ったのと同じです。(出エジプト記 4:1-9, 30, 31)

こうして、イエスはほかの町で伝道するためカペルナウムを出発します。4人の弟子たち、ペテロと兄弟のアンデレ、ヨハネとその兄弟ヤコブも一緒です。この4人は先週、イエスと一緒に旅をしながら伝道を行うよう勧められ、それに応じた最初の人たちです。

ガリラヤでのイエスと弟子たちの伝道旅行は大成功でした。イエスのうわさは遠く広く伝わっていきます。「イエスの評判はシリア中に広まり」、デカポリスと呼ばれる十都市がある地方や、ヨルダン川の向こう側の他の地域にまで伝わります。(マタイ 4:24, 25) ユダヤとそれらの地域から大勢の人が来て、イエスと弟子たちの後に従います。多くの人が治療の必要な人を連れてきます。イエスはその期待に応え、病気を治し、邪悪な天使を追い出します。

- 
- ◇ カペルナウムでの忙しい日の翌日、朝早くにどんなことがありましたか。
  - ◇ イエスが地上に遣わされたのはなぜですか。イエスは何のために奇跡を行いましたか。
  - ◇ イエスと一緒にガリラヤへの伝道旅行に出掛けたのは誰でしたか。イエスの活動に対して、どんな反響がありましたか。



- イエスは4人の弟子たちとガリラヤ地方を旅する
- イエスの伝道と活動が広く知れ渡る





# 思いやりに動かされて重い皮膚病<sup>ひふびょう</sup>の人を癒<sup>い</sup>やす

マタイ 8:1-4   マルコ 1:40-45   ルカ 5:12-16



イエスと4人の弟子たちが「ガリラヤ中の会堂」で伝道していくにつれ、イエスが素晴らしいことを行っているというニュースが広まっていきます。(マルコ 1:39) そのニュースは、重い皮膚病を患う1人の男性にも伝わります。医師ルカは、その人が「全身重い皮膚病」だったと記しています。(ルカ 5:12) この病気は進行すると、体の各部分がだんだん崩れていきます。

男性は悲惨な病状に苦しんでおり、人から離れて生活しなければなりません。さらに、他の人が自分に近づいて病気に感染しないよう、「汚れている、汚れている!」と叫ぶことも求められています。(レビ記 13:45, 46) ところが、この人はイエスに近づいてひれ伏し、こう言ったのです。「主よ、あなたは、お望みになるだけで、私を癒やすことができます」。(マタイ 8:2)

イエスに対する何と立派な信仰でしょう。病気のせいで痛々しい姿をしていたはずですが、イエスはどのように反応するのでしょうか。あなたがその場にいたならどうしましたか。イエスは思いやりに動かされ、手を伸ばして相手に触れます。そして、「そう望みます。良くなりなさい」と言います。(マタイ 8:3) すると、信じにくいことかもしれませんが、その重い皮膚病はすぐに消えたのです。

イエスのように思いやりにあふれる有能な人が王になってくれたら素晴らしいと思いませんか。この男性に

対するイエスの接し方から、次の点を確信できます。それは、イエスが地球全体を支配する時、「立場が低い人や貧しい人を哀れに思い、貧しい人の命を救う」という預言が実現するということです。(詩編 72:13) その時、イエスは苦しむ人たち<sup>全て</sup>を助けたいという自分の心からの願いを果たします。

重い皮膚病の男性を癒やす前から、イエスの伝道活動は人々の関心を集めています。今回の目覚ましい奇跡についてのお知らせも広まるでしょう。しかしイエスは、人々がうわさで聞いたことだけを基に信仰を持ってほしくないと考えています。また、「通りで自分の声が聞かれないようにする」と述べている預言も知っています。つまり世間を騒がせたくないのです。(イザヤ 42:1, 2) それで、癒やした男性に次のような命令を与えます。「誰にも話さないようにしなさい。ただ自分を祭司に見せに行き、モーセが指定した供え物をささげなさい」。(マタイ 8:4)

しかし、この男性はうれしさのあまり、何が起きたかを話さずにはいられません。去っていき、いろいろな場所で話して回ります。人々の好奇心はますますかき立てられます。イエスは町に入れば人目につくので、誰も住んでいない場所にしばらくの間とどまることにします。それでも人々は、イエスから教えを聞くため、また癒やしてもらうために、あちこちからやって来ます。

- 
- ◇ 重い皮膚病にかかるとうどんな症状が出ますか。その病気にかかった人は何をしなければならませんでしたか。
  - ◇ 重い皮膚病にかかったある男性は、イエスに何と言いましたか。イエスの反応からどんなことが分かりますか。
  - ◇ 男性は癒やされた後どうしましたか。その結果、人々はどんな反応をしましたか。



# 「あなたの罪は許されています」

マタイ 9:1-8    マルコ 2:1-12    ルカ 5:17-26





イエスの評判は遠く広くに伝わっています。大勢の人がイエスの教えを聞いたり強力な行いをしたりするために、人里離れた場所にまでやって来ます。何日かして、イエスが活動の拠点であるカペルナウムに戻ると、その知らせがガリラヤの海の沿岸にあるこの町全体にある間に伝わります。そのため多くの人がイエスのいる家に押し掛けます。中にはガリラヤやユダヤ、さらにはエルサレムから来たパリサイ派の人たちや律法の教師たちもいます。

「大勢の人が集まったため、戸口の辺りにも場所がなく」なります。そして、「イエスは神の言葉を語り始め」ます。(マルコ 2:2) 目を見張るような出来事が起きるのはこれからです。イエスは人間の苦しみの原因を取り除き、全ての人に健康を回復させる力を持っています。そのことを確信できる出来事です。

混み合った部屋の中でイエスが教えていると、4人の男性が体のまひした男性を担架に乗せてやって来ます。友達をイエスに癒やしてほしかったのです。でもあまりにも混んでいて、イエスの「すぐそばに連れて」いけません。(マルコ 2:4) がっかりしたはずですが、しかし、彼らは平らな屋根に上り、屋根を剥がして穴を開けます。そして、体がまひした男性を乗せた担架を部屋の中に入らせたのです。

イエスは話の邪魔をされて怒るでしょうか。いいえ、むしろその人たちの信仰に感動し、体がまひした男性に言います。「あなたの罪は許されています」。(マタイ

9:2) しかし、イエスは本当に罪を許せるのでしょうか。律法学者やパリサイ派の人たちはそのことを問題にし、こう考えます。「この男はなぜこんなことを言うのか。神を冒瀆している。神以外の誰が罪を許せるのか」。(マルコ 2:7)

イエスは彼らの考えを見抜き、こう尋ねます。「なぜそのような事を考えているのですか。このまひした人に、『あなたの罪は許されている』と言うのと、『起き上がって、担架を持って歩きなさい』と言うのとでは、どちらが簡単ですか」。(マルコ 2:8, 9) イエスは自分がささげることになっていた犠牲に基づいて、その男性の罪を許すことができたのです。

そこにはイエスを批判する人もいましたが、イエスは自分が地上で罪を許す権威を持っていることを皆の前で示します。体がまひした男性を見て、「さあ、起き上がって担架を持ち、家に帰りなさい」と命じます。すると、男性はすぐにその通りにし、担架を持って皆の前を歩いて出ていきます。人々はすっかり驚き、神をたたえて、「こんなことは見たことがない」と言います。(マルコ 2:11, 12)

イエスが病氣と罪のつながりについて話したこと、罪の許しが健康の回復に関係のあることに注目してください。聖書は、人間の最初の親アダムが罪を犯したことで、罪の結果である病氣と死が私たちに遺伝した、と説明しています。しかし神の王国の支配下では、イエスが、神を愛し神に仕える人全ての罪を許します。そして、病氣は永遠になくなるのです。(ローマ 5:12, 18, 19)

- ◇ イエスがカペルナウムで体のまひした男性を癒やしたのはなぜですか。
- ◇ その男性はどのようにしてイエスに近づくことができましたか。
- ◇ この出来事から、病氣と罪のつながりについてどんなことが分かりますか。将来、どんなことを期待できますか。

# マタイが加わる

マタイ 9:9-13 マルコ 2:13-17 ルカ 5:27-32

体がまひした男性を癒やした後、イエスはガリラヤの海のそばのカペルナウムの辺りにとどまっています。その時も群衆がやって来たため、イエスは再び教え始めます。その後イエスは歩いている時に、レビとも呼ばれているマタイが徴税所に座っているのを見掛け、「私の弟子になりなさい」と言います。素晴らしい誘いです。(マタイ 9:9)

マタイはイエスが教えている事柄や、この地域でイエスが行っていた活動がある程度知っていたようです。ペテロやアンデレ、ヤコブやヨハネもそうでした。その4人と同じく、マタイもすぐに行動を起こします。福音書の中でこう記しています。「するとマタイは立ち上がって、イエスの後に従った」。(マタイ 9:9) マタイは徴税人の仕事を辞めて、イエスの弟子になります。

その後マタイは、イエスから特別な誘いを受けたことへの感謝を表すためだと思われますが、イエスと弟子たちを招待して盛大にもてなします。ほかに誰が招かれていたでしょうか。マタイの同僚だった徴税人たちです。徴税人は、憎まれていたローマの当局者のために税金を集めていました。港に入る船や輸入品、主要道路を通る商人たちの荷物に課された税を徴収していました。徴税人は一般のユダヤ人からどう見なされていたでしょうか。彼らは税率以上のものを要求することが多かったため、ひどく嫌われていました。徴税人たちに加えて、この時マタイの家には、不道徳な生き方で知られている「罪人」たちも招かれていました。(ルカ 7:37-39)

自分が正しいと信じて疑わないパリサイ派の人たちは、イエスがそうした人々と一緒にいるのを見て、弟子たちに、「あなたたちの先生が徴税人や罪人と食事をするのはどうしてか」と尋ねます。(マタイ 9:11) それ

を聞いたイエスは、こう言います。「健康な人に医者が必要ではなく、病氣の人に必要なのです。『私が望むのは憐れみであって、犠牲ではない』』ということの意味を、行って学んでください。私は、正しい人ではなく罪人を招くために来しました」。(マタイ 9:12, 13。ホセア 6:6) パリサイ派の人たちは、イエスのことを誠実な気持ちで「先生」と呼んだものではありませんでしたが、何が正しいかについてイエスから学ぶことができました。

マタイが徴税人や罪人たちを招いたのは、そうした人たちがイエスの話を聞き、神について学んで爽やかにされるためだったようです。実際、「そのような人が大勢、イエスの後に従っていた」とあります。(マルコ 2:15) イエスは、人々が神との良い関係を得られるよう助けたいと思っています。自分こそ正しいと考えるパリサイ派の人とは違い、罪人たちを見下したりはしません。思いやりと憐れみに動かされ、心を爽やかにする医師として、罪人たちを癒やします。

イエスが徴税人と罪人に憐れみを示すのは、罪を大目に見ているからではありません。病氣の人に対するのと同じ優しい気持ちを抱いているからです。重い皮膚病の人に思いやり深く触れたイエスのことを思い出してください。イエスは、「そう望みます。良くなりなさい」と言いました。(マタイ 8:3) 私たちも、憐れみ深い態度を身に付け、困っている人が神を知って心が爽やかになるよう助けたいものです。

- 
- ◇ イエスがマタイに会った時、マタイは何をしていましたか。
  - ◇ ユダヤ人が徴税人をひどく嫌っていたのはなぜですか。
  - ◇ イエスが罪人たちと食事をしたのはなぜですか。

- イエスは徴税人ちょうぜいにんのマタイを招く
- キリストは罪人を助けるため、一緒に食事をする





# イエスの弟子たちが断食をしない理由

マタイ 9:14-17 マルコ 2:18-22 ルカ 5:33-39

イエスが西暦30年の過ぎ越しに出席してからしばらくして、バプテストのヨハネは牢屋に入れられます。ヨハネは自分の弟子たち全てがイエスの弟子になってほしいと期待しています。しかし、ヨハネが投獄されて数カ月たってもそうなっていません。

西暦31年の過ぎ越しが近づいたころ、ヨハネの弟子が何人かイエスに近づき、「私たちとパリサイ派の人たちは断食を行うのに、あなたの弟子はどうして断食をしないのですか」と質問します。(マタイ 9:14) パリサイ派の人たちは宗教上の儀式として断食をします。後にイエスはその点を、あるパリサイ派の人の祈りを題材にした例えで取り上げました。その人は自分こそ正しいと考え、「神よ、私がほかの人々のよう……[で]ないことを感謝します。私は週に2回断食をし……ています」と

**断食についての例え** イエスは、多くの人がすぐに思い浮かべることのできる裁縫をテーマにして例えを話しました。もし、縮んでいない新しい布切れを古い布に縫い付けるなら、どうなるでしょうか。洗濯すると、新しい布切れが縮んで古い布を引っ張り、破れができてしまいます。

また、ぶどう酒は動物の革でできた袋に保存されることがありました。革は時間がたつと固くなり、弾力性がなくなります。そのため、古い革袋は新しいぶどう酒を入れるのに向いていません。新しいぶどう酒は発酵を続け、ガスを発生させるので、古く固くなった革袋

を破裂させてしまう可能性があるので、

祈りました。(ルカ 18:11, 12) ヨハネの弟子たちは習慣として、あるいはヨハネの投獄を悲しんで断食しているのかもしれませんが、彼らは、イエスの弟子たちが断食をして悲しまないのはなぜか、不思議に思っています。

イエスはヨハネの弟子たちにこう答えます。「花婿の友人たちは、花婿と一緒にいる限り、嘆き悲しむ理由がありません。しかし、花婿が取り去られる時が来ます。そうなれば、断食をします」。(マタイ 9:15)

花婿とは、以前ヨハネが述べたようにイエスのことです。(ヨハネ 3:28, 29) ですから、イエスの弟子たちは、イエスがいない間に断食をすることはありません。その後イエスが亡くなると、その死を悲しみ、食欲をなくします。しかしイエスが復活すると、悲しんで断食をする必要がもうなくなり、大きな喜びが生じます。

イエスは次に2つの例えを話します。「古い外衣を繕うために、縮んでいない布切れを使う人はいません。外衣は新しい布切れに引っ張られ、もっとひどく破れてしまうからです。また人は、新しいぶどう酒を古い革袋に入れません。もしそうしたら、革袋は張り裂け、ぶどう酒はこぼれ出て、革袋は駄目になってしまいます。やはり、新しいぶどう酒は新しい革袋に入れます」。(マタイ 9:16, 17) イエスは何を教えているのでしょうか。

誰もイエスの弟子たちに対し、儀式的な断食などユダヤ教の古い慣行に従うことを期待してはならないということです。イエスは、古くなって擦り切れた崇拜を繕って長持ちさせるために来たものではありませんでした。古い崇拜の仕組みは間もなく捨てられることになっています。イエスが推進している崇拜は、人間の伝統が混じった当時のユダヤ教に従ったものではありません。古い衣類に新しい布切れを当てたり、古い革袋に新しいぶどう酒を入れたりするようなものではないのです。





- ◇ イエスの時代、誰が断食の習慣を守っていましたか。なぜですか。
- ◇ イエスが一緒にいる間、イエスの弟子たちが断食をしないのはなぜですか。その後、断食をするようになるのはなぜですか。
- ◇ イエスが語った新しい布切れと新しいぶどう酒についての例えには、どんな意味がありましたか。

# 安息日に良いことを行えるか

ヨハネ 5:1-16

イエスはガリラヤでの<sup>こうはん い</sup>広範囲にわたる伝道で多くのことを成し遂げました。それでも、「私はほかの町にも神の王国の良い知らせを広めなければなりません」と言います。ガリラヤ以外にも目を向けていたのです。それで、イエスは「ユダヤの会堂で伝道」していきます。(ルカ 4:43, 44) これにはもっともな理由がありました。春になり、エルサレムでの祭りが近づいていたからです。

ガリラヤでの伝道と比べると、ユダヤでの活動のことは福音書にあまり記録されていません。ユダヤの<sup>ひとびと</sup>人々が無関心だったからかもしれません。それでもイエスは<sup>ちが</sup>熱心に伝道を続け、どこへ行っても良いことをしたに違いありません。

間もなくイエスは、<sup>せいれき</sup>西暦31年の<sup>す こ</sup>過ぎ越しを祝うため、ユダヤの主要な都市エルサレムに向かいます。エルサレムの羊の門の近くにある人通りの多い場所に、<sup>ちゅうろう</sup>柱廊のある大きな池があります。そこはベツザタと呼ばれています。この池には、病人や<sup>もうじん</sup>盲人や足の不自由な人がたくさんやって来ます。水面が<sup>ゆ</sup>揺れる時に池に入るなら癒やされる、と人々は信じているからです。

安息日にイエスは、38年間も病気の男性に池のそばで会い、「良くなりたいですか」と質問します。男性はこう答えます。「旦那さま、私には、水が<sup>ゆ</sup>揺れる時に池に入れてくれる人がいません。私が行こうとすると、ほかの人が先に降りてしまいます」。(ヨハネ 5:6, 7)

そこでイエスは、この男性だけでなく<sup>だれ</sup>誰もがびっくりするようなことを言います。「起き上がり、その敷物を持って、歩きなさい」。(ヨハネ 5:8) すると、すぐにその男性は癒やされ、<sup>しきもの</sup>敷物を持って歩き始めます。

ところが、ユダヤ人たちは起きた<sup>き せき</sup>奇跡を喜ぶのではなく、「安息日だから、<sup>しきもの</sup>敷物を運んではいけない」と男性に厳しく注意します。男性は、「治してくださった方が、『<sup>しきもの</sup>敷物を持って、歩きなさい』と言いました」と答えます。(ヨハネ 5:10, 11) それらのユダヤ人は安息日に癒やしを行った人物を批判します。

<sup>かれ</sup>彼らは、「『それを持って、歩きなさい』と言ったのは誰だ」と男性に<sup>たず</sup>尋ねます。なぜでしょうか。イエスは「その場の群衆に<sup>まぎ こ</sup>紛れ込んで」しまっていたからです。その男性もイエスの名前を知りませんでした。(ヨハネ 5:12, 13) でもこの男性はもう一度イエスに<sup>しん でん</sup>神殿で会うことができました。そして、<sup>だれ</sup>誰が池のそばで自分を癒やしてくれたのかを知ります。

男性は、癒やしたのは<sup>だれ</sup>誰かと聞いてきたユダヤ人たちを見つけ、その人がイエスだったと知らせます。これを聞いたユダヤ人たちはイエスの所に行きます。どうやってその人を癒やしたのかを知るためではなく、安息日に癒やしを行ったことでイエスを非難するためです。そして、イエスを<sup>はくがい</sup>迫害し始めます。

- 
- ◇ イエスがユダヤに向かったのはなぜですか。イエスは何をし続けますか。
  - ◇ ベツザタと呼ばれる池に大勢の人が集まっていたのはなぜですか。
  - ◇ 池のそばでイエスはどんな<sup>き せき</sup>奇跡を行いましたか。それを知ったあるユダヤ人たちはどうしましたか。





# イエスは神の子

ヨハネ 5:17-47

ユダヤ人たちは、イエスが男性を癒やすことで安息日を破ったと非難します。それに対し、イエスはこう答えます。「天の父は今までずっと働いてきました。それで私も働き続けています」。(ヨハネ 5:17)

イエスは、安息日に関する神の律法に反していません。伝道や癒やしを行うことにより、神の良い行いに倣っているのです。それで、毎日良いことを行います。でも、ユダヤ人たちはイエスの答えを聞いてますます怒り、イエスを殺そうとします。なぜでしょうか。

彼らは、イエスが癒やしを行って安息日を破っているという間違った見方をしているだけでなく、イエスが自分を神の子としたことで非常に腹を立てているのです。神を父と考えるのは不敬だ、自分を神と同等の存在としていることになる、というわけです。しかしイエスは恐れずに、自分と神との特別な関係について、こう話します。「父は子に愛情を抱いていて、自分がする事全てを子に示します」。(ヨハネ 5:20)

イエスの父は命を与えることができます。過去において、復活させる力がある人たちに与えたこともあります。それでイエスは、「父が死者を生き返らせて命を与えるように、子も自分が望む人に命を与える」でしょう、と言います。(ヨハネ 5:21) まさに将来への希望を抱かせる言葉です。とはいえ、神の子はすでに、神から離れてしまった人々の心が再び神に向かうよう助けています。イエスはこう言います。「私の言葉を聞いて、私を遣わした方を信じる人は、永遠の命を受けます。処罰されず、死から命へ移っています」。(ヨハネ 5:24)

イエスが誰かを実際に生き返らせたことはまだありません。しかし、そうした復活が起きることを、イエスはこう予告します。「記念の墓の中にいる人が皆、彼の声を聞いて出てくる時が来るのです」。(ヨハネ 5:28, 29)

ですから、イエスには特別な役割があります。それでもイエスは、自分は神に次ぐ存在だとはっきり言います。「私は自分からは何一つ行えません。……自分の意志ではなく、私を遣わした方の意志に沿って行うからです」。(ヨハネ 5:30) イエスが人々に神の目的の中での自分の役割を話すのは初めてです。でも人々は、別の人がイエスの役割について証言したのも聞いています。イエスはその点を指摘し、「あなた方は[バプテストの]ヨハネの所に人々を遣わし、ヨハネは真理について証言しました」と言います。(ヨハネ 5:33)

イエスを非難する人々は、2年ほど前にヨハネが宗教指導者に話すことを聞いていたでしょう。それは、「預言者」また「キリスト」と呼ばれる人が自分の後から来る、ということです。(ヨハネ 1:20-25) イエスは、今は投獄中のヨハネを彼らが尊敬していたことを指摘し、「あなた方はしばらくの間、彼の光を受けて喜びにあふれたいと思っていました」と言います。(ヨハネ 5:35) しかし、イエスはヨハネを超える証言を行っています。

イエスはさらに、「[これまで行ってきた癒やしも含め]私がしている事……それが、父が私を遣わしたことの証拠となるのです」と話した上で、「私を遣わした父が私について証言してくださいました」と言います。(ヨハネ 5:36, 37) 例えば、神はイエスのバプテスマの時に、イエスについて証言しました。(マタイ 3:17)

ですから、イエスを非難する人々には、イエスを退ける根拠がありません。彼らが調べていると主張する聖書そのものが、イエスの立場について証明しているのです。イエスは結論としてこう言います。「あなた方が本当にモーセを信じているなら、私を信じるはずです。モーセは私について書いたからです。しかし、モーセが書いた物を信じないのであれば、どうして私が言うことを信じるでしょうか」。(ヨハネ 5:46, 47)





- ◇ イエスが安息日に伝道や癒やしを行っても、安息日を破ったことにならないのはなぜですか。
- ◇ 神の目的の中でのイエスの重要な役割とはどんなものですか。
- ◇ イエスが神の子であることをどんな証拠しょうこが示していますか。



## 安息日に穀物をむしる

マタイ 12:1-8    マルコ 2:23-28    ルカ 6:1-5

イエスと弟子たちは北のガリラヤに向かっています。春なので畑には穀物が実っています。おなかがすいた弟子たちは穂<sup>ほ</sup>をむしって実を食べます。その日は安息日で、パリサイ派の人たちがイエスと弟子たちを見張っています。

少し前、エルサレムのユダヤ人たちは、イエスが安息日を破ったと非難し、イエスを殺そうとしました。この日も、パリサイ派の人たちは弟子たちの行動を見て、こう言います。「見なさい、あなたの弟子たちは安息日にしてはいけないことをしています」。(マタイ 12:2)

穀物をむしり、手でこすって食べるのは収穫<sup>しゅうかく</sup>と脱穀<sup>だつこく</sup>に当たるといのが、パリサイ派の人たちの主張です。(出エジプト記 34:21) もともと安息日<sup>しんこう</sup>は信仰<sup>しんこう</sup>を強める爽やかな日であるべきでした。でも、彼らは何が仕

事に含まれるかについて厳し過ぎる見方をしていたので、安息日は大変うっとうしいものになっていました。エホバが取り決めた安息日の律法はそうのように厳しいものではありません。イエスはそのことを示すため、幾つかの例<sup>いく</sup>を使って彼らの見方が間違<sup>まちが</sup>っていることを指摘<sup>てき</sup>します。

まずイエスは、ダビデとその部下の例を挙げます。彼らは空腹だった時、幕屋に立ち寄って供え物のパンを食べました。そのパンはすでに新しいものと取り換えられ、エホバの前から取り下げられたもので、普通<sup>ふつう</sup>は祭司たちが食べました。しかし、その時は特別に、ダビデと部下は食べることを許されました。(レビ記 24:5-9。サムエル第一 21:1-6)

次にイエスは別の例を挙げ、「安息日<sup>しんてん</sup>に神殿にいる



祭司たちが安息日を守らなくても罪にならないことを、律法の中で読んだことがないのですか」と言います。祭司は安息日でも神殿で犠牲のための動物を殺したりします。イエスはこう続けます。「しかしあなた方に言いますが、神殿より偉大な者がここにいます」。(マタイ 12:5, 6。民数記 28:9) つまり、イエスは神の大祭司なので、安息日を破ることなど心配せずに自分の仕事を行うことができるのです。

イエスは大切なポイントを強調するため、もう1つの聖句を引用し、こう言います。「あなた方は、『私が望む

のは憐れみであって、犠牲ではない』ということの意味を理解していたなら、罪のない人を断罪したりはしなかったでしょう」。そして最後に、「人の子は安息日の主なのです」と言います。イエスはここで、自分が行う1000年間の平和な王国支配について述べていました。(マタイ 12:7, 8。ホセア 6:6)

人類は長い間、サタンの支配する世で戦争や暴力に苦しめられながら生活してきました。しかし、安息日の主キリストは、私たちがずっと待ち焦がれてきた安心できる時代を実現するのです。

- ◇ バリサイ派の人たちは、イエスの弟子たちがどんな罪を犯したと非難しましたか。それはなぜですか。
- ◇ イエスはそれらの人たちの見方をどのように正しましたか。
- ◇ イエスが「安息日の主」と言えるのはなぜですか。





## 安息日に関する正しい見方

マタイ 12:9-14 マルコ 3:1-6 ルカ 6:6-11

イエスは別の安息日に、ある会堂に行きます。それはガリラヤの会堂だったようです。イエスはそこで、右手のまひした男性を見掛けま<sup>み かけ</sup>す。(ルカ 6:6) 律法学者とパリサイ派の人たちはイエスをじっと見えています。その理由は、彼らの次の質問で明らかになります。「安息日に病気を治すのは正しいことでしょうか」。(マタイ 12:10)

ユダヤ教の宗教指導者たちは、安息日に治療<sup>ちりょう</sup>が許されるのは命が危険な場合<sup>だけ</sup>であると考えています。例えば、安息日には骨折の手当てをしてはならない、捻挫<sup>ねんそ</sup>した所に包帯をしてはならない、といった規定がありました。律法学者とパリサイ派の人たちがイエスに質問したのは、右手のまひした男性を氣遣<sup>きづか</sup>っているからではありません。イエスを非難する口実を見つけようとしているのです。

しかしイエスは、彼らの考え方がゆがんでいることを知っています。彼らは、安息日にしてはならないとされる仕事に何が含まれるかについて、極端<sup>きょくたん</sup>で聖書からずれた見方をしています。(出エジプト記 20:8-10) イエスが行った良い事柄<sup>ことば</sup>に対する見当違い<sup>ちが</sup>いの批判はこれまでもありました。それでイエスは、この問題に正面から切り込むことにし、右手のまひした男性に、「立って、中央に来てください」と言います。(マルコ 3:3)

イエスは律法学者とパリサイ派の人たちの方を見て、「あなた方の中で、飼<sup>ひき</sup>っている1匹の羊が安息日に穴に落ちた場合、つかんで引き出さない人がいるでしょうか」と質問します。(マタイ 12:11) 羊は貴重な収入源なので、次の日まで穴の中に放置することはありません。そんなことをすれば羊は死んでしまうかもしれず、損するのは自分だからです。さらに、聖書には、「正しい人は自分の家畜<sup>かちく</sup>を大切にす<sup>しんげん</sup>る」とあります。(箴言 12:10)

イエスは分かりやすい比較<sup>ひかく</sup>をし、「人は羊よりずっと価値があるのではないのでしょうか。それで、安息日に立派なことをするのは正しいことです」と話します。(マタイ 12:12) ですから、イエス<sup>い</sup>がその男性を癒やしたとしても安息日を破ることにはならないのです。宗教指導者たちはそのような論理的で思いやり深い見方に反論できません。黙<sup>だま</sup>り込んでしまいます。

イエスは彼らの誤った見方に心を痛め、憤<sup>いきどお</sup>りを感じつつ、周りを見回します。そしてその男性に、「手を伸ばしなさい」と言います。(マタイ 12:13) 男性がまひした手を伸ばすと、まひはすっかりなくなります。男性は大喜びしますが、イエスを陥<sup>おとし</sup>れようとしたくらんでいた人たちはどうするでしょうか。

パリサイ派の人たちは男性の手が治ったことを喜ばず、その場から出ていき、すぐに「ヘロデ党の人たちと協議」します。「イエスを殺そうとして」です。(マルコ 3:6) ヘロデ党の中には、サドカイ派と呼ばれるグループの人たちもいるようです。サドカイ派とパリサイ派は対立していますが、イエスに敵対するために団結します。







- ◇ どんないことがきっかけでイエスとユダヤ教の宗教指導者たちの議論が始まりましたか。
- ◇ ユダヤ教の宗教指導者たちは安息日についてどんな間違った見方をしていましたか。
- ◇ イエスは安息日に関する間違った見方にどのように反論しましたか。

## イザヤの預言を実現する

マタイ 12:15-21 マルコ 3:7-12

イエスはパリサイ派とヘロデ党の人たちが命を狙っていることを知り、弟子たちと一緒にガリラヤの海に向かいます。すると、いろいろな場所からたくさんの人たちがイエスの所へやって来ます。ガリラヤ、海辺の町ティルスやシドン、ヨルダン川の東側、エルサレム、はるか南のイドマヤからもです。イエスは大勢の人を癒やします。そのため、重い病気の人たちがイエスの元に押し寄せます。イエスに触れてもらうのを待たずに、自分からイエスに触れようとしているのです。(マルコ 3:9, 10)

あまりにも大勢の人がやって来たので、イエスは弟子たちに小舟を準備するように言います。岸から離れることができ、群衆に押しつぶされてしまうのを避けられるからです。また、舟の上から人々を教えたり、岸に沿って移動しながら別の人たちを助けたりできます。

弟子のマタイは、イエスの活動により「預言者イザヤを通して……語られた事」が実現する、と述べています。(マタイ 12:17) それはどんな預言なのでしょう。

「見なさい、私が選んだ奉仕者、私が愛し、喜んで  
る者である。私は彼の上に聖霊を置き、彼は、公正とは  
何かを諸国の人々に明らかにする。彼は言い争わず、  
叫び立てず、誰も大通りで彼の声を聞かない。彼は、傷  
ついたアシを折らず、くすぶる灯心を消さず、やがて公正  
を確実にもたらす。まさに、諸国の人々は彼の名に望  
みを掛ける」。(マタイ 12:18-21。イザヤ 42:1-4)

イエスは、神が愛し、神が喜んでる奉仕者です。宗教上の偽りの伝統によってあいまいになっている真の公正とは何かを明らかにします。パリサイ派の人たちは律法を不公正また自分勝手な方法で適用し、安息日には病気の人を助けようとしません。しかしイエスは、神の公正をはっきりさせ、聖霊が自分の上にあることを示すことによって、不公正な伝統という重荷から人々を



解放します。それで、宗教指導者たちはイエスを殺したいと思っているのです。何と残念なことでしょう。

「彼は言い争わず、叫び立てず、誰も大通りで彼の声を聞かない」とはどういう意味でしょうか。イエスは癒やを行った際、人々や邪悪な天使に対し、「誰にも話さないように」と命じました。(マルコ 3:12) イエスは自分のことが通りで大々的に宣伝されることや、大げさなうわさが広まっていくことを望んでいないのです。

またイエスは、傷ついたアシのようにいわば折り曲げられ倒された人々をほっとさせるメッセージを伝えま



す。その人たちは、くすぶるランプの火のように、今にも  
命の炎が消えそうになっています。イエスは傷ついたア  
シを折ったり、くすぶる灯心の炎を消したりはしません。

愛と優しさをもって<sup>にゅうわ</sup>柔和な人を親切に元気づけます。  
イエスこそ、諸国の<sup>ひとびと</sup>人々が<sup>か</sup>望みを掛けることのできる方  
です。

◇ イエスは大通りで<sup>さけ</sup>叫び立てることなく、公正とは何かを明らかにしました。どのようにですか。

◇ 傷ついたアシやくすぶる灯心とは、どんな人のことを指していますか。イエスはそうした人たちにどう接しますか。



## 12使徒を選ぶ

マルコ 3:13-19 ルカ 6:12-16

バプテストのヨハネがイエスを神の子羊として紹介した時から約1年半が過ぎました。イエスが伝道活動を始めから、大勢の誠実な男性が弟子になっています。例えば、アンデレ、シモン・ペテロ、ヨハネ、フィリポ、ナタナエル(バルトロマイとも呼ばれる)がいます。恐らくヤコブ(ヨハネの兄弟)も含まれるでしょう。その後も大勢の人がイエスに従い始めます。(ヨハネ 1:45-47)

イエスが使徒を選ぶ時が来ました。使徒たちはイエスの親しい仲間となり、特別な訓練を受けます。でも、イエスは使徒を選ぶ前に、山に出ていきます。カペルナウムからそれほど遠くない、ガリラヤの海のそばの山で



しょう。一晩中イエスは神に祈ります。知恵と神の祝福を求めたに違ひありません。次の日、弟子たちを自分の所に呼び、その中から12人を使徒として選びます。

イエスは、最初の節に出てきた6人に加えて、徴税所から呼んだマタイも選びます。そのほかの5人は、ユダ(タダイ、または「ヤコブの子」と呼ばれる)、「熱心な

人」シモン、トマス、アルパヨの子ヤコブ、ユダ・イスカリオテです。(ルカ 6:16。マタイ 10:2-4)

この12人はこれまでもイエスと旅をしてきたので、イエスは彼らのことをよく知っています。イエスの親族も何人か含まれています。ヤコブとヨハネはイエスのいとこと思われます。また、ある人たちが考えるようにアルパヨがイエスの養父ヨセフの兄弟であるなら、アルパヨの息子で使徒のヤコブもイエスのいとこに当たります。

イエスにとって使徒たちの名前を覚えるのは簡単でしたが、あなたはどうか。覚え方があります。まず、シモンが2人、ヤコブが2人、ユダが2人います。そして、シモン(ペテロ)の兄弟がアンデレ、ヤコブ(ゼベダイの子)の兄弟がヨハネです。これで8人の使徒を覚えられます。あとの4人は、徴税人(マタイ)、後に疑いを抱いた人(トマス)、木の下から呼ばれた人(ナタナエル)、ナタナエルの友人(フィリポ)です。

使徒のうち11人は、イエスの故郷であるガリラヤの出身です。ナタナエルはカナ出身で、フィリポとペテロとアンデレはベツサイダ出身です。ペテロとアンデレは後にカペルナウムに引っ越します。そこにはマタイも住んでいたようです。ヤコブとヨハネはカペルナウムかその周辺に住み、漁業を営んでいました。後にイエスを裏切るユダ・イスカリオテだけがユダヤ出身だったようです。

◇ イエスは夜通し神に祈った後、どんな大切な決定を下しましたか。

◇ イエスの12使徒は誰ですか。どうすれば使徒たちの名前を覚えられますか。





## 有名な山上の垂訓

マタイ 5:1-7:29 ルカ 6:17-49





イエスは一晚中祈った後、弟子の12人を使徒として選びました。すでに日は昇っています。イエスは疲れているに違いありません。でも、人々を助けたいと願っており、その力も残っています。それで、ガリラヤの山の中腹で時間を取ります。そこは、カペルナウムにあるイエスの活動の中心地からそれほど遠くない場所と思われるます。

大勢の人が遠くからイエスの所にやって来ています。エルサレムやユダヤなど南の方から来た人もいれば、北西の海辺の町ティルスやシドンから来た人もいます。何のためですか。「イエスの話を聞くため、また病気を癒やしてもらうため」です。そして、イエスは「全ての人を癒やし」ていきます。考えてみてください。病気の人たち全員が癒やされたのです。さらにイエスは、サタンが率いる「邪悪な天使に苦しめられている人たち」も助けます。(ルカ 6:17-19)

イエスは山の中腹で平らな場所を見つけ、人々もそこに集まります。弟子たち、特に12使徒はイエスのすぐそばにいたことでしょう。病気を癒やしたり邪悪な天使を追いついたりする人の話をぜひ聞きたいと皆が思っています。そこでイエスは教訓となる話をします。この時以来、非常に大勢の人たちがこの話から力を得てきました。イエスがシンプルに分かりやすく述べた深い教訓は、私たちにも役立ちます。イエスは、人々が普段経験することやよく知っていることを題材にして話します。そのおかげで、神が喜ぶ生き方をしたいと願う人は、イエスの話をすぐに理解できます。では、イエスが語った大切な教訓を順番に取り上げましょう。

## 本当に幸福なのは誰か

誰もが幸福になりたいと願っています。それでイエスは、本当に幸福なのはどんな人かについて話し始めます。人々はイエスの話を真剣に聞きます。しかし、すぐには納得できない部分もあったでしょう。

イエスはこう話します。「神の導きが必要であることを自覚している人たちは幸福です。天の王国はその人たちのものだからです。嘆き悲しむ人たちは幸福です。慰められるからです。……正しいことを切望している人たちは幸福です。満たされるからです。……正しいことをして迫害されてきた人たちは幸福です。天の王国はその人たちのものだからです。私のために非難され、迫害され……るとき、あなたたちは幸福です。喜び、また歓喜しなさい」。(マタイ 5:3-12)

イエスはどういう意味で「幸福」と言っていたのでしょうか。陽気で愉快的な気分のことを言っていたものではありません。幸福とはもっと深いものです。人生における満足感や充実感のことです。

イエスが言う幸福な人とは、神の導きが必要であることを認め、自分の罪深さを悲しみ、神を知って神に仕えるようになる人のことです。その人は、神に従うことで憎まれ迫害されても幸福です。神に喜ばれ、永遠の命という報いが与えられると知っているからです。

とはいえ多くの人は、経済的に豊かで楽しければ幸せになれる、と考えています。しかし、イエスは違う見方を示します。人々に考えさせるため、こう言います。「裕福なあなたたちは悲惨です。慰めを全て得ているから

◇ イエスは、有名な山上の垂訓をどこで話しましたか。そこには誰がいましたか。

◇ その垂訓にはどんな大切な教訓が含まれていますか。

◇ 本当に幸福なのは誰ですか。なぜそう言えますか。

です。いま満たされているあなたたちは悲惨<sup>ひさん</sup>です。飢え<sup>う</sup>るようになるからです。いま笑っているあなたたちは悲惨<sup>ひさん</sup>です。嘆いて泣き悲しむようになるからです。全ての人があなたたちのことを良く言うとき、あなたたちは悲惨<sup>ひさん</sup>です。彼らの父祖も偽預言者たちにそのようにしたのです」。(ルカ 6:24-26)

裕福<sup>ゆうふく</sup>になったり、楽しく笑ったり、人から褒められたりするの<sup>ひさん</sup>が悲惨なのはなぜでしょうか。そうしたことを重要視すると、神に仕えることが後回しになり、本当の幸



福を得られなくなる可能性があるからです。イエスは、貧しさや飢え<sup>う</sup>が人を幸福にすると述べていたのではありません。しかし多くの場合、恵まれない状況にある人たちは、イエスの教えを受け入れ、本当の幸福を味わいます。

次に、イエスは弟子たちに、「あなたたちは地の塩です」と言います。(マタイ 5:13) 本物の塩のことではありません。塩は保存料の働きをします。神殿の祭壇の近くには大量の塩が置かれ、捧げ物に振り掛けられました。また、塩は腐敗<sup>ふはい</sup>を防ぎます。(レビ記 2:13。エゼキエル 43:23, 24) イエスの弟子たちも「地の塩」として、人々の心<sup>ひとびと</sup>を腐敗<sup>ふはい</sup>から守ります。弟子たちの伝えるメッセージは、それを受け入れる人たちの命を保護することができます。

イエスはさらに、「あなたたちは世の光です」と話します。ランプは籠<sup>かご</sup>の下ではなく、周りを照らせるよう台の

上に置きます。それでイエスはこう勧めます。「あなたたちはこう勧めます。『あなたたちの光<sup>ひとびと</sup>を人々の前に輝かせなさい。そうすれば、人々はあなたたちの立派な行動を見て、天にいる父をたたえるでしょう』」。(マタイ 5:14-16)

### 弟子のための高い規準

宗教指導者たちはイエスを律法の違反者<sup>いはんしや</sup>と見なし、少し前にもイエスを殺そうとしました。それでイエスははっきりこう言います。「私が律法や預言者の言葉を取り消すために来た、と考えてはなりません。取り消すためではなく、実現するために来ました」。(マタイ 5:17)

イエスは神の律法をとても大切にしており、皆<sup>みな</sup>にもそうするよう勧めます。イエスはこう言います。「ですから、小さなおきての1つを破り、そうするよう教える人は、天の王国にふさわしくない者と呼ばれます」。これは、王





国に入ることができないという意味です。そして、こう続けます。「しかし、そうしたおきてを行い、教える人は、天の王国にふさわしい者と呼ばれます」。(マタイ 5:19)

イエスは、神の律法を破ることにつながる考え方も間違っている、と教えます。律法が「殺人をしてはならない」と述べていることに触れた後、「兄弟に対して憤りを抱き続ける人は皆、法廷に引き出されます」と言ったのです。(マタイ 5:21, 22) 他の人に憤りを抱き続けるのはとても危険です。殺人につながりかねないからです。それでイエスは、平和を作り出すためにどこまですべきかを次のように説明します。「それで、あなたが供え物を祭壇に持ってきて、兄弟が自分に対して何か反感を抱いていることをそこで思い出したなら、供え物を祭壇の前に残して、出掛けていきなさい。まず兄弟と仲直りし、それから戻ってきて、供え物をささげなさい」。(マタイ 5:23, 24)

律法には、姦淫に関するおきてもあります。イエスは言います。「あなたたちは、こう言われているのを知っています。『姦淫をしてはならない』。しかし私は言います。女性を見続けて情欲を抱く人は皆、すでに心の中で姦淫をしたのです」。(マタイ 5:27, 28) イエスは、頭にくらぶ浮かぶ不道德な考えについてではなく、「見続けることの重大さを教えていたのです。見続けるなら欲望がどんどん強くなり、機会があると姦淫をしてしまうかもしれません。では、何ができますか。断固とした行動が必要です。イエスはこう言います。「そこで、もし右目があなたに罪を犯させているなら、えぐり出して捨て去りなさい。……もし右手があなたに罪を犯させているなら、切り離して捨て去りなさい」。(マタイ 5:29, 30)

人は生き延びるために、病気にひどく侵された手足を切断する場合があります。イエスが教えていたのは、不道德な考えや行いを避けるためなら何でも「捨て去[る]」ように、ということでした。たとえそれが目や手と同じくらい大切なものであっても、そうすべきなのです。「体の一部を失う方が、全身がゲヘナに落ちるよりは、よいのです」とイエスは説明します。ゲヘナとは、エルサレムの城壁の外側にあった燃えるごみの山のことで、永遠の滅びを表しています。

イエスは、私たちの心や体を傷つける人にどう対処すればよいかを教えます。「邪悪な人と争ってはなりません。右の頬を平手打ちする人には、もう一方の頬も向けなさい」。(マタイ 5:39) これは、襲われた時に自分や家族を守ることができないという意味ではありません。イエスは平手打ちという言葉を使っています。平手打ちは、ひどい傷を負わせたり相手を殺したりするというより、侮辱するための方法です。ですから、誰かから



- ◇ 本当に幸福な人とは対照的に、どんな人は悲惨だと言えますか。なぜですか。
- ◇ イエスの弟子たちは「地の塩」、「世の光」です。なぜそう言えますか。
- ◇ イエスは神の律法を大切にしていることをどのように示しましたか。
- ◇ イエスは殺人や姦淫につながりかねないことをきっぱり避けるために何をすべきだと教えましたか。



実際の平手打ちや侮辱的な言葉でけんかを吹っ掛けられても、乗ってはならないのです。

このアドバイスは、隣人を愛するようにという神の律法に沿ったものです。それで、イエスはさらにこう教えます。「敵を愛し続け、迫害する人のために祈り続けなさい。自分が天にいる父の子であることを示すためです。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ……てくださるのです」。(マタイ 5:44, 45)

イエスは垂訓のこの部分をこう締めくくります。「ですから、あなたたちは、天の父が完全であるように完全でなければなりません」。(マタイ 5:48) これは私たちが完璧になれるということではありません。神に倣って敵をも愛するほどの大きな愛を持てる、という教えです。別の言い方をすると、「天の父が憐れみ深いように憐れみ深くありなさい」ということです。(ルカ 6:36)

### いのちの祈りと神への信頼

次にイエスは、「注目されようとして人前で善行をすることがないように注意しなさい」と言います。イエスは見せかけの敬虔な態度を非難し、「憐れみの施しをするとき、偽善者たちが……するように、施す前にラッパを吹いてはなりません」と言います。(マタイ 6:1, 2) そうした施しは、目立たないように行う方がよいのです。

さらにイエスは、「祈るとき、偽善者たちのようであってはなりません。その人たちは、人に見えるように会堂の中や大通りの角に立って祈ることを好みます」と話します。そして、「祈るときには、自分の部屋に入って戸を閉じてから、ひそかな所にいる父に祈りなさい」と教えます。(マタイ 6:5, 6) 人前で祈ることが良くないわけではありません。イエスもそうした祈りをささげました。いのちの祈るとき、人を感心させて褒め言葉をもらおうとしてはならない、ということです。

イエスは、「祈るとき、異国の民々がするように同じことを何度も言うてはなりません」と述べます。(マタイ 6:7) ある事について繰り返し祈るのは間違っています。イエスは、覚えたフレーズを「何度も」使って機械的に祈るのはよくない、と言っていたのです。それからイエスは7つの祈願が含まれている模範的な祈りを教えます。最初の3つは神の支配権と神の目的に関係があり、神の名前が神聖なものとされること、神の王国が来ること、神の意志が行われることを願うものです。それらについて祈ってから、個人的なことを祈れるでしょう。毎日の食物、罪の許し、誘惑に耐える力、邪悪な者からの救出を願うことができます。



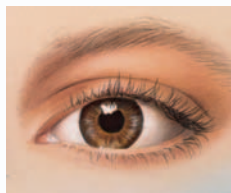
私たちににとって所有物はどれほど重要ですか。イエスはこう話しました。「自分のために地上に宝を蓄えるのをやめなさい。そこでは蛾やさびがむしばみ、泥棒が入って盗みます」。イエスの言う通りです。所有物は高

- ◇ もう一方の頬を向けるとは、どんな意味ですか。
- ◇ 私たちはどのような意味で神のように完全であることができますか。
- ◇ イエスは祈りについてどんなことを教えましたか。





価であっても失われやすく、たくさん所有しているからといって神からの評価が上がるわけではありません。それでイエスは、「自分のために天に宝を蓄えなさい」と教えます。神への奉仕を生活の中で第一にすることによってそうできます。神の前での私たちの良い立場や永遠の命という報いを奪うことは誰にもできません。イエスの次の言葉は事実です。「あなたの宝のある所、そこにあなたの心もあるのです」。(マタイ 6:19-21)



イエスはこの点を強調する例えを話します。「目は体にとって光です。それで、もし目の焦点が合っていれば、体全体が明るいでしょう。しかし、目が欲で満ちていれば、体全体が暗いでしょう」。(マタイ 6:22, 23) 目はきちんと働けば、光を放つランプのようになります。しかし、そのためには、目の焦点が合っていなければなりません。さもないと、誤った判断をする可能性があります。目の焦点が神への奉仕よりも所有物に合っていると、私たちの「体全体が暗」くなり、暗い闇の方向に進んでしまうかもしれません。

**繰り返し教える** イエスは大切な教訓を繰り返し教えました。例えば、山上の垂訓では、祈り方と、物に対するバランスの取れた見方を教えました。(マタイ 6:9-13, 25-34)

それから約1年半後、イエスは同じことをもう一度教えました。(ルカ 11:1-4; 12:22-31) これにより、最初の時にその場にいなかった人が教訓を得ただけでなく、弟子たちもそれを心に刻むことができました。



イエスはインパクトのある例えを語ります。「誰も2人の主人に奴隷として仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛するか、一方に尽くして他方を軽く見るからです。神と富とに奴隷として仕えることはできません」。(マタイ 6:24)

話を聞いている人たちは、生活必需品についてどんな見方をすればよいのかと思ったかもしれません。イエスは、神への奉仕を第一にする限り、不安に思う必要はないと教え、こう言います。「鳥をよく観察しなさい。種をまいたり、刈り取ったり、倉に集めたりはしません。それでも天の父は鳥を養っています」。(マタイ 6:26)

その山に咲いていた野のユリはどうですか。イエスは、「栄華を極めたソロモンでさえ、このような花の1つほどにも装ってはいませんでした」と言います。何を学

べますか。「神が、今日ここにあって明日かまどに投げ込まれる野の草木にこのように服<sup>あは</sup>を与えているなら、ましてあなたたちには服<sup>あは</sup>を与えてくださるのではないでしょう。信仰<sup>しんこう</sup>の少ない人たち」。(マタイ 6:29, 30) イエスはこう教えます。「思い煩<sup>わづら</sup>って、『何を食べるのか』、『何を飲むのか』、『何を着るのか』などと言ってはなりません。……天の父は、あなたたちがこうしたもの全てを必要としていることを知っています。ですから、王国と神から見て正しい事をいつも第一にしないで。そうすれば、こうしたほかのもの全て、あなたたちに与<sup>あた</sup>えられます」。(マタイ 6:31-33)

### 命を得る方法

使徒たちや他の誠実な人たちは神を喜ばせる生き方をしたいと願っています。しかし彼<sup>かれ</sup>らにとって、それは簡単なことではありません。例えば、パリサイ派は全体的に、批判的で他の人を厳しく裁<sup>えい</sup>きます。イエスはその影<sup>えい</sup>響<sup>きやう</sup>を受けないよう忠告し、「裁<sup>えい</sup>くのをやめなさい。裁<sup>えい</sup>かれないためです。人を裁<sup>えい</sup>いているのと同じ仕方、自分も裁<sup>えい</sup>かれ」ます、と言います。(マタイ 7:1, 2)

批判ばかりしているパリサイ派に従うのは危険です。イエスは例えを用いて、「目の見えない人が目の見えない人を案内できるでしょうか。2人とも穴に落ちてしまいませんか」と質問します。では、他の人のことをどう見るべきでしょうか。決して批判的になるべきではありません。重大な罪につながりかねないからです。イエスは説明を続けます。「自分自身の目の中の材木が見えていないのに、どうして、『兄弟、あなたの目の中にあるわらを取り除かせてください』と言えるのですか。偽善<sup>ぎぜん</sup>者<sup>しや</sup>たち！ まず自分の目から材木を取り除きなさい。そうすれば、兄弟の目の中にあるわらを取り除く方法がはっきり分かるでしょう」。(ルカ 6:39-42)

これは、正しいか間違<sup>まちが</sup>いかの判断をしてはならないという意味ではありません。イエスは、「聖なるものを犬<sup>あは</sup>に与<sup>あた</sup>えてはなりません。真珠<sup>しんじゆ</sup>を豚<sup>ぶた</sup>の前に投<sup>な</sup>げてもなり

ません」と言いました。(マタイ 7:6) 神の言葉 聖書に収められている真理は、貴重な真珠<sup>しんじゆ</sup>のようです。もしある人がその貴重な真理の価値を全く認めないなら、弟子たちは真理を喜んで聞<sup>き</sup>く別の人を探すべきです。

イエスは祈<sup>いの</sup>りのことに話<sup>も</sup>を戻<sup>もど</sup>し、祈<sup>いの</sup>り続ける大切さを教<sup>あ</sup>えてこう言<sup>い</sup>います。「求め続けなさい。そうすれば与<sup>あた</sup>えられます」。神は祈<sup>いの</sup>りに答<sup>こた</sup>える用意ができています。



イエスはその点を強調します。「あなたたちのうち誰<sup>だれ</sup>が、自分の子からパンを求められて、石<sup>いし</sup>を渡すでしょうか。……それで、邪悪<sup>じゃあく</sup>な人間でありながら、あなたたちが子供<sup>こども</sup>に良い贈<sup>おく</sup>り物<sup>もの</sup>を与<sup>あた</sup>えることを心得ているのであれば、まして天にいる父は、ご自分に求めている人に良いもの<sup>あは</sup>を与<sup>あた</sup>えてくださるのです」。(マタイ 7:7-11)

イエスは次に、有名な行動規<sup>き</sup>準<sup>じゆん</sup>を教<sup>あ</sup>えます。それはこのような言<sup>い</sup>葉<sup>は</sup>です。「ですから、自分にしてほしいと思うことは皆<sup>みな</sup>、人にもしなければなりません」。この助言<sup>すけご</sup>をいつも覚えておき、人間関係に当てはめるのは本当に大切<sup>たいせつ</sup>です。しかし、そうするのが難<sup>がた</sup>しいときもあります。イエスが教<sup>あ</sup>えた通りです。「狭<sup>せま</sup>い門<sup>かど</sup>を通<sup>とほ</sup>って入<sup>い</sup>りなさい。滅<sup>ほろ</sup>びに至<sup>いた</sup>る門<sup>かど</sup>は広<sup>ひろ</sup>くてその道<sup>みち</sup>は広<sup>ひろ</sup>々としており、それを





通って入っていく人は多いからです。一方、命に至る門は狭くてその道は狭められており、それを見いだす人は少ないのです」。(マタイ 7:12-14)

イエスは、弟子たちを命に至る道からそらせようとする



る人がいることを知っています。それで、こう警告します。「羊の格好をしてやって来る偽預言者たちに警戒していなさい。その人たちは内側では、むさぼり食うオオカミです」。(マタイ 7:15) さらにイエスは、良い木か悪い木かはその

実で分かる、と話します。人間も同じです。偽預言者かどうかはその教えと行動で分かるのです。ですから、イエスの弟子は、言葉だけでなく行動で見分けられます。では、イエスは自分の主である、と言っている、神の意志を行っていない人はどうなりますか。イエスはこう言います。「私ははっきり言います。『あなたたちのことは全く知りません。不法なことをする人たち、離れ去れ』」。(マタイ 7:23)

イエスは山上の垂訓の締めくくりに、次のように話します。「私のこれらの言葉を聞いて行う人は皆、岩の上に家を建てた思慮深い人のようです。大雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてたたきつけても、その家は崩れ落ちませんでした。岩の上に土台が据えられていたからです」。(マタイ 7:24, 25) 家が崩れなかったのはなぜですか。建てた人が「地面を深く掘り下げて岩の上に土台を据え」たからです。(ルカ 6:48) ですから、イエスの言葉を聞くだけではなく、「行う」努力をしなければなりません。

では、イエスの「言葉を聞いても行わない人」については何と言えますか。その人は「砂の上に家を建てた愚かな人のようです」。(マタイ 7:26) 雨が降り、洪水が来て、風が吹くと、その家は崩れ落ちてしまいます。

人々はこの垂訓を聞き、イエスの教え方に変驚きます。權威を授かった人のように教え、宗教指導者たちとは全く違っていたからです。話を聞いた人の多くがイエスの弟子になったことでしょう。

- ◇ 天に宝を蓄える方が良いと言えるのはなぜですか。どうすればそうできますか。
- ◇ イエスの弟子は不安に思う必要がありません。そうと言えるのはなぜですか。
- ◇ イエスは他の人を裁くことについてどんなことを教えましたか。何が正しいか間違いかの判断をすべき、どんな場合がありますか。
- ◇ イエスは祈りについてさらにどんなことを教えましたか。どんな行動規準を教えましたか。
- ◇ イエスは自分の弟子であるのが簡単ではないことと、命の道からそらされる危険について、どんな説明をしましたか。

## 百人隊長の立派な信仰<sup>しんこう</sup>

マタイ 8:5-13 ルカ 7:1-10



イエスは山上の垂訓の後、カペルナウムの町に行きます。すると、ユダヤ人の長老たちが近づいてきます。ローマ軍の士官である百人隊長から派遣されたのです。

その士官の大切な召し使いが重い病気で死にかかっています。士官は異国人ですが、イエスに助けを求めています。ユダヤ人の長老たちは、士官の召し使いが「体がまひして家で寝込んでおり、ひどく苦しんで」といって話します。きっと激しい痛みがあるのでしょう。(マタイ 8:6) 長老たちはイエスに、士官は「私たちの民を愛して、会堂を建ててくれ」たので、ぜひこの人を助けてあげてほしいと頼みます。(ルカ 7:4, 5)

イエスは長老たちと一緒に士官の家に向けてすぐに出発します。イエスが家の近くまで来た時、士官は次のように伝えるため友人たちを派遣します。「閣下、わざわざ私のような者の家に来ていただくには及びません。それに、私はあなたの元に伺うにはふさわしくない者だと思いました」。(ルカ 7:6, 7) 士官は人に命令することに慣れているはずですが、何と謙遜なのでしょう。普通ローマ人は奴隷を厳しく扱いますが、この人は違っています。(マタイ 8:9)

士官は、ユダヤ人が別の人種の人と交友を持たないことを知っているのでしょう。(使徒 10:28) そのためと思われませんが、士官は友人たちを通してイエスにこう頼みます。「ただ一言言ってくださり、私の召し使いが癒やされるようにしてください」。(ルカ 7:7)

イエスはとても驚き、「あなたたちに言いますが、イスラエルでもこれほどの信仰は見たことがありません」と言います。(ルカ 7:9) 士官の家に戻った友人たちは、重体だった奴隷が無事に回復したことを知ります。

イエスはこの癒やしを行った後、ユダヤ人ではない人たちの信仰が報われることを次のように保証します。「大勢の人が東や西から来て、天の王国でアブラハム、イサク、ヤコブと共に食卓に着いて横になります」。不忠実なユダヤ人はどうなりますか。イエスによると、彼らは「外の闇に放り出され、そこで泣き悲しんだり歯ざしりしたりします」。(マタイ 8:11, 12)



ユダヤ人はキリストと共に王国の一員となる機会を最初に与えられました。しかし、それを受け入れないなら、神から退けられます。その代わりに、異国人が「天の王国で」いわば食卓に着いて横になります。

- ◇ ユダヤ人たちが異国人の士官から派遣されてイエスに頼み事をしたのはなぜですか。
- ◇ 士官はイエスに、家まで来ていただかなくてもよいと言いました。それはなぜだと考えられますか。
- ◇ イエスは異国人にどんな希望があることを示しましたか。



## やもめの息子を復活させる

ルカ 7:11-17

イエスは士官の召し使いを癒やした後、カペルナウムを離れ、南西に32<sup>き</sup>〇余り離れた所にあるナインという町に行きます。イエスは弟子たちや他の大勢の人と一緒に旅をしています。ナインの町の外れに到着したのは夕暮れ近くだったようです。すると、たくさんのユダヤ人がやって来ます。葬式の行列です。若い男性の遺体が埋葬のために町の外へ運ばれていきます。

一番悲しみに暮れているのは、その若い男性の母親です。この母親はやもめで、その1人息子が亡くなったのです。夫が亡くなった時には、まだ息子がいてくれました。この母親が息子をどれだけ頼りにしていたか想像できますか。自分の望みも今後のことも息子に託していました。しかし、その息子はもういません。これからは誰と一緒にいて支えてくれるのでしょうか。

イエスは女性の痛ましい姿を見て心を揺さぶられます。それでやもめに優しくもきっぱりと、「泣くことはありません」と言います。そして、遺体を載せた台に近づ

き触ります。(ルカ 7:13, 14) そのため、町の人たちの行列は止まります。多くの人々は、イエスはなぜそのようなことを言うのだろう、いったい何をするつもりだろう、と思ったでしょう。

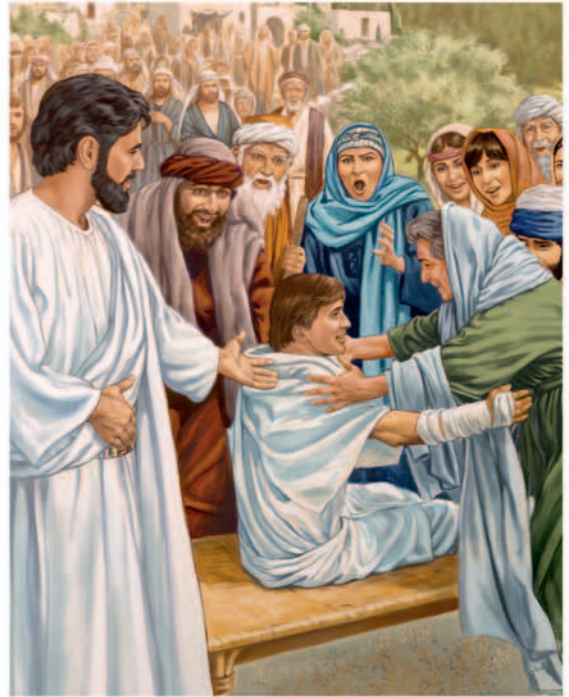
では、イエスと一緒に旅をしてきた人たちはどう思っているのでしょうか。これまでイエスが大勢の人の病気を癒やし、強力な行いをするのを目撃してきました。しかし、イエスが死者を復活させるのを見たことは1度もないようです。復活は遠い昔にはありましたが、イエスは人を復活させることができるのでしょうか。(列王第一 17:17-23。列王第二 4:32-37) そこでイエスは、「若者よ、さあ、起き上がりなさい!」と命じます。(ルカ 7:14) すると、若者は体を起こして話し始めます。イエスは驚きと喜びでいっぱいになっている母親に息子を渡します。もう独りではありません。

人々はこの若者が本当に生きているのを見て、命を与える方エホバを賛美し、「偉大な預言者が私たちの



間に現れた」と言います。また、起きた素晴らしい出来事の重要性を認識して、「神はご自分の民に注意を向けてくださった」と言う人もいます。(ルカ 7:16) この感動的な奇跡<sup>きせき</sup>の話は周辺地域にあっていう間に広まり、10<sup>き</sup>里<sup>はな</sup>離れたイエスの故郷ナザレにも伝わったようです。そして、南方のユダヤにも広まります。

バプテストのヨハネはというと、今も牢屋<sup>ろうや</sup>の中にいて、イエスの活動をもっと知りたいと願っています。それで、ヨハネの弟子たちはイエスが行った奇跡<sup>きせき</sup>のことを話します。ヨハネはどんな反応をするでしょうか。



- ◇ イエスがナインの近くまで来た時、どんなことがありましたか。
- ◇ イエスはそこで見たことにどう反応しましたか。それで何をしましたか。
- ◇ イエスが行ったこと<sup>ひとびと</sup>に人々はどんな反応を示しましたか。





## ヨハネはイエスに質問する

マタイ 11:2-15 ルカ 7:18-30

バプテストのヨハネが牢屋<sup>ろうや</sup>に入れられてから1年になります。ヨハネも、イエスの素晴らしい行いについて聞きます。ヨハネは自分の弟子たちから、イエスがナインでやもめの息子を復活させたことを知らされて感動したはずですが。しかしヨハネは、イエス自身からイエスがメシアなのかどうかを聞きたいと思っています。それで弟子2人を呼び、イエスにこう尋ねるよう頼みます。「あなたが、来ることになっている方ですか。それとも、ほかの方を待つべきでしょうか」。(ルカ 7:19)

この質問は不思議に思えるかもしれません。ヨハネは強い信仰<sup>しんこう</sup>を持つ人です。2年近く前、イエスにバプテスマを施した時には、聖霊<sup>せいれい</sup>がイエスに下るのを見、イエスのことを喜んでいるという神からの言葉を聞きました。ヨハネの信仰<sup>しんこう</sup>が弱くなっているとは思えられません。イエスはヨハネからのこの質問を聞いた後、ヨハネを褒めています。もしヨハネの信仰<sup>しんこう</sup>が弱くなっていたのであれば、そのようなことはしないはずです。では、なぜヨハネはイエスにこんな質問をしたのでしょうか。

ヨハネはイエスがメシアであるとの証拠<sup>しやうこ</sup>をイエス自身から得たいだけなのかもしれません。それを得られるなら、牢屋<sup>ろうや</sup>ですっかりやつれたヨハネにとって大きな励<sup>はげ</sup>ましとなるでしょう。ヨハネの質問には別の意味もあるようです。ヨハネは、神に油を注がれた者が王また救出者になるという聖書預言をよく知っています。しかし、イエスがバプテスマを受けてから何カ月もたっているのに、ヨハネはまだ牢屋<sup>ろうや</sup>から出られません。そのため、メシアに関する預言全てを実現する別の方、いわばイエスの後継者<sup>こうけいしや</sup>がいるのかどうか尋ねているのです。

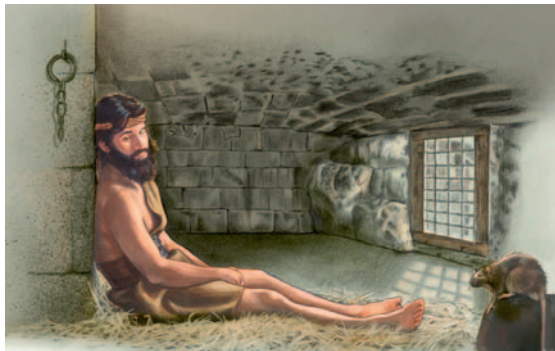
イエスはヨハネの弟子たちに、私こそ来ることになっている者<sup>しやうこ</sup>です、とは言いません。むしろ、自分がメシアである証拠<sup>しやうこ</sup>として、あらゆる病気の人を治していることを挙げ、こう言います。「行って、見聞きしている事柄<sup>ことがら</sup>をヨ

ハネに報告<sup>ほうこ</sup>しなさい。盲人<sup>もうじん</sup>は見、足が不自由だった人は歩き、重い皮膚病<sup>ひふびよう</sup>の人は治り、耳が聞こえなかった人は聞き、死人は生き返り、貧しい人には良い知らせが告げられています」。(マタイ 11:4, 5)

ヨハネの質問には、イエスが自分を解放してくれるのではないか、という期待<sup>き</sup>が込められているのかもしれませんが。でもイエスは、いま自分が行っている以上の奇跡<sup>きせき</sup>は期待しないようにとヨハネに言っているのです。

ヨハネの弟子たちが去ると、イエスは人々<sup>ひとびと</sup>にヨハネがただの預言者ではないと教えます。そして、ヨハネがマラキ 3章1節で預言されているエホバの「使者」であり、マラキ 4章5, 6節で予告されている預言者エリヤである、と説明します。また、こう述べます。「はっきり言います。これまでに生まれた人で、バプテストのヨハネより偉大<sup>いだい</sup>な人は現れていません。しかし、天の王国で小さな方<sup>かれ</sup>の者も彼より偉大<sup>いだい</sup>です」。(マタイ 11:11)

イエスは天の王国で小さな方<sup>いだい</sup>の者もヨハネより偉大であると述べて、ヨハネが天の王国に入らないことを示しました。ヨハネはイエスのために道を整えますが、イエスが天への道を開く前に亡くなりました。(ヘブライ 10:19, 20) ヨハネは神の忠実な預言者であり、将来、地上で神の王国の支配を楽しみます。







- ◇ ヨハネはイエスが来ることになっている方なのか、それともほかの方を待つべきなのかを<sup>たず</sup>ねました。それはなぜですか。
- ◇ イエスはバプテストのヨハネがどんな預言を実現したと言いましたか。
- ◇ バプテストのヨハネが天でイエスと<sup>いっしょ</sup>にならないのはなぜですか。

## 鈍感な世代は悲惨

マタイ 11:16-30 ルカ 7:31-35

イエスはバプテストのヨハネに敬意を払っていますが、ほかの人たちはどうなのでしょう。イエスはこう言います。「この世代[は]広場に座って遊び友達に叫ぶ幼い子供たちのようです。こう言うのです。『笛を吹いてあげたのに、踊ってくれなかった。泣き叫んだのに、胸をたたいて悲しんでくれなかった』」。(マタイ 11:16, 17)

イエスの言葉にはどんな意味がありますか。イエスはこう説明します。「ヨハネが来て食べたり飲んだりしないと、『彼は邪悪な天使に取りつかれている』と言い、人の子が来て食べたり飲んだりすると、『見ろ、大食いで、ぶどう酒にふける男、徴税人や罪人たちの友だ』と言います」。(マタイ 11:18, 19) ヨハネはナジル人として簡素に生活し、お酒も一切飲みませんでしたが、この世代の人々はヨハネが邪悪な天使に取りつかれていると言いました。(民数記 6:2, 3. ルカ 1:15) 一方、イエスはほかの人と変わらない生活をし、食事もお酒もほどほどにしか楽しまなかったのに、人々は食べ過ぎだ飲み過ぎだと非難したのです。人々を満足させることはできません。

イエスはこの世代の人々を市場にいる子供たちに例えます。その子供たちはほかの子たちが笛を吹いてもおど踊りませんし、ほかの子たちが泣き叫んでも悲しみません。イエスは、「知恵の正しさは、行動によって示されるのです」と教えます。(マタイ 11:16, 19) イエスとヨハネの「行動」は、人々からの非難が偽りであることを証明しています。

イエスはこの世代の鈍感さについて話した後、自分が強力な行いをしてきた3つの町、コラジン、ベツサイダ、カペルナウムを名指しで非難します。イエスは、もし自分がフェニキア人の町ティルスとシドンでそうした行

いをしたなら、それらの町は悔い改めただろう、と言います。さらに、カペルナウムにはイエスの活動の拠点があったにもかかわらず、そこの人たちはイエスの強力な行いに良い反応をほとんど示しませんでした。それでイエスは、「裁きの日には、あなたよりソドムの方が耐えやすいでしょう」と言います。(マタイ 11:24)

それからイエスは天の父を賛美します。神が貴重な真理を「賢い知識人たちから」隠し、幼い子供のような立場の低い人たちに明らかにしているからです。(マタイ 11:25) イエスは立場の低い人たちに優しく勧めます。「労苦し、荷を負っている人は皆、私の所に来なさい。そうすれば、爽やかにしてあげましょう。私と共に働いて、私から学びなさい。私は温和で、謙遜だからです。あなたたちは爽やかさを感じるでしょう。私と共に働くことは心地よく、私の荷は軽いのです」。(マタイ 11:28-30)

イエスは人々をどのように爽やかにするのでしょうか。宗教指導者たちは安息日に関する厳格な規定を設けたりして、人々の生活を伝統で縛っています。しかしイエスは、厳しい伝統とは一線を画した真理を教えて、人々を爽やかにしています。さらに、圧政に苦しんでいる人や、自分が犯した罪のために落胆している人に助けを与えます。イエスは、どうすれば罪が許されるのか、どうすれば神の前で穏やかな心を持てるのかを教えているのです。

イエスと一緒に働いて心地よさを経験する人は、神に献身し、思いやりと憐れみがある天の父に仕えるようになるでしょう。それは決して重荷とはなりません。神は私たちに難し過ぎることを求めたりはしないからです。(ヨハネ第一 5:3)



- ・ イエスは幾つかの町を非難する
- ・ イエスは安心感と爽やかさを与える

39



- ◇ イエスの世代の<sup>ひとびと</sup>人々は、どんな子供のようなのですか。
- ◇ イエスが天の父を賛美したのはなぜですか。
- ◇ 多くの<sup>ひとびと</sup>人々はどんな重荷に苦しんでいましたか。イエスはどんな<sup>あた</sup>助けを与えましたか。



## 許しについて教える

ルカ 7:36-50

イエスの教えや行いに対する反応は、人の心の状態によって異なります。そのことは、ガリラヤのある家で起きたことからよく分かります。シモンというパリサイ派の人がイエスを食事に招いた時のことです。シモンはたくさんきせきの奇跡を行う人に実際に会ってみたいと思ったのかもしれません。イエスは、徴税人ちようぜいにんや罪人たちとの食事に応じた時と同じく、今回の招待も人々ひとびとを教える機会と見なしたようです。

しかしイエスは、普通、客に示されるような温かい歓迎かんげいを受けません。パレスチナのほこりっぽい道を歩くと、サンダルを履いた足は火照り、汚れます。ですから、客をもてなすために足を冷たい水で洗う習慣がありました。しかし、イエスは足を洗ってもらえませんが、一般的に行われる歓迎の口づけもありません。親切なもてなしとして客の頭に油を注ぐこともありませんでした。本当に歓迎されているのでしょうか。

皆が食卓に着いて横になります。すると食事中に、招待されていない女性が静かに部屋へ入ってきます。それは、「罪人として知られる女性」でした。(ルカ 7:37) 不完全な人間は全て罪人ですが、この女性は不道德な生活をしているようで、娼婦しょうふと思われまふ。イエスの教えや、「荷を負っている人は皆、私の所に来なさい。そうすれば、爽やかにしてあげましょう」というイエスの勧めを聞いていたのかもしれませんが。(マタイ 11:28, 29) 女性はイエスの教えと行いに心を動かされ、イエスを捜していたのです。

その女性は食卓に着いているイエスの後ろに行き、足元にひざまずきます。目から涙なみだがあふれ、イエスの足をぬらします。女性はそれを髪かみの毛けで拭き取り、イエスの足に優しく口づけし、持ってきた香油こうゆを足に注ぎます。シモンは不機嫌な顔ふ きげんでそれを眺め、なが「この人が本当に預言者なら、自分に触さわっているのが誰だれでどんな

女か知っているはずだ。この女は罪人だ」と思います。(ルカ 7:39)

イエスはシモンの心を読み、「シモン、あなたに言うことがあります」と切り出します。シモンは、「先生、何でしょうか」と答えます。それでイエスはこう続けます。「2人の人がある人からお金を借りていました。1人は500デナリ、もう1人は50デナリでした。2人が返済できないので、貸した人は2人を寛大に許してやりました。では、どちらの人が彼かれをより愛するでしょうか」。シモンはぶっきらぼうに、「多く許してもらった方だと思ひます」と答えます。(ルカ 7:40-43)

イエスは同意します。そして女性に目を向けつつ、シモンに話します。「この女性が見えますか。私が家に入っても、あなたは足を洗う水をくれませんでした。しかし、この女性は涙なみだで私の足をぬらし、髪かみの毛けで拭いてくれました。あなたは私に口づけしませんでしたか、この女性は、私が入ってきた時から私の足に優しく口づけしてやめました。あなたは私の頭に油を注ぎませんでしたか、この女性は私の足に香油こうゆを注いでくれました」。イエスは、その女性が不道德な生活を心から悔い改めていることを理解しました。それでこう言ひます。「彼女の罪かのじよは多いとはいひえ許されています。彼女は多く愛したからです。ところが、わずかしかが許されていない人は、わずかしかが愛しません」。(ルカ 7:44-47)

イエスは不道德を軽く見ているわけではありません。むしろイエスは、重大な罪を後悔して助けを求めている人に深い思いやりを示したのです。この女性がイエスから次の言葉を掛けられた時、どんなにほっとしたか想像できますか。「あなたの罪は許されています。……あなたが救われたのは信仰しんこうがあったからです。安心して行きなさい」。(ルカ 7:48, 50)

- 罪人として知られる女性がイエスの足に香油を注ぐ
- 借金を抱えていた人が許される例え

## 40



- ◇ イエスはシモンの家でどのように<sup>むか</sup>えられましたか。
- ◇ 地元のある女性がイエスを<sup>さが</sup>していたのはなぜですか。
- ◇ イエスはどんな例えを話しましたか。それをどのように適用しましたか。



## 奇跡は誰の力によるものか

マタイ 12:22-32 マルコ 3:19-30 ルカ 8:1-3

イエスはシモンの家で許しについて語った後、ガリラヤでの2回目の伝道旅行を始めます。伝道を開始して2年目です。今回の旅も12使徒が一緒です。また、「邪悪な天使から解放され病気を癒やされた女性たち」も一緒です。(ルカ 8:2) その中には、マリヤ・マグダレネ、スザンナ、ヨハンナがいます。ヨハンナの夫は王ヘロデ・アンテパスに仕える役人でした。

イエスが有名になるにつれて、イエスの活動についての議論が激しくなっていきます。邪悪な天使に取りつかれた盲目で口が利けない男性がイエスの所に連れてこられた時、それが明らかになります。イエスがその人を癒やすと、男性は邪悪な天使から解放され、見たり話したりできるようになりました。人々はただただ驚き、「もしかしたらこの人がダビデの子ではないか」と言います。(マタイ 12:23)

大勢の人がイエスの滞在している家に来て来たため、イエスと弟子たちは食事でもできません。イエスのことを「ダビデの子」と考える人たちだけでなく、律法学者とパリサイ派の人たちもはるばるエルサレムから来ます。といっても、イエスから学んだり、イエスの活動を手伝ったりするためではありません。彼らは人々に、「彼はベエルゼブブに取りつかれている」、「邪悪な天使の支配者」とぐるになっている、と言います。(マルコ 3:22) この騒ぎについて聞いたイエスの親族は、イエスを捕まえようとしてやって来ます。なぜでしょうか。

イエスの弟たちはまだイエスが神の子だとは信じていません。(ヨハネ 7:5) ナザレで一緒に育ったイエスがこうした騒ぎを起こしているというのは、考えられないことです。それで、「彼は頭がおかしくなってしまった」と言います。(マルコ 3:21)





事実は何を示していますか。イエスは<sup>じゃあく</sup>邪悪な天使に取りつかれた男性を癒やしたばかりで、その人は目が見え、話せるようになりました。これは否定できない事実です。それで律法学者とパリサイ派の人たちは、イエスの評判を落とすために言い掛かりをつけ、「この男が<sup>じゃあく</sup>邪悪な天使を追い出すのは、<sup>じゃあく</sup>邪悪な天使の支配者ベエルゼブブの力によるのだ」と言います。(マタイ 12:24)

イエスは律法学者とパリサイ派の人たちの考えを見抜きます。それで、こう話します。「内部で分裂している王国はどれも荒廃し、内部で分裂している町や家はどれも長くは続きません。同じように、サタンがサタンを追い出すなら、サタンが自分自身に敵対して分裂していることになります。そうしたら、その王国はどうして長く続くでしょうか」。(マタイ 12:25, 26)

見事な説明です。パリサイ派の人たちは、あるユダヤ人たちが<sup>じゃあく</sup>邪悪な天使を追い出していることを知っています。(使徒 19:13) それで、イエスはこう言います。「もし私がベエルゼブブによって<sup>じゃあく</sup>邪悪な天使を追い出すのであれば、あなた方の弟子は誰によって追い出すのですか。従って、あなた方が間違っていることをあなた方の弟子が示します。しかし、私が<sup>じゃあく</sup>邪悪な天使を追い出すのが神の<sup>せいれい</sup>聖霊によるのであれば、神の王国はもうあなた方の所に来ています」。(マタイ 12:27, 28)

イエスは、サタンを制する力があるからこそ、<sup>じゃあく</sup>邪悪な天使を追い出せるということを、次のような例えで示

します。「家財を奪うために強い人の家に侵入したなら、まずその人を縛らなければなりません。そうして初めて、その家の物を奪えます。私の側にいない人は私に敵対しており、私と一緒に集めない人は散らしています」。(マタイ 12:29, 30) 律法学者とパリサイ派の人たちはイエスに敵対しています。それは、彼らがサタンの側にいる証拠です。神の力によって行動する神の子の元から、人々を追い散らしているのです。

イエスはサタンの影響を受けている敵対者たちにこう警告します。「人は、どんな罪を犯し、どんな冒瀆の言葉を発しても、全て許されます。ただし、<sup>せいれい</sup>聖霊を冒瀆する人は永久に許されず、永遠の罪を負うのです」。(マルコ 3:28, 29) 敵対者たちは<sup>せいれい</sup>聖霊の力によって行われたことを、サタンの力によるものとしたのです。それが彼らにとって何を意味するか考えてみてください。



- ◇ イエスとガリラヤでの2回目の伝道旅行をしたのは誰ですか。
- ◇ イエスの親族がイエスを捕まえようとしたのはなぜですか。
- ◇ 律法学者とパリサイ派の人たちはイエスの<sup>きせき</sup>奇跡をどのように<sup>ぶじよく</sup>侮辱しましたか。イエスはどのように反論しましたか。

## パリサイ派の人々に強く警告する

マタイ 12:33-50    マルコ 3:31-35    ルカ 8:19-21

律法学者とパリサイ派の人たちは、イエスが神の力で<sup>じゃあく</sup>邪悪な天使を追い出すということを認めません。そのため、<sup>せいらい</sup>聖霊を冒瀆する危険を<sup>おか</sup>冒しています。イエスはこう言います。「木を立派にして実も立派にするか木を腐らせて実も腐らせるかのどちらかにしなさい。木はその実によって知られるのです」。(マタイ 12:33)



イエスは<sup>じゃあく</sup>邪悪な天使を追い出すという立派な行いをしたのに、サタンに仕えているからそうできるのだ、と考えるのはおかしい話です。イエスが山上の垂訓で教えた通り、実が立派であれば、木は腐っていません。パリサイ派の人々の実はどうなのですか。イエスに<sup>こんきよ</sup>根拠のない非難を浴びせている彼らは腐っています。イエスは彼らにこう話します。「マムシのような者たち、あなた方は<sup>じゃあく</sup>邪悪なのに、どうして良い<sup>こと</sup>事柄を語れるのでしょうか。心に満ちあふれているものが口から出ます」。(マタイ 7:16, 17; 12:34)

言葉には心の状態が表れるので、話す事柄は裁きの<sup>こんきよ</sup>根拠になります。イエスはこう言います。「あなた方に言いますが、人は、自分が語る無益な言葉全てについて裁きの日に責任を問われることになります。あなたは、自分の言葉によって正しいと認められ、自分の言葉によって有罪とされます」。(マタイ 12:36, 37)

イエスが強力な行いをしているのに、律法学者とパリサイ派の人たちは、「先生、あなたからのしを見たのですが」とさらに要求します。彼らはイエスの奇跡を自分では見ていないかもしれませんが、イエスの強力な行いを見た人はたくさんいるため、<sup>しょうこ</sup>証拠は十分な

はずです。それで、イエスはユダヤ人の指導者たちにこう言います。「<sup>じゃあく</sup>邪悪な<sup>かんいん</sup>姦淫の世代はしきりにしるしを求めますが、預言者ヨナのしるし以外にしるしが与えられることはありません」。(マタイ 12:38, 39)

イエスはその言葉の意味を説明し、こう続けます。「ヨナが巨大な魚の腹の中に3日3晩いたように、人の子も地の中に3日3晩いるのです」。ヨナは巨大な魚に飲み込まれた後に生還しましたが、それはまるで復活のような経験でした。イエスはここで、自分が死んで3日目に復活することを予告しているのです。しかし、後にイエスの予告が実現した時、ユダヤ人の指導者たちは「ヨナのしるし」を退け、悔い改めて変化することを拒みます。(マタイ 27:63-66; 28:12-15) 一方、「ニネベの人々」はヨナが伝道した後、悔い改めました。それで、「ニネベの人々」はこの世代を断罪すると言えるのです。さらにイエスは、シェバの女王も立派な手本を残している



ので、この世代を断罪するだろうと言います。女王はソロモンの知恵を聞きたいと願い、実際にそれを聞くと深く感動しました。イエスは、「ソロモンを上回る者がここにいます」と言います。(マタイ 12:40-42)

イエスはこの世代を、<sup>じゃあく</sup>邪悪な天使が出ていった人に例えます。(マタイ 12:45) その人は自分を良いもので満たさなかったのて、出ていった天使がもっと<sup>じゃあく</sup>邪悪な天使7人を連れて戻り、住み着きます。同様に、イスラエル国民は清められ、さまざまな改革を経験してきました。しかし、<sup>かれ</sup>彼らは神の預言者たちを退け、明らかに<sup>せいれい</sup>聖霊を受けていたイエスに反対するまでになります。国民の状態は誕生した時よりも悪くなってしまいました。

イエスが話している間に、イエスの母と兄弟たちが<sup>とう</sup>到着しますが、たくさんの人がいて近づけません。それでイエスのそばに座っていた人たちが、「お母さんと兄弟たちが外にいて、会いたがっています」と言います。するとイエスは、弟子たちとの強い絆について話します。弟子たちの方に手を差し出し、「私の母また兄弟たちとは、神の言葉を聞いて行くこの人たちのことです」と言ったのです。(ルカ 8:20, 21) イエスは、自分と親族の絆が<sup>きずな</sup>どれほど貴重であっても、弟子たちとの関係はそれ以上に貴重であることを明らかにしました。私たちは仲間の兄弟姉妹とそのような親しい絆<sup>きずな</sup>を持てることを本当にうれしく思います。他の人たちから理解されなかったり、私たちが行う良い活動について非難されたりする時には、特にそうです。



- ◇ パリサイ派の<sup>ひとひと</sup>人々が腐った木のようなだったのはなぜですか。
- ◇ 「ヨナのはし」とは何ですか。そのしるしはどのように退けられましたか。
- ◇ 1世紀のイスラエル国民は、<sup>じゃあく</sup>邪悪な天使が出ていった人にどんな点で似ていますか。
- ◇ イエスは弟子たちとの親しい関係をどのように強調しましたか。



## 王国に関する例え

マタイ 13:1-53    マルコ 4:1-34    ルカ 8:4-18

イエスがパリサイ派の人たちに強い警告を与えたのは、カペルナウムにいた時のようです。その日の続く出来事を見てみましょう。イエスは家を出て、近くのガリラヤの海まで歩いていきます。するとそこでも人々が集まってきます。イエスは舟に乗って少し岸から離れ、天の王国について教え始めます。その際、たくさんの例えを使います。イエスはみんながよく知っている場面や物事を題材にして話します。そのため、王国に関するさまざまな点が理解しやすくなります。

イエスはまず、種をまく人の話をします。まかれた種の幾らかは道端に落ち、鳥に食べられてしまいました。また、ある種は土が深くない岩地に落ちます。根は出るものの深くまで伸びず、結局、太陽の熱に焼かれ枯れてしまいました。ある種はいばらの間に落ちます。しかし、すぐにいばらが新芽の成長を妨げてしまいました。別の種は良い土に落ちて、「ある種は100倍、ある種は60倍、ある種は30倍の実を付けました」。(マタイ 13:8)

イエスは次に、天の王国を種の成長に例えます。種は人が寝ていても起きていても成長していきます。それが「どのようにしてかを人は知りません」。(マルコ 4:27) 種は自然に成長を続けて実を結び、やがて収穫できるようにります。

イエスは種まきについての3つ目の例えを語ります。ある人が小麦の良い種をまきますが、「人々が眠っている間に」敵が小麦の間に雑草をまいていきました。種をまいた人の奴隷は雑草を引き抜いてもよいか尋ねます。するとその人は言います。「いいえ、雑草を抜く際に小麦も一緒に引き抜くといけません。収穫まで両方と



◇ イエスはいつ、どんな場所で、いろいろな例えを使って話しましたか。





も一緒に成長させておきなさい。収穫の季節になったら、刈り取る者たちにこう言いましょう。まず雑草を抜き、焼くために縛って束にし、それから小麦を倉に集めなさい、と。(マタイ 13:24-30)

イエスの話を聞く人の多くは農業に通じています。それでイエスは、よく知られていた小さなからしの種について話します。その種は成長し、鳥が来て枝の間に巣を作れるほどの大木になります。この種についてイエスは、「天の王国はからしの種のように。人がそれを畑に植えました」と話します。(マタイ 13:31) イエスは植物学の話をしているのではありません。王国の目覚ましい成長について説明し、とても小さいものがいかに成長し拡大していくかを話しているのです。

さらにイエスは、多くの人にとって身近な例を取り上げます。イエスは天の王国を、女性が「3セアの麦粉と混ぜ」た「パン種」に例えます。(マタイ 13:33) 生地の中のパン種は人間の目から隠されていますが、全体に広がり、生地を発酵させます。ですから、パン種は大きな成長をもたらす、目には見えない変化を生じさせます。

これらの例えを話してからイエスは人々を解散させ、滞在している家に戻ります。その後しばらくすると、弟子たちが例えの意味を知りたくてイエスの所にやって来ます。

### イエスの例えから学ぶ

弟子たちはイエスが例えを使って話すのを以前にも聞いたことがあります。1度にこれほど多くの例えを聞くのは初めてです。それでイエスに、「例えを使って話すのはどうしてですか」と質問します。(マタイ 13:10)

イエスがそのようにする理由の1つは、聖書預言を実現するためです。マタイによる書には、こう説明されています。「イエスはこれら全てを例えで群衆に話した。実際、例えを用いなくて話そうとはしなかった。それは預言者を通してこう語られた事が実現するためである。『私は口を開いて例えを語り、始めから隠されてきた事柄を言い広める』」。(マタイ 13:34, 35。詩編 78:2)

しかし、イエスが例えを使った理由はほかにもあります。例えによって、人々の心の中が明らかになるのです。ほとんどの場合、人がイエスに関心を持つのは、イエスが優れた話をし、奇跡を行うからにすぎません。自分を捨てて従うべき自分の主と考えているわけではありません。(ルカ 6:46, 47) 物の見方や生き方を変えるよう要求されるのは好みません。イエスの言葉にそこまで影響されるのは、嫌なのです。

イエスは弟子たちの質問に答えてこう言います。「ですから、例えを使って話すのです。あの人たちは見えても無駄に見、聞いていても無駄に聞き、意味を悟らないからです。この人たちについて、イザヤの次の預言が実現しています。……『この民は心が鈍くな[った]』」。(マタイ 13:13-15。イザヤ 6:9, 10)

しかし、その言葉はイエスの話を聞いていた人全てに当てはまるわけではありません。イエスはこう説明します。「あなたたちの目は見るので、また耳は聞くので、幸せです。はっきり言いますが、多くの預言者や正しい人は、あなたたちが見ているものを見たいと願いながら見ず、あなたたちが聞いている事を聞きたいと願いながら聞かなかったのです」。(マタイ 13:16, 17)

12使徒と他の忠実な弟子たちの心は決して鈍くありません。それでイエスはこう話します。「あなたたちは、

- 
- ◇ イエスは最初にどんな5つの例えを話しますか。
  - ◇ イエスが例えを使って話すのはなぜですか。
  - ◇ イエスの弟子たちは他の人たちと違っていることを、どのように示しましたか。
  - ◇ イエスは種をまく人の例えについてどのように説明しましたか。



天の王国の神聖な秘密を理解することを許されていますが、あの人たちは許されていません。(マタイ 13:11) <sup>かれ</sup>彼らが心から理解したいと思っていたので、イエスは種をまく人の例えについて説明します。

「種は神の言葉です」とイエスは言います。(ルカ 8:11) そして、土は心です。この点が、イエスの例えを理解する鍵<sup>かぎ</sup>です。

<sup>ふ</sup>踏み固められた<sup>みちばた</sup>道端の土にまかれた種について、イエスはこう説明します。「信じて救われることがないよう、<sup>あくま</sup>悪魔がやって来て、その心から神の言葉を取り去ります」。(ルカ 8:12) 岩地にまかれた種はどうですか。イエスの説明によると、それは、神の言葉を喜んで受け入れたものの、その言葉が心に深く根付かない人のことです。「その言葉のために苦難<sup>はくがい</sup>や迫害が生じると、<sup>しん</sup>信仰<sup>こう</sup>を捨ててしまいます。家族や他の人たちからの反対

などによって「試練の時期」が来ると、<sup>はな</sup>離れ去ってしまいます。(マタイ 13:21。ルカ 8:13)

いばらの間にまかれた種についてはどうですか。イエスによれば、それは神の言葉を聞いた人たちのことです。しかし<sup>かれ</sup>彼らは、「今の体制での心配事や富<sup>ゆう</sup>の誘惑<sup>わく</sup>」に<sup>あつとう</sup>圧倒されてしまいます。(マタイ 13:22) 神の言葉をいったん心に入れたものの、ふさがれ、実らなくなります。

イエスは最後に良い土について話します。良い土の人は、神の言葉を聞いて受け止め、神の言葉の意味を理解します。その結果どうなりますか。その人たちは「実」を結びます。<sup>ねんれい</sup>年齢や健康状態<sup>じょうきょう</sup>など状況は人によって<sup>ちが</sup>違うため、皆が同じことを行えるわけではありません。生み出す実は、100倍、60倍、30倍といろいろです。しかし、「非常に良い心で神の言葉を聞いた後、それをしっ



かり保ち、耐え忍んで実を結ぶ人」は、神に仕えることの祝福を味わえるのです。(ルカ 8:15)

イエスの教えの意味を理解したいと思ってイエスの元に來た弟子たちは、こうした説明を聞き、胸を躍らせたに違いありません。例えの概要だけではなく、もっと深い真の意味を理解できたのです。イエスが弟子たちに例えの意味を教えたのは、弟子たちが他の人に真理を伝えられるようにするためでした。それでイエスはこう言います。「ランプを持ってきて、籠の下やベッドの下に置いたりしますか。台の上に置きませんか」。そして、「聞く耳のある人は聞きなさい」と言います。(マルコ 4:21-23)

### さらに多くのことを教えられる

種をまく人の例えの説明を聞いた弟子たちは、もっと学びたいと願い、「畑の雑草の例えを説明してください」と言います。(マタイ 13:36)



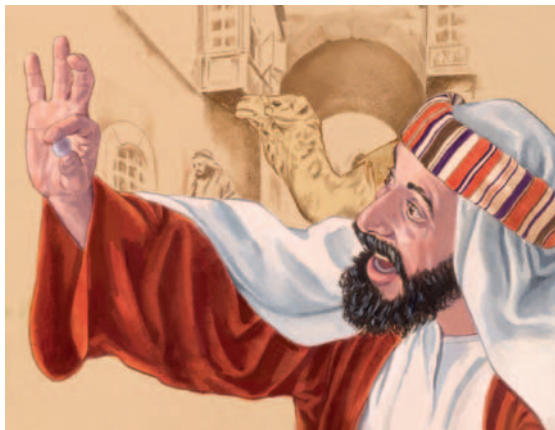
この質問から、弟子たちの態度と浜辺にいる人たちの態度には大きな違いがあると分かります。それらの人たちはただ聞くだけで、例えにはどんな意味があるのか、自分たちにどう関係するのかを知りたいという気持ちがなようです。イエスの例えの概要を知るだけで満足しているのです。イエスは、浜辺にいる人たちと、もっと学びたいという意欲を持ってイエスの所に來た弟子たちとを比較し、こう言います。

「聞いている事柄に注意を払いなさい。あなたたちは自分が量って与えるのと同じはかりで与えられます。しかも、さらに加えられます」。(マルコ 4:24) 弟子たちはイエスから聞く事柄に注意を払っています。イエスに大きな関心を向けているので、さらに多くの教えと理解を与えられます。実際イエスは、小麦と雑草の例えの意味を尋ねてきた弟子たちに対し、こう答えます。

「良い種をまく人は人の子です。畑は世界です。良い種は王国の子たち、雑草は邪悪な者の子たち、雑草をまいた敵は悪魔です。収穫は体制の終結で、刈り取る者は天使たちです」。(マタイ 13:37-39)

このような詳しい説明をした後、イエスは例えの結末を話します。体制の終結の際、刈り取る者つまり天使たちは、雑草のような偽のクリスチャンを本当の「王国の子たち」から分けます。それら「正しい人たちは」集められ、最終的に「父の王国で」明るく輝きます。「邪悪な者の子たち」はどうなりますか。彼らの迎える結末は滅びであるため、彼らは「泣き悲しんだり歯ざりしたり」します。(マタイ 13:41-43)

イエスは弟子たちのために、さらに3つの例えを話します。1番目はこうです。「天の王国は野原に隠された宝のようです。ある人がそれを見つけてから隠しました。そして、喜びのあまり、行って持ち物を全て売り、その野原を買います」。(マタイ 13:44)





イエスは話を続けます。「また、天の王国は立派な真珠を探し求める旅商人のようです。高価な真珠1つを見つけると、去って行って持ち物全てを即座に売り、その真珠を買いました」。(マタイ 13:45, 46)

イエスは両方の例えで、真に価値のあるもののために進んで犠牲を払う態度を強調しています。商人は高価な真珠を手に入れるため、「持ち物全て」をすぐに売りました。弟子たちにとってこれはよく理解できる例えです。また、野原に隠された宝を見つけた男性は、それを手に入れるために「持ち物を全て売り」ました。どちらの例えにおいても、貴重なものは手の届く所にありました。それは手に入れるべき、また大切にすべきものでした。私たちが神の導きを得るには、同じような犠牲を

払わなければなりません。(マタイ 5:3) イエスがこれらの例えを語って聞かせた人たちの中には、神の導きを得るため、またイエスの真の弟子となるため、喜んで大きな努力を払ってきた人がいます。(マタイ 4:19, 20; 19:27)

最後に、イエスは天の王国をあらゆる種類の魚を集める引き網に例えます。(マタイ 13:47) 魚が分けられる時、良いものは入れ物に集められ、良くないものは投げ捨てられます。体制の終結の時にも、同じことが起きます。天使たちは正しい人たちから邪悪な人たちをより分けるのです。

イエス自身、最初の弟子たちを「人を集める漁師」として招いた時、いわば漁をしていました。(マルコ 1:17) しかしイエスは、引き網に関する例えが将来の「体制の終結の時」に当てはまる、と説明します。(マタイ 13:49) ですから、イエスの話を聞いていた使徒と他の弟子たちは、将来、驚くような事柄が生じることを理解できました。

舟の上で話された例えを聞いた使徒と他の弟子たちは、満たされた気持ちになります。イエスは「弟子たちだけの時に全ての説明をし」ました。(マルコ 4:34) イエスは「宝物庫から新しい物と古い物を取り出す家の主人」のようです。(マタイ 13:52) 例えを話す際にも教える能力を見せびらかしていません。むしろ、貴重な宝のような真理を弟子たちに喜んで伝えていきます。本当に優れた「教師」です。

- ◇ 小麦と雑草の例えに出てくる、種をまく人、畑、良い種、雑草、敵、収穫、刈り取る者は、それぞれ誰を、または何を表しますか。
- ◇ イエスはさらにどんな3つの例えを話しましたか。それらの例えから何を学べますか。



# 海の嵐を静める<sup>あらし</sup>

マタイ 8:18, 23-27    マルコ 4:35-41    ルカ 8:22-25



イエスは1日中働いて疲れて<sup>つか</sup>います。その日の夕方、弟子たちに、「向こう岸に渡り<sup>わた</sup>ましょう」と言います。今いるカペルナウムの向こう側の場所です。(マルコ 4:35)

ガリラヤの海の東側はゲラサ人の地域です。この地域はデカポリスの一部です。デカポリスはギリシャ文化の中心でしたが、ユダヤ人もたくさん住んでいました。

イエスがカペルナウムから出発すると、人々はそれに<sup>ひとびと</sup>気付<sup>ふね</sup>き、ほかの舟に乗って後に続きます。(マルコ 4:36) 向こう岸まではそれほど遠くありません。ガリラヤの海は大きな淡水湖で、長さが約21<sup>たんすいこ</sup>キロ、幅は一番広い所で12<sup>はば</sup>キロほどあり、深さもかなりあります。

イエスは完全な人ですが、忙しく伝道したので疲れて<sup>つか</sup>います。そのため舟が岸を離れると、舟の後部で横になり、枕<sup>まくら</sup>を使って眠<sup>ねむ</sup>ってしまいます。

使徒たちの中には舟の扱いに慣れている人もいますが、今日はどうも大変なことになるそうです。ガリラヤの海は山に囲まれていて、湖面の温度がかなり上がります。それで、山からの冷たい風が温かな湖面に吹き下ろすと、突然<sup>とつぜん</sup>に猛烈<sup>もうれつ</sup>な暴風が生じることがあります。まさに今、その状況です。波が激しくぶつかり、舟は「水をいっぱいかぶって危険な状態になって」きます。(ルカ 8:23) それでも、イエスは眠<sup>ねむ</sup>ったままです。

使徒たちはこれまで嵐<sup>あらし</sup>を切り抜けてきた経験を生か

して、必死<sup>ふね</sup>に舟を操ります。しかし、この嵐<sup>あらし</sup>はただ事ではありません。弟子たちは命の危険を感じてイエスを起こし、こう叫<sup>さけ</sup>びます。「主よ、助けてください。死んでしまいそうです!」(マタイ 8:25) 溺<sup>おぼ</sup>れてしまうのではないかと心配しているのです。

イエスは目を覚まして弟子たちに、「なぜそんなに怖<sup>こわ</sup>がっているのですか。信仰<sup>しんこう</sup>の少ない人たち」と言います。(マタイ 8:26) それから風と海に向かって、「静まれ! 静かになれ!」と命じます。(マルコ 4:39) すると暴風はやみ、海は穏やかになります。(マルコとルカもこの印象的な出来事を記録していますが、イエスが嵐<sup>あらし</sup>を奇跡<sup>きせき</sup>的に静めたことをまず強調し、その後、弟子たちの信仰<sup>しんこう</sup>のなさについて述べています。)

弟子たちがどんな反応をしたか想像してみてください。荒れ狂<sup>あぐる</sup>っていた海がすっかり静まったのです。彼らは大変<sup>おそ</sup>な畏れを感じ、「一体どういう方なのだろう。風や湖さえ従<sup>くちくち</sup>うのだ」と口々に言います。その後、無事に向こう岸に到着します。(マルコ 4:41-5:1) 一緒<sup>いっしょ</sup>に出発したほかの舟は西側の岸に戻<sup>もど</sup>っていったのかもしれない。

神の子が自然界をコントロールする力を持っているというのは、本当に心強いことです。イエスが王国で支配し、地上に深い関心を払<sup>はら</sup>う時、全ての人が安心して暮らせ<sup>はら</sup>ます。自然災害はなくなるからです。

- ◇ ガリラヤの海で激しい嵐<sup>あらし</sup>が生じやすかったのはなぜですか。
- ◇ 命の危険を感じた弟子たちはどうしましたか。
- ◇ この出来事が私たちに安心感<sup>あんしん</sup>を与えるのはなぜですか。



## 大勢の邪悪な天使を追い出す

マタイ 8:28-34 マルコ 5:1-20 ルカ 8:26-39

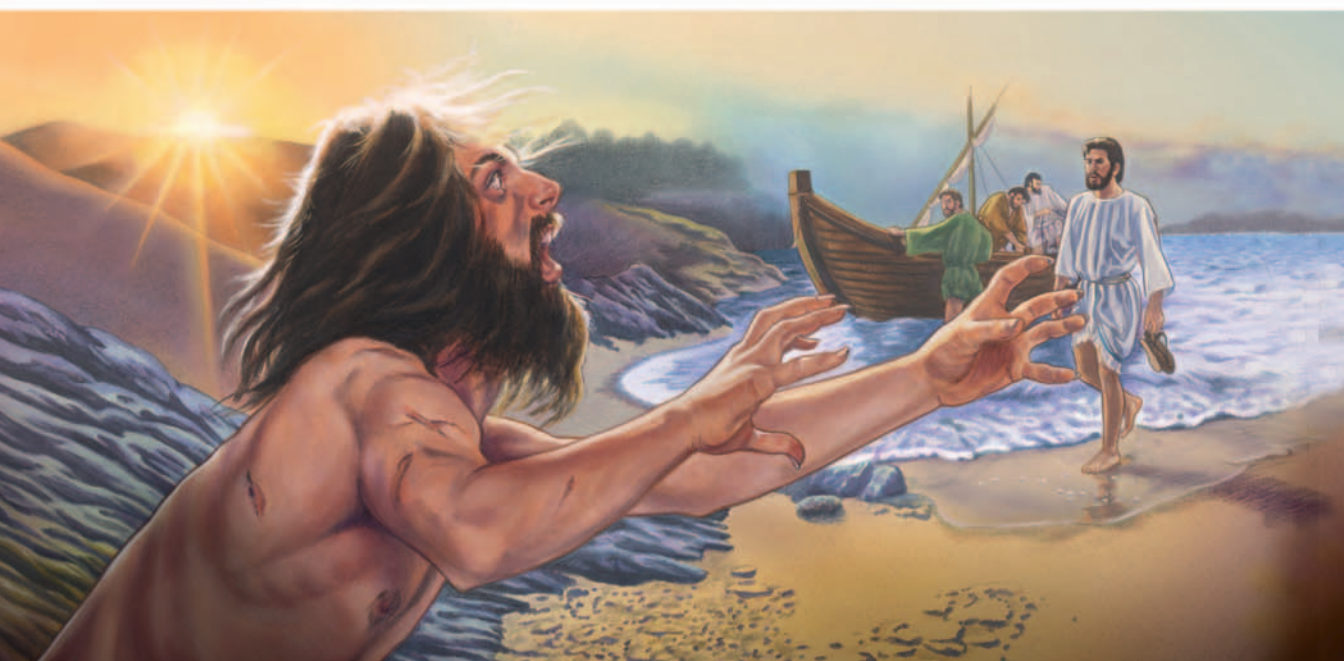
弟子たちがひどい嵐を切り抜けて岸に着くと、ショックなことが起きます。邪悪な天使に取りつかれた2人の凶暴な男が墓の間から出てきて、イエスに向かって走ってきたのです。聖書の記述では、そのうちの1人が特に注目されています。恐らく、その男の方がより凶暴で、より長い期間、邪悪な天使に支配されてきたからでしょう。

この気の毒な男性はずっと裸で生活しており、昼も夜も「墓場や山の中で叫んだり、石で自分の体を傷つけたりして」います。(マルコ 5:5) あまりにも狂暴なので、その周辺を通る人は誰もいません。この人を縛ろうとしても、鎖は引きちぎられ、足かせは打ち壊されてしまいます。誰もこの人を従わせる力がないのです。

男性はイエスの前でひれ伏します。すると、取りついている邪悪な天使は、「至高の神の子イエス、何をしに来たのですか。私を罰しないことを神に懸けて誓ってください」と男性に叫ばせます。イエスは邪悪な天使に従わせる権威があることを示し、「その人から出なさい、邪悪な天使よ」と命じます。(マルコ 5:7, 8)

実は、この男性には大勢の邪悪な天使が取りついていました。「あなたの名前は何ですか」とイエスが尋ねると、「レギオンです。私たちは大勢いるからです」という答えが返ってきます。(マルコ 5:9) レギオンは軍団という意味です。古代ローマの軍団は何千人もの兵士で構成されていました。ですから、非常に大勢の邪悪な天使がこの男性を苦しめ、それを楽しんでいたので。邪悪な天使たちは、「底知れぬ深みに去っていけとは命じないでください」とイエスに嘆願します。彼らは自分たちと自分たちの支配者であるサタンにどんな最後が待っているのか知っているようです。(ルカ 8:31)

その付近の野原では2000頭ほどの豚が草を食べていました。律法で豚は汚れた動物とされており、ユダヤ人は豚を飼うことすら許されていませんでした。邪悪な天使たちは、「私たちを豚の中に送り込んで、その中に入れてください」と言います。(マルコ 5:12) イエスがそれを許すと、彼らは豚の中に入ります。すると、2000頭ほどの豚全てが崖に突進し、海に落ちて溺死します。







<sup>ふた</sup>豚の世話をしていた人たちは急いで町や田舎に行き、このことを知らせました。人々は何が起きたのか見ようとして来ます。来てみると、<sup>じゃあく</sup>邪悪な天使に取りつかれていた男性がすっかり元気になり、正気を取り戻しています。そして何と、服を着てイエスの足元に座っています。

この知らせを聞いたり、その男性を見たりした人たちは恐怖を感じ、イエスが次に何をするのか不安になります。それで、ここから出ていこうイエスに嘆願します。イエスが舟で出発しようとした時、<sup>じゃあく</sup>邪悪な天使に取りつかれていた男性が一緒に行かせてほしいとイエス

に頼みます。しかしイエスはこう言います。「親族の元に帰り、エホバがしてくださった全ての事と示してくださった<sup>あわ</sup>憐れみについて知らせなさい」。(マルコ 5:19)

普通イエスは自分が癒やした人に、起きたことを話さないよう命じます。人々が大げさなうわさによって自分に<sup>しんこう</sup>信仰を持つことがないようにするためです。しかし今回は違います。この男性はイエスの強力な力の生きた証拠であり、イエスが直接会えない人々に証言することもできます。また、この男性が証言すれば、<sup>ふた</sup>豚が死んだ件で悪いうわさが広がるのを防げます。それで、この人はイエスがしてくれたことをデカポリス全域で話します。



- ◇ 聖書の記述で、<sup>じゃあく</sup>邪悪な天使に取りつかれた2人の男性のうち1人が特に注目されているのはなぜですか。
- ◇ <sup>じゃあく</sup>邪悪な天使たちは自分たちの将来について何を知っていますか。
- ◇ <sup>じゃあく</sup>邪悪な天使に取りつかれていた男性が、起きたことを他の人に話すようイエスに指示されたのはなぜでしたか。

# イエスの外衣に触って癒やされる

マタイ 9:18-22 マルコ 5:21-34 ルカ 8:40-48

イエスはデカポリスから戻ってきました。ガリラヤの海の沿岸の北西部に住んでいるユダヤ人たちの間に、その知らせが広がります。最近イエスが嵐の際に風と波を静めたことは大勢の人に知られていたでしょう。邪悪な天使に取りつかれた男性を癒やしたことも伝わっていたかもしれませんが。そのため、恐らくカペルナウムの海辺に、「大勢の人」が集まりイエスを迎えます。(マルコ 5:21) イエスが浜辺に立つと、人々の期待は高まります。

会堂の主宰役員ヤイロも、ぜひともイエスに会いたいと思ってそこにいます。ヤイロはイエスの足元にひれ伏し、「私の娘は今にも死にそうです。元気になって生きられるよう、おいでになって手を置いてやってください」と何度も頼みます。(マルコ 5:23) まだ12歳のかわいい一人娘をどうか助けてほしいという心からの訴えに、イエスはどうか応じてでしょうか。(ルカ 8:42)

イエスはヤイロの家に向かいますが、その途中、心を動かされる別の出来事が生じます。大勢の人たちは別の奇跡を見られるのではないかと、興奮しながらイエスに付いていきます。しかし、1人の女性だけは様子が違います。自分の深刻な病気のことで頭がいっぱいなのです。

このユダヤ人の女性は12年間、出血に悩まされています。たくさんの医者に診てもらっていろいろな治療を受けた結果、お金を使い果たしてしまいました。しかし良くなりません。「かえって悪くなっていた」のです。(マルコ 5:26)

その女性は病気で体調が悪くなっていただけでなく、人に言えないような恥ずかしさも感じていました。普通はそうした症状のことを人前で話すことはしないででしょう。さらにモーセの律法によれば、血の流出がある間、

女性は儀式的に汚れた人となります。その女性や女性の血で汚れた服に触れるなら、水を浴びなければならず、夕方まで汚れた人とされました。(レビ記 15:25-27)

「イエスの評判を聞いて」た女性は、ずっとイエスを捜していました。自分が汚れていることを知っているので、できるだけ目立たないように人混みの中を進み、「あの方の外衣に触るだけで良くなる」と自分に言い続けます。そして、イエスの外衣の裾に触ります。すると、出血が止まったことをすぐに感じ取ります。ついに「悲痛な病気が癒やされた」のです。(マルコ 5:27-29)

その時、「触ったのは誰ですか」とイエスが言います。これを聞いた女性がどう思ったか想像できますか。ペテロは、そんなことは分かるはずがないというニュアンスで、「人々があなたを囲んで群がっているのです」と言葉を返します。では、「触ったのは誰ですか」とイエスが尋ねたのはなぜでしょうか。イエスはこう説明します。「誰かが私に触ったのです。私から力が出ていきました」。(ルカ 8:45, 46) 癒やしを行うと力を奪われるのです。

女性は気付かれずには済まなかったことを知ると、恐れて震えながらイエスの前にひれ伏します。そして、人々の前で、自分の病気のことで、たった今癒やされたことをありのままに話します。するとイエスは優しく安心させるように、「あなたが良くなったのは信仰があったからです。安心して行きなさい。悲痛な病気は治りました」と言います。(マルコ 5:34)

この出来事から、地を支配させるために神が選んだのは、温かく思いやりのある方だということが分かります。人々を気遣うだけでなく、実際に助ける力も持っているのです。



- ◇ イエスがカペルナウムの<sup>もと</sup>辺りに戻ってきた時、人々がイエスを<sup>むか</sup>迎えるために集まってきたのはなぜですか。
- ◇ ある女性はどんな<sup>か</sup>問題を抱えていましたか。イエスに<sup>い</sup>助けてほしいと思っていたのはなぜですか。
- ◇ 女性はどのように癒やされましたか。イエスは何と言って女性を安心させましたか。



## 少女が復活する

マタイ 9:18, 23-26 マルコ 5:22-24, 35-43 ルカ 8:40-42, 49-56

ヤイロは、出血に悩まされていた女性をイエスが癒やすのを見ました。「今ごろはもう、私の娘は死んでしまったに違いない」という気持ちもありますが、イエスなら絶対に助けてくれると思います。(マタイ 9:18) 少女に助かる見込みはあるのでしょうか。

癒やされた女性とイエスがまだ話しているうちに、ヤイロの家から何人かの人が来てこう報告します。「娘さんは亡くなりました。もう先生を煩わさなくてもいいのではありませんか」。(マルコ 5:35)

何と悲しい知らせでしょう。この地域で大変尊敬されているヤイロですが、どうすることもできません。一人娘が亡くなったのです。しかし、この報告を聞いたイエスはヤイロの方を向き、こう励まします。「心配は要りません。ただ信仰を抱きなさい」。(マルコ 5:36)

イエスはヤイロに付き添って家に向かいます。到着

すると、たくさんの人たちが騒ぎ立てています。泣いて大声を上げたり、胸をたたいて悲しんだりしていたのです。そこでイエスは中に入り、「子供は死んだのではなく、眠っているのです」という驚くようなことを言います。(マルコ 5:39) これを聞いた人たちはイエスをばかにして笑い始めます。少女が実際に死んだことを知っているからです。しかしイエスは、神から与えられた力で人を復活させられることを示します。それは、ぐっすり眠っている人を起こすかのようなものです。

イエスは、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、そして少女の両親以外の全員を家の外に出します。それから皆で亡くなった少女が横たわっている所に行きます。イエスは少女の手を取り、「タリタ クミ」と言います。これは訳すと、「少女よ、さあ、起きなさい!」という意味です。(マルコ 5:41) すると、少女はすぐに起き上がり、立って歩き始めます。ヤイロと妻がどれほど喜んだか想像できますか。少女が本当に生きていることを示すため、イエスは何か食べ物少女に与えるようにと言います。

これまでもイエスは癒やした人たちに、何が起きたかを大勢の人に話さないよう命じていましたが、今回も少女の両親にそう命じます。それでも、このニュースは「その地方全体に」広まります。(マタイ 9:26) 死んでいた人が生き返るのを見たなら興奮して話したくなるのも当然かもしれません。これは、イエスが死んだ人を復活させた2番目の例です。



- ◇ ヤイロはどんな報告を聞きましたか。イエスはどのようにヤイロを励ましますか。
- ◇ ヤイロとイエスが家に到着した時、どんな状況でしたか。
- ◇ 死んだ子供はただ眠っているだけだとイエスが述べたのはなぜですか。





# 奇跡を行うが、ナザレで退けられる

マタイ 9:27-34; 13:54-58 マルコ 6:1-6



忙しい1日でした。デカポリスから舟で戻ってきた後、出血に悩まされていた女性を癒やし、ヤイロの娘を復活させました。でも、1日はまだ終わりません。ヤイロの家を出ると、2人の盲人が、「ダビデの子よ、憐れみをお掛けください」と叫びながら付いてきます。(マタイ 9:27)

この2人は「ダビデの子」と呼び掛けることにより、イエスがダビデの王位継承者つまりメシアだと信じていることを示します。イエスは彼らの叫びを無視しているように思えます。2人の粘り強さを試しているのかもしれませんが、それでも彼らは諦めず、イエスが家の中に入ると、同じように入ってきます。それでイエスは、「私にそれができるという信仰がありますか」と尋ねます。すると彼らは確信を込めて、「はい、主よ」と答えます。そこでイエスは2人の目に触り、「あなたたちの信仰通りになるように」と言います。(マタイ 9:28, 29)

すると、2人の視力は回復します。イエスはこの時も、癒やされたことを人に話してはならない、と命じます。しかし彼らはうれしさのあまり、イエスのことを皆に話して回りました。

2人の男性が去ると、人々は邪悪な天使に取りつかれて口が利けない人を連れてきます。イエスが天使を追いつ出すと、すぐに男性は話し始めます。人々はすっかり驚き、「このようなことはイスラエルで一度も見たことがない」と言います。そこには、パリサイ派の人たちもいますが、彼らはイエスの奇跡を否定できません。それでその力が誰によるかを再び問題にし、「彼が邪悪な

天使を追いつ出すのは、邪悪な天使の支配者の力によるのだ」と言って非難します。(マタイ 9:33, 34)

その後間もなく、イエスは弟子たちと一緒に、地元のナザレに戻ります。1年ほど前、イエスはナザレの会堂で教えました。最初、人々は感心していましたが、後にその教えに腹を立て、イエスを殺そうとしました。ところが、イエスはそのような人たちをもう一度助けようとします。

安息日に、イエスは再び会堂で教えます。多くの人々が驚き、「この人は、このような知恵と強力な行いをする力をどこで得たのか」と尋ねる人もいます。しかし、彼らはこうも言います。「この人は大工の息子ではないか。母親はマリアと言い、弟はヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではないか。妹たちも皆、私たちと一緒にいる。では、この全てをどこで得たのか」。(マタイ 13:54-56)

ナザレの人たちには、イエスがただの地元の人に見えませんでした。自分たちは彼の成長を見てきた、どうして彼がメシアだと言えるのか、と考えます。その結果、偉大な知恵や強力な行いという証拠が十分あるのに、イエスを退けます。イエスの親族でさえ、イエスをよく知っているという気持ちに邪魔されて、信仰を持ちません。それで、イエスはこう言います。「預言者は郷里や自分の家以外であれば敬われます」。(マタイ 13:57)

人々の信仰のなさに驚いたイエスは、「何人かの病人に手を置いて治す以外」、奇跡を行いません。(マルコ 6:5, 6)

- ◇ 2人の盲人はイエスに「ダビデの子」と呼び掛けることにより、何を信じていることを示しましたか。
- ◇ パリサイ派の人たちはイエスが奇跡を行った時、何と言って非難しましたか。
- ◇ ナザレの人たちはイエスをどう見ましたか。なぜですか。



## ガリラヤで伝道し、使徒たちを訓練する

マタイ 9:35-10:15 マルコ 6:6-11 ルカ 9:1-5

イエスは2年ほど熱心に伝道活動が続けてきました。ではもう手を抜き、のんびりしてよいでしょうか。そうではありません。イエスは伝道活動を拡大し、「[ガリラヤの]全ての町や村を回る旅に出掛けて、会堂で教え、王国の良い知らせを伝え、あらゆる病気や不調を治し」ます。(マタイ 9:35) また、その旅を通して、伝道活動をさらに拡大する必要があることを確信します。でもどうしてもそうできるのでしょうか。

イエスは旅行しながら、人々が助けと支えを必要としている様子を目にします。羊飼いのいない羊のように痛めつけられ、放り出されていたのです。イエスは彼らをかわいそうに思い、弟子たちにこう言います。「確かに、収穫は多いですが、働き手は少ないのです。それで、

収穫のために人を遣わしてください、収穫の主人にお願い下さい」。(マタイ 9:37, 38)

イエスはどうすればいいかを知っています。それで12使徒を集め、2人ずつの組にして6つのチームを作ります。それから明確な指示を与えます。「異国人の道に行ってはならず、サマリア人の町に入ってはなりません。いつも、イスラエルの家の迷い出た羊の所に行きなさい。行って、『天の王国は近づいた』と伝道しなさい」。(マタイ 10:5-7)

彼らが伝道する王国とは、イエスが模範的な祈りの中で述べた王国のことです。「王国は近づいた」と言えるのは、神から王に指名されたイエス・キリストが今そこにいるからです。弟子たちがこの王国を代表している



という証拠<sup>しょうこ</sup>についてはどうですか。イエスは彼ら<sup>かれ</sup>に、病気を治し、死者を生き返らせる力を与え、ただでそうするよう指示します。では、毎日の食物など、生活必需品<sup>ひつじゅひん</sup>はどうしたらよいのでしょうか。

イエスは弟子たちに、旅行用品の準備はしないように、と言います。金や銀や銅のお金を持つ必要はありません。旅のための食物袋<sup>しょくもつぶくろ</sup>、予備の下着、サンダルも要りません。なぜですか。イエスは、「働く人には当然、食物が与えられます<sup>あた</sup>」と言います。(マタイ 10:10) 弟子たちのメッセージを聞いて感謝する人たちが、必需品<sup>ひつじゅひん</sup>に事欠かないよう助けてくれるのです。さらにイエスは、「どこでも、ある家に入ったなら、その土地を去るまではそこに滞在<sup>たいざい</sup>しなさい」と言います。(マルコ 6:10)

イエスは、どのように家の人に王国について伝えたらよいのかも教えます。「家に入る時には、家の人たちにあいさつをしなさい。その家がふさわしいなら、あなたたちが願う平和がそこにとどまるようにしなさい。しかし、ふさわしくないなら、その平和を戻<sup>もど</sup>らせなさい。どこでも、人があなたたちを迎えず、話を聞かない所では、その家や町を出る際に、足の土を振り払いなさい」。(マタイ 10:12-14)

1つの町や村全体が話を聞こうとしない場合もあるでしょう。そのような所はどうなりますか。厳しい裁きが



下されます。イエスはこう説明します。「はっきり言いますが、裁きの日には、その町よりもソドムとゴモラの方が耐えやすいでしょう」。(マタイ 10:15)

- ◇ イエスが再びガリラヤでの伝道旅行を始めたのはいつですか。イエスは人々<sup>ひとびと</sup>のどんな状態に気が付きませんか。
- ◇ イエスはどのように12使徒<sup>つか</sup>を遣わしますか。その際、どんな指示<sup>あた</sup>を与えますか。
- ◇ 「天の王国は近づいた」とはどんな意味ですか。



## はく がい 迫害されても伝道続けるための準備

マタイ 10:16-11:1 マルコ 6:12, 13 ルカ 9:6

イエスは使徒たちに、2人1組でどのように伝道を行えばよいかについて、素晴らしい指示を与えます。しかし同時に、伝道に反対する人について次のような警告を与えます。「さあ、私はあなたたちを遣わします。あなたたちはオオカミの間にいる羊のようになります。……ひとひとに用心していなさい。あなたたちを地方法廷に引き渡し、会堂でむち打つからです。そして、あなたたちは私のために総督や王の前に連れていかれます」。(マタイ 10:16-18)

イエスの弟子は厳しい迫害に遭うことでしょう。しかし、イエスは元気の出る約束をします。「引き渡される時、何をどう話そうかと心配してはなりません。話すべき事はその時に与えられるからです。単にあなたたちが話すのではなく、天の父の聖霊があなたたちによって話すのです」。さらに、こう続けます。「兄弟が兄弟を、父が子供を引き渡して死なせ、子供が親に歯向かい、死に至らせます。そしてあなたたちは、私の名のために全ての人から憎まれますが、終わりまで耐え忍んだ人が救われます」。(マタイ 10:19-22)

伝道は最優先しなければならない大切な事柄です。それでイエスは、自由に伝道続けられるように弟子たちが思慮深くあるべきことを強調し、こう言います。

「ある町で迫害されるときには、別の町に逃げなさい。はっきり言いますが、人の子が来るまでにあなたたちがイスラエルの町々を回り尽くすことは決してありません」。(マタイ 10:23)

イエスのこれらの言葉は、12使徒にとってぴったりの指示、警告、励ましです。しかし、この言葉はイエスの死と復活の後に伝道する人たちにも当てはまります。そう言えるのは、イエスは弟子たちが「**全ての人から憎まれ**」ると述べたものの、当時の使徒たちはまだそのような経験をしていなかったからです。また、使徒たちがガリラヤでの短い伝道期間中に総督や王の前に連れていかれたり、家族によって引き渡されて殺されたりしたという記録は聖書にありません。

イエスはこの時、将来のことを考えながら話していました。「人の子が来るまでに」弟子たちが町々を回り尽くすことはない、という言葉に注目してください。イエスは、自分が栄光を受けた王として裁きを行うために来る時までに、弟子たちが伝道を終えることはないということを示していたのです。

伝道を行う際に反対に遭うとしても、驚くべきではありません。イエスは、「弟子は先生より上ではなく、奴隷も主人より上ではありません」と言います。これは、イ



イエスが神の王国を伝道したためにひどい扱いを受け迫害されたのであれば、弟子たちも同じ経験をするという意味です。しかし、イエスはこう言います。「体は殺せても命を奪えない人たちを恐れてはなりません。むしろ、命も体もゲヘナで滅ぼせる方を畏れなさい」。(マタイ 10:24, 28)

イエスはこの点で模範を示します。全能者であるエホバ神への忠節を曲げずに、恐れることなく死を耐え忍びました。神は人の命を滅ぼす(将来の命の希望を奪う)こともできれば、人を復活させて永遠の命を与えることもできます。これは使徒たちに安心感を抱かせます。

イエスは神が弟子たちを愛情深く世話する様子を、例えを使って説明します。「スズメ2羽は小額の硬貨1枚で売っていませんか。それでも、その1羽でさえ、天の父が知らないうちに地面に落ちることはありません。……ですから、恐れることはありません。あなたたちはたくさんスズメより価値があるのです」。(マタイ 10:29, 31)

弟子たちが伝道するメッセージは、家族を分裂させることもあります。同じ家族の中でも、メッセージを受け入れるかどうかは人それぞれだからです。イエスは、「私が地上に平和をもたらすために来たと考えてはなりません」と言います。聖書の真理を信じて守るには、勇気が必要です。ですから、イエスは次のように話します。



「私より父親や母親に愛情を抱く人は私の弟子としてふさわしくありません。私より息子や娘に愛情を抱く人は私の弟子としてふさわしくありません」。(マタイ 10:34, 37)

その一方で、弟子たちを喜んで迎える人もいます。イエスはこう語ります。「はっきり言いますが、これら目立たない人の1人を弟子であると認めてほんの1杯の冷たい飲み水を与える人は、必ず報いを得ます」。(マタイ 10:42)

イエスの指示、警告、励ましによって準備が整った使徒たちは、「村から村へと区域を回り、至る所で良い知らせを広め、病気を治し」ていきます。(ルカ 9:6)

- ◇ イエスは弟子たちにどんな警告を与えましたか。
- ◇ イエスは弟子たちをどのように励まし、安心させるとどんな言葉を語りましたか。
- ◇ イエスの指示が私たちにも当てはまると言えるのはなぜですか。



## 誕生パーティーの裏で行われた殺人

マタイ 14:1-12    マルコ 6:14-29    ルカ 9:7-9

イエスと使徒たちがガリラヤで伝道を行っている間も、イエスを神の子羊として紹介したバプテストのヨハネは釈放されていません。牢屋に入れられてから2年がたとうとしています。

ヨハネは、王ヘロデ・アンテパスが異母兄弟フィリポの妻ヘロデアを奪い取って結婚したことは間違いないで、と大胆に非難しました。ヘロデはヘロデアと結婚するために最初の妻を離婚したのです。ヘロデが従うと主張しているモーセの律法では、そうした結婚が姦淫とされており、禁じられています。ヨハネの非難を聞いたヘロデは彼を牢屋に入れます。ヘロデアがそう要求したのでしょう。

「人々がヨハネを預言者と見なして」いるため、ヘロデはヨハネをどうしたらよいものかと考えています。(マタイ 14:5) しかし、ヘロデアはためらいません。「恨みを抱き」、何とかヨハネを殺したいと思っています。(マルコ 6:19) そしてついに、機会が訪れます。

西暦32年の過ぎ越しの直前、ヘロデは自分の盛大な誕生パーティーを開きます。ヘロデに仕える高官や士官たち全て、またガリラヤ市民の中の有力者たちが招待されます。宴会が進んだところで、ヘロデアとその以前の夫フィリポの間に生まれた若い娘サロメが、客のために踊ります。男たちはその踊りに夢中です。

ヘロデもサロメの踊りにとても喜び、「何でも欲しいものを言いなさい。それをあげよう」と約束します。し

かも、「欲しいものが何であっても、王国の半分でも、あげよう」とまで誓ったのです。サロメはまず母親の所に行き、「何を求めたらいいでしょうか」と聞きます。(マルコ 6:22-24)

ヘロデアが待ちに待ったチャンスがやって来ました。即座に、「バプテストを施す者ヨハネの首を」と答えます。サロメはすぐヘロデの所に戻り、「バプテストのヨハネの首を大皿に載せて今すぐお与えくださいますように」と願い出ます。(マルコ 6:24, 25)

ヘロデはかなりうろたえます。しかし、客は皆、自分が誓ったのを聞いています。たとえ無実の男性を殺すことであったとしても、サロメの願いを聞かないのはきまりが悪いことです。それで護衛にぞっとするような命令を与え、牢屋に遣わします。間もなく護衛はヨハネの首を大皿に載せて持てきます。ヘロデはそれをサロメに与え、サロメはヘロデアに大皿を渡します。

これを聞いたヨハネの弟子たちは、やって来て遺体を引き取り、葬ります。それからイエスに報告します。

後に、イエスが人々を癒やしたり邪悪な天使を追いつけたりしていることを聞いたヘロデは、不安になります。バプテストのヨハネが「生き返り」、そうしたことを行っているのではないかと思ったのです。(ルカ 9:7) それでイエスに会ってみたいと考えます。イエスのメッセージを聞きたいと思ったわけではありません。自分の心配していることが本当かどうか確かめなかったのです。

- 
- ◇ バプテストのヨハネが牢屋に入れられているのはなぜですか。
  - ◇ ヘロデアはヨハネを殺すチャンスをどのようにして得ましたか。
  - ◇ ヨハネの死後、ヘロデ・アンテパスがイエスに会いたいと思ったのはなぜですか。



## 少しのパンと魚で非常に大勢の人に食事をさせる

マタイ 14:13-21   マルコ 6:30-44   ルカ 9:10-17   ヨハネ 6:1-13

12使徒はガリラヤ中で伝道旅行を楽しみ、その後、「行った事や教えた事を全て」イエスに話します。使徒たちは当然疲れています。しかし、出入りする人が多くて、食事をする暇さえありません。それでイエスは、「さあ、一緒に静かな場所に行って、少し休みましょう」と言います。(マルコ 6:30, 31)

それで、恐らくカペルナウム辺りから舟に乗り、ヨルダン川の東にあるベツサイダに近い人里離れた場所へ向かいます。しかし、彼らの出発をたくさんの人が見ていたため、そのことが知れ渡ります。それで皆は岸伝いに走っていき、先回りして舟の到着を待ちます。

舟を降りたイエスは大勢の人を見て、かわいそうに思います。羊飼いのいない羊のようだったからです。それで、神の王国について「多くのことを教え始め」ます。



(マルコ 6:34) また、「治療が必要な人たち」を癒やします。(ルカ 9:11) 夕方になると、弟子たちはイエスにこう言います。「ここは辺ぴな場所で、もう遅い時間です。群衆を解散させ、村々に行って自分で食物を買えるようにしてあげてください」。(マタイ 14:15)

するとイエスは、「その必要はありません。あなたが食べ物を与えなさい」と答えます。(マタイ 14:16) イエスはこれから何をするか決めています。フィリポに、「この人々が食べるパンをどこで買いましょうか」と尋ねます。フィリポを試したのです。彼がベツサイダ近くの出身だったからです。しかし、パンを買ってきても問題は解決しません。約5000人の男性がいたのです。女性や子供を含めると1万人を超えたでしょう。それでフィリポはこう返事します。「200デナリ分[1デナリは当時の日給に当たる]のパンでも足りません。行き渡るとしても、1人分はごくわずかでしょう」。(ヨハネ 6:5-7)

アンデレも、全員に食事をさせるのは無理だと思ったらしく、こう言います。「ここに大麦のパン5つと小さな魚2匹を持っている少年がいます。でも、これほど大勢では何になるでしょうか」。(ヨハネ 6:9)

今は西暦32年の過ぎ越しの直前です。春なので丘の中腹には青草がたくさん生えています。イエスは弟子たちに命じて人々を50人から100人のグループに分けて座させます。それから5つのパンと2匹の魚を取り、神に感謝の祈りをささげます。そしてそれらを割って弟子たちに渡し、弟子たちが人々に配ります。そして何と、全ての人がおなかいっぱい食べたのです。

その後、イエスは弟子たちに、「余ったかけらを集め、何も無駄にならないようにしなさい」と命じます。(ヨハネ 6:12) 残ったものを集めると、12の籠がいっぱいになりました。





- ◇ イエスが使徒たちのために静かな場所を探したのはなぜですか。
- ◇ イエスと弟子たちはどこに向かいましたか。到着した時、どんなことがありましたか。
- ◇ 弟子たちはイエスにどうするよう勧めましたか。しかし、イエスは人々をどのように世話しましたか。



## 風と海をコントロールする支配者

マタイ 14:22-36 マルコ 6:45-56 ヨハネ 6:14-25



イエスが奇跡<sup>きせきてき</sup>的な力を使って非常に大勢の人に食事をさせるのを見た時、人々<sup>ひとびと</sup>は衝撃<sup>しょうげき</sup>を受けました。そして、「これこそ、世に来ることになっていた預言者だ」と言います。イエスこそメシアであり、この人なら素晴らしい支配者<sup>ちが</sup>になってくれるに違いないと考えたのです。(ヨハネ 6:14。申命記 18:18) それでイエスを王にするために捕まえようとし<sup>つか</sup>ます。

しかしイエスはその考えを見抜<sup>みぬ</sup>きます。それで人々<sup>ひとびと</sup>を解散させ、弟子たちには舟<sup>ふね</sup>に乗るよう指示します。どんなルートでどこへ向かうのでしょうか。まずベツサイダの方向に進み、それからカペルナウムに向かいます。イエスはというと、晩に1人で祈<sup>いの</sup>るため山に登ります。

夜明け前の月明かりの中、遠く<sup>う</sup>に浮かぶ舟<sup>ふね</sup>がイエスの目に入ります。強風のため湖の波は荒れており、使徒たちは「向かい風のために……必死でこいでい」ます。(マルコ 6:48) イエスは山を下り、使徒たちの方に向かって波の上を歩き始めます。彼ら<sup>かれ</sup>が「5、6キロほどこいた時」のことで<sup>あ</sup>す。(ヨハネ 6:19) 弟子たちは舟<sup>ふね</sup>のそばを通り過ぎようとするイエスを見て信じられず、「幻影<sup>げんえい</sup>だ」と思い、恐ろしくな<sup>おそ</sup>って叫<sup>さけ</sup>びます。(マルコ 6:49)

するとイエスは、「安心しなさい。私<sup>おそ</sup>です。恐れることはありません」と声<sup>か</sup>を掛け<sup>か</sup>ます。それに対しペテロは、「主よ、あなたでしたら、水の上を歩いてそちらに行くよう私に命令<sup>たの</sup>してください」と頼<sup>たの</sup>みます。イエスは、「来なさい!」と言<sup>か</sup>います。そこでペテロは舟から出<sup>ふね</sup>て、実際に水の上を歩いてイエスの方に向かいます。ところが暴

風を見て怖<sup>こわ</sup>くなり、沈<sup>しず</sup>み始めます。ペテロが、「主よ、助けてください!」と叫<sup>さけ</sup>ぶと、イエスは手<sup>て</sup>を伸ばしてペテロをつかみ、「信仰<sup>しんこう</sup>の少ない人よ、なぜ疑いに負けたのですか」と言<sup>い</sup>います。(マタイ 14:27-31)

ペテロとイエスが舟<sup>ふね</sup>に乗り込むと暴風はやみます。弟子たちは大変驚<sup>おどろ</sup>きますが、それは無理のないことでしたか。彼ら<sup>かれ</sup>が「パンの意味<sup>は</sup>」を把握<sup>はく</sup>していれば、つまりイエスが少し前に非常に大勢の人に食事をさせたことを正しく理解していたなら、イエスが水の上を歩き、暴風を静めたとしても驚<sup>おどろ</sup>かなかったはず<sup>は</sup>です。弟子たちはイエスに敬意を示し、「確かにあなたは神の子です」と言<sup>い</sup>います。(マルコ 6:52。マタイ 14:33)

彼ら<sup>かれ</sup>は間もなく、カペルナウムの南にある美しく肥<sup>ひ</sup>沃なゲネサレの平原<sup>どうちやく</sup>に到着<sup>ふね</sup>します。そして舟を止めて岸に降<sup>ひとびと</sup>ります。するとイエスに気付いた人々や、周囲の地方の人たちが病<sup>び</sup>気<sup>き</sup>の人をイエスの元<sup>もと</sup>に連れてきます。病<sup>び</sup>気<sup>き</sup>の人たちはイエスの外衣<sup>すそ</sup>の裾<sup>ふ</sup>に触れるだけです<sup>す</sup>かり良<sup>よ</sup>くなります。

イエスが非常に大勢の人に食事をさせるとい<sup>き</sup>う奇跡<sup>せき</sup>を見た人たちは、イエスが去ってしまったことに気付<sup>き</sup>きます。彼ら<sup>かれ</sup>はティベリアから数<sup>おどろ</sup>ぞうの舟<sup>ふね</sup>が着くと、それに乗<sup>さ</sup>ってイエスを捜<sup>さが</sup>しにカペルナウムにや<sup>さ</sup>って来<sup>き</sup>ます。そしてイエスを見つ<sup>た</sup>けると、「ラビ、いつここに来たのですか」と尋<sup>たず</sup>ねます。(ヨハネ 6:25) するとイエスは彼ら<sup>かれ</sup>を非難<sup>ひ</sup>します。それにはもっともな理由<sup>りゆう</sup>がありました。次の章で考えま<sup>し</sup>ょう。

- 
- ◇ イエスが非常に大勢の人に食事をさせた後、人々<sup>ひとびと</sup>はイエスに何を期待<sup>き</sup>しましたか。
  - ◇ イエスが水の上を歩き、暴風を静めた時に、弟子たち<sup>おどろ</sup>が驚くべきでなかったのはなぜですか。
  - ◇ カペルナウムの近く<sup>どうちやく</sup>の岸<sup>き</sup>辺<sup>べん</sup>にイエスが到着<sup>と</sup>した後、どんなことがあ<sup>り</sup>ましたか。



# イエスは「命のパン」

ヨハネ 6:25-48

イエスはガリラヤの海の東側の地域で、大勢の人に食事をさせました。その後、人々が自分を王にしようとしたため、そこを去ります。その晩には、荒れる海の上を歩きます。ペテロも水の上を歩きますが、信仰が弱くなり沈み始めたので、イエスはすぐに助けます。そして暴風を静め、弟子たちの舟が沈まないようにしました。

それから、イエスはガリラヤの海の西側にあるカペルナウムに戻ってきました。奇跡によって食事をした人たちはイエスを見つけ、「いつここに来たのですか」と質問します。するとイエスは彼らを非難します。その人たちは、もう一度食事をさせてもらいたくてイエスを捜していたからです。イエスは、「腐る食物のためではなく、なくならないで永遠の命をもたらす食物のために働きなさい」と強く勧めます。そこで人々は、「何をしなければなりませんか」と尋ねます。(ヨハネ 6:25-28)

人々は、「働きなさい」と言われた時、律法に従って働くことを想像したかもしれません。しかしイエスは、最重要なことが何かを示し、「神が遣わした人に信仰を抱くことが必要です」と言います。でも、人々はイエスに信仰を抱きません。イエスが多くのことを行ってきたのに、さらに多くのしるしを見せてほしいと要求します。そしてイエスに、「どんなことをするのですか」と尋ねます。さらに、「私たちの父祖は荒野でマナを食べました。『神は天からパンを与えて食べさせた』と書いてある通りです」と言います。(ヨハネ 6:29-31。詩編 78:24)

それに対してイエスは、必要なものを奇跡によって与えるのは誰かを、こう説明します。「はっきり言うておきます。モーセは天からのパンを与えませんでした。しかし、私の父は、天からの真のパンを皆さんに与えています。天から下ってきて人類に命を与える人が神のパンだからです」。でも、人々は要点を理解せず、「主よ、い

つもそのパンを下さい」と言います。(ヨハネ 6:32-34) では、イエスが言っていた「パン」とは何なのでしょう。

イエスはこう説明します。「私が命のパンです。私の元に来る人は全く飢えず、私に信仰を抱く人は決して喉が渇きません。しかし私が言ったように、皆さんは確かに私を見たのに信じません。……私が天から下ってきたのは、自分の意志ではなく、私を遣わした方の意志を行うためだからです。私を遣わした方の意志は、私が、託された全ての人を一人も失うことなく終わりの日に復活させることです。私の父の意志は、子を認めて信仰を抱く人が皆、永遠の命を受けることなのです」。(ヨハネ 6:35-40)

この説明を聞いてユダヤ人たちは騒ぎだし、不満を言い始めます。いったいなぜイエスは自分のことを「天から下ってきたパン」だと言えるのでしょうか。(ヨハネ 6:41) 人々にとってイエスは、ガリラヤの町ナザレ出身の親から生まれた人間にすぎないのです。それで、「これはヨセフの子イエスではないか。私たちは彼の父親も母親も知っている。今になって、『私は天から下ってきた』と言うのはどうしてか」と言います。(ヨハネ 6:42)

そこでイエスは言います。「不満を口にするのはやめなさい。私を遣わした父が引き寄せてくださらない限り、誰も私の元に来ることはできません。私はその人を終わりの日に復活させます。預言者の書に、『彼らは皆エホバに教えられる』と書いてあります。父から聞いて学んだ人は皆、私の元に来ます。誰かが父を見たというわけではありません。神の所から来た人だけが父を見ました。はっきり言うておきますが、信じる人は永遠の命を受けます」。(ヨハネ 6:43-47。イザヤ 54:13)

以前イエスはニコデモに永遠の命について話しました。そして、その命と人の子に抱く信仰を関連付けて、



「[神の独り子<sup>しんこう</sup>]に信仰<sup>いだい</sup>を抱く人が皆、滅<sup>みな</sup>ぼされな<sup>ほろ</sup>いで永遠の命を受け<sup>ひとびと</sup>る」と言いました。(ヨハネ 3:15, 16) 今回<sup>ひとびと</sup>はもっと大勢の人たちに、自分には人々が永遠の命を得るために果たすべき役割があると説明します。この永遠の命は、マナを食べてもガリラヤで一般<sup>いっばん</sup>に売ら

れていたパンを食べても手に入りません。では、どうすれば永遠の命を得られますか。イエスはもう一度、「私は命のパンです」と言います。(ヨハネ 6:48)

天からのパンについての話は続きます。その話はイエスがカペルナウムの会堂で教えた時に山場<sup>むか</sup>を迎えます。

- ◇ 少し前に起きた出来事について考えると、イエスにしるしを要求するべきでなかったのはなぜですか。
- ◇ イエスが自分のことを真の「天からのパン」だと言った時、ユダヤ人たちはどんな反応をしましたか。
- ◇ マナや普通<sup>ふつう</sup>のパンよりも、イエスが話したパンの方が優れていると言えるのはなぜですか。

# 大勢の人がイエスの言葉に衝撃を受ける

ヨハネ 6:48-71

イエスはカペルナウムの会堂で、自分が天からの真のパンであることを教えています。ガリラヤの海の東側から戻ってきた人々に話しています。イエスを追い掛け、パンと魚で食事をさせてもらった人たちです。

イエスは、「父祖たちは荒野でマナを食べましたが、それでも死にました」と言います。しかし、イエスが述べているパンは違います。こう説明します。「私は天から下ってきた生きたパンです。このパンを食べる人は永久に生きます。そして、私が与えるパンとは私の肉であり、人類が生きるためのものです」。(ヨハネ 6:48-51)

西暦30年の春、イエスはニコデモに、神は自分の子を救い主として与えるほどに人類を愛した、と話しました。そして今、イエスは自分がささげる犠牲に信仰を抱くことによりイエスの肉を食べるべきである、という点を教えています。それが永遠の命を得る道なのです。

しかし、人々はイエスの言葉に反発し、「どうしてこの人は自分の肉を与えて食べさせることができるのか」と言います。(ヨハネ 6:52) イエスは比喻を使って話していることを理解してもらうため、比喻を続けます。

「人の子の肉を食べず、その血を飲まない限り、自分の内に命を持てません。私の肉を食べ、私の血を飲む人は永遠の命を受け……ます。私の肉は真の食物、私の血は真の飲み物です。私の肉を食べ、私の血を飲む人は、ずっと私と結び付いて……います」。(ヨハネ 6:53-56)

ユダヤ人たちはぞっとしたでしょう。人食いや血を飲んで律法を破ることを勧めていると感じたかもしれません。(創世記 9:4。レビ記 17:10, 11) しかしイエスは、本当に人肉を食べたり血を飲んだりすることを述べていたわけではありません。将来イエスは、自分の完全な

体を差し出し、自分の血を注ぎ出すことにより犠牲をささげます。永遠の命を得たいと願う人は皆、その犠牲に信仰を抱かなければならない、とイエスは教えているのです。でも、弟子の中にさえこの教えを理解しない人が多くいます。ある人たちは、「この話はひどい。誰が聞いていられるだろうか」と言います。(ヨハネ 6:60)

イエスは不満を言う人がいるのに気づき、こう質問します。「このことで反感を抱いているのですか。では、人の子が元いた所に上っていくのを見たら、どうでしょうか。……私があなたたちに話した事は聖霊によるのであり、命を与えます。しかし、あなたたちの中には信じない人もいます」。これを聞いた大勢の弟子が去っていき、もうイエスに従おうとしません。(ヨハネ 6:61-64)

イエスは12使徒に、「あなたたちも去っていきたいですか」と尋ねます。するとペテロがこう答えます。「主よ、私たちは誰の所に行けばよいのでしょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っています。私たちは、あなたが神の聖なる方であることを信じ、知るようになりました」。(ヨハネ 6:67-69) ペテロや他の使徒たちは今聞いたばかりの教えを十分には理解していません。それでも、イエスに対する変わらぬ愛を示したのです。

イエスはペテロの返事をうれしく思ったでしょう。しかし、こうも言います。「私があなたたち12人を選んだものではありませんか。しかし、あなたたちのうちの1人は中傷する人です」。(ヨハネ 6:70) イエスはユダ・イスカリオテのことを言っていました。彼が悪い欲望に従い始めていることを見抜いていたのかもしれません。

それでもイエスは、ペテロと他の使徒たちが自分に従い続け、命を救う活動をやめなかったので、喜びを感じたに違いありません。



- イエスの肉を食べ、その血を飲む
- 大勢の人が信仰を捨ててイエスの後に従うのをやめる

55



- ◇ イエスはどのようにして自分の肉を人々に与えますか。イエスの肉を食べるとはどういう意味ですか。
- ◇ イエスが自分の肉と血について話した時、人々が衝撃を受けたのはなぜですか。イエスが強調していたのはどんなことでしたか。
- ◇ 大勢の人がイエスに従うのをやめた時、ペテロは何と言いましたか。

# 人を本当に汚すものとは何か

マタイ 15:1-20 マルコ 7:1-23 ヨハネ 7:1

西暦32年の過ぎ越しが近づいたころ、イエスはガリラヤで人々を教えて忙しい毎日を過ごしていましたが、律法の規定に従い、過ぎ越しを祝うためエルサレムに向かったようです。ただし、ユダヤ人たちから命を狙われているので用心深く行動します。(ヨハネ 7:1) その後、ガリラヤへ戻ります。

恐らくカペルナウムにいたイエスの所へ、パリサイ派の人たちと律法学者たちがエルサレムからはるばるやって来ます。なぜでしょうか。イエスを宗教上の違反で訴える手掛かりをつかもうとしているのです。それでイエスにこう質問します。「あなたの弟子が父祖たちからの伝統を破っているのはどうしてですか。例えば、食事をする時に手を洗いません」。(マタイ 15:2) しかし、食事の時に「手を肘まで洗[う]」というしきたりは神が命じたものではありません。(マルコ 7:3) それでもパリサイ派の人たちは、そうしないのは重大な違反であると考えています。

イエスはその非難に直接は答えません。むしろ、彼らがどのように神の律法を意図的に破っているかを、次のように指摘します。「あなたが自分たちの伝統によって神のおきてを破っているのはどうしてですか。例えば、神は、『あなたの父と母を敬いなさい』、そして、『父や母に暴言を吐く人は死刑にきなさい』と言いました。ところがあなた方は言います。『父や母に、「私の物でお役に立ちそうな物はどれも神に献納された供え物なのです」と言えば、父を敬わなくてよい』」。(マタイ 15:3-6。出エジプト記 20:12; 21:17)

パリサイ派の人たちは、神に献納された供え物はお金も財産も全て神殿のものであり、他の目的のために用いることはできないと教えています。ところが、献納したはずの供え物をその人自身がまだ持っていることが

ありました。例えば、ある人が自分のお金や財産は「コルバン」(神や神殿に献納されたもの)である、と言うかもしれない。そして、そうした資産がまだ手元にあり自由に使えたとしても、これは神殿のためだから高齢の貧しい親を助けるために使うことはできない、と主張します。こうして、親に対する責任を逃れるのです。(マルコ 7:11)

パリサイ派の人たちが神の律法をねじ曲げていることに、イエスが怒りを感じたのも当然です。それでこう言います。「自分たちの伝統によって神の言葉を否定しています。偽善者たち、イザヤはあなた方について適切にこう預言しました。『この民は唇で私を敬うが、心は私から遠く離れている。私を崇拜し続けても無駄である。人間の命令を教理として教えるからである』」。イエスからの厳しい非難にパリサイ派の人たちは何も答えられません。イエスは人々を近く呼んで話を続けます。「聞いて、意味を悟りなさい。口に入るものが人を汚すものではありません。口から出るものが人を汚すのです」。(マタイ 15:6-11。イザヤ 29:13)

その後、弟子たちは家の中でイエスに、「パリサイ派の人たちがあなたの言ったことを聞いて反感を抱いたのを知っていますか」と尋ねます。イエスはこう答えます。「天の父が植えたのでない植物は皆、引き抜かれます。放っておきなさい。あの人たちは目が見えない案内人です。目の見えない人が目の見えない人を案内すれば、2人とも穴に落ちます」。(マタイ 15:12-14)

ペテロから人を汚すものの説明を頼まれ、イエスは驚いたようです。こう言います。「口に入るものは何でも胃を通して下水に排出されるものではありません。しかし、口から出るものは何でも心から出てくるのであ



り、それが人を汚します。例えば、心から、邪悪な考え、殺人、姦淫、性的不道德、盗み、偽証、冒瀆が出てきます。これらは人を汚します。しかし、手を洗わずに食事をすることは人を汚しません」。(マタイ 15:17-20)

これは、普段の衛生に気を付けなくてもよいとか、調

理や食事の前に手を洗わなくてもよいという意味ではありません。イエスは、人間の伝統によって神の律法を無視しようとする宗教指導者たちの偽善を非難していたのです。人を本当に汚すのは、心から出てくる悪い行いです。

- ◇ バリサイ派の人たちと律法学者たちは何と言ってイエスを非難しましたか。
- ◇ イエスは、バリサイ派の人たちと律法学者たちが神の律法を意図的に破っていることを、どのように指摘しましたか。
- ◇ 人を本当に汚すものとは何ですか。



## 女の子と耳が聞こえない人を癒やす

マタイ 15:21-31 マルコ 7:24-37

イエスはパリサイ派の自分勝手な伝統を非難した後、弟子たちとそこを去ります。北西に何十キロも離れたフェニキアのティルスやシドンがある地域に向かいます。

イエスは泊まる家を見つめますが、そこにいることを知られたくありません。でも、気付かれてしまいます。その地域出身のギリシャ系の女性がイエスを見つけ、「主よ、ダビデの子よ、憐れみをお掛けください。娘が邪悪な天使に取りつかれ、ひどく苦しめられています」と頼み始めます。(マタイ 15:22。マルコ 7:26)

イエスが何も答えずにいると、弟子たちが、「この女性を追い払ってください。後に付いてきて、ずっと叫んでいます」と言います。するとイエスは女性を無視している理由を説明し、「私は、イスラエルの家の迷い出た羊の所にしか遣わされていません」と答えます。でも女性は諦めません。イエスの前にひざまずき、「主よ、お助けください!」と必死に頼みます。(マタイ 15:23-25)

そこでイエスは女性の信仰を試すためだと思われませんが、他の国籍の人に対するユダヤ人の偏見にそれとなく触れて、「子供たちのパンを取って小犬に投げ与えるのは正しくありません」と言います。(マタイ 15:26) イエスは“犬”ではなく「小犬」と述べることで、ユダヤ人ではない人への優しい気持ちを表現しています。表情や声にもその気持ちが表れていたに違いありません。

女性はイエスの返事に腹を立てたりはしません。イエスがユダヤ人の偏見について述べていることに気付く、謙遜にこう答えます。「そうです、主よ。けれど、小犬も主人の食卓から落ちるパンくずを食べます」。この言葉を聞いたイエスは、女性が純粋な心を持っていることを認め、「あなたの信仰は偉大です! あなたの願う通

りのことが起きるように」と言います。(マタイ 15:27, 28) すると驚いたことに、女性の娘はその場になかったのに癒やされます。女性が家に帰ると、幼い娘はすっかり癒やされて寝床に横になっています。「邪悪な天使は出ていった」のです。(マルコ 7:30)

次にイエスと弟子たちはフェニキア地方を出発し、ヨルダン川の上流に向かいます。その後、ガリラヤの海の北のどこかでヨルダン川を渡り、デカポリス地方に入ります。そして山に登りますが、そこでも大勢の人に見つかってしまいます。人々は足が不自由な人、障害を負った人、盲人、口が利けない人などをイエスの所に連れてきてその足元に横たえます。イエスが彼らを癒やしていくと、皆がとても驚き、イスラエルの神をたたえます。

イエスは耳が聞こえず言語障害のある1人の男性に注目します。その人が大勢の人の中でどんな気持ちになっていたか想像できますか。イエスは男性がとても緊張しているのに気付いたのかもしれませんが。その人を別の場所に連れていきます。2人だけになると、イエスはこれから何を行うかを伝えます。まず指を男性の両耳に入れ、それから唾を掛けて、舌に触れます。そして天を見上げ、「エファタ」つまり「開かれよ」と言います。すると、男性は耳が聞こえるようになり、普通に話し始めます。とはいえ、イエスは人々が自分で見聞きした事柄に基づいて信じてほしいと願っているため、このことを皆に話さないよう命じます。(マルコ 7:32-36)

イエスがこうした癒やしを行うのを見て人々は「すっかり驚きます。そしてこう言います。「あの人は何でも見事に行った。耳が聞こえない人を聞こえるように、口が利けない人を話せるようにするのだ」。(マルコ 7:37)

- イエスはフェニキア人の女性の娘を癒やす
- 耳が聞こえず言語障害のある男性を癒やす

57



- ◇ イエスがフェニキア人の女性の娘をすぐに癒やさなかったのはなぜですか。
- ◇ イエスと弟子たちはフェニキア地方を出発してどこに向かいましたか。
- ◇ 耳が聞こえず言語障害のある男性に対して、イエスはどのように思いやりを示しましたか。

## パンを増やし、パン種について警告する

マタイ 15:32-16:12 マルコ 8:1-21

ガリラヤの海の東側に位置するデカポリス地域で、非常に大勢の人たちがイエスの所に集まっています。イエスの話を聞きたい、癒やしてほしいと思ってやって来ており、食料を入れる大籠おおかごを持参している人もいます。

しばらくしてイエスは弟子たちにこう言います。「群衆がかわいそうです。私と共に3日いて、食べる物がないのです。空腹のまま家に帰らせたら、途中で倒れてしまうでしょう。遠くから来ている人もいます」。すると弟子たちは、「この辺びな場所で、この人々ひとびとに十分食べさせるだけのパンをどこから得られるでしょうか」と答えます。(マルコ 8:2-4)

イエスは、「パンは幾いくつありますか」と尋ねます。弟子たちは、「7つです。それに小さい魚が何匹びきかあります」と言います。(マタイ 15:34) そこでイエスは地面に座るよう人々ひとびとに指示します。次に、パンと魚を取って神に祈り、それらを分けて弟子たちに渡し、弟子たちが人々ひとびとに配おどろっていきます。驚いたことに、そこにいた全員、4000人ほどの男性と女性や子供たちがおなかいっ

ぱい食べます。しかも余った物を集めると、7つの大籠おおかごがいっぱいになります。

イエスは人々ひとびとを解散させると、弟子たちと舟ふねでガリラヤの海の西側にあるマガダンに行きます。そこでは、パリサイ派とサドカイ派の人たちがイエスを試すため近づいてきて、天からのしるしを見せてくれるよう頼みます。

イエスは彼らの動機かれに気が付き、こう答えます。「あなた方は、夕方になると、『夕焼けだから、晴れる』と言い、朝には、『朝焼けで雲が出ているから、今日は冬のような雨が降る』と言います。空模様から天気を見分ける方法を知りながら、時代のしるしは見分けられないのです」。(マタイ 16:2, 3) そして、あなた方にヨナのしるし以外にしるしが与えられることはない、と言います。

イエスと弟子たちは舟ふねに乗り、ガリラヤの海の北東にあるベツサイダへ出発します。その途中、弟子たちはパンを十分持ってこなかったことに気がきます。パンは1個しかありません。その時イエスは、パリサイ派とヘロデを支持するサドカイ派の人たちに会ったことを考えつつ、「じっと見張っていて、パリサイ派のパン種とヘロデのパン種に気を付けなさい」という警告を弟子たちに与えます。弟子たちはパン種あたと聞いて、パンを十分持ってこなかったことを言われていると勘違いかんちがします。それに気付いたイエスは、「なぜパンがないことについて言い合っているのですか」と尋ねます。(マルコ 8:15-17)

少し前にイエスは非常に大勢の人たちにパンあたを与えたばかりでした。ですから、イエスがパンについて心配していないことに弟子たちは気付いてもよいはずでした。イエスは、「覚えていませんか。私が5つのパンを5000人のために割った時、幾いくつの籠かごがかけらでいっぱい





- ・ イエスは4000人の男性に食事をさせる
- ・ パリサイ派のパン種について警告する

# 58

いになりましたか」と質問します。弟子たちは「12個です」と答えます。イエスはさらに、「7つのパンを4000人のために割った時、<sup>いく</sup>幾つの大籠<sup>おおかご</sup>がかけらでいっぱいになりましたか」と尋ねます。彼らは、「7つです」と答えます。(マルコ 8:18-20)

それでイエスは、「私がパンについて話したのでないことを、どうして悟<sup>さと</sup>らないのですか」と尋ね、<sup>たず</sup>「パリサイ

派とサドカイ派のパン種に気を付けなさい」と言います。(マタイ 16:11)

弟子たちはイエスの話の意味をやっと理解します。パン種はパンを<sup>はっこう</sup>発酵させて<sup>ふく</sup>膨らますために使われます。ですから、パン種は<sup>ふ</sup>腐敗<sup>はい</sup>を表していました。イエスは、人を<sup>ふ</sup>腐敗<sup>はい</sup>させる「パリサイ派とサドカイ派の<sup>ふ</sup>教え」に気を付けるようにと警告していたのです。(マタイ 16:12)



- ◇ <sup>ひとひと</sup>人々がイエスの所に集まったのはなぜですか。
- ◇ イエスがパン種について話した時、弟子たちはどんな<sup>かんちが</sup>勘違いをしましたか。
- ◇ イエスが述べた「パリサイ派とサドカイ派のパン種」とは何のことでしたか。

## 人の子とは誰のことか

マタイ 16:13-27 マルコ 8:22-38 ルカ 9:18-26

イエスと弟子たちがバツサイダに着くと、人々が盲目の男性を連れてきて、彼に触れて癒やしてほしいと頼みます。

そこでイエスはその男性の手を取って村の外へ連れていきます。そして、男性の両目に唾を掛けてから、「何か見えますか」と尋ねます。その人は、「人が見えます。木のように見えますが、歩き回っています」と答えます。(マルコ 8:23, 24) それからイエスは両手を男性の両目に当てて視力を回復させます。イエスは男性を家に帰らせませんが、村に入ってはならないと言います。

その後、イエスと弟子たちは北のカエサレア・フィリビ地方に向けて旅をします。そこまでは約40<sup>キロ</sup>に及ぶ上り道で、村は海拔350<sup>メートル</sup>の所にあります。村の北東には、頂上に雪をかぶったヘルモン山がそびえています。恐らく2日かそれ以上の旅だったでしょう。

途中で、イエスは祈るために独りになります。自分が死ぬまで残り9カ月か10カ月です。弟子たちのことが心配です。最近、大勢の人が自分に従うのをやめてしまいました。イエスの態度に納得がいかず、失望した人もいます。王になることをなぜイエスが拒否したのか、自分が誰であることを明らかにするしるしをなぜイエスが示そうとしないのか、分からないのかもしれませんが。

イエスが祈っていると弟子たちがやって来ます。イエスは、「人々は人の子のことを誰だと言っていますか」と尋ねます。弟子たちは、「バプテストのヨハネや、エリヤ、エレミヤ、預言者の1人、などと言っています」と答えます。人々は、そのうちの1人が復活しイエスとして現れた、と考えています。弟子たちの考えを知りたいイエスは、「あなたたちは、私のことを誰だと言いますか」と質問します。するとすぐにペテロが、「キリスト、生きている神の子です」と答えます。(マタイ 16:13-16)

イエスはペテロに、あなたは幸福だと言います。神が

ペテロにイエスが誰であるかを啓示したからです。イエスはさらにこう言います。「あなたはペテロであり、私はこの岩の上に自分の会衆をつくります。死の力はそれを征服できません」。これは、イエスが会衆をつくること、その会衆の成員が死ぬまで忠実であるなら死さえも彼らを捕らえておくことはできないことを意味しています。イエスはペテロに次のような約束をします。「私はあなたに天の王国の鍵を与えます」。(マタイ 16:18, 19)

イエスはペテロに使徒たちの中で一番良い地位を与えたわけでも、ペテロを会衆の土台としたわけでもありません。イエス自身が岩であり、その上に会衆がつくられるのです。(コリント第一 3:11。エペソス 2:20) とはいえ、ペテロには3つの鍵が与えられることになっています。それは、3つのグループの人たちに天の王国に入る機会を開くという特別な割り当てのことです。

ペテロは西暦33年のペンテコステにおいて、1番目



- イエスは盲目の男性を癒やす
- ペテロは王国の鍵を与えられる
- イエスは自分の死と復活について予告する

59

の鍵を使います。その時、ペテロは悔い改めたユダヤ人と改宗者たちに対し、救われるには何をしなければならぬかを説明します。さらに2番目の鍵を使って、信仰を抱いたサマリア人に王国に入る機会を開きます。そして西暦36年、3番目の鍵を使い、コルネリオなどの割礼を受けていない異邦人にも機会を開くのです。(使徒 2:37, 38; 8:14-17; 10:44-48)

イエスは使徒たちとの話の続きで、間もなく自分はエルサレムで苦しみと死を経験することになると予告します。それを聞いて彼らは動揺します。ペテロは、イエスが復活し天での命を得ることを理解していません。それでイエスを脇に連れて行って叱り、「主よ、自分を大切にしてください。決してそのような目には遭いません」と言います。するとイエスはペテロに背を向けて、こう答えます。「私の後ろに下がれ、サタン! あなたは私の邪魔をしています。神の考えではなく、人間の考えを抱いているからです」。(マタイ 16:22, 23)

イエスは使徒たちに加えて他の弟子たちも呼び集め、自分の後に従うのは簡単ではないということを次のように説明します。「誰でも私に付いてきたいと思うなら、自分を捨て、苦しみの杭を持ち上げ、絶えず私の後に従いなさい。自分の命を救おうと思う人はそれを失いますが、私と良い知らせのために命を失う人はそれを救うからです」。(マルコ 8:34, 35)

イエスの恵みを得るのにふさわしい人となるには、勇気と自己犠牲が求められます。イエスはこう言います。



「この罪深い姦淫の世代において私と私の言葉を恥じるようになる人については、人の子も、聖なる天使たちと共に、自分の父の栄光を帯びて来る時、その人を恥じるのです」。(マルコ 8:38) イエスはその時、「各々の振る舞いに応じて報います」。(マタイ 16:27)

- ◇ イエスが誰であるかについて、ある人たちはどんな見方をしていますか。使徒たちはどんな見方をしていますか。
- ◇ ペテロはどんな鍵を与えられましたか。どのようにそれを使いますか。
- ◇ ペテロはどんな矯正を受けましたか。なぜですか。



## 栄光のうちにキリストの姿が変わる

マタイ 16:28-17:13    マルコ 9:1-13    ルカ 9:27-36

イエスはヘルモン山から25<sup>き</sup>ほど離れたカエサレア・フィリビで教えている時、使徒たちを驚かせる次のようなことを言います。「はっきり言いますが、ここに立っている人の中には、死を迎える前に、人の子が王国をもって来るのを見る人たちがいます」。(マタイ 16:28)

弟子たちは、イエスの言葉はどういう意味だろうと思ったに違いありません。数日後、イエスはペテロ、ヤコブ、ヨハネの3人を連れて高い山に登ります。恐らく夜だったのででしょう。3人の使徒たちは眠そうです。イエスが祈っていると、彼らの目の前でイエスの姿が変わります。顔が太陽のように輝き、服が光のように明るく輝いて、きらめくほど白くなったのです。

するとそこに、2人の人「モーセとエリヤ」が現れ、「エルサレムで実現しようとしているイエスの旅立ち」についてイエスと話し始めます。(ルカ 9:30, 31) 旅立ちとは、イエスが最近話した死と復活のことです。(マタイ 16:21) この会話は、ペテロの期待とは違って、イエスが悲惨な死に方を避けられないことを示しています。

使徒たちは眠気が吹き飛び、目を丸くして聞き入ります。幻がとてもリアルだったので、ペテロは会話に加わろうとし、こう言います。「ラビ、私たちがこの場にいられるのは素晴らしいことです。3つの天幕を立てさせてください。あなたと、モーセと、エリヤのためです」。(マルコ 9:5) 「天幕を立てさせてください」とペテロが言ったのは、幻が続いてほしいと思ったからかもしれません。

ペテロが話していると、明るい雲が皆を覆い、雲の中から声が聞こえてきます。「これは私の愛する子、私はこの子のことを喜んでいる。彼の言うことを聞きなさい」。

これを聞いて弟子たちは恐ろしくなり、地面にうつぶします。するとイエスは、「起き上がりなさい。恐れることはありません」と言います。(マタイ 17:5-7) 3人が顔を上げると、イエスのほかにはもう誰も見えません。幻は終わったのです。次の日、山を下りていく時、イエスは、「人の子が生き返るまでは、この幻について誰にも語ってはなりません」と命令します。(マタイ 17:9)

使徒たちは幻の中でエリヤが現れたことを不思議に思います。それで、「なぜ律法学者たちは、まずエリヤが来なければならないと言うのですか」と質問します。するとイエスは、「エリヤはすでに来た」が「人々は彼を見分け」なかった、と答えます。(マタイ 17:10-12) イエスは、エリヤと同じような役割を果たしたバプテスマのヨハネについて話していました。エリヤはエリシャのために、ヨハネはキリストのために道を整えたのです。

イエスも使徒たちもこの幻によって強められたに違いありません。王国におけるキリストの栄光を事前に目撃できたからです。イエスが約束していた通り、弟子たちは「人の子が王国をもって来る」のを見ました。(マタイ 16:28) 山にいた時、「キリストの荘厳さを実際に見た」のです。パリサイ派の人たちはイエスが神によって選ばれた王であることを証明するしるしを見たいと思いましたが、その願いはかなえられませんでした。しかし、イエスの親しい弟子たちは、イエスの姿が変わるのを見ることができました。それは王国の預言に対する信頼を強めるものでした。それでペテロは後に、「私たちにとって預言の言葉はいっそう確かなものとなりました」と記しています。(ペテロ第二 1:16-19)



- ◇ ある人たちは死を迎える前に、イエスが王国をもつて来るのをどのようにして見ましたか。
- ◇ モーセとエリヤは幻の中で何についてイエスと話しましたか。
- ◇ イエスの姿が変わるという幻を見て、キリストの弟子たちが強められたのはなぜですか。

## じゃ あく 邪悪な天使に取りつかれた男の子を癒やす

マタイ 17:14-20 マルコ 9:14-29 ルカ 9:37-43

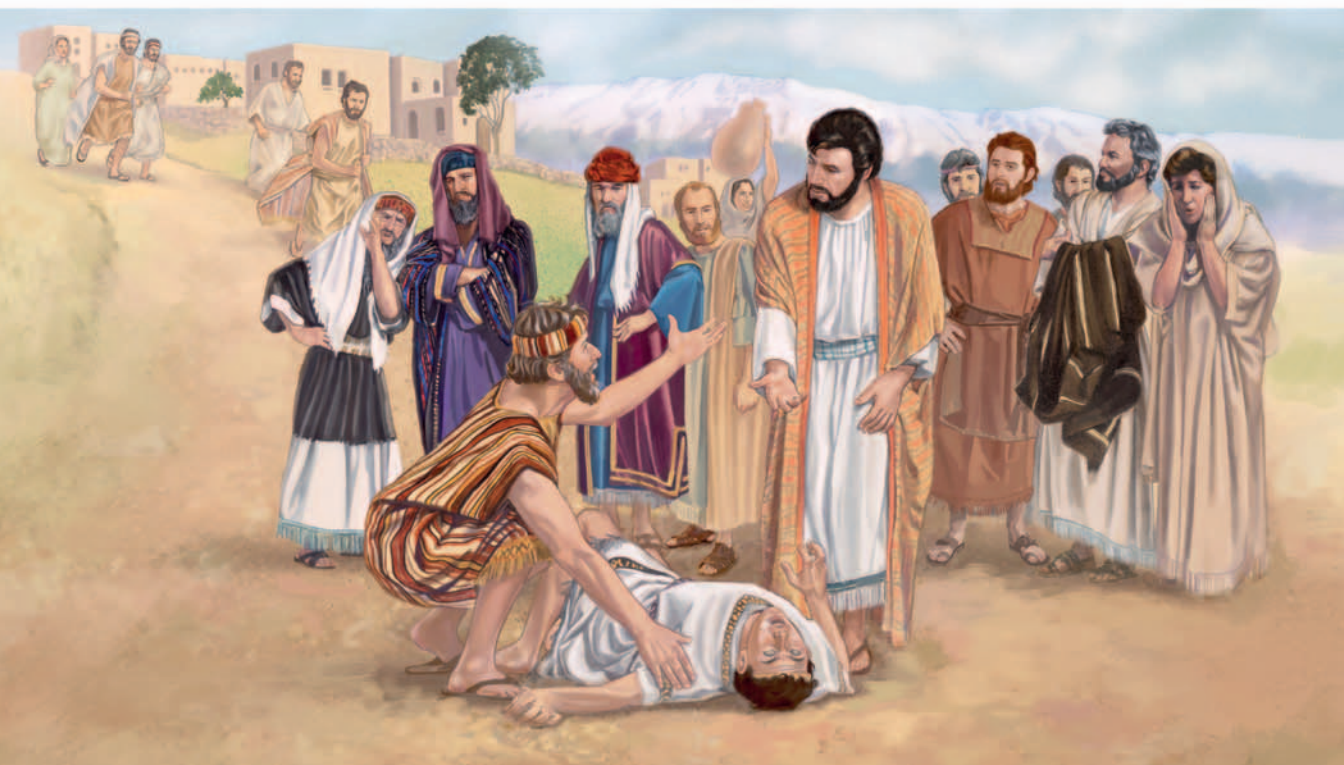
山を下りたイエスと使徒たちは大勢の人に会います。何か様子が変わります。律法学者たちがイエスの弟子たちを取り囲み、言い合っています。人々はイエスを見ると興奮し、走り寄ってあいさつします。イエスは、「何を言っているのですか」と尋ねます。(マルコ 9:16)

すると、1人の男性が出てきてひざまずき、こう言います。「先生、息子が邪悪な天使に取りつかれて話せないで、あなたの所に連れてきました。その者はいつでも息子を襲うと地面にたたきつけ、息子は泡を吹き、歯ぎしりして、ぐったりしてしまいます。あなたの弟子たちに、追い出してくれるよう頼みましたが、できませんでした」。(マルコ 9:17, 18)

律法学者たちは弟子たちがその男の子を癒やせなかったので批判し、ばかにしていたようです。イエスは取り乱している父親に直接答えず、その場にいた人々

にこう言います。「ああ、不信仰でねじけた世代よ、私はいつまであなた方と共にいなければならないのでしょうか。いつまであなた方のことを耐えなければならないのでしょうか」。この強い言葉は、イエスがいけない間に弟子たちを困らせていた律法学者たちに、ぴったり当てはまります。それから、イエスは動揺している父親に、「その子をここに連れてきなさい」と言います。(マタイ 17:17)

男の子がイエスの方に来る間も、邪悪な天使はその子を地面にたたきつけ、激しくけいれんさせます。また、その子は泡を吹きながら転げ回ります。イエスは、「こうしたことがいつから起きているのですか」と尋ねます。父親はこう答えます。「小さなころからずっとです。邪悪な天使は息子を殺そうとして、何度も火の中や水の中に投げ込みました」。そしてこう嘆願します。「何かでき





るのでしたら、かわいそうだと思って私たちを助けてください」。(マルコ 9:21, 22)

父親は必死です。弟子たちが何もできなかったからです。イエスはその願いを聞いて、心強い言葉を掛けます。『『できるなら』と言うのですね。信仰がある人には、全てのことが可能です』。すぐに父親は声を張り上げて言います。「私には信仰があります！ 信仰が必要なところで私を助けてください！」(マルコ 9:23, 24)

イエスは人々が押し寄せてくるのに気付きます。そして、人々の前で邪悪な天使を叱りつけて、「口と耳をふさぐ邪悪な天使よ、私は命じます。この子から出て、二度と入ってはなりません」と言います。すると、邪悪な天使は男の子に叫び声を上げさせ、何度もけいれんを起こさせてから出ていきます。男の子が倒れて動かなくなったのを見た人々は、「この子は死んだ！」と言います。(マルコ 9:25, 26) しかし、イエスが手を取って起こすと、「その時、少年は治った」のです。(マタイ 17:18) 人々がイエスの奇跡に非常に驚いたのもうなずけます。

以前、弟子たちはイエスの指示で伝道した際、邪悪な天使を追い出していました。それで、弟子たちは家でイエスにそっと尋ねます。「なぜ私たちは追い出せなかったのでしょうか」。するとイエスは、今回は弟子たちの信仰が足りなかったことを指摘し、「この種のものは、祈らなければ追い出せません」と説明します。(マルコ 9:28, 29) 強い信仰を持ち、力を求めて神に祈らなければ、邪悪で強力な天使を追い出すことはできないのです。



最後にイエスはこう言います。「はっきり言いますが、からしの種ほどの信仰があるなら、この山に、『ここからあそこに移れ』と言うとしても、それは移るのであり、何事も不可能ではありません」。(マタイ 17:20) 信仰は何と強いものなのでしょう。

エホバへの奉仕を行っていると、山のような障害や問題にぶつかるかもしれません。取り除くことや乗り越えることができないと感じるとしても、強い信仰があるなら、必ず克服できるのです。

- ◇ イエスは山を下りてきた時、どんな様子を目にしましたか。
- ◇ 弟子たちが男の子から邪悪な天使を追い出せなかったのはなぜですか。
- ◇ 信仰はどれほど強いものですか。

## けん そん 謙遜さについての大切な教え

マタイ 17:22-18:5 マルコ 9:30-37 ルカ 9:43-48

イエスの姿が変わったり、<sup>じゃあく</sup>邪悪な天使に取りつかれた男の子をイエスが癒やしたりしたのは、カエサレア・フィリピ地方でのことです。イエスはその後、カペルナウムに向かいます。「そのことを誰にも知られたくなかった」ので、弟子たちだけを連れて目立たないように旅をします。(マルコ 9:30) イエスは旅の途中、弟子たちがイエスの死を受け入れ、その後も活動していくための準備をさせます。イエスは、「人の子は裏切られて人々に引き渡され、殺され、3日目に生き返ります」と話します。(マタイ 17:22, 23)

これは弟子たちにとって驚くことではなかったはずですが、ペテロは信じようとしませんでした。イエスはすでに自分が殺されると話していたからです。(マタイ 16:21, 22) さらに、3人の使徒はイエスの姿が変わるのを目撃し、イエスの「旅立ち」についての話を聞きました。(ルカ 9:31) 弟子たちはイエスの言っていることを全部理解できているわけではありませんが、「非常に悲しくなります。(マタイ 17:23) しかし、このことについてイエスに詳しく質問する勇氣はありません。

その後彼らは、イエスの活動の拠点であり、多くの弟子たちの故郷でもあるカペルナウムに到着します。すると、<sup>しんでんぜい ちょうしゅう</sup>神殿税を徴収する人たちがペテロの所にやってきました。彼らはイエスが税を払っていないことを非難するためだと思われそうですが、こう質問します。「あなたたちの先生は2ドラクマ税[<sup>しんでんぜい</sup>神殿税]を払わないのですか」。(マタイ 17:24)

ペテロは「<sup>はら</sup>払います」と答えます。家に戻ると、何があったかを知っていたイエスはペテロが話す前にこう尋ねます。「シモン、どう考えますか。地上の王たちは物品税や人頭税を誰から受け取っていますか。自分の子からですか、それともほかの人からですか」。ペテロが、

「ほかの人からです」と答えると、イエスは、「そうであれば、子は税を課されていません」と言います。(マタイ 17:25, 26)

イエスの父は<sup>しんでん すうはい</sup>神殿で崇拝されている宇宙の王です。ですから、神の子が<sup>しんでんぜい</sup>神殿税を払う義務はないのです。イエスはこう続けます。「しかし、反感を抱かせないために、湖に行って、<sup>つ ばり</sup>釣り針を垂らしなさい。

最初に釣れる魚を取って口を開けると、銀貨[スタテル、つまり4ドラクマ貨幣]が1枚見つかります。それを取って、私とあなたの分の税を払いなさい」。(マタイ 17:27)

間もなくして、弟子たちはイエスの所に来て、ある質問をしようとします。王国では誰が一番偉いのかという質問です。イエスの死については尋ねる勇氣がなかったのに、自分たちの将来のこととなると、ためらうことなくイエスに尋ねるのです。イエスは弟子たちの考えを知っています。それはカペルナウムに戻る途中で、イエスの後ろを歩きながら彼らが言い合っていたことでした。それでイエスは、「途中で何を言い合っていたのですか」と質問します。(マルコ 9:33) 恥ずかしくなった弟子たちは黙り込みます。答えにくいことだったからです。でもついに、自分たちが言い合っていたことを持ち出し、「天の王国ではいったい誰が一番偉いのですか」とイエスに尋ねます。(マタイ 18:1)

ほぼ3年にわたり、イエスをすぐそばで見て、その話を聞いていた弟子たちがこのような議論をすることなどあり得るのでしょうか。しかし、彼らも不完全な人間です。地位や身分を重んじる宗教的な背景の影響もあり



- ・ イエスは再び自分の死を予告する
- ・ 魚の口にあった銀貨で税を払う
- ・ 天の王国では誰が一番偉いか

## 62

ます。さらに、ペテロは最近イエスから王国の「鍵」を  
与えたと約束されました。自分は特別だと考えていた  
のかもしれませんが。ヤコブとヨハネも、イエスの姿が変  
わるのを目撃していたので、優越感を感じていたかもしれ  
ません。

いずれにしろ、イエスは弟子たちの考え方を改めさ  
せます。1人の子供を呼んで弟子たちの真ん中に立た  
せ、こう教えたのです。「心を入れ替えて幼い子供のよ  
うにならなければ、決して天の王国に入れません。で  
すから、この幼い子供のように謙遜になる人が、天の王  
国で一番偉いのです。そして、私の名のためにこのよ  
うな幼い子供1人を受け入れる人は、私をも受け入れま  
す」。(マタイ 18:3-5)

素晴らしい教え方です。イエスは弟子たちを怒った  
り、欲が深く野心的だと言ったりはしませんでした。  
むしろ、実例を使って教えました。幼い子供は高い地位  
や名声を持っていません。そのような子供と同じ態度を  
持たなければならぬと教えたのです。そして、こう締  
めくります。「あなたたちの間でより小さな者として行  
動する人こそ偉いのです」。(ルカ 9:48)



- ◇ カペルナウムに戻る途中、イエスは弟子たちにどんな重要なことをもう一度教えましたか。それを聞いて弟子たちはどう反応しましたか。
- ◇ イエスには神殿税を払う義務がないと言えるのはなぜですか。それでもイエスが税を払ったのはなぜですか。
- ◇ 弟子たちが地位のことをとても気にしていたことには、どんな理由がありますか。イエスはどのようにして彼らの考え方を改めさせましたか。



## 信仰を妨げるものと罪について教える

マタイ 18:6-20 マルコ 9:38-50 ルカ 9:49, 50

イエスは弟子たちが持つべき態度について子供を実例として教えました。弟子たちは「[イエス]の名のためにこのような幼い子供……を受け入れ」、「[イエス]をも受け入れ」なければなりません。(マタイ 18:5) 何の立場も持っていない子供のような謙遜さが必要なのです。

使徒たちは誰が一番偉いか議論したばかりだったので、イエスの言葉は良い助言となったでしょう。ここで使徒ヨハネが、最近起きた出来事に話題を振ります。「ある人があなたの名を使って邪悪な天使を追い出していたので、私たちはやめさせようと思いました。私たちと一緒にあなたに従っていないからです」。(ルカ 9:49)

ヨハネは、人を癒やし邪悪な天使を追い出す権威を与えられているのは自分たちだけなのに、なぜその男性が邪悪な天使を追い出せるのか、と思ったのでしょう。ヨハネは、自分たちに同行していないその人が奇跡を行うのはおかしい、と考えたようです。

しかし、イエスの次の言葉を聞いてヨハネは驚いたでしょう。「やめさせようとしてはなりません。私の名によって強力な行いをしながら、すぐ私を悪く言える人はいないからです。私たちに反対していない人は私たちに味方しているのです。はっきり言いますが、あなたたちがキリストの弟子だという理由で1杯の飲み水を与えてくれる人は、必ず報いを得ます」。(マルコ 9:39-41)

この当時、イエスの味方になるためにキリストと一緒に行動する必要はありませんでした。クリスチャン会衆はまだ設立されていません。ですから、イエスと旅をしないとしても、反対者であるとか偽りの宗教を推進しているということにはなりません。この男性がイエスの名に信仰を持っていたことは明らかです。それでイエスは、その人は報いを得ると言ったのです。

しかし、使徒たちがその男性の信仰を妨げるのは重大なことです。イエスは言います。「信仰を持つそのような目立たない人1人の信仰を妨げる人は、口バが回すひき臼の石を首に掛けられて海に投げ込まれる方がましです」。(マルコ 9:42) 続けてイエスは、手や足や目



など貴重なものでも、信仰を妨げているなら、捨て去るべきだと教えます。自分にとって大切なものにしがみついてゲヘナ(ヒノムの谷)に行くよりは、それらを捨ててでも神の王国に入る方が良いのです。ヒノムの谷はエルサレムの近くにあり、そこではごみが燃やされていました。ですから使徒たちは、ゲヘナが永遠の滅びを表していると理解できたでしょう。

イエスはさらにこう警告します。「それら目立たない人の1人をも軽く見ないようにしなさい。あなたたちに言いますが、彼らの天使たちは、天にいる父の前に常にいるのです」。この「目立たない人」たちは天の父にとってどれほど大切なのでしょう。イエスは100匹の羊を飼っている人の例えを話します。100匹のうちの

1匹がいなくなると、その人は99匹を残して捜しに行きます。そして見つけると、99匹のこと以上にその1匹のことで大喜びします。イエスは、「それら目立たない人が1人でも滅びるのは、天にいる私の父の望むところではありません」と話します。(マタイ 18:10, 14)

イエスは誰が一番偉いのか言い合っていた使徒たちのことを考えていたようです。それで、こう勧めます。「自分の内に塩を持ちなさい。そして、互いに平和を保ちなさい」。(マルコ 9:50) 塩があれば食べ物は食べやすくなります。塩で味付けするかのように言葉を選んで話すなら、相手は受け入れやすくなり、平和を保てます。言い合ってしまうと、そうはなりません。(コロサイ 4:6)

イエスは、深刻な問題の解決方法をこう教えます。「もしあなたの兄弟が罪を犯したなら、行って、あなたと兄弟だけの間で罪を明らかにしなさい。あなたが話すことを兄弟が聞かなければ、あなたは兄弟を助けたのです」。相手が聞かないならどうしますか。イエスは、「1人か2人を連れていきなさい。どんな事も2人か3人の証言によって確かめられるためです」と言います。それで解決しない場合は、「会衆」に、つまり長老たちに話し、判断を委ねることができます。それでも罪を犯した人が聞かないならどうしますか。「その兄弟を、あなたにとって、異国人や徴税人のような者としなさい」とイエスは教えます。当時のユダヤ人はそうした人たちと交友を持ちませんでした。(マタイ 18:15-17)



会衆の監督たちは神の言葉にしっかりと従います。もしある人の罪が確認され、矯正が必要なら、その裁きは「天ですでに縛られ」たものです。しかし、その人の無罪が証明されるなら、それは「天ですでに解かれ」たものです。この考え方は会衆が設立された後に大変役立つでしょう。イエスはこうした重大な問題を扱う時のことについて、「2人か3人が私の名において集まっている所には、私もいる」と話します。(マタイ 18:18-20)

- ◇ 邪悪な天使を追いついていた男性を反対者と考えるべきでなかったのはなぜですか。
- ◇ 目立たない人の信仰を妨げることはどれほど重大な問題ですか。そうした目立たない人たちが大切であることを、イエスはどんな例えで説明しましたか。
- ◇ ある兄弟が罪を犯したなら、イエスはどうすべきであると教えましたか。

## 許すことの大切さ

マタイ 18:21-35

ペテロは、仲間との間で難しい問題が生じたなら、まずは一対一で解決するようにというイエスのアドバイスを聞きました。しかし、そうした努力を何回くらいすべきなんだろうと思っているようです。

それでペテロはこう尋ねます。「主よ、兄弟が私に罪を犯すとき、何回許すべきでしょうか。7回までですか」。ある宗教指導者たちは3回までは許すようにと教えています。ペテロは、「7回まで」許すと言った自分はとても心が広いと考えたかもしれません。(マタイ 18:21)

しかし、回数を数えるという考え方は、イエスの教えとは違っています。イエスはペテロに、「あなたに言いますが、7回ではなく77回までです」と教えます。(マタイ 18:22) これは、無制限に許しなさいということです。ペテロは仲間を許す回数に制限を設けるべきではなかったのです。

次にイエスは、許す義務があることを例えを使って教え、ペテロと弟子たちの心を動かします。その例えは、思いやりのある主人である王と同じ態度を示さなかった奴隷<sup>どれい</sup>についての話です。王は奴隷<sup>どれい</sup>たちに借金の清算を求めます。そこへ1万タラント(6000万デナリ)という巨額<sup>きょがく</sup>の借金を抱えた奴隷<sup>どれい</sup>が連れてこられます。しかし、その奴隷<sup>どれい</sup>は返すお金がありません。それで王はその奴隷<sup>どれい</sup>に、自分と妻と子供たちを売って返済するよう命じます。すると奴隷<sup>どれい</sup>は王の足元にひれ伏し、「もうしばらくご辛抱<sup>しんぼう</sup>ください。全てをお返ししますから」と頼み込みます。(マタイ 18:26)

王はかわいそうになり、思いやり深くもその巨額<sup>きょがく</sup>の借金を取り消してあげます。王にそうしてもらった後、奴隷<sup>どれい</sup>は出ていき、自分から100デナリを借りている奴隷<sup>どれい</sup>を見つけます。そしてその人を捕まえて首を絞め始め、「借金を全部返せ」と迫ります。相手の奴隷<sup>どれい</sup>はひれ伏し、「もうしばらくご辛抱<sup>しんぼう</sup>ください。返しますから」と嘆







願します。(マタイ 18:28, 29) しかし、王に借金を取り消してもらった奴隷は王と同じ態度を示そうとしません。自分からはるかに少ない額しか借りていない相手を、借金を返すまで牢屋に入れてしまいます。

この思いやりのない仕打ちを見た他の奴隷たちは王の所に行き、報告します。すると王は怒り、奴隷を呼んでこう言います。「邪悪な奴隷よ、あなたが嘆願した時、私は負債を全て取り消してあげました。私があなたに憐れみを掛けたように、あなたも仲間の奴隷に憐れみを掛けるべきではありませんでしたか」。そして王は、借金を全て返すまで、その奴隷を牢番に引き渡します。イエスは最後にこう言います。「もしあなたたち各自が兄弟を心から許さないなら、天の父もこの主人と同じように行動します」。(マタイ 18:32-35)

許すことの大切さが本当によく分かる例えです。私たちは神から巨額の借金のような罪を許されてきました。その罪に比べれば、仲間が私たちに対して犯す罪ははるかに小さなものです。さらに私たちは神から1度だけでなく数え切れないほど許してもらっています。ですから、たとえ不満を感じるとしても、仲間を許すべきではないでしょうか。イエスが山上の垂訓で教えた通り、神は、「私たちに罪を犯した人たち[いわば負債がある人たち]を私たちが許す時、「私たちの罪を」許してください。(マタイ 6:12)



- ◇ ペテロが仲間を許すことについてイエスに質問しようと思ったのはなぜですか。「7回まで」許すと言った時、自分は心が広いとペテロが考えたかもしれないのはなぜですか。
- ◇ 奴隷の嘆願に対する王の態度と、仲間に対するその奴隷の態度はどのように違っていましたか。
- ◇ イエスの例えからどんな大切なことを学べますか。

## エルサレムへの旅の途中で教える

マタイ 8:19-22 ルカ 9:51-62 ヨハネ 7:2-10

イエスはしばらくの間、主にガリラヤだけで活動します。その地域の人々がユダヤの人々よりも良い反応を示したからです。イエスがエルサレムで安息日にある男性を癒やした時、「ユダヤ人たちはますますイエスを殺そうとするようにな」りました。(ヨハネ 5:18; 7:1)

今は西暦32年の秋で、幕屋(または仮小屋)の祭りが近づいています。祭りは7日間続き、8日目には特別な集まりが開かれます。農耕の1年の終わりを示すもので、皆が喜びにあふれ、神に感謝する時です。

イエスの異父兄弟ヤコブ、シモン、ヨセフ、ユダはイエスに、「ここを去ってユダヤに入りなさい」と勧めます。エルサレムは国全体における宗教の中心地で、年3回の祭りの時には大混雑します。エルサレムへ行くよう勧める理由として彼らはこう言います。「公に知られることを求めながら、物事をひそかに行う人はいません。行っている事を人々に見せなさい」。(ヨハネ 7:3, 4)

4人の異父兄弟たちは「イエスに信仰を抱いて」おらず、イエスがメシアであるとは考えていません。それでも、祭りで集まった人たちにイエスの強力な行いを見てほしいと思っています。イエスは危険が待っていることを知っているため、こう答えます。「世があなたたちを憎む理由はありません。しかし、私のことは憎みます。世の行いが邪悪であることを明らかにするからです。あなたたちは祭りに行きなさい。私はまだ行きません。私の時はまだ来ていないからです」。(ヨハネ 7:5-8)

イエスの異父兄弟たちがエルサレムに向かう大勢の人たちと一緒に掛けてから数日後、イエスと弟子たちも人々の目を避けながらこっそりと出発します。人々がよく使うヨルダン川に近い道ではなく、サマリアを抜ける直行ルートを行います。そして、サマリアのどこかで夜を過ごす手配をするため、イエスは先に使者を遣わします。ところが、ある場所の人たちは彼らを迎えたり



普通するようなもてなしをしったりはしません。なぜなら、イエスがユダヤ人の祭りのためにエルサレムへ向かっているからです。ヤコブとヨハネは怒り、「主よ、お望みでしたら、天から火が下るよう求めて彼らを滅ぼし尽くしましょうか」と言います。(ルカ 9:54) イエスはそういう発言をした2人を叱ります。そして、旅を続けます。

その途中、ある律法学者がイエスに、「先生、あなたが行く所なら、どこへでも付いていきます」と言います。しかしイエスは、「キツネには穴があり、鳥には巣があります。しかし人の子には頭を横たえる所がありません」と答えます。(マタイ 8:19, 20) イエスは、自分の弟子になるなら試練を経験する、と言っていました。この律法学者はプライドが高過ぎてイエスの弟子としての



生活を受け入れられないのでしょうか。私たちも、自分は喜んでイエスの弟子になるだろうか、と考えるべきです。

イエスは別の男性に、「私の弟子になりなさい」と言います。するとその人は、「主よ、まず行って父を葬<sup>ほうむ</sup>らせてください」と答えます。その男性の状況<sup>じょうきよう</sup>を知っていたイエスは、「死人は死人に葬<sup>ほうむ</sup>らせ、あなたは行って神の王国を広く知らせなさい」と言います。(ルカ 9:59, 60) その人の父親はまだ生きていたようです。もし父親が亡くなったのであれば、その男性がその場においてイエスと話すことはなかったでしょう。神の王国を最優先にした生活をする準備ができていなかったのです。

エルサレムへの道を進んでいくと、また別の男性がイエスに、「主よ、私はあなたの後に従います。でも、まず家の者に別れを告げさせてください<sup>か</sup>」と言います。イエスはこう答えます。「すきに手を掛けてから後ろのもの

を見る人は神の王国にふさわしい人ではありません」。(ルカ 9:61, 62)

イエスの真の弟子になりたいと思うなら、王国のため<sup>ほうし</sup>の奉仕に目の焦点<sup>しやうてん</sup>を合わせていなければなりません。畑を耕す人が真<sup>ま</sup>つすぐ前を見ていないと、敵<sup>うね</sup>は曲がってしまうでしょう。また、後ろのものを見るためにすきを下ろしてしまうなら、畑での作業は進みません。同じように、後ろを向いて今の体制を見る人は、永遠の命へと続く道からそれしてしまうかもしれません。

- 
- ◇ イエスの4人の異父兄弟たちはイエスのことをどう見ていましたか。
  - ◇ サマリアの人たちがイエスを迎え<sup>むか</sup>えなかったのはなぜですか。ヤコブとヨハネはどんな反応をしましたか。
  - ◇ エルサレムに向かう途中<sup>とちゆう</sup>、イエスは3人の人とどんな会話<sup>かうわ</sup>をしましたか。その会話でイエスは神への奉仕<sup>ほうし</sup>についてどんなことを強調しましたか。











セクション

# 4

## ユダヤでの 伝道活動

「<sup>しゅうかく</sup>収穫のために人を  
<sup>つか</sup>遣わしてくださるよう、<sup>しゅうかく</sup>収穫の  
主人にお願いしなさい」。

ルカ 10:2

## エルサレムでの幕屋の祭り

ヨハネ 7:11-32

バプテスマ後、イエスは有名になります。多くのユダヤ人がイエスの奇跡を見、イエスの活動についての話は広範囲に伝わっています。今は幕屋(または仮小屋)の祭りの最中で、大勢の人がイエスを捜しています。

イエスについての意見はさまざまです。「彼は善い人だ」と言う人もいれば、「いや、群衆を惑わしている」と言う人もいます。(ヨハネ 7:12) 人々は祭りの初めの期間に、こうしたひそひそ話をよくしていました。でも誰もイエスを支持する話を大きな声でする勇氣はありません。ユダヤ人の指導者の反応を恐れていたのです。

イエスは祭りが半分を過ぎたころに神殿へ行きます。人々の多くはイエスの教える能力の素晴らしさに驚きます。イエスがラビの学校に行ったことはないを知っているので不思議に思い、「どうしてこの人は、学校で学んだこともないのにこんなに聖書の知識があるのだろう」と言います。(ヨハネ 7:15)

イエスはこう説明します。「私の教えは私のものではなく、私を遣わした神のものです。この方の意志を行いたいと願う人なら、この教えが神からのものか、それとも私が独自の考えで話しているのかが分かります」。(ヨハネ 7:16, 17) イエスの教えは神の律法に沿ったものです。ですから、明らかにイエスは自分ではなく神が称賛されるよう願っています。

さらにイエスはこう言います。「モーセが律法を与えたではありませんか。それなのに、あなた方の誰も律法に従っていません。なぜ私を殺そうとするのですか」。その場にいたある人たちはエルサレム市外から来ていると思われませんが、そうした悪巧みについて知りません。イエスのような優れた教師を殺そうとする人があるとは信じられないのです。それで、そんなことを考えるイエスはどこかおかしいのではないかと思い、「あなた

は邪悪な天使に取りつかれています。誰が殺そうとしているのですか」と言います。(ヨハネ 7:19, 20)

1年半前にイエスが安息日に男性を癒やした時、ユダヤ人の指導者たちはイエスを殺そうとしました。それでイエスはここで、指導者たちの分別のなさを見事に暴きます。まず、律法の規定について考えさせます。規定によると、男の子は生後8日目に割礼を施さなければならず、その日が安息日でもそれは変わりません。それからイエスはこう言います。「モーセの律法を破らないように安息日に割礼を施すのに、私が安息日に人をすっかり健康にすると、激しく怒るのですか。見掛けで裁くのをやめ、正しい裁きをしなさい」。(ヨハネ 7:23, 24)

すると、いきさつを知っているエルサレムの住民はこう言います。「これは、支配者たちが殺そうとしている人ではないか。それなのに、公然と話しており、支配者たちは何も言わない。この人がキリストだとはっきり分かったのだろうか」。では、イエスがキリストであるとエルサレムの住民が信じないのはなぜでしょうか。彼らはこう言います。「私たちは、この人がどこから来たのかを知っている。キリストが来る時には、どこから来たのかを誰も知らないはずだ」。(ヨハネ 7:25-27)

そこでイエスはこう答えます。「あなた方は、私が誰でもどこから来たのかを知っています。私は自分の考えで来たのではなく、私を遣わした方がいます。あなた方はその方を知りません。私はその方を知っています。私は代理としてその方に遣わされたからです」。(ヨハネ 7:28, 29) イエスが自分の立場をはっきり示したため、ある人たちはイエスを捕まえて、牢屋に入れるか殺すかしようします。しかし、イエスが死ぬ時はまだ来ていなかったため、失敗に終わります。

とはいえ、イエスの強力な行いにより、大勢の人がイエスに信仰を持ちます。水の上を歩き、風を静め、少し





のパンと魚で大勢の人に食事をさせました。病気を癒やし、足が不自由な人を歩けるようにし、盲人もうじんの視力を回復させ、重い皮膚病ひふびょうの人を癒やしました。死んだ人を復活させることまでしたのです。人々がこう言ったの

も当然です。「キリストが来ても、この人が行ったほど多くのしるしは行わないのではないか」。(ヨハネ 7:31)

人々の話を聞いたパリサイ派の人たちは祭司長たちと共に、イエスを逮捕させるため下役たちを派遣します。

- ◇ 祭りの際、人々はイエスについてどんなことを言いましたか。
- ◇ イエスは自分が律法を破っていないことをどのように見事に説明しましたか。
- ◇ 大勢の人がイエスに信仰を抱いたのはなぜですか。

## 「あのよう<sup>に</sup>話した人はこれまでにいませんでした」

ヨハネ 7:32-52

イエスは幕屋(または仮小屋)の祭りのためにエルサレムにいます。そして、「群衆の多くがイエスに<sup>しんこう</sup>信仰を持」ったことを喜んでいます。しかし、宗教指導者たちは違います。イエスを逮捕<sup>たいほ</sup>するために下役<sup>つか</sup>たちを遣わします。(ヨハネ 7:31, 32) でもイエスは隠<sup>かく</sup>れません。

むしろ、イエスはエルサレムで人々を<sup>ひとびと</sup>堂々<sup>どうどう</sup>と教え続けます。そして、こう言います。「私は、自分を遣わした方の元に行くまで、もうしばらくあなた方と共にいます。あなた方は私を<sup>さが</sup>捜しますが、見つけることができず、私がいる所に来ることができません」。(ヨハネ 7:33, 34) でもユダヤ人たちは意味を理解できず、こう話します。「この人はどこへ行って見つからないようにするつもりなのか。ギリシャ人の間に<sup>りさん</sup>離散しているユダヤ人の所へ行って、ギリシャ人を教えるつもりなのだろうか。『あなた方は私を<sup>さが</sup>捜しますが、見つけることができず、私がいる所に来ることができません』というのはどういう意味なのか」。(ヨハネ 7:35, 36) この時イエスが言っていたのは、自分の死と天への復活についてでした。敵はイエスを天まで追<sup>か</sup>い掛けることができません。

祭りの7日目になりました。祭りの期間中は毎朝、祭司がシロアムの池から<sup>さいだん</sup>くんだ水を祭壇の上に注ぎ出し、水は祭壇の基部に流れ落ちます。イエスはこの儀式を<sup>ひとびと</sup>人々に思い起<sup>おき</sup>こさせようとしたようです。それで、大声でこう言います。「喉<sup>のど</sup>が<sup>かわ</sup>渴いている人がいるなら、私の所に来て飲みなさい。私に<sup>しんこう</sup>信仰を持つ人は、聖書にある通り、『その人の奥深くから、生きた水が流れ出ます』」。(ヨハネ 7:37, 38)

イエスは、弟子たちが<sup>せいれい</sup>聖霊で油を注がれ天での命の希望を持つようになる時、何が起きるかについて話していました。それが起きるのは、翌年のペンテコステの日



です。その日に、聖霊で油を注がれた弟子たちが他の人に真理を伝え始め、命を与える水が流れ始めます。

イエスの話を聞いたある人たちは、「これこそ確かにあの預言者だ」と言います。予告されていた、モーセよりも偉大な預言者のことを言っているようです。また、「これがキリストだ」と言う人もいます。しかし別の人たちは、「キリストがガリラヤから出るはずがない。聖書は、キリストがダビデの子孫で、ダビデがいた村ベツレヘムから出ると言っているではないか」と主張します。(ヨハネ 7:40-42)

人々の間には分裂が生じます。イエスの逮捕を期待している人もいますが、誰もイエスを捕まえようとしません。下役たちがイエスを連れずに戻ると、祭司長とパリサイ派の人たちは、「どうして彼を連れてこなかったのか」と尋ねます。下役たちは、「あのように話した人はこれまでにいませんでした」と答えます。すると宗教指導者たちは怒り、あざけってこう言います。「あなたたちまで惑わされたというのか。支配者やパリサイ派の中に彼に信仰を持った人がいるか。律法を知らないあの群衆は神に見放されているのだ」。(ヨハネ 7:45-49)

この時、パリサイ派でサンヘドリンの一員であるニコデモがイエスのために発言します。ニコデモは2年半ほど前に、晩にイエスを訪ね、イエスに対する信仰を言い表しました。ニコデモはこう言います。「私たちの律法

では、まず本人の話を聞いて、行っている事を確認してから、裁くのではないか」。それを聞いた他の人たちは、「あなたもガリラヤ出身にでもなったのか。預言者はガリラヤからは現れないことを調べてみなさい」と言い返します。(ヨハネ 7:51, 52)

聖書は、預言者がガリラヤから出るとはっきり述べているわけではありません。とはいえ、キリストがそこから出るということは示しています。なぜなら、「大きな光」が「諸国の<sup>ひとびと</sup>人々のガリラヤ」で見られるようになると予告しているからです。(イザヤ 9:1, 2。マタイ 4:13-17) さらに、イエスは予告通りベツレヘムで生まれ、ダビデの子孫でもあります。しかし、パリサイ派の人たちはそのことに気付いていながら、イエスについての誤解を広めていたようです。



- ◇ イエスは、祭りの間に毎朝行われていた儀式を思い出させるようなどんなことを述べましたか。
- ◇ 下役たちがイエスを逮捕しなかったのはなぜですか。宗教指導者たちはどのような反応をしましたか。
- ◇ キリストがガリラヤから出ることはどのように予告されていましたか。



## 神の子は「世の光」

ヨハネ 8:12-36

幕屋の祭りの最終日である7日目に、イエスは神殿<sup>しんてん</sup>の中の「寄付箱」<sup>ひとびと</sup>がある辺りで人々を教えています。(ヨハネ 8:20。ルカ 21:1) それは婦人の庭にある場所のよう<sup>ひとびと</sup>で、人々はそこで寄付をします。

祭りの期間中、日が暮れるとそのエリアでは特別な明かりが準備<sup>きょだい</sup>されます。4つの巨大なランプ台<sup>はち</sup>で、それぞれには油を満した4つの大きな鉢<sup>はち</sup>が付いています。この明かりはとても強力<sup>きょりき</sup>で、周囲をかなり遠くまで照らします。次のイエスの言葉を聞いた人はその明かりのことを思い浮<sup>う</sup>かべたかもしれません。「私は世の光です。私の後に従<sup>やみ</sup>う人は決して闇の中を歩むことがなく、命<sup>あたま</sup>を与える光を持つようになります」。(ヨハネ 8:12)

パリサイ派の人たちは、「あなたは自分について証言しています。それを信じることはできません」と文句を言います。イエスはこう答えます。「私が自分について証言していても、その証言は真実です。私は、自分がどこから来て、どこへ行くかを知っているからです。しかしあなた方は、私がどこから来て、どこへ行くかを知りません」。そしてさらにこう言います。「あなた方自身の律法にも、『2人の証言があれば真実である』と書いてあります。私について、私自身が証言し、私を遣<sup>つか</sup>わした父も証言します」。(ヨハネ 8:13-18)

パリサイ派の人たちはイエスの説明に納得せず、「あなたの父親はどこにいるのですか」と尋ねます。イエスははっきりこう言います。「あなた方は私も私の父も知りません。もし私を知っているなら、私の父をも知っているはず<sup>はず</sup>です」。(ヨハネ 8:19) パリサイ派の人たちはイエスを逮捕<sup>たいほ</sup>したいと思っていますが、誰<sup>だれ</sup>もイエスに手を出そうとしません。

イエスは前に話したことを繰<sup>く</sup>り返します。「私は去っていきます。あなた方は私を捜<sup>さが</sup>しますが、それでも罪を負ったまま死にます。私が行く所へあなた方は来ること



ができません」。ユダヤ人たちはその意味が分からず、「彼は自殺するつもりではないだろう。でも、『私が行く所へあなた方は来ることができない』と言っている」と言い合います。彼らはイエスがどこから来たのかに気付いていないので誤解しているのです。イエスはこう説明します。「あなた方は地上の領域の者ですが、私は天の領域の者です。あなた方は人間社会に属しています、私はそうではありません」。 (ヨハネ 8:21-23)

イエスは、人間になる前に天にいたこと、自分が約束のメシアまたキリストであることについて話しています。宗教指導者たちはイエスがそのような人物であることを認めるべきです。しかし、彼らはイエスをばかにして、「あなたは誰なのですか」と聞きます。 (ヨハネ 8:25)

そうした敵対的な反応に対しイエスは、「一体、私は何のためにあなた方に話しているのでしょうか」と言います。そして自分の父に注意を向け、子の言うことを聞くべき理由を説明します。「私は、真実を語る方から世に遣わされ、その方から聞いたことを話しているのです」。 (ヨハネ 8:25, 26)

イエスは、ユダヤ人たちが持っていない、父に対する確信を次のように言い表します。「あなた方は、人の子を杭に掛けた後に、私がその者で、何事も自分の考えで行っていたのではないことを知ります。私は、父が教えてくださった通りに、これらのことを話しています。そして、私を遣わした方は共にいてくださり、私を独りだけ

にはしませんでした。私は常に、その方が喜ぶことを行うからです」。 (ヨハネ 8:28, 29)

あるユダヤ人たちはイエスに信仰を持ちます。それでイエスはその人たちにこう話します。「私の教えを常を守るなら、あなた方は本当に私の弟子であり、真理を知り、真理によって自由になります」。 (ヨハネ 8:31, 32)

この言葉を聞いて不思議に思った人たちは、こう反論します。「私たちはアブラハムの子孫で、誰の奴隷になったこともありません。どうして『自由になる』と言うのですか」。ユダヤ人は何度も外国の支配を受けてきたのに、奴隷とは呼ばれたくないのです。しかしイエスはこう指摘します。「はっきり言っておきますが、罪を犯す人は皆、罪の奴隷です」。 (ヨハネ 8:33, 34)

自分たちが罪の奴隷であることを認めようとしなければ、ユダヤ人たちは危険な立場にすることになります。イエスは、「奴隷は主人の家にいつまでもいるわけではありません。子はいつまでもいます」と説明します。 (ヨハネ 8:35) 奴隷には相続権がないため、いつ解雇されてもおかしくありません。その家で生まれた子が養子だけが「いつまでも」、つまり生きている限り家にいます。

ですから、子についての真理は、死をもたらす罪から人を永遠に自由にする真理なのです。イエスはこう断言します。「子である私が自由にするなら、あなた方は本当に自由になります」。 (ヨハネ 8:36)

- 
- ◇ 祭りの期間中の晩には、どんなことがなされましたか。それは、イエスが教えたこととどんな関係がありますか。
  - ◇ イエスは自分がどこから来たと言いましたか。その言葉からイエスについてどんなことが分かりますか。
  - ◇ ユダヤ人は何の奴隷でしたか。彼らをその奴隷状態から解放するのはどんな真理ですか。

# アブラハムと悪魔のどちらが父なのか

ヨハネ 8:37-59

イエスは幕屋の祭りでエルサレムにいる間、大切なことを教えます。そこにいたあるユダヤ人たちがイエスに、「私たちはアブラハムの子孫で、誰の奴隷になったこともありません」と言ったので、イエスはこう答えます。「あなたがアブラハムの子孫であることは知っています。しかし、あなた方は私を殺そうとしています。私の教えを受け入れられないからです。私は自分の父の元で見た話を話し、あなた方は自分たちの父から聞いた話を行っています」。(ヨハネ 8:33, 37, 38)

イエスの父は彼らの父とは違うということです。しかしユダヤ人たちはそれが分からず、「私たちの父はアブラハムです」と主張します。(ヨハネ 8:39。イザヤ 41:8) 彼らはアブラハムの子孫なので、神の友アブラハムと同じ信仰を持っていると考えているのです。

イエスは答えます。「アブラハムの子なら、アブラハムに倣って行動しているはずです」。本当の子なら父に倣うはずです。さらにイエスは、「あなた方は今、神から聞いた真理を告げた者、つまり私を殺そうとしています。アブラハムはそのようなことはしませんでした」と言い、「あなた方は自分たちの父に倣って行動しています」と指摘します。(ヨハネ 8:39-41)

ユダヤ人たちには誰のことを言っているのか分かりません。「私たちは姦淫によって生まれたものではありません。私たちにひとり父、神がいます」と言い張ります。でも、本当にそうでしょうか。イエスはこう言います。「もし神があなた方の父なら、あなた方は私を愛するはずです。私は神の元から来てここにいるからです。自分の考えで来たのではなく、その方に遣わされました」。それから、「私が言っている事をあなた方が理解できないのはなぜでしょうか。それは、私の教えを受け入れようとしないからです」と話します。(ヨハネ 8:41-43)

イエスは自分を退ける結果を示してきましたが、こゝでずばりと指摘します。「あなた方は、あなた方の父、悪魔から出ていて、自分たちの父が欲するところを行おうとしています」。そして彼らの父の正体を暴き、「その者はその始まりから人殺しで、真理から離れました」と言います。それから、こう述べます。「神の所から来た人は神の言う事を聞きます。あなた方は聞きません。神の所から来ていないからです」。(ヨハネ 8:44, 47)

ユダヤ人たちはかっとなり、「『あなたはサマリア人で、邪悪な天使に取りつかれている』と私たちが言うのも当然ではありませんか」と叫びます。彼らはイエスを「サマリア人」と呼び見下しました。イエスはそれを気に留めず、「邪悪な天使に取りつかれてはいません。私は父を尊んでいて、あなた方は私を辱めています」と答えます。イエスをどう見るかは重要な問題です。イエスは、「私の言葉を守る人は、決して死にません」という素晴らしい約束をしているからです。これは、イエスの弟子は死を経験しない、という意味ではなく、「第二の死」、つまり復活の希望のない永遠の滅びに至ることはないということです。(ヨハネ 8:48-51。啓示 21:8)

ユダヤ人はその言葉を文字通りに取り、「今、あなたが邪悪な天使に取りつかれていることがはっきり分かります。アブラハムも預言者たちも死んだのに、あなたは、『私の言葉を守る人は、決して死を迎えない』と言っています。あなたは私たちの父アブラハムより偉くはないでしょう。アブラハムは死に……ました。自分を誰だと思っているのですか」。(ヨハネ 8:52, 53)

イエスはメシアであることを示そうとしているものの、質問には直接答えず、こう言います。「私が自分を称賛するのなら、それはむなしいものです。私を称賛してくださいるのは私の父で、あなた方が自分たちの神だと言う方





です。しかし、あなた方はその方を知りません。私は知っています。私が、その方を知らないと言ったら、あなた方のようにうそつきになるでしょう。」(ヨハネ 8:54, 55)

ここでイエスは、「父アブラハムは、私が来る日をとても楽しみにしていて、その時を思い<sup>えが</sup>描いて喜びました」と述べます。アブラハムは神の約束を信じ、メシアが来ることを待ち望みました。それを聞いたユダヤ人たち

は、「50歳<sup>さい</sup>になってもいないのに、アブラハムを見たことがあるのですか」と問い<sup>う</sup>詰めます。そこでイエスは、「はっきり言いますが、アブラハムが存在する前から私はいます」と答えます。人間になる前に強力な天使として天にいたことを述べているのです。(ヨハネ 8:56-58)

ユダヤ人たちはその言葉に<sup>げき</sup>激怒し、イエスを石打ちにしようとしませんが、イエスは<sup>はな</sup>その場を無事に離れます。

- 
- ◇ イエスは自分の父と敵たちの父が<sup>ちが</sup>違うことを、どのように示しますか。
  - ◇ ユダヤ人がアブラハムを父と主張するのは<sup>まちが</sup>間違いです。なぜですか。
  - ◇ イエスの弟子たちが「決して死を迎えない」とは、どういう意味ですか。

# 生まれつき盲目の男性を癒やす

ヨハネ 9:1-18

イエスはまだエルサレムにいます。安息日に町の中を歩いていたイエスと弟子たちは、生まれつき盲目の物乞いに会います。弟子たちは、「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、誰が罪を犯したからですか。本人ですか、それとも親ですか」と尋ねます。(ヨハネ 9:2)

弟子たちは、その男性が前世に罪を犯したとは信じていませんが、母親のおなかの中で罪を犯したと思っているのかもしれません。イエスは答えます。「この人や親が罪を犯したからではありません。この件で、神の力が明らかにされます」。(ヨハネ 9:3) この男性が盲目になったのは、本人や親が何かの間違いをしたり罪を犯したりしたからではありません。人間は全て、アダムが罪を犯したために生まれつき不完全で、欠陥があります。盲目のような障害もその1つです。しかしこの人が盲目だったことがきっかけで、素晴らしいことが起こります。イエスが神の力を明らかにするのです。これまでにたくさんの病気を癒やした時と同じです。

イエスは神の力を表すことを遅らせてはいけないことを強調し、こう言います。「私たちは昼のうちに、私を遣わした方の意志を行わなければなりません。誰も働くことができない夜が来ようとしています。私は世にいる間、世の光です」。(ヨハネ 9:4, 5) イエスの死は迫っており、墓に入ればイエスは何もできなくなります。その時まで、イエスは世に光を輝かせ続けます。

では、どのようにこの人を癒やすのでしょうか。イエスは地面に唾を吐いて泥を作り、その男性の両目に塗って、「シロアムの池に行って洗いなさい」と言います。(ヨハネ 9:7) 男性がその通りにすると、何と見えるようになります。生まれて初めて目が見えるようになったのです。その喜びを想像できますか。

近所の人たちと、この男性の障害を知っていた他の

人たちは驚き、「これは、座って物乞いをしていた男ではないか」と言います。それに対して、「その人だ」と言う人もいれば、起きたことが信じられず、「違う、でも似ている」と言う人もいます。すると本人は、「私がその人です」と言います。(ヨハネ 9:8, 9)

それで人々は、「では、どうして目が見えるようになったのか」と尋ねます。男性はこう答えます。「イエスという人が泥を作って私の両目に塗り、『シロアムに行って洗いなさい』と言いました。それで、行って洗ったら、見えるようになりました」。彼らが「その人はどこにいるのか」と聞くと、男性は、「知りません」と言います。(ヨハネ 9:10-12)

その人はパリサイ派の人たちの所に連れていかれます。どのようにして見えるようになったのか、彼らも知りたいのです。それで男性はこう説明します。「その人が





私の両目<sup>どろ</sup>に泥を付け、私は洗いました。今は見えます」。パリサイ派の人たちも喜んでいいはずですが、<sup>かれ</sup>彼らのうちの何人かはイエスを非難し、「この人は神の所から来たのではない。安息日を守っていない」と言います。一方、「罪人だったら、どうしてこんなしを行えるだろうか」と言う人もいます。(ヨハネ 9:15, 16) <sup>かれ</sup>彼らの意見は分かれてしまいました。

<sup>かれ</sup>彼らはその人に<sup>たず</sup>尋ねることにし、「あなたの目を開けた人だが、何者だと思うか」と聞きます。男性は、「あの人は預言者です」と断言します。(ヨハネ 9:17)

パリサイ派の人たちは信じようとしません。<sup>みな</sup>皆をだますためイエスとその男性は何かをたくらんでいる、と思ったのかもしれません。それで、この男性が本当に目が見えなかったかどうか<sup>たず</sup>親に尋ねることにします。

- ◇ <sup>ものご</sup>物乞いの男性が<sup>もうもく</sup>盲目だったのはなぜですか。
- ◇ <sup>もうもく</sup>盲目だった男性を知る人たちは、その男性が癒<sup>い</sup>やされたことにどう反応しましたか。
- ◇ 男性が癒<sup>い</sup>やされたことについてパリサイ派の人たちの意見はどう分かれましたか。



## パリサイ派の人たちが盲目だった男性に詰め寄る

ヨハネ 9:19-41

パリサイ派の人たちは、盲目だった男性の視力をイエスが回復させたことを信じません。そこで男性の両親を呼び出します。両親は「会堂から追放」される可能性もあることを知っています。(ヨハネ 9:22) そのようにして他のユダヤ人たちとの交流を断たれるなら、社会的に孤立し、経済的にも生活が苦しくなってしまいます。

パリサイ派の人たちは2つの質問をします。「これは、生まれつき目が見えなかった息子か。今は見えるのはどうしてか」。両親は、「これは息子で、生まれつき目が見えませんでした。でも、どうして今見えるのかは知りませんし、誰が目を開けたのかも知りません」と答えます。息子から話を聞いていたのかもしれませんが、言い方に気を遣い、「本人に聞いてください。もう大人です。自分で話すはずですよ」と言います。(ヨハネ 9:19-21)

それでパリサイ派の人たちは男性を呼び戻します。そして、自分たちはイエスに不利な証拠を持っていると脅し、「神の前で本当のことを言いなさい。私たちはその人が罪人であることを知っているのだ」と言います。男性は追及をかわそうとし、「その人が罪人かどうかは分かりません」と答え、こうも言います。「1つ分かるのは、私は目が見えなかったのが、今は見えるということです」。(ヨハネ 9:24, 25)

彼らは満足せず、「彼はあなたに何をしたのか。どのようにして目を開けたのか」と尋ねます。男性はきっぱりと、「すでに話しましたが、あなた方は聞きませんでした。なぜもう一度聞きたいのですか。あなた方もあの人の弟子になりたいわけではないでしょう」と答えます。彼らは怒りだします。「あなたはあの男の弟子だが、私たちはモーセの弟子だ。神がモーセに語ったということは知っている。だが、この男については、どこからの者が知らない」。(ヨハネ 9:26-29)

男性は驚き、「あの人がどこからの人か知らないので

すか。あの人は私の目を開けました」と言います。そして、神が誰の願いを喜んで聞くかを明快に話します。「神は、罪人たちの願いは聞きませんが、神を畏れてその意志を行う人の願いなら、聞きます。生まれつき盲目の人の目を開けたという話は今まで聞いたことがありません」。結論はこうです。「神の所から来た人でなければ、何もできないはずですよ」。(ヨハネ 9:30-33)

パリサイ派の人たちはこの説明に太刀打ちできません。「罪にまみれて生まれながら、私たちを教えるというのか」と言って男性を追い出します。(ヨハネ 9:34)

イエスはそのことを聞くと男性を捜し、こう尋ねます。「人の子に信仰を持っていますか」。男性は、「それはどなたですか。その方に信仰を持ちたいのですが」と答えます。するとイエスははっきりこう言います。「あなたはその人に会ったことがあります。しかも、その人は今あなたと話しています」。(ヨハネ 9:35-37)

男性は、「人の子に本当に信仰を持っています、主よ」と答え、信仰と敬意を示しひれ伏します。そこでイエスは深い言葉を述べます。「私がこの世に来たのは裁きのため、すなわち、見えない人が見えるようになり、見える人が見えないようになるためです」。(ヨハネ 9:38, 39)

その場にいたパリサイ派の人たちは目が見えないわけではありません。しかし、彼らは神について教えるという責任を果たしていたでしょうか。彼らは自分たちは正しいと言いたげに、「私たちも目が見えないというわけではないでしょうね」とイエスに尋ねます。イエスはこう答えます。「目が見えなかったなら、あなた方は罪を問われないでしょう。しかしあなた方は今、『見える』と言います。あなた方は罪を問われます」。(ヨハネ 9:40, 41) 彼らがイスラエルを教える立場にいないければ、メシアであるイエスを退けたとしてもまだ許せます。しかし彼らは律法に通じていたので、罪は重いのです。

- パリサイ派の人たちが盲目だった男性に詰め寄る
- 宗教指導者たちは「目が見えない」

71



- ◇ 盲目だった男性の両親がパリサイ派の人たちから呼び出された時に不安を感じたのはなぜですか。両親はどんな返事をしましたか。
- ◇ パリサイ派の人たちはどんな明快な説明を聞いて怒りだしますか。
- ◇ パリサイ派の人たちがイエスに反対したことで許されないのはなぜですか。



## 70人を伝道に送り出す

ルカ 10:1-24

今は西暦<sup>せいれき</sup>32年の終わりごろです。イエスがバプテスマを受けてから約3年がたちます。少し前にイエスは弟子たちとエルサレムでの幕屋の祭りに出席しました。今もまだエルサレムの近くにいるようです。(ルカ 10:38。ヨハネ 11:1) イエスは残されている半年の間、ユダヤとヨルダン川<sup>わた</sup>を渡ったペレア地域で伝道を行います。それらの地域でも伝道する必要があります。

以前にイエスは、西暦<sup>せいれき</sup>30年の過ぎ越し<sup>すすこ</sup>が終わった後、ユダヤで数カ月間伝道し、それからサマリアを通して移動しました。そして西暦<sup>せいれき</sup>31年の過ぎ越し<sup>すすこ</sup>のころ、エルサレムのユダヤ人たちはイエスを殺そうとします。その後の1年半、イエスは主に北のガリラヤで教え、大勢の人が弟子になります。イエスはガリラヤで使徒たちを訓練し、『天の王国は近づいた』と伝道しなさい」という指示<sup>あたい</sup>を与えて彼ら<sup>かれ</sup>を送り出しました。(マタイ 10:5-7) 今度は、ユダヤでの伝道活動を組織します。

この活動のために、イエスは70人の弟子を選び、2人ずつ送り出します。ですから、「収穫<sup>しゅうかく</sup>は多い」ものの「働き手は少ない」区域で35チームが伝道します。(ルカ 10:2) イエスが行こうとしている場所に弟子たちが先に出掛けていくのです。彼らは病氣<sup>い</sup>の人を癒やし、イエスが伝えているのと同じ知らせ<sup>ひとびと</sup>を人々に伝えます。

会堂で教えることが弟子たちの目標ではありません。イエスは人々の家<sup>ひとびと</sup>を訪問するようにと指示し、こう言います。「どこでも家に入ったなら、まず、『この家に平和がありますように』と言いなさい。平和を望む人がそこにいるなら、あなたたちが願う平和はその人の元にとどまります」。どんな知らせを伝えますか。イエスはこう言います。「『神の王国はあなた方の近くに来了』と告げなさい」。(ルカ 10:5-9)

70人への指示は、約1年前にイエスが12使徒を送り

出した時に与<sup>あた</sup>えたものと同じです。イエスは弟子たちに、全ての人から歓迎<sup>かんげい</sup>されるわけではないと話します。しかし、彼ら<sup>かれ</sup>の努力によって心の広い人たちは準備ができます。この後すぐイエスがやって来た時に、それらの人たちの多くがぜひイエスの話を聞きたいと思うでしょう。

やがて、35組の弟子たちがイエスの所に帰ってきて、喜びながらこう報告します。「主よ、あなたの名を使うと、邪悪<sup>じゃあく</sup>な天使も服するのです」。イエスはこの素晴らしい報告に感動し、こう言います。「サタンがすでに稲妻<sup>いなづま</sup>のように天から落ちたのが見えます。私はあなたたちに、蛇<sup>へび</sup>やサソリ<sup>ふ</sup>を踏みつけ……る權威<sup>けんい</sup>を与えました」。(ルカ 10:17-19)

ここでイエスは、蛇<sup>へび</sup>やサソリ<sup>ふ</sup>を踏みつけるという表現





を用いて、弟子たちが悪に打ち勝つことを保証しています。将来サタンが天から落とされることも確信できます。またイエスは、長期的に見て本当に重要なのは何かを弟子たちが理解できるよう、こう言います。「<sup>じゃあく</sup>邪悪な天使が服していることを喜ぶのではなく、あなたたちの名前が天に記されたことを喜びなさい」。(ルカ 10:20)

イエスは深い喜びを感じ、<sup>けんそん</sup>謙遜な弟子たちを通して

強力なことを成し<sup>と</sup>遂げている父を賛美します。それから弟子たちにこう言います。「あなたたちが見ているものを見る人は幸せです。あなたたちに言いますが、多くの預言者や王は、あなたたちが見ているものを見たいと願いながら見ず、あなたたちが聞いている事を聞きたいと願いながら聞かなかったのです」。(ルカ 10:23, 24)

- 
- ◇ イエスは残されている半年の間、どこで伝道を行いましたか。それはなぜですか。
  - ◇ 70人の弟子たちはどのように伝道することになっていましたか。
  - ◇ 70人の弟子たちは多くのことを成し<sup>と</sup>遂げましたが、イエスはさらに重要なことがあると言いました。それは何ですか。



# 本当の隣人となったサマリア人

ルカ 10:25-37

イエスがエルサレムの近くにいる期間中、たくさんのユダヤ人が会いにやって来ます。ぜひ何か学びたいと思っている人だけでなく、イエスを試そうと思っている人もいます。律法に通じたある男性もその1人で、イエスにこう質問します。「先生、永遠の命を受けるには何をする必要がありますか?」(ルカ 10:25)

イエスはその人の質問には裏があることを見抜きます。ユダヤ人が怒るようなことをイエスに答えさせようとしているのです。さらにイエスは、相手がすでに正しい答えを知っていることに気がきます。それで、**相手の考え**が明らかになる仕方で巧みに返事をします。

イエスは、「律法には何と書いてありますか。どう読みますか」と尋ねます。その男性は律法をよく学んでいるので、申命記 6章5節とレビ記 19章18節を引用してこう答えます。「『あなたは、心を<sup>つく</sup>尽くし、力を<sup>つく</sup>尽くし、知力を<sup>つく</sup>尽くし、自分の全てを<sup>つく</sup>尽くして、あなたの神エホバを愛さなければならない』、そして、『隣人を自分自身のように愛さなければならない』」。(ルカ 10:26, 27) しかし、これはその男性が願っていた答えでしたか。

イエスは、「その通りです。それを続けなさい。そうすれば命を得ます」と言います。会話はまだ続きます。男性はただ正解が欲しいのではありません。「自分の正しさを示」したい、つまり自分の考えや他の人への接し方は正しいという確証を得たいと思っているのです。それで、「私の隣人とはいったい誰でしょうか」と質問します。(ルカ 10:28, 29) 簡単な質問のようで実は深い意味があります。どういうことでしょうか。

ユダヤ人は、「隣人」という言葉は自分たちの伝統を守る人にしか当てはまらなないと考えていて、レビ記 19章18節をその根拠にしていたようです。別の人種と交友を持つのは「許されない」とまで主張する人もいま

す。(使徒 10:28) ですから、この男性は、仲間のユダヤ人に親切に接していれば自分は正しいと考えています。イエスの弟子たちの中にもそう考える人がいたかもしれません。しかし、この男性も弟子たちも、別の人種の人を不親切な仕方であつかっていた可能性があります。そういう人は「隣人」ではないというわけです。

イエスは、ユダヤ人を怒らせることなく、どのように見方を正すでしょうか。次の例え話を語ります。「ある男性がエルサレムからエリコに下っていく途中で、強盗に襲われました。強盗は服を剥ぎ、殴り、半殺しにして去っていきました。たまたま、ある祭司がその道路を下っていきましたが、男性を見ると、反対側に寄って通り過ぎました。同じように、あるレビ族の人も、そこに来て彼を見ると、反対側に寄って通り過ぎました。ところが、その道路を通っていたあるサマリア人はそこに来て彼を見ると、かわいそうに思いました」。(ルカ 10:30-33)

イエスに質問した男性は、大勢の祭司と神殿で祭司を補佐するレビ族の人たちがエリコに住んでいることを知っていたでしょう。神殿からエリコに戻るには、23<sup>キロ</sup>ほどの道を下っていかなければなりません。そのルートは強盗が隠れている場合があり、危険でした。例え話の祭司やレビ族の人は、悲惨な目に遭った仲間のユダヤ人を見掛けた時に助けるべきなのに、そうしようとしません。その人を助けたのは、ユダヤ人から軽蔑されていたサマリア人だったのです。(ヨハネ 8:48)

サマリア人はけがをしたユダヤ人をどのように助けたでしょうか。イエスはこう続けます。「それで近寄り、傷に油とぶどう酒を注いで包帯をしてあげました。それから彼を自分の家畜に寄せ、宿屋に連れて行って世話をしました。次の日、2デナリを取り出し、宿屋の主人に渡して言いました。『この人の世話をしてください。もっ

と費用がかかったら、戻ってきた時に払いますから』。  
(ルカ 10:34, 35)

この後、優れた教師であるイエスは男性に次のように尋ね、考えさせます。「この3人のうち誰が、強盗に襲われた人にとって隣人になったと思いますか」。この人は「サマリア人です」と言いたくなかったようで、「その人に対して憐れみ深く行動した人です」と答えます。イエスはこの話の教訓をはっきりさせ、こう勧めます。「行っ

て、あなたも同じようにしなさい」。(ルカ 10:36, 37)

何と優れた教え方でしょう。イエスが、別の人種の人でも隣人であると話すだけだったなら、男性や他のユダヤ人たちは納得しなかったでしょう。しかし、聞いている人がすぐにイメージできるシンプルな例え話を用いて、「私の隣人とはいったい誰でしょうか」という質問の答えを見事に出したのです。本当の隣人とは、聖書が命じている愛や親切を行い以示す人なのです。



- ◇ ある男性がイエスに、永遠の命を受けるにはどうすればよいか質問したのはなぜですか。
- ◇ ユダヤ人は誰を隣人だと考えていましたか。なぜですか。
- ◇ 本当の隣人とは誰かについての正しい見方を、イエスはどのようにして教えましたか。



## もてなしと祈りについての教え

ルカ 10:38-11:13

エルサレムから3<sup>き</sup>ほど離れたオリブ山<sup>ひがしやめん</sup>の東斜面に、ベタニヤという村があります。(ヨハネ 11:18) イエスはその村に住む友人、マルタとマリアという2人の姉妹またその兄弟ラザロを訪ね、温かく歓迎<sup>かんげい</sup>されます。

メシアを客<sup>むか</sup>として迎えるのは大変名誉なことです。マルタはイエスをもてなすため、手の込んだ<sup>ていこんだ</sup>食事を準備しています。一方、マリアはイエスの足元に座り、話を聞いています。やがて、マルタがイエスにこう言います。「主よ、マリアが私だけに用事をさせていることを何とも思わないのですか。手伝うよう言ってください」。(ルカ 10:40)

イエスはマリアを叱<sup>しか</sup>らず、食事の準備に注意を奪<sup>うば</sup>われているマルタにこう言います。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに気を遣<sup>つか</sup>ってかき乱されています。でも、必要なのはわずかなもの、というより1つだけです。マリアは良いものを選びました。それが彼女<sup>かのじょ</sup>から取り上げられることはありません」。(ルカ 10:41, 42) イエスは、たくさんの料理を出すために多くの時間をかける必要はないと教えていました。簡単な食事で十分でした。

マルタの動機は良いものです。イエスをもてなしたかったのです。でも、食事のことに気を取られ過ぎて、神の子から貴重な教えを学ぶチャンスの<sup>のが</sup>逃しています。イエスはマリアが賢い<sup>かしこ</sup>選択<sup>せんたく</sup>をしたと強調しました。その選択<sup>せんたく</sup>はマリアの人生にとって大きな祝福となります。私たちもマリアから大切な教訓を学べます。

別の時にもイエスは、弟子たちに重要なことを教えます。ある弟子が、「主よ、私たちに祈り方を教えてください。ヨハネも弟子たちに教えました」と頼<sup>たの</sup>んだ<sup>かた</sup>時のことです。(ルカ 11:1) イエスは約1年半前に山上の垂訓で祈り方を教えました。(マタイ 6:9-13) この弟子はその場にいなかったのかもしれませんが。それでイエスは同じ内容をもう一度教えます。そして例えを使い、粘<sup>ねば</sup>

り強く祈らなければならないということを強調します。

「あなたたちの1人が真夜中に友人の所に行って、こう言ったとしましょう。『友よ、パンを3つ貸してください。友人が旅の途中<sup>とちゅう</sup>で今うちに来たのですが、出す物が何もありません』。しかし、その人は中からこう答えます。『無理なことを言わないでください。もう戸には鍵<sup>かぎ</sup>を掛け、幼い子供たちが私と一緒に寝<sup>いっしょ</sup>ています。起きて行って何かをあげることはできません』。あなたたちに言いますが、その人は、友人だという理由で起きて来て何かを<sup>あた</sup>与えること<sup>しつよう</sup>はないとしても、執拗<sup>しつよう</sup>に頼<sup>たの</sup>むなら、必ず起きて来て何でも必要とする物<sup>あた</sup>を与えてくれます」。(ルカ 11:5-8)

エホバは私たちの願いになかなか応じない方ではありません。友人が、気が進まないとしても粘<sup>ねば</sup>り強く頼<sup>たの</sup>まれた時に願いを聞くのであれば、愛ある天の父はなおのこと忠実な人の誠実な願いを聞いて行動してくださるのです。イエスはさらにこう言います。「求め続けなさい。そうすれば与えられます。探し続けなさい。そうすれば見つかります。たたき続けなさい。そうすれば開かれます。求めている人は受け、探している人は見つけ、たたいている人には開かれるのです」。(ルカ 11:9, 10)

イエスは人間の父親と神を比較<sup>ひかく</sup>することで要点を強調します。「あなたたちのうちどの父親が、自分<sup>おの</sup>の子から魚を求められて、魚ではなく蛇<sup>へび</sup>を渡すでしょうか。また、卵を求められて、サソリ<sup>わた</sup>を渡すでしょうか。それで、あなたたちが邪悪<sup>じゃあく</sup>な人間でありながら、子供に良い贈り物<sup>もの</sup>を<sup>あた</sup>与えることを心得ているのであれば、まして天の父は、ご自分に求めている人に聖霊<sup>せいれい</sup>を<sup>あた</sup>与えてくださるのです」。(ルカ 11:11-13) ですから私たちは、神が願いを喜んで聞き、私たちのために行動してくださることを確信できます。



- ◇ マルタとマリアの注意はそれぞれ何に向けられていましたか。そのことから何を学べますか。
- ◇ イエスが祈<sup>いの</sup>り方<sup>かた</sup>についてもう一度教えたのはなぜですか。
- ◇ イエスは粘<sup>ねば</sup>り強<sup>い</sup>く祈<sup>いの</sup>ることの大切さをどのように教えましたか。

## 本当に幸福なのはどんな人か

ルカ 11:14-36

イエスが伝道期間中に繰り返し教えたのは、祈りのこと  
だけではありません。ガリラヤでイエスの奇跡を見た  
人々は、そうした奇跡は邪悪な天使の支配者の力によ  
るのだと批判しました。今回、ユダヤの人々も同じこと  
を言います。

イエスは、邪悪な天使のせいで口が利けなかった男  
性を癒やします。群衆はとても驚きますが、イエスに敵  
対する人たちはガリラヤの人々と同じ批判をし、こう言  
います。「彼は邪悪な天使の支配者ベエルゼブブの力  
で、邪悪な天使を追い出しているのだ」。(ルカ 11:15)  
また、イエスが何者であるかを突き止めたくて、天から  
のしるしをもっと見せてくれるよう頼む人々もいます。

イエスは彼らが自分を試そうとしていることに気付  
き、ガリラヤの人々にしたのと同じ返事をします。まず、  
内部で分裂している王国はどれも倒れてしまうと話し  
てから、「サタンも自分自身に敵対して分裂しているな  
ら、その王国はどうして長く続くでしょうか」と尋ねます。  
それから彼らに対しはっきりこう言います。「私が邪悪  
な天使を追い出すのが神の力[または指]によるのであ  
れば、神の王国はもうあなた方の所に来ています」。  
(ルカ 11:18-20)

イエスがそう言った時、人々はイスラエルの歴史で生  
じたある出来事を思い出したことでしょう。ファラオの  
宮廷にいた人たちはモーセが行った奇跡を見た時、  
「これは神の力[または指]です!」と叫びました。また、  
石板2枚に十戒を書き記したのも「神の指」でした。  
(出エジプト記 8:19; 31:18) その同じ「神の指」つま  
り聖霊によって、イエスは邪悪な天使を追い出したり病  
気を癒やしたりしています。イエスはそれを神から指名  
された王として行いました。ですから、神の王国はイエ  
スの反対者たちの所に来ていると言えるのです。

イエスが邪悪な天使を追い出せることは、イエスが

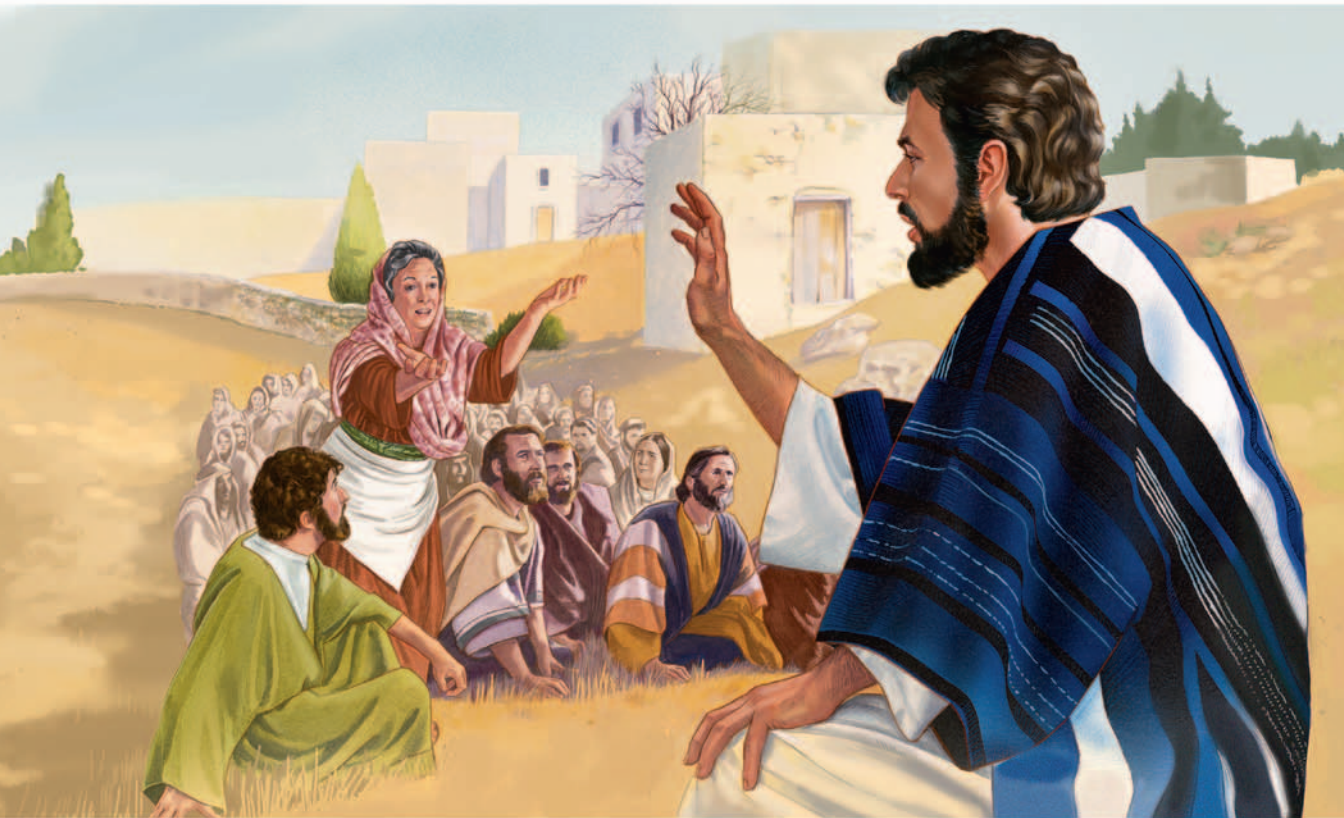
サタンを支配できる証拠です。それは、十分に武装して  
邸宅を守っている人をもっと強い人が打ち負かすのと  
同じです。ここでイエスは、邪悪な天使が出ていった人  
の例えをもう一度話します。その人は自分を良いもの  
で満たさなかったので、最初の邪悪な天使が7人の天  
使を連れて戻ってきてしまい、最終的な状態は最初よ  
り悪くなるのです。(マタイ 12:22, 25-29, 43-45) これ  
はイスラエル国民の状態にぴったり当てはまります。

ここで、話を聞いていた1人の女性が、「あなたを産ん  
で乳を飲ませた女性は幸福です!」と大声で言います。  
ユダヤ人の女性たちは預言者の母親、特にメシアの母  
親になりたいと願っていました。それでこの女性は、こ  
んなに素晴らしい教師の母親になったマリアは幸せだ、  
と思ったのでしょう。しかしイエスは、本当に幸福なのは  
どんな人かを教え、「いいえ、神の言葉を聞いて守っ  
ている人たちこそ幸福です!」と言います。(ルカ 11:  
27, 28) イエスは、マリアに名誉が与えられるべきだとい  
うことは絶対に言いませんでした。むしろ、男女を問  
わず本当の幸福は、血縁関係や達成した事柄ではなく、  
神に忠実に仕えることから味わえると教えたのです。

イエスはガリラヤで行ったように、しるしを求めた人  
たちを非難します。そして、「ヨナのしるし」以外のしる  
しは与えられないと言います。ヨナは魚の中に3日間い  
たこと、また大胆に伝道したことでしるしとなり、ニネベ  
の人々は悔い改めました。イエスはこう言います。「し  
かし見なさい、ヨナを上回る者がここにいます」。(ルカ  
11:29-32) さらにイエスは、シェバの女王が知恵を聞  
くためにやって来たソロモンを上回る者でもあります。

イエスは話を続け、「人はランプをともした後、それを  
人目に付かない所や籠の下ではなく、台の上に置」く、  
と言います。(ルカ 11:33) イエスは、これらの人々の  
前で教えたり奇跡を行ったりするのはランプを人目に





付かない場所に置くようなものだ、と言っていたのかも  
しれません。彼らの目の焦点は合っていないので、イエ  
スの奇跡の目的を理解できないのです。

イエスは邪悪な天使を追い出し、口が利けなくなっ  
ていた男性が話せるようにしました。それを見た人たちは  
神を賛美し、エホバが行っていることを他の人に話す

よう動かされるはずです。しかし、イエスを批判した人  
たちはそのような反応をしません。そのためイエスは彼  
らにこう警告します。「それで、あなたの内の光が闇に  
ならないように用心していなさい。あなたの体は、全体  
が明るく少しも暗い所がないなら、ランプが照らすとき  
のように全く明るいでしょう」。(ルカ 11:35, 36)

- 
- ◇ ユダヤのある人々はイエスが男性を癒やした時にどんな反応をしましたか。
  - ◇ 「神の指」とは何のことですか。神の王国はどのような意味でイエスの話を聞いていた人たちの所に来ていましたか。
  - ◇ 本当に幸福なのはどんな人ですか。

## パリサイ派の人と食事をする

ルカ 11:37-54

イエスはユダヤにいる時、あるパリサイ派の人から食事と呼ばれます。それは夕食ではなく昼食だったようです。(ルカ 11:37, 38) パリサイ派の人たちには、食事の前に手を肘<sup>ひじ</sup>まで洗うしきたりがあります。でもイエスはそうしません。(マタイ 15:1, 2) 肘<sup>ひじ</sup>まで洗っても律法を破ることはありませんが、神はそこまですることを求めています。

そのパリサイ派の人はイエスが伝統に従わないのを見て驚<sup>おどろ</sup>きます。イエスはそれに気付<sup>ひじ</sup>き、こう言います。「さて、パリサイ派の人たち、あなた方は杯<sup>さかずき</sup>と皿の外側は清めますが、あなた方の内側は貪欲<sup>どんよく</sup>と邪悪<sup>じゃあく</sup>に満ちています。無分別な人たち! 外側を作った方は内側も作ったのではありませんか」。(ルカ 11:39, 40)

問題となっているのは、食事の前に手を洗うことではなく、宗教的な偽善<sup>ぎぜん</sup>です。しきたりとして手を洗うパリサイ派などの人たちは、自分の心にある邪悪<sup>じゃあく</sup>さを洗い落とせていないのです。それでイエスは彼らにこう言います。「憐れみの施<sup>あわ</sup>しを<sup>ほどこ</sup>する時には、内面からのものを与えなさい。そうすれば、あなた方は何もかも清くなるのです」。(ルカ 11:41) イエスの言う通りです。誰か<sup>だれ</sup>に何かを<sup>あた</sup>える時には、心からの愛に動かされてそうすべきです。正しいことを行うふりをして、人に良い印象<sup>あつ</sup>を与えようとすべきではありません。

パリサイ派の人たちは与えていないわけではありません。イエスはこう言います。「あなた方は……ミントやヘンルーダなど、あらゆるハーブの10分の1を納めながら、神の公正と神への愛を無視して[ま]す。10分の1を納める義務はありますが、後者を無視すべきではありません」。(ルカ 11:42) 律法では、作物の10分の1を納めることが求められています。(申命記 14:22) 納めるものには、ミントやヘンルーダなど、食物<sup>かお</sup>の香り付け<sup>づ</sup>

に使われるハーブが<sup>ふく</sup>含まれていました。彼らはそうしたハーブの10分の1をきちようめに納めていましたが、律法が要求しているもっと大切なことを行っていない。それは公正<sup>つうし</sup>や慎みなどを示すことです。(ミカ 6:8)

イエスはさらにこう言います。「パリサイ派の人たち、あなた方は悲惨<sup>ひさん</sup>です! 会堂の最も良い座席や、広場であいさつされることを愛するからです。あなた方は悲惨<sup>ひさん</sup>です! 目に付きにくい墓<sup>ひとびと</sup>のようだからです。人々はその上を歩いても気付<sup>ひ</sup>きません」。(ルカ 11:43, 44) 人はそうした目立たない墓<sup>ひとびと</sup>につまづき、儀式上汚れた人になってしまう可能性があります。イエスはここで、パリサイ派の人たちの汚れ<sup>けが</sup>がはっきり見えないということを強調していたのです。(マタイ 23:27)

すると、律法に通じたある人が抗議<sup>こうぎ</sup>し、「先生、その発言は私たちをも侮辱<sup>ぶじやく</sup>しています」と言います。しかし、彼らは自分たちが人々を助け<sup>ひとびと</sup>ていないことに気付くべきです。イエスはこう言います。「律法に通じたあなた方も悲惨<sup>ひさん</sup>です! 担<sup>ふ</sup>うのが大変な荷を人に負わせますが、自分ではその荷に指一本触れないからです。あなた方は悲惨<sup>ひさん</sup>です! 預言者の墓を建てますが、預言者を殺したのはあなた方の父祖だからです」。(ルカ 11:45-47)

イエスが話した荷とは、口頭伝承とパリサイ派による律法<sup>かいしやく</sup>の解釈<sup>ひとびと</sup>のことで、重荷となる規則を守<sup>か</sup>ることを求<sup>か</sup>めていたのです。彼らの父祖たちはアベル以降の預言者たちを殺しました。彼らは墓<sup>か</sup>を建てて預言者を敬<sup>か</sup>っているように見せかけていますが、実際の行動や態度は父祖たちと変わりません。しかも、一番偉大<sup>いだい</sup>な預言者を殺そうとしています。神は彼らの責任<sup>か</sup>を問うことになる<sup>せ</sup>とい<sup>い</sup>は<sup>れ</sup>ます。そして、この時から38年後の西暦70年に、まさにその通りの出来事が生じました。

さらにイエスは、「律法に通じたあなた方は悲惨で  
す！ 知識の鍵を取り去ったからです。自分自身が入ら  
ず、入ろうとする人を妨げます」と言います。（ルカ 11：  
52）彼らは、神の言葉を理解するための扉を人々に開  
くべきですが、そうせずに、その扉を閉じているのです。

パリサイ派の人たちと律法学者たちはどう反応した  
でしょうか。イエスがその場を去ろうとすると、彼らは激  
しく詰め寄り、さらに質問をぶつけます。何かを学ぼう  
としていたわけではありません。逮捕する根拠になること  
をイエスに言わせようとしていたのです。



- ◇ イエスがパリサイ派の人たちと律法学者を非難したのはなぜですか。
- ◇ 人々はどんな大変な荷を負わされていましたか。
- ◇ イエスに反対し、イエスを殺そうとしていた人たちはどうなりますか。



## 財産に対する見方を教える

ルカ 12:1-34

イエスがパリサイ派の人の家で食事をしていると、たくさんの人が家の外に集まってきます。ガリラヤにいた時と同じです。(マルコ 1:33; 2:2; 3:9) ここユダヤでも、大勢の人たちがイエスに会って話を聞きたいと思っています。パリサイ派の人たちの態度とは大違いです。

イエスの最初の言葉は弟子たちにとって重要です。こう言ったのです。「パリサイ派のパン種つまり偽善に気を付けなさい」。イエスは同じ警告を以前にも与えました。しかし、食事の際の出来事を考えると、ここでもう一度警告が必要です。(ルカ 12:1。マルコ 8:15) パリサイ派の人たちは信心深いふりをして邪悪さを隠そうとすることがあります。それで、彼らが危険な存在であることをはっきり教えなければなりません。イエスはこう話します。「注意深く秘められているもので明らかにされないものはなく、秘密にされているもので知られないでいるものはありません」。(ルカ 12:2)

イエスの所に来た人たちの多くは恐らくユダヤの人々で、ガリラヤでイエスが教えた際にその場にいませんでした。それでイエスは、その時に教えた大切な点をもう一度話し、こう強く勧めます。「体は殺せてもその後は何もできない人たちを恐れてはなりません」。(ルカ 12:4) イエスは、弟子たちは神が養ってくださることを信じなければならない、と強調します。また、人の子とは誰のことかを認め、神が助けてくださることも確信しているべきです。(マタイ 10:19, 20, 26-33; 12:31, 32)

すると突然、ある男性が自分の心配事を持ち出して、イエスにこう頼みます。「先生、相続財産を私と分けるよう私の兄弟に言ってください」。(ルカ 12:13) 律法によると、長男は2倍の相続財産を与えられることになっているので、議論する必要はありません。(申命記 21:17) それなのに、この人は律法が定めている分よりも多く欲

しいと考えているようです。イエスはどちらの肩を持つこともせず、「誰が私をあなたたち2人の裁判官や仲裁人に任命したのですか」と答えます。(ルカ 12:14)

そして全ての人に、「じっと見張っていて、あらゆる貪欲に警戒しなさい。満ちあふれるほど持っていても、命は所有物からは生じないからです」と言います。(ルカ 12:15) どれだけ裕福でも、いつかは死に、全てを後に残すことになります。イエスはその点を印象的な例えで強調し、神から良い評価を得ることの大切さも教えます。

「ある裕福な人の土地で作物が豊かに実りました。そこでその人は心の中で考え始めました。『どうしようか。作物を集める場所がない』。その人は言いました。『こうしよう。倉を取り壊して、もっと大きいのを建て、そこに穀物などの物を全て集めるのだ。そして自分に言おう。『おまえはたくさんの良い物を何年分も蓄えることができた。楽にして、食べて、飲んで、楽しめ』。しかし神は言いました。『無分別な者よ、今夜、あなたの命は取り上げられる。そうしたら、蓄えた物は誰のものになるのか』。自分のために宝を蓄えても、神から見ても裕福でない人はこうなるのです」。(ルカ 12:16-21)

弟子たちもこの話を聞いていた人たちも、もっと豊かな暮らしをするという誘惑にはまるかもしれません。毎日の心配事によって、エホバに仕えることから気をそられる可能性もあります。それでイエスは、約1年半前に山上の垂訓で語った大切な教訓をもう一度教えます。

「何を食べるのだろうかと自分の命のことで、また何を着るのだろうかと自分の体のことで、思い煩うのをやめなさい。……ワタリガラスのことを考えなさい。種をまいたり刈り取ったりしませんし、納屋も倉も持っていません。それでも神はその鳥を養っています。あなたたちは鳥よりずっと価値があるのではありませんか。……

ユリがどのように育つかを考えなさい。苦労して働いたり、糸を紡いだりはしません。しかし、栄華を極めたソロモンでさえ、このような花の1つほどにも装ってはいませんでした。……それで、何を食べるのか、何を飲むのかとばかり考えるのをやめ、心配して気をもむのをやめなさい。……天の父は、あなたがこうしたものを必要としていることを知っています。……神の王国を求めていきなさい。そうすれば、こうしたものはあなたがに与えられます」。 (ルカ 12:22-31。マタイ 6:25-33)

神の王国を求めるのはどんな人たちですか。イエスは、それが比較的少数の忠実な人であることを明らかにし、彼らを「小さな群れ」と呼びます。後に、その人数が14万4000人であることも明らかになります。彼らには何が保証されていますか。イエスは、「天の父は、あなたがたたちに王国を与えることをよしとしました」と言います。これらの人たちは、地上で宝を蓄えることに心を奪われません。そうした宝は盗まれてしまう危険があります。むしろ彼らの心は、「決して尽きることのない宝」に向けられています。その宝は、彼らが将来キリストと共に支配を行う天にあるのです。 (ルカ 12:32-34)



- ◇ イエスはある男性から相続財産のことで助けてほしいと頼まれた時、どのように答えましたか。
- ◇ イエスの例えは私たちにどんな大切な教訓を教えてください。
- ◇ イエスは自分と一緒に王国に入る人たちについて、どんなことを明らかにしましたか。

# 忠実な管理人は用意をしていなければならない

ルカ 12:35-59

イエスは天の王国に入るのは「小さな群れ」だけであると説明しました。(ルカ 12:32) この素晴らしい報いを決して軽く見るべきではありません。この報いを得る見込みを持つ人にとって、正しい態度がとても大切であることをイエスは強調します。

それでイエスは弟子たちに、自分が帰って来る時のために用意をしているよう、次のように忠告します。「身支度を整え、ランプをともしていなさい。主人が披露宴から帰って来て戸をたたく時にすぐ開けられるように待っている奴隷たちのようでありなさい。主人が来た時、見張っているところを見られるその奴隷たちは幸せです!」(ルカ 12:35-37)

弟子たちは、イエスがどんな態度を教えようとしているのかすぐに理解します。例えの使用人は用意をして主人が帰って来るのを待っています。イエスはこう説明します。「主人が第2夜警時[午後9時ごろから真夜中]に、あるいは第3夜警時[真夜中から午前3時ごろ]に来たとしても、用意ができているところを見られるなら、幸せです!」(ルカ 12:38)

この忠告には、勤勉な使用人となることや、よく働くことを勧める以上の重みがあります。なぜなら例えでは、どのように人の子イエスが来るかが示されているからです。イエスは弟子たちにこう話します。「あなたたちも用意をしていなさい。思ってもいない時刻に人の子は来るからです」。(ルカ 12:40) 将来のある時点で、イエスは帰って来ます。それで、自分の弟子たち、特に「小さな群れ」には用意をしてほしいと願っています。

ペテロはイエスの話の意味をはっきり理解したいと思い、「主よ、この例えは私たちにだけ話しているので

すか。それとも、全ての人にもですか」と尋ねます。イエスはペテロの質問に直接答える代わりに、別の例えを話します。「主人が、時に応じて従者たちに必要な食料を与えていくため、彼らの上に任命する忠実な管理人、思慮深い者はいったい誰でしょうか。その奴隷は、主人が来た時に、そうしているところを見られるなら、幸せです! 実を言うと、主人は自分の全ての持ち物を管理させるためにその奴隷を任命します」。(ルカ 12:41-44)

最初の例えに出てくる「主人」とは、人の子であるイエスのことです。そして「忠実な管理人」とは、王国を与えられる「小さな群れ」の一部の人たちのことです。(ルカ 12:32) イエスは、その人たちが「時に応じて従者たちに必要な食料を与えていく」と話しました。イエスはペテロや他の弟子たちに真理を教え養いました。それで彼らは、将来人の子が来る期間中にも同じようなことが起きると結論できました。その期間中に、管理人が主人の「従者たち」つまりイエスの弟子たちに真理を教える体制が整うのです。

さらにイエスはこう言います。「しかし、もしもその奴隷が、『主人は来るのが遅い』と心の中で言い、使用人の男女をたたいて、食べたり飲んだり酔ったりし始めるなら、その奴隷の主人は、奴隷が予期していない日、思ってもいない時刻に来て、最も厳しく彼を罰し、不忠実な者たちと同じ目に遭わせます」。(ルカ 12:45, 46) ここでもイエスは、弟子たちが油断することなく、自分たちの態度に注意を払っていなければならないことを強調していました。なぜなら、気を緩めてしまい、仲間の兄弟姉妹に反対するようにまでなってしまう危険があるからです。

次にイエスは、自分は「地上に火をおこすために」来



たと話します。イエスは確かに地上に火をおこしました。イエスの教えは大きな議論を引き起こし、偽りの教えや伝統を焼き尽くすことになります。またその教えは、本来は固い絆で結ばれている人たちをも分裂させます。それで、「父が息子と、息子が父と対立し、母が娘と、娘が母と対立し、しゅうとめが嫁と、嫁がしゅうとめと対立します」。(ルカ 12:49, 53)

イエスはここまでの話を主に弟子たちのために語りました。次にイエスは群衆に向けて話します。彼らの多

くは、イエスがメシアであることを示す証拠があるのに、その事実を受け入れてきませんでした。それでイエス是这样いいます。「皆さんは、西に雲が出るのを見ると、すぐに『嵐が来る』と言い、そうなります。また、南風が吹いているのが分かったら、『熱波が来る』と言い、そうなります。偽善者たち、地や空の様子の調べ方を知っているのに、なぜ、この特別な時の調べ方を知らないのですか」。(ルカ 12:54-56) 明らかに、人々はメシアを受け入れる用意ができていないのです。



- ◇ 「主人」とは誰のことですか。また、「忠実な管理人」とは誰のことですか。
- ◇ 将来、忠実な管理人が存在するようになると弟子たちが結論できたのはなぜですか。管理人はどんな役割を果たすことになっていますか。
- ◇ 「用意をしていなさい」というイエスの助言がとても大切なのはなぜですか。

# 信仰のないユダヤ人が滅びてしまうのはなぜか

ルカ 13:1-21

イエスは神との関係を見直すよう、さまざまな方法で人々を助ける努力をしてきました。あるパリサイ派の人の家の前で人々と話した後にも、その機会が訪れます。

その場にいた人たちが、ある悲惨な出来事のことを持ち出します。それは、「犠牲をささげていたガリラヤ人たちを[ローマ総督のポンテオ・]ピラトが殺した」事件のことです。(ルカ 13:1) 彼らは何が言いたいのでしょうか。

そのガリラヤ人とは、エルサレムへの送水路建設のために神殿の寄付箱のお金を使ったピラトに大勢のユダヤ人が抗議した際、騒ぎに巻き込まれて殺された人たちのことでしょう。ピラトは神殿の権威者たちの協力でお金を得たと思われます。人々は、ガリラヤ人たちが悪いことをしていたのでそういう目に遭ったのだと考えているようです。しかしイエスはそう考えません。

イエスは、「そのガリラヤ人たちはそうした苦しみに遭ったのだから他の全てのガリラヤ人よりひどい罪人だったのだ、と思いますか」と質問します。イエスは、決してそうではないと言います。しかし、この出来事をユダヤ人たちに関連付けて、「皆さんも、悔い改めないなら、皆、滅ぼされます」と警告を与えます。(ルカ 13:2, 3) 次にイエスは、恐らくピラトの送水路建設に関連して最近起きた惨事について、こう尋ねます。

「また、シロアムの塔が倒れて死んだあの18人はエルサレムの他の全ての住民より罪が重かった、と思いますか」。(ルカ 13:4) 群衆は、その人たちが個人的に悪いことをしていたから死んだと思っているようです。しかしこの件でも、イエスはそう考えません。人は皆、「思いも寄らないこと」を経験し、その犠牲になる場合があると知っているからです。(伝道の書 9:11) それでも、人々はこの出来事から大切な点を学ぶべきです。イエ

スは、「皆さんも、悔い改めないなら、皆、滅ぼされます」と教えます。(ルカ 13:5) イエスはなぜ今のタイミングでこの教訓を強調するのでしょうか。

その答えは、イエスの伝道期間と関係があります。イエスは例えてこう説明します。「ある人が、ブドウ園に1本のイチジクの木を持っていました。実があるかと見に行きましたが、見つかりませんでした。それでブドウの栽培人に言いました。『このイチジクの木に実があるかともう3年も見に来ていますが、一つも見つかりません。切り倒してしまいなさい! なぜ土地を無駄にしているのですか』。栽培人は答えました。『ご主人さま、あと1年そのままにしてください。周りを掘って肥やしをやり



ます。この先、実を結ぶようであればそれでいいですし、そうでなければ切り倒してください』。(ルカ 13:6-9)

イエスは3年以上にわたって、ユダヤ人が信仰を培えるよう助けてきました。その努力を考えると、弟子となった人たちの数はわずかでです。それでイエスは4年目に入って、ユダヤとペレアでますます熱心に伝道し教えます。それはまるで、ユダヤ人というイチジクの木の下を掘って肥料をやっているようなものです。結果はどうですか。ほんの少数の人しか良い反応を示しません。全体的に見てユダヤ国民は悔い改めず、滅びに向かっています。



多くの人の信仰のなさは、イエスが例えを話したすぐ後に再び明らかになります。イエスは安息日に会堂で教えています。そこには、邪悪な天使に取りつかれているせいで18年間も腰が折れ曲がった女性が来ています。憐れみの気持ちに動かされたイエスはその女性に、「あなたはもう病弱ではありません」と言います。(ルカ 13:12) イエスが両手を置くと、女性はすぐさま真っすぐに立ち、神をたたえ始めます。

ところが、会堂の主宰役員は怒り、「仕事をすべき日は6日あるのだから、それらの日に来て治してもらいな

さい。安息日は駄目だ」と言います。(ルカ 13:14) この人は、イエスの癒やす力を認めていないのではありません。安息日に癒やしてもらおうとやって来る人たちを非難しているのです。それでイエスはこう切り返します。「偽善者たち、あなた方はそれぞれ安息日に牛やロバを家畜小屋から解いて、水を飲ませに引いていきませんか。それなら、アブラハムの子孫でサタンが18年も縛っていたこの女性が安息日に解放されてもよいのではありませんか」。(ルカ 13:15, 16)

反対者たちは恥ずかしくなります。群衆はというと、イエスがした素晴らしい事柄を見て、とても喜びます。次にイエスは、王国についての2つの預言的な例えをここユダヤで再び話します。これは以前にガリラヤの海のほとりで舟に乗って話したものと同じです。(マタイ 13:31-33。ルカ 13:18-21)



- ◇ イエスは人々に警告を与えるため、どんな2つの悲惨な出来事について話しましたか。それはどんな警告でしたか。
- ◇ 実を結ばないイチジクの木の例えは、ユダヤ国民の状態にどのようにぴったり当てはまりますか。
- ◇ 会堂の主宰役員は何を非難しましたか。イエスはその人の偽善的な考え方をどのように明らかにしましたか。



## 立派な羊飼いと羊の囲い

ヨハネ 10:1-21

今もユダヤで教えているイエスは、人々がイメージしやすい羊と羊の囲いの話をします。話を聞いたユダヤ人たちは、ダビデが語った、「エホバは私の牧者。私は何も不足しない。導かれて青々とした牧草地に寝そべ[る]」という言葉の思い出したでしょう。(詩編 23:1, 2) ダビデは「詩編」の別の編でも国民全体に対し、こう呼び掛けています。「さあ、崇拜し、ひれ伏そう。私たちが造ったエホバの前でひざまずこう。この方は私たちの神。私たちは神の牧草地の民」。(詩編 95:6, 7) これらの聖句から分かる通り、律法下のイスラエル人はこれまでずっと羊の群れに例えられてきました。

“羊”であるイスラエル人はモーセの律法契約という“羊の囲い”の中で生まれました。律法は柵のようになり、律法契約の下にいない人々の汚れた慣行からイスラエル人を保護しました。しかし、彼らの中には神の羊の群れを優しく扱わない人たちもいました。それでイエスはこう言います。「はっきり言っておきます。羊の囲いに、戸口を通してではなくほかの所を乗り越えて入る人は、泥棒や強盗です。一方、羊飼いは戸口を通して入ります」。(ヨハネ 10:1, 2)

人々は、メシアつまりキリストを自称する人たちのことを思い浮かべたでしょう。そうした人たちは泥棒や強盗のようです。人々はそのようなペテン師にではなく、イエスが語る次のような「羊飼いに」付いていくべきです。

「戸口番は羊飼いに對して戸口を開け、羊は彼の声を聞きます。羊飼いは自分の羊の名前を呼んで連れ出します。自分の羊を皆外に出すと、その先頭を走ります。羊は後に付いていきます。羊飼いの声を知っているからです。よその人には決して付いていかず、むしろ逃げます。その人たちの声を知らないからです」。(ヨハネ 10:3-5)

バプテストのヨハネは戸口番のような役割を果たし、「羊」が付いていくべきなのはイエスであることを明らかにしました。また、ガリラヤでもここユダヤでも、ある人々はイエスの声を聞き分けました。では、イエスは彼らをどこに「連れ出」しますか。イエスに付いていくとどんな結果になりますか。例えを聞いていたある人たちはそうした点を疑問に思ったようです。「イエスが言っている事を理解できなかった」からです。(ヨハネ 10:6)

イエスはこう説明します。「はっきり言っておきますが、私は羊が通る戸口です。私のふりをして来た人は皆、泥棒や強盗です。しかし羊は彼らの言うことを聞きませんでした。私は戸口です。私を通して入るなら救われ、出入りして牧草地を見つけます」。(ヨハネ 10:7-9)

この時、イエスは新しいことを教えていました。人々はイエスが律法契約への戸口でないことを知っています。その契約は何世紀も存在してきたからです。イエスは、自分が「連れ出」す羊は別の囲いに入ることにすると話していたのです。では、その羊たちはどうなりますか。

イエスは自分の役割をさらに説明します。「私は、羊が命を得て生き続けるために来ました。私は立派な羊飼いです。立派な羊飼いは羊のために命をなげうちます」。(ヨハネ 10:10, 11) 「羊飼いに」であるイエスは少し前に弟子たちに、「恐れることはありません、小さな群れよ。天の父は、あなたたちに王国を与えることをよしとしました」と言って励ましていました。(ルカ 12:32) ですから、「小さな群れ」を構成する人たちとは、イエスが新しい囲いに連れていく人たちのことです。そして、彼らは「命を得て生き続ける」ことになります。その群れの一員となるのは何という祝福なのでしょう。

イエスの話には続きがあります。「私にはほかの羊がいますが、この囲いのものではありません。私はその羊たちも連れてこなければならず、それらも私の声を聞き



ます。こうして、1つの群れ、1人の羊飼いとなります」。(ヨハネ 10:16)「ほかの羊」は「この囲いのものではありません」。王国を受け継ぐ「小さな群れ」とは別の囲いにいます。これら2つの囲いの羊に約束されている将来は違っているのです。しかし、どちらの囲いの羊にとってもイエスの役割は重要です。イエスはこう言います。「父は私を愛してください。私が命をなげうつからです」。(ヨハネ 10:17)

群衆の多くは、「彼は邪悪な天使に取りつかれ、頭がおかしくなっている」と言います。しかし、イエスの話に引き付けられ、立派な羊飼いに付いていきたいと考える人たちもいます。そして、「あのような話は邪悪な天使に取りつかれた人にはできない。邪悪な天使が盲人の目を開けられるはずがない」と話します。(ヨハネ 10:20, 21) 生まれつき盲目だった男性をイエスが癒やした時のことを言っているのでしょう。

- 
- ◇ イエスが羊と羊の囲いについて話した時、ユダヤ人たちがイメージしやすかったのはなぜですか。
  - ◇ 立派な羊飼いと誰のことですか。その羊飼いによって羊はどんな祝福を受けますか。
  - ◇ イエスに付いていく2つの囲いの羊には違いがあります。どんな違いですか。

# 父と一つであっても神ではない

ヨハネ 10:22-42

イエスはエルサレムでの献納<sup>けんのう</sup>の祭り(またはハヌッカ)に  
来<sup>しん</sup>ています。これは神殿<sup>さいけんのう</sup>の再献納を記念する行事です。  
100年以上前、シリアの王アンティオコス4世エピファネスは、  
神殿<sup>しん</sup>の大祭壇<sup>だいさいだん</sup>の上に別の祭壇<sup>さいだん</sup>を築きました。後  
に、ユダヤ人の祭司の子孫がエルサレムを奪<sup>うば</sup>い返し、エ  
ホバに神殿<sup>しん</sup>を再献納<sup>さいけん</sup>します。それ以来毎年、キスレウの  
25日から祭りが開かれています。キスレウの月は  
現在の11月後半から12月前半の時期に相当します。

それは寒い冬の時期です。イエスが神殿<sup>しん</sup>にあるソコ  
モン<sup>ちゅうろう</sup>の柱廊を歩いていると、ユダヤ人がイエスを取り囲  
み、「いつまで私たちを迷わせるのですか。あなたがキ  
リストなら、はっきりそう言ってください」と言います。  
(ヨハネ 10:22-24) イエスは、「私は言いましたが、あ  
なた方は信じません」と答えます。井戸の所でサマリア  
人の女性に、イエスは自分がキリストであると言いま  
したが、ユダヤ人たちに直接<sup>しん</sup>そう言ったことはありません。  
(ヨハネ 4:25, 26) しかし以前、イエスは自分がど  
んな者かを明らかにし、「アブラハムが存在する前から  
私はいます」と話したことがあります。(ヨハネ 8:58)

イエスの願いは、自分の活動と、キリストが行うと予  
告されていた事柄<sup>こと</sup>とを比較<sup>ひかく</sup>し、イエスこそキリストであ  
るという結論を各自が下すことです。そのため、自分が  
メシアであることを誰<sup>だれ</sup>にも話さないよう弟子たちに命じ  
てきたのです。でもイエスはここで、自分に敵意を抱い  
ている相手にはっきりこう言います。「父の名において  
私が行っている事柄<sup>こと</sup>を見れば、私が誰<sup>だれ</sup>かは明らかです。  
しかしあなた方は信じません」。(ヨハネ 10:25, 26)

イエスがキリストであることを彼ら<sup>かれ</sup>が信じないのはな  
ぜでしょうか。イエスはこう説明します。「あなた方は信  
じません。私の羊<sup>かれ</sup>ではないからです。私の羊は私の声  
を聞きます。私は彼ら<sup>かれ</sup>を知っており、彼らは私に付いて  
きます。私は彼ら<sup>かれ</sup>に永遠<sup>あた</sup>の命<sup>かれ</sup>を与え、彼らは決して滅<sup>ほろ</sup>ぼ

されません。誰も私の手から彼ら<sup>かれ</sup>を奪<sup>うば</sup>うことはありません。  
天の父が私に与えてくださった羊<sup>あた</sup>は、ほかの全て  
のものより大切で[す]」。そして、自分と父の絆<sup>きずな</sup>がどれ  
ほど強いかを示し、「私と父とは一つです」と言います。  
(ヨハネ 10:26-30) イエスは地上におり、父は天にい  
ますが、同じ目的を持って一致<sup>いっち</sup>して行動しているのです。

ユダヤ人たちはその返事を聞いて激怒<sup>げきど</sup>し、またもや石  
を拾<sup>おそ</sup>って殺そうとします。でもイエスは恐れることなく、  
「私は、天の父が命じた立派な行いをあなた方の前で  
数多くしました。そのうちどの行いのために、私を石打  
ちにするのですか」と質問します。すると彼ら<sup>かれ</sup>は、「石  
打ちにするのは、立派な行いのためではなく、冒瀆<sup>ぼうとく</sup>のため  
だ。……自分を神とするからだ」と答えます。(ヨハネ  
10:31-33) イエスは自分のことを神だとは一度も言っ  
ていないのに、なぜこのように非難されるのでしょうか。

それはイエスが、ユダヤ人が神にしかないと信じてい  
た力を持っていることを話したからです。例えば、「羊」  
について話した際、私は彼ら<sup>かれ</sup>に永遠<sup>あた</sup>の命<sup>あた</sup>を与え」と  
言いました。それは人間にはできないことです。(ヨハ  
ネ 10:28) でもユダヤ人たちは、イエスが父<sup>けん</sup>から権威<sup>い</sup>  
を与えられているとはっきり述べていることを真剣に受  
け止めていませんでした。

イエスは彼ら<sup>かれ</sup>の非難<sup>ま</sup>が間違いであることを示し、こ  
う言います。「律法[詩編 82編6節]の中に、『私は言った。  
「あなた方は神だ』』と書かれていませんか。神にとがめ  
られた人たちが『神』と呼ばれ、……父が神聖なものと  
して世に遣わした私が、自分は神の子だと言うと、『神  
を冒瀆<sup>ぼうとく</sup>している』と言うのですか」。(ヨハネ 10:34-36)

聖書は、不公平な裁判人のことをさへ「神」と呼んで  
います。ですから、イエスが「自分は神の子だ」と言っ  
ても罪を問われる理由にはなりません。イエスは彼ら<sup>かれ</sup>  
をこう論破します。「私が、父が望むことを行っていない





なら、私を信じてはなりません。しかし行っているなら、たとえ私を信じないとしても、その行いを信じなさい。そうすれば、父と私が結び付いていることが分かり、さらによく分かるようになります」。(ヨハネ 10:37, 38)

するとユダヤ人たちはイエスを捕ま<sup>つか</sup>えようしますが、イエスは逃<sup>に</sup>げます。そしてエルサレムを去ってヨルダン川<sup>わた</sup>を渡り、4年近く前にヨハネがバプテスマを施<sup>ほどこ</sup>し始め

た地域に行きます。そこはガリラヤの海の南<sup>なんたん</sup>端からそれほど遠くない場所のようです。

そこでも大勢の人たちがイエスの所にやって来て、「ヨハネはしるしを一つも行わなかったが、ヨハネがこの人について言ったことは全て本当だった」と言います。(ヨハネ 10:41) そして、たくさんのユダヤ人がイエスに信<sup>しんこう</sup>仰<sup>いだ</sup>を抱くようになります。

- 
- ◇ イエスが自分の活動に人々<sup>ひとびと</sup>の注意を向けたのはなぜですか。
  - ◇ イエスと父はどのような意味で一つですか。
  - ◇ 自分を神としたというユダヤ人からの非難に対し、イエスは詩編を引用してその間<sup>まちが</sup>違<sup>が</sup>いをどのように証明しましたか。
-









セクション

# 5

## ヨルダンの 東側での 伝道活動

「多くの人が  
イエスに<sup>しんこう</sup>信仰を持った」。

ヨハネ 10:42



## ペレアでの伝道

ルカ 13:22-14:6

イエスはユダヤとエルサレムで人々を教え、癒やしを行った後、ヨルダン川を渡り、ペレア地域の町から町へ教えていきます。しかし間もなくして、エルサレムへ戻ります。

ペレアでのこと、1人の男性がイエスに、「主よ、救われる人は少ないのですか」と尋ねます。この人は、救われる人たちが多いか少ないかという宗教指導者たちの議論を知っていたのかもしれませんが。イエスはその質問には答えず、救われるためには何をすべきかこう教えます。「狭い戸口を通して入るため、精力的に励みなさい」。そこまでの努力が必要なのはなぜですか。イエスは、「あなた方に言いますが、入ろうとしても入れない人が多いからです」と説明します。(ルカ 13:23, 24)

精力的に励む必要性を、イエスは例えで説明します。「家の主人が立ち上がって戸に鍵を掛けると、あなた方は外に立って戸をたたき、『主よ、開けてください』と言います。……しかし主人は言います、『あなた方がどこの人か知りません。悪を行う者たちよ、皆、私から離れ去りなさい!』」(ルカ 13:25-27)

この例えでは、ある人が遅れて来ると戸が閉まり鍵が掛かっているという惨めな状況が描写されています。自分の都合の良い時間に來たのでしょうか。しかし都合が悪くても、もっと早くに來るべきでした。これは、イエスがいる間にイエスから学べたはずの人たちに当てはまります。彼らは、真の崇拜を人生の主な目標とする機会を逃してしまいました。救いのために遣わされたイエスを、大半の人は受け入れませんでした。イエスはその人たちが外に放り出され、「泣き悲しんだり歯ざりしたり」と言います。しかし、「東や西から、北や南から」来るさまざまな国の人たちが「神の王国で食卓に着いて横になります」。(ルカ 13:28, 29)

さらにイエスは、「最後の人[ユダヤ人以外の人や痛

めつけられてきたユダヤ人など]が最初になったり、最初の人[アブラハムの子孫であることを誇りにしている宗教指導者たち]が最後になったりします」と説明します。(ルカ 13:30)「最後」になるというのは、そうした感謝の欠けた人たちが神の王国に入ることは決してないという意味です。



そこへ何人かのパリサイ派の人たちがやって来て、「ここから出て、去っていきなさい。ヘロデ[・アンテパス]があなたを殺そうとしています」とイエスに忠告します。ヘロデ王はイエスに自分の領土から出ていってほしいと思い、自分でこのうわさを広めたようです。彼はすでにバプテストのヨハネを殺害していたので、イエスという別の預言者の殺害にも関わりたくないと思ったのかもしれません。しかしイエスはパリサイ派の人たちにこう言います。「行って、あのきつねに言いなさい。『私は今日と明日、邪悪な天使を追出し、人々を癒やしてい

ます。そして3日目に終えます』。(ルカ 13:31, 32) イエスはヘロデのことを「きつね」と呼んで、<sup>かれ</sup>彼が<sup>わるがしこ</sup>悪賢いことを示していたようです。とはいえイエスは、ヘロデやほかの人の言いなりになったり、せき立てられたりはしません。父からの任務を、人に従ってではなく神である父が定めた予定に従って果たしていきます。

イエスはエルサレムへの旅を続けます。イエスの言葉によると、「預言者がエルサレムの外で殺されることはあり得ない」からです。(ルカ 13:33) メシアがエルサレムで死ぬことになるという聖書預言は一つもありません。では、イエスが自分はエルサレムで殺されると言ったのはなぜでしょうか。エルサレムは、71人の成員で構成されるサンヘドリンの<sup>ほうてい</sup>高等法廷<sup>ほう</sup>がある首都で、その法廷では<sup>てい</sup>偽預言者<sup>にせ</sup>が裁判にかけられることになっていたからです。さらに、エルサレムでは動物の<sup>ぎせい</sup>犠牲<sup>せい</sup>がささげられました。ですからイエスは、自分がエルサレム以外の場所で殺されることはあり得ないと知っていたのです。

イエスは悲しんでこう言います。「エルサレム、エルサレム、<sup>つか</sup>預言者たち<sup>ひとひと</sup>を殺し、<sup>つばさ</sup>追わされた人々<sup>つばさ</sup>を石打ちにする者よ、私はめんどりが<sup>つばさ</sup>翼の下にひなたちを集めるようにあなた方を集めたいと何度思ったことでしょう。しかし、あなた方はそれを望みませんでした。聞きなさい、あなた方の家は見捨てられます」。(ルカ 13:34, 35) 神の子を退けたイスラエル国民には、<sup>ひさん</sup>悲惨な将来<sup>ひさん</sup>が待ち受けています。



エルサレムに<sup>とうちやく</sup>到着する前、イエスは安息日にパリサイ派のある指導者から家での食事に招かれます。そこには<sup>すいしゅ</sup>水腫<sup>あし</sup>(脚に水がたまりやすい重い病気)の人が来ており、他の客たちはイエスがどうするかじっと見ています。そこでイエスは、パリサイ派の人たちと律法に通じた人たちに、「安息日に病気を治すのは正しいでしょうか。正しくないでしょうか」と質問します。(ルカ 14:3)

<sup>ひとひと</sup>人々は<sup>だま</sup>黙ったままです。それでイエスはその男性<sup>い</sup>を癒やし、<sup>ひとひと</sup>人々に<sup>たず</sup>こう尋ねます。「あなた方のうち、息子や牛が<sup>いど</sup>井戸に落ちた場合、安息日だからすぐに引き上げないという人がいるでしょうか」。(ルカ 14:5) このイエスの<sup>かれ</sup>明快な教えに、<sup>かれ</sup>彼らは何も答えられません。

- 
- ◇ 救われるには何をすべきであるとイエスは教えましたか。多くの人がいわば家から<sup>し</sup>締め出されてしまうのはなぜですか。
  - ◇ 「最後」だったのに「最初」になる人、「最初」だったのに「最後」になる人とは、それぞれどんな人たちですか。
  - ◇ ヘロデ王にとって<sup>き</sup>気掛かり<sup>が</sup>だったのはどんなことかもしれませんか。
  - ◇ イエスが自分はエルサレムで殺されると言ったのはなぜですか。

## 食事に招く

ルカ 14:7-24

イエスは水腫<sup>すいしゅ</sup>を患う男性<sup>わづら</sup>を癒<sup>い</sup>やした後も、パリサイ派の人の家にいます。イエスは客たちが目立つ場所に座ろうとしているのを見て、謙遜<sup>けんそん</sup>さについて教えます。

「結婚<sup>けっこん</sup>の披露宴<sup>ひろうえん</sup>に招かれたとき、最も目立つ場所を取ってはなりません。もしかすると、あなたより重要な人が招かれているかもしれません。その場合、招いた人から、『この方に場所を譲<sup>ゆず</sup>ってください』と言われる。その時、恥ずかしい思いをしながら最も良くない場所に移ることになります」。(ルカ 14:8, 9)

イエスはさらに話します。「招かれたときは、行って、最も良くない場所に着きなさい。そうすると、招いた人から、『友よ、もっと良い場所に行ってください』と言われる。その時、一緒<sup>いっしょ</sup>にいる全ての客の前で誉れを受けます。これは単に、良いマナーを示すようにという教えではありません。イエスはこう説明します。「高慢<sup>こうまん</sup>になる人は皆低く評価され、謙遜<sup>けんそん</sup>になる人は高く評価されるのです」。(ルカ 14:10, 11) イエスは、謙遜<sup>けんそん</sup>さを身に付けるようにと教えていたのです。

次にイエスは、自分を招いたパリサイ派の人に、神の恵<sup>めぐ</sup>みを得るにはどんな人たちを食事に招けばよいかにについて教えます。「昼食会や夕食会を設けるときには、友人や兄弟、親族や裕福な隣人<sup>りんじん</sup>などと呼んではなりません。その人たちを呼ぶと、お返しに招かれて報われるでしょう。むしろ、宴会<sup>えんかい</sup>を設けるときには、貧しい人、体が不自由な人、足が不自由な人、盲目<sup>もうもく</sup>の人などを招きなさい。そうするなら幸せです。その人たちにはあなたに報いるものが何もないからです」。(ルカ 14:12-14)

友達や親族や近所の人を食事に呼ぶのは普通のことで、イエスはそれが間違っていると言っているのではありません。貧しい人、体が不自由な人、盲目<sup>もうもく</sup>の人と

いった弱い立場の人を食事に招くなら大きな祝福を受けるということを強調していたのです。イエスは自分を招いたパリサイ派の人に、「あなたは、正しい人たちが復活する時に報いを受けます」と言います。すると客の1人が、「神の王国で食事をする人は幸せです」と言います。(ルカ 14:15) この男性は、それが本当に光栄なことだと考えていたのです。とはいえ、皆がその人と同じ見方をしているわけではありません。イエスはそのことについてある例えを話します。

「ある男性が盛大な夕食会を設けて、大勢の人を招きました。そして……奴隷<sup>どれい</sup>を遣わして、招いておいた人たちに言いました。『おいでください。全て用意ができました』。ところが、皆が一様<sup>みな</sup>に言い訳をし始めました。最初<sup>はつしう</sup>の人は言いました。『畑を買ったので、見に行かなければなりません。すみませんが、伺<sup>うかが</sup>えません』。別の人は言いました。『牛を5対買ったので、調べに行くところです。すみませんが、伺<sup>うかが</sup>えません』。また別の人は言いました。『結婚<sup>けっこん</sup>したばかりなので、出席できません』」。(ルカ 14:16-20)

何とひどい言い訳でしょう。畑や家畜<sup>かちく</sup>は買う前に調べるのが普通です。買った後に急いで見に行く必要はありません。また3番目の人も結婚<sup>けっこん</sup>の準備をしていたのではなく、すでに結婚<sup>けっこん</sup>していました。大切な招待を断る理由はなかったはず。主人はこうした言い訳を聞くと怒<sup>おこ</sup>り、奴隷<sup>どれい</sup>にこう命じます。

「急いで町の大通りや路地に行き、貧しい人、体が不自由な人、盲目<sup>もうもく</sup>の人、足が不自由な人をここに連れてきなさい。奴隷<sup>どれい</sup>は命じられた通りにしますが、まだ空きがあります。それで主人は奴隷<sup>どれい</sup>にこう言います。「道路や小道に出ていき、無理にでも人々<sup>ひとびと</sup>に來させ、家をいっぱいにしなさい。招かれていたあの人たちは誰も私の



夕食会で食べることはできないのだ」。(ルカ 14:21-24)

この例えは、エホバ神がイエス・キリストを遣わして天の王国に入るよう人々を招待する様子をよく表しています。最初は主にユダヤ人の宗教指導者たちが招待されました。しかし、イエスが伝道した期間中、彼らの大半はその招待を断りました。とはいえ、招待されたのは彼らだけではありません。イエスは、将来、立場の低

いユダヤ人たちや改宗者も招待されることをはっきり示しています。そして最後に、ユダヤ人が神の崇拝にふさわしくないと見なしていた人々が招待されます。(使徒 10:28-48)

イエスの教えた事柄は、客の1人が言った言葉が真実であることを裏付けています。「神の王国で食事をする人は幸せです」。



- ◇ イエスは謙遜さが大切であることをどのように教えましたか。
- ◇ 誰を食事に招くことができますか。それはどんな祝福につながりますか。
- ◇ 夕食会の例えでイエスはどんなことを教えましたか。

# キリストの弟子であることの責任

ルカ 14:25-35

イエスはパリサイ派のある指導者の家で食事をした時に大切なことを教えました。その後もエルサレムへの旅を続けますが、大勢の人が一緒に付いてきます。なぜでしょうか。どんな犠牲を払ってでもイエスの真の弟子になりたいと本当に思っているからでしょうか。

旅の途中でイエスは驚くようなことを言います。「私の元に来て、自分の父親、母親、妻、子供、兄弟、姉妹、さらには自分の命以上に私を愛さないなら、私の弟子になることはできません」。(ルカ 14:26) どういう意味でしょうか。

これは、イエスの弟子になりたい人は家族を愛してはいけないということではありません。家族に対する愛よりもイエスに対する愛が大きくなければならない、という意味です。家族に対する愛が大きくなってしまうと、例え話の中で、結婚を言い訳にして夕食会への招待を断った人のようにになってしまうかもしれません。(ルカ 14:20)

弟子となる人は「自分の命」であっても第一にすべきではない、とイエスは言っています。自分を大事にする気持ちよりもイエスへの愛の方が大きくなければならず、場合によってはイエスのために死ぬこともたまたわらない、という意味です。ですから、キリストの弟子になることには大きな責任が伴います。よく考えず軽い気持ちで決定してはなりません。

弟子になれば、困難や迫害を経験するかもしれません。イエスはこう言っているからです。「自分の苦みの杭を運びながら私に付いてくる人でなければ、私の弟子になることはできません」。(ルカ 14:27) イエスの本当の弟子はイエスと同じように、つらい経験をしてでも忍耐しなければなりません。イエスは、自分が敵の手で殺されるとも言いました。

ですから、イエスの話を聞いていた人たちは、キリストの弟子になるということがどういうことかを注意深く考えるべきでした。イエスはその点を例えで強調します。「例えば、塔を建てようと思う場合、まず座って費用を計算し、完成させるだけのものを持っているかどうかを調べるのではないのでしょうか。そうしないなら、土台を据えても仕上げられないかもしれず、見ている人たちは皆あざけり始めるでしょう」。(ルカ 14:28, 29) 人々



は、イエスの弟子になる前に、弟子としての責任をしっかり果たすことを固く決意しているべきなのです。イエスは別の例えでそのことを強調します。

「ある王が別の王との戦いに出ていく場合、まず座って、2万の軍勢で攻めてくる相手に1万の軍勢で立ち向かえるかどうかを協議するのではないのでしょうか。実際、立ち向かえないなら、相手がまだ遠くにいる間に、使節団を遣わして和平を求めます」。それからイエスは要点を強調し、こう言います。「同じように、持ち物全てに別

れを告げない人は誰も私の弟子になることができません」。(ルカ 14:31-33)

このイエスの言葉は、一緒に旅をしている人たちだけに当てはまるものではありません。キリストを知るようになる人は皆、ためらうことなくイエスの言葉通りに行動しなければなりません。イエスの弟子であるには、持ち物全て、また自分の命さえも手放す覚悟が必要です。ですから、これは祈って、よく考えるべき事柄です。

次にイエスは、山上の垂訓の中で語った点をもう一度教えます。それは、弟子たちが「地の塩」であるというものです。(マタイ 5:13) その時イエスは、塩が保存料の働きをするように、弟子たちも人々の心を腐敗から守ると教えていたようです。伝道期間が終わりに近づいた今、イエスはこう言います。「確かに塩は良いものです。しかし、塩が塩気を失ったら、何によって塩気を取り戻せるのですか」。(ルカ 14:34) 人々は、当時の塩には土のような不純物が混ざっていることがあり、そうした塩が使い物にならないことを知っていました。

イエスは、これまでずっと自分の弟子だった人でも決意を弱めてはならないと教えます。もし弱めてしまうなら、塩気を失った塩のように使い物にならなくなってしまおうでしょう。そうすると人々からばかにされるだけで



なく、神の恵みを失いかねないのです。神の名が非難されることもあり得ます。イエスはそうした結果にならないよう強く勧め、「聞く耳のある人は聞きなさい」と言います。(ルカ 14:35)

- 
- ◇ イエスは、自分の弟子となる人は家族や「自分の命」以上に私を愛さなければならない、と教えました。それはどういう意味でしたか。
  - ◇ 塔を建てることや戦いをする王の例えで、イエスはどんなことを教えていましたか。
  - ◇ 塩についてのイエスの話はどんな大切なことを教えていますか。



## 悔い改める罪人のことを喜ぶ

ルカ 15:1-10

イエスは伝道期間中のさまざまな機会に、謙遜<sup>けんそん</sup>さの大切さを教えてきました。(ルカ 14:8-11) また、神に謙遜<sup>けんそん</sup>な態度で仕えたいと願う人たちを熱心に探しています。その中には、罪人として知られてきた人たちがいます。

パリサイ派と律法学者たちは、自分たちが無価値な人間と見なしている罪人がイエスとイエスの教えに引き付けられていることに気がきます。それで、「この男は罪人<sup>けんじん</sup>たちを歓迎<sup>かんげい</sup>して一緒<sup>いっしょ</sup>に食事をすると文句を言います。(ルカ 15:2) 宗教指導者たちは自分たちの方が優れていると考え、一般<sup>いっぱん</sup>の人々<sup>ひとびと</sup>を足元の土でもあるかのように扱い、いわば踏みつけています。そして、アム・ハーアーレツ(ヘブライ語で「地の民」という意味)と呼んで軽蔑<sup>けいべつ</sup>しています。

でもイエスは違<sup>ちが</sup>います。一人一人を大切に、親切に思いやりを持って接します。それで、罪人として知られる人や立場の低い人はイエスの話をぜひ聞きたいと思うのです。ではイエスは、彼ら<sup>かれ</sup>を助けることで上がる批判をどう考え、それにどう反応するでしょうか。

イエスの気持ちは、イエスが語った心を動かす例えに表れています。それは以前にカペルナウムで語った例えに似ています。(マタイ 18:12-14) イエスはパリサイ派の人を、自分は正しく神の囲いの中にいて安全だと考えている人として描<sup>えが</sup>いています。対照的に、立場の低い人は迷い出て失われた状態にあるとしています。イエスはこう話します。



「あなた方のうちのある男性が100匹<sup>びき</sup>の羊を持っていて1匹<sup>びき</sup>がいなくなったとき、その男性は99匹<sup>ひき</sup>を荒野<sup>こうや</sup>に残して、迷い出た羊を見つかるまで捜<sup>さが</sup>すのではないでしょう。そして見つけると、その羊を肩<sup>かた</sup>に載せて喜びます。家に着くと、友人や隣人<sup>りんじん</sup>を呼び集めて言います。『一緒<sup>いっしょ</sup>に喜んでください。迷い出ていた羊が見つかりました』。(ルカ 15:4-6)

この例えは何を教えていますか。イエスはこう説明します。「あなた方に言いますが、同じように、悔い改める1人の罪人<sup>けんじん</sup>については、悔い改める必要のない99人の正しい人についてよりも、大きな喜びが天にあるのです」。(ルカ 15:7)

イエスが悔い改めについて話した時、パリサイ派の人たちは衝撃<sup>しょうげき</sup>を受けたでしょう。彼らは、自分たちは正しく悔い改める必要など全くないと考えていました。2年ほど前にも、彼らが徴税人<sup>ちょうぜいにん</sup>や罪人たちと食事をする



イエスを批判した時、イエスは、「私は、正しい人ではなく罪人を招くために来ました」と言いました。(マルコ 2:15-17) パリサイ派の人たちは悔い改めが必要であることを認めないため、天には喜びがありません。しかし、罪人が本当に悔い改めると、天には喜びがあります。

天での喜びの大きさを強調するため、イエスは家の中での出来事を基にした例えを話します。「ある女性が10枚のドラクマ硬貨を持っていて1枚をなくした場合、ランプをとめて家の中を掃き、見つけるまで注意深く探すのではないのでしょうか。そして見つけると、友人や隣人を呼び集めて言います、『一緒に喜んでください。なくしたドラクマ硬貨が見つかりました』」。(ルカ 15:8, 9)

この例えの適用は、迷い出た羊の例えと同じです。イエスはこう言います。「同じように、あなた方に言いますが、悔い改める1人の罪人については、神の天使たちが一緒に喜ぶのです」。(ルカ 15:10)

考えてみてください。天使たちは迷い出た罪人が戻ってくることに深い関心を抱いているのです。悔い改めて神の天の王国に入る罪人は、天使たちより高い地位に就くことになります。それを考えると、天使たちの態度から大切なことを学べます。(コリント第一 6:2, 3) 天使たちは嫉妬しないのです。そうであればなおのこと、私たちは罪人が心から悔い改めて神の元に戻ってきた時に喜ぶべきではないでしょうか。



- ◇ イエスが罪人として知られる人たちと時間を過ごしたのはなぜですか。
- ◇ パリサイ派の人たちは、一般の人々をどのように見なしていましたか。また、そうした人々へのイエスの接し方を見て、どう反応しましたか。
- ◇ イエスは2つの例えによってどんなことを教えましたか。

# いなくなっていた息子が戻ってくる

ルカ 15:11-32

イエスは、迷い出た羊となくした硬貨の例えを、ヨルダン川の東側のペレアにいる時に語ったようです。それらの例えは、罪人が悔い改めて神の元に<sup>もと</sup>戻ってきた時、私たちが喜ぶべきであるということを教えています。パリサイ派の人たちと律法学者たちは、イエスがそうした罪人たちと時間を過ごすのを見て批判してきました。では<sup>かれ</sup>彼らは、教訓を学ぶでしょうか。天の父が悔い改めて<sup>く</sup>罪人を見てどう感じるかを理解するでしょうか。イエスはこうした大切な教訓をしっかり教えるため、感動的な別の例え話をします。

主な登場人物は、父親と2人の息子です。下の息子が中心となって話が展開していきます。パリサイ派の人たちや律法学者たち、またこの話を聞いていた他の人たちも、この下の息子から教訓を学べるでしょう。でも、父親や上の息子についてイエスが語った<sup>ことがら</sup>事柄も<sup>みのが</sup>見逃せません。その2人が示した反応は大切なことを教えているからです。この3人に注目しながら考えてみましょう。

イエスは次のように話し始めます。「ある男性に2人



の息子がいました。下の息子が父親に言いました。『父上、財産のうち私が頂くことになる分を下さい』。それで父親は資産を2人に分けました」。(ルカ 15:11, 12) 下の息子は、父親が亡くなったので資産を分けてほしいと言ったものではありません。父親はまだ生きています。自分の分を<sup>はな</sup>今欲しがったのは、親元を離れ、もらったお金で好きなことをしたかったからです。それはどんなことでしたか。

イエスは続けます。「数日後、下の息子は全ての物をまとめて遠い国に旅立ち、そこで放蕩の生活をして財産を乱費しました」。(ルカ 15:13) この息子は、父親が<sup>きづか</sup>気遣い養ってくれる温かい家で暮らすのをやめています。別の土地に出<sup>で</sup>掛けていき、そこで好き放題なことをし、性的に乱れた生活を送って財産を使い果たします。当然、生活は苦しくなります。イエスは次のように話します。

「全てを使い果たした時、その国中でひどい<sup>ききん</sup>飢饉が起





き、彼は<sup>かれ</sup>困窮<sup>こんきゆう</sup>し始めました。その国のある住民の所に<sup>こ</sup>転がり込むことまでし、野で豚<sup>ぶた</sup>を飼う仕事をさせられました。豚<sup>ぶた</sup>が食べているイナゴマメのさやでおなかを満たしたいと思うほどでしたが、誰<sup>だれ</sup>も何もくれませんでした」。(ルカ 15:14-16)

律法で豚<sup>ぶた</sup>は汚<sup>けが</sup>れた動物とされていますが、この息子<sup>ぶた</sup>は豚を飼う仕事をしなければなりません。空腹のあまり、豚<sup>ぶた</sup>が食べている、動物用の餌<sup>えさ</sup>でいいから食べたいと思うようになります。こうした悲惨<sup>ひさん</sup>な状況<sup>じようきよう</sup>で、息子は「本心に立ち返<sup>かえ</sup>」ります。そしてこう言います。「父の所では大勢<sup>おほい</sup>の雇われ人に有り余るほどパンがあるのに、私はここで飢え死<sup>う</sup>にしそうだ。ここを出て父の元に行き、こう言おう。『父上、私は天に対しても、あなたに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれるに値しません。雇われ人<sup>やと</sup>の1人のようにしてください』」。そして父親の元へ帰ることにします。(ルカ 15:17-20)

父親はどんな反応をするでしょうか。怒鳴りつけ、そもそも家を出ていったのが悪かったのだと叱<sup>しか</sup>りつけますか。帰ってきた息子を無視<sup>ふ</sup>し、不愉快<sup>ふゆかい</sup>だという態度を示すでしょうか。あなたがこの息子の父親ならどう思いますか。もし自分の息子や娘<sup>むすめ</sup>がこの息子のように帰ってきたなら、どうするでしょうか。



- ◇ イエスはこの例え話<sup>だれ</sup>を誰に向けて話しましたか。なぜですか。
- ◇ 例え話の主人公は誰<sup>だれ</sup>ですか。主人公はどんなことをし、その後どうなりましたか。





## いなくなっていた息子が見つかる

イエスは父親がどう思い、どう行動したかを次のように話します。「彼〔下の息子〕がまだ遠くにいる間に、父親は息子を見てかわいそうに思い、走って行って抱き締め、優しく口づけしました」。(ルカ 15:20) 父親は息子が好き放題な生活をしているというのを聞いていたでしょう。それでも息子を温かく迎えました。エホバを知り崇拝すると主張するユダヤ人の指導者たちは、天の父が悔い改めた罪人たちを見てどう感じるかを理解するでしょうか。また、イエスが天の父と同じく、温かく迎える態度を示していることを認めるでしょうか。

よく気が付くこの父親は、息子の悲しげで落ち込んだ表情を見て、本人が悔い改めていることが分かったはずで、息子は、父親が愛情深く自分から迎えに来てくれたので、罪を打ち明けやすくなります。イエスはこう続けます。「息子は言いました、『父上、私は天に対しても、あなたに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれるに値しません』」。(ルカ 15:21)

すると父親は奴隷たちに言います。「さあ早く、長い服、一番良いのをを出してきてこの子に着せ、指輪をはめ、サンダルを履かせなさい。それから、肥えた子牛を連れてきて調理しなさい。食べて祝いましょう。私のこの息子が死んでいたのに生き返ったのです。いなくなっていたのに見つかりました」。そして、「楽しいひととき」が始まります。(ルカ 15:22-24)

次にイエスは上の息子についてこう話します。「上の息子は畑にいましたが、帰ってきて家に近づく、音楽と踊りの音が聞こえました。召し使いを呼び、何事かと尋ねました。召し使いは言いました、『ご兄弟がお帰りになりました。無事に戻ってこられたので、お父さまは肥えた子牛を振る舞われたのです』。ところが彼は怒り、入ろうとしませんでした。すると父親が出てきて、中に入るよう促し始めました。上の息子は父親にこう答えました、『私はこれまで何年もあなたのために奴隷のように働いてきて、ご命令に背いたことは一度もありません』」。



せん。それなのに、友人<sup>いっしょ</sup>と一緒に食べるための子ヤギを下さったことが一度もありません。ところが、娼婦<sup>しょうふ</sup>たちと一緒にあなたの資産を乱費したあのあなたの息子<sup>もど</sup>が戻るとすぐ、肥えた子牛<sup>ふま</sup>を振る舞ったのです』。(ルカ 15:25-30)

イエスが一般<sup>いっぱん</sup>の人たちや罪人<sup>あわ</sup>たちに憐れみ<sup>あわ</sup>を示し関心<sup>はら</sup>を払った時、そのことを上の息子のように批判<sup>だれ</sup>したのは誰でしたか。パリサイ派の人たちと律法学者<sup>あわ</sup>たちです。それでイエスはこの例え話を話すことにしたのです。神<sup>あわ</sup>の憐れみを批判<sup>みな</sup>する人は皆、この話の教訓<sup>あわ</sup>をしっかり<sup>だれ</sup>と心に刻むべきです。

イエスは、父親<sup>あわ</sup>が上の息子に言った言葉<sup>し</sup>でこの例え話を締めくくります。「息子よ、おまえはいつも私<sup>あわ</sup>といた

し、私の物は全部おまえのものだ。でも、祝って喜ばずにはいられなかった。おまえの弟<sup>あわ</sup>が死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだ」。(ルカ 15:31, 32)

イエスは上の息子がその後どうしたかについて何も述べていません。しかし、イエスの死と復活の後、「非常に大勢の祭司<sup>あわ</sup>たちが信じるようになった」りました。(使徒 6:7) その中には、イエスがこの感動的な例え話を話すのを直接聞いた人<sup>あわ</sup>たちもいたことでしょう。彼らも本心に立ち返り、悔い改めて神<sup>あわ</sup>の元<sup>もど</sup>に戻ってくるチャンスがあったのです。

その日以降、弟子<sup>あわ</sup>たちはこの例え話の大切な教訓<sup>あわ</sup>を忘れなかったでしょう。また、決して忘れるべきではありませんでした。その教訓<sup>あわ</sup>の1つは、「遠い国<sup>うば</sup>」での楽しみに心<sup>あわ</sup>を奪<sup>た</sup>われて漂<sup>ただよ</sup>い出してしまうのではなく、天<sup>あわ</sup>の父が氣遣い<sup>きづか</sup>養<sup>ひと</sup>っている愛情<sup>あわ</sup>深い人々<sup>はな</sup>から離れてはならない、ということです。

2つ目の教訓<sup>あわ</sup>は、もし神<sup>あわ</sup>の道からそれてしまうことがあったとしても、天<sup>あわ</sup>の父の恵み<sup>めく</sup>をもう一度得るために、謙遜<sup>けんそん</sup>に父<sup>あわ</sup>の元<sup>もど</sup>に戻るべきである、ということです。

さらに学べることがあります。父親<sup>あわ</sup>は物分<sup>あわ</sup>かりの良い寛大<sup>かんたい</sup>な態度<sup>いか</sup>を示し、上の息子<sup>あわ</sup>は怒りに満ちた冷淡<sup>れいたん</sup>な態度<sup>あわ</sup>を示しました。神<sup>あわ</sup>の民であれば、迷い出た人<sup>あわ</sup>が心から悔い改めて父<sup>あわ</sup>の「家<sup>かんたい</sup>」に戻ってきた時、寛大<sup>かんたい</sup>に温かく迎<sup>むか</sup>えたいと思うでしょう。「死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかった」私たちの兄弟<sup>あわ</sup>のことを喜ぶ<sup>あわ</sup>たいものです。

- ◇ 下の息子<sup>あわ</sup>が戻ってきた時、父親<sup>あわ</sup>はどう反応<sup>あわ</sup>しましたか。
- ◇ 同情心<sup>あわ</sup>にあふれた父親<sup>あわ</sup>から、エホバとイエスについてどんなことが分かりますか。
- ◇ 上の息子<sup>あわ</sup>の反応<sup>あわ</sup>は、パリサイ派の人たちと律法学者<sup>あわ</sup>たちの行動<sup>あわ</sup>にどんな点<sup>あわ</sup>で似ていましたか。
- ◇ イエスの例え話<sup>あわ</sup>から何を学べますか。



## 实际的な知恵を働かせ、前もって計画する

ルカ 16:1-13

いなくなっていた息子の例え話は、神が悔い改めた罪人を快く許すということを、徴税人や律法学者やパリサイ派の人たちにはっきり教えるものとなったはずです。(ルカ 15:1-7, 11) 次にイエスは弟子たちに向けて別の例えを話します。ある裕福な男性の家の管理人が適切な管理をしていないという話です。



この管理人は主人の持ち物を浪費していると訴えられ、主人から解雇すると言われてしまいます。管理人は考えます。「どうしよう。主人は管理人の仕事をさせないつもりだ。私は土掘りをするほど強くないし、物乞いをするのは恥ずかしい」。それで今後に備えてどうするかを決め、こう言います。「いい考えがある。こうすれば、管理人を辞めさせられた時に人々が家に迎え入れてくれるはずだ」。すぐに管理人は主人に負債がある人たちを呼び、「私の主人にどれくらい借りがありますか」と尋ねます。(ルカ 16:3-5)

最初の人、「オリーブ油100バトです」と答えます。

これは2200<sup>シ</sup>に相当します。この人は、広大なオリーブ園を持っていたのか、オリーブ油の商人だったのかも知れません。管理人は言います。「契約書を受け取って座り、急いで50[1100<sup>シ</sup>]と書きなさい」。(ルカ 16:6)

管理人は別の人に、「さてあなたは、どれくらい借りがありますか」と尋ねます。その人は、「小麦100コルです」と答えます。これは2万2000<sup>シ</sup>に相当します。管理人は、「契約書を受け取って、80と書きなさい」と言います。負債を20%減らしてあげたのです。(ルカ 16:7)

管理人はまだ主人の財産の管理を任されているので、負債を減らすことができます。そうすることで管理人は友を作り、解雇された時に力を貸してもらえるようにしているのです。

そのことが、ある時点で主人の耳に入ります。主人は管理人のしたことが自分にとって損になると思いました。が、感心し管理人を褒めます。「正しい人とは言えませんが、实际的な知恵を働かせた」からです。イエスはこう言います。「今の体制の人々は、自分たちの世代に対する实际的なやり方の点で、光の中にいる人々より賢いのです」。(ルカ 16:8)

イエスは管理人のやり方を大目に見ているわけでも、ずる賢い商売を勧めているわけでもありません。では例えの要点は何ですか。イエスは弟子たちに、「正しくない富によって友を作り、そうした物が尽きた時に永遠の住まいに迎え入れてもらえるようにしなさい」と勧めます。(ルカ 16:9) イエスは、先のことを考えて实际的な知恵を働かせるように、と教えていたのです。「光の中にいる人々」つまり神に仕える人たちは、将来の永遠の命のことを考え、自分の資産を賢く用いるべきです。

人を天の王国やその支配下の地上のパラダイスに迎

え入れることができるのは、エホバとイエスだけです。ですから、私たちは王国を支える活動のために自分の資産を用いることによって、エホバとイエスとの友情を深めるよう努力しなければなりません。そうすれば、金や銀といった物質の富が役に立たなくなったり失われたりした時でも、将来の永遠の命はしっかり保証されるでしょう。

さらにイエスは、資産や所有物を用いることに関して忠実な人は、もっと重要な<sup>ことがら</sup>事柄<sup>あつが</sup>を扱うことに関しても忠実である、と教えます。そしてこう言います。「それで、あなたたちが正しくない富に関して忠実であることを示していないなら、<sup>だれ</sup>誰<sup>た</sup>があなたたちに[王国を支える活動といった]本当に価値あるものを<sup>たく</sup>託<sup>たく</sup>するでしょうか」。(ルカ 16:11)

イエスは、「永遠の住まいに<sup>むか</sup>迎え入れ」られるためには多くのことが期待されると話します。神に仕えながら、物質の富の<sup>どれい</sup>奴隷<sup>ど</sup>になることはできません。イエスは例え話の最後にこう言います。「どんな使用人も2人の主人の<sup>どれい</sup>奴隷<sup>ど</sup>となることはできません。一方を<sup>にく</sup>憎<sup>にく</sup>んで他方を愛するか、一方に<sup>く</sup>尽<sup>く</sup>くして他方を軽く見るかです。神と富との<sup>どれい</sup>奴隷<sup>ど</sup>となることはできません」。(ルカ 16:9, 13)

- 
- ◇ 例えに出てくる管理人は、自分を助けてくれそうな友をどのようにして作りましたか。
  - ◇ 「正しくない富」とは何ですか。クリスチャンがその富を用いて「友を作」るとは、どうすることですか。
  - ◇ 私たちが「正しくない富」を用いることに忠実であれば、<sup>だれ</sup>誰<sup>た</sup>が「永遠の住まいに<sup>むか</sup>迎え入れ」てくれますか。
- 



## 裕福な男性とラザロは変化を経験する

ルカ 16:14-31

イエスは弟子たちに資産の用い方について優れた教訓を教えました。話を聞いていたのは弟子たちだけではなく、そこにはパリサイ派の人たちもいました。彼らもその教訓を心に刻むべきです。なぜなら「金を愛する」人たちだったからです。しかし、彼らは「イエスのことを冷笑し始め」ます。(ルカ 15:2; 16:13, 14)

イエスはひるみません。こう言います。「あなた方は人前で自分を正しく見せますが、神はあなた方の心を知っています。人の間で重んじられるものは、神から見て極めて不快なものなのです」。(ルカ 16:15)

パリサイ派の人たちはこれまでずっと「人の間で重んじられ」てきました。しかし変化が生じ、立場が逆転します。多くの資産、政治権力、宗教上の影響力を持ち、大変重んじられてきた人たちは低められます。そして、神についてもっと多くを学びたいと願う一般の人々が祝福されるのです。イエスはこの大きな変化について次のように話します。

「律法と預言者の言葉が広められたのはヨハネの時まででした。それ以降は、神の王国が良い知らせとして広められており、誰もがその王国に入ろうとひたむきに努力しています。天地が消え去るとしても、律法の文字の1画が実現しないことはありません」。(ルカ 3:18; 16:16, 17) イエスの言葉から、生じている変化についてどんなことが分かりますか。

ユダヤ人の宗教指導者たちは、モーセの律法を固く守っていることを自慢げに話します。エルサレムでイエスがある男性の視力を回復させた時、パリサイ派の人たちは高慢な態度で、「私たちはモーセの弟子だ。神がモーセに語ったということは知っている」と言いました。(ヨハネ 9:13, 28, 29) モーセを通して律法が与えられた目的の1つは、謙遜な人をメシアつまりイエス



に導くことでした。バプテストのヨハネは神の子羊がイエスであることを明らかにしました。(ヨハネ 1:29-34) ヨハネが伝道を開始して以来、謙遜なユダヤ人、特に貧しい人たちが「神の王国」について聞いてきました。その王国の国民になり、その支配の恩恵を受けたいと願う人全てにとつての良い知らせです。

モーセの律法は実現しないというわけではなく、人々をメシアに導いています。そして、律法を守る義務は間もなくなくなります。例を考えましょう。律法下ではさまざまな理由で離婚が許されていました。しかしイエスは、「妻を離婚して別の女性と結婚する人は皆、姦淫をすることになり、夫に離婚された女性と結婚する人は姦淫をすることになります」と説明します。(ルカ 16:18) 何事にも細かな規則を作っていたパリサイ派の人たちは、これを聞いてひどく腹を立てたに違いありません。

イエスは、生じている大きな変化を強調する例え話

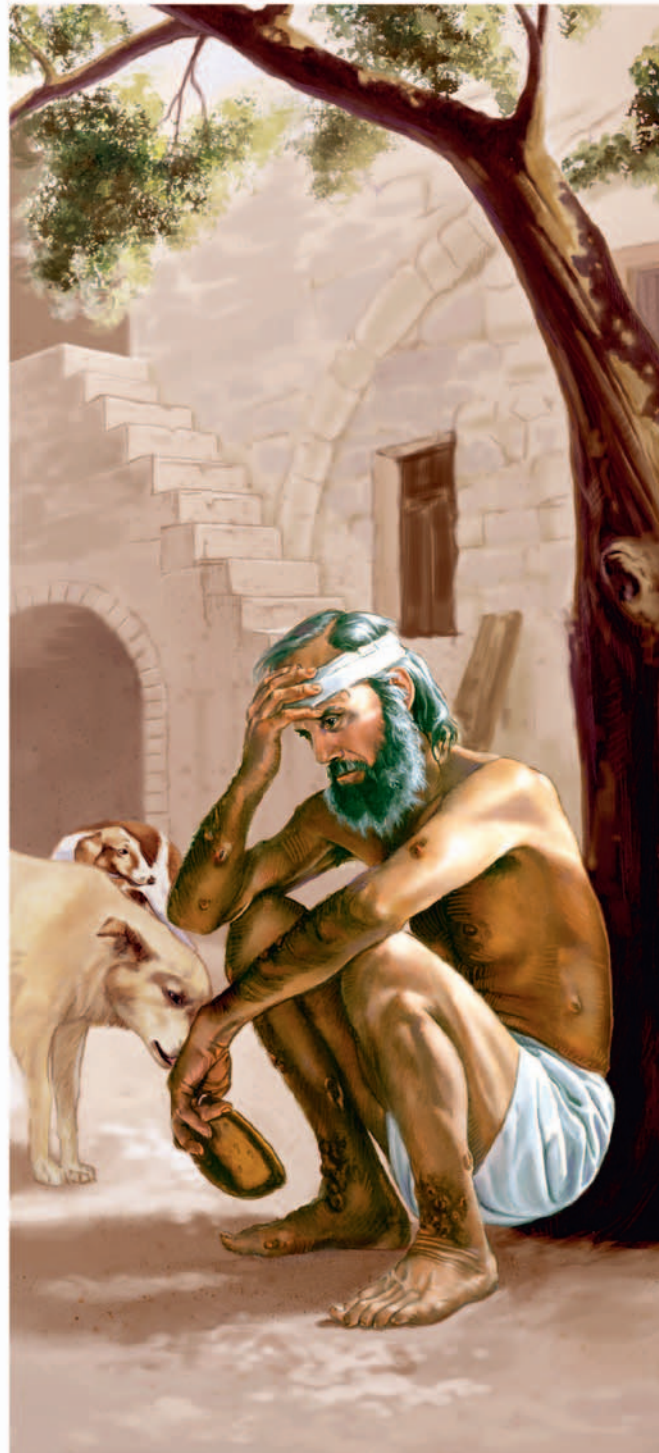


を話します。2人の男性が登場し、それぞれの立場つまり境遇が一変します。例えを考えるに当たり、その場には、人の間で重んじられてきた、金愛するパリサイ派の人たちもいたことを覚えておきましょう。

イエスはこう話します。「ある裕福な男性が紫布や亜麻布の服で装い、毎日ぜいたくに楽しく暮らしていました。一方、その門の所に、潰瘍だらけのラザロという物乞いがいて、裕福な男性の食卓から落ちる物でおなかを満たしたいと思っていました。その上、犬が来ては潰瘍をなめるのですでした」。(ルカ 16:19-21)

パリサイ派の人たちは金を愛していたので、イエスが話した「裕福な男性」とは明らかに彼らのことでした。それらユダヤ人の宗教指導者たちは高価な服で着飾ることを好みました。さらに、彼らは裕福だっただけでなく、どんな富よりも素晴らしい富を持っていました。つまり、神に仕える特権と機会がたくさんあったのです。濃い紫の服は彼らの特別な立場を表し、白の亜麻布は自分こそ正しいと信じて疑わない態度を表しています。(ダニエル 5:7)

裕福で偉そうにしている宗教指導者たちは、一般の貧しい人たちをどう見ていたのでしょうか。そうした人々を軽蔑してアム・ハーアーレツつまり地の民と呼び、律法を知らず、律法を知る必要もない人たちだと考えていたのです。(ヨハネ 7:49) 言ってみれば、一般の貧しい



- ◇ ユダヤ人の宗教指導者たちと一般の人々の状況はどれほど違っていましたか。
- ◇ ヨハネが伝道を始めた時にどんな変化が起きたことをイエスは示しましたか。
- ◇ イエスの例え話に出てくる裕福な男性とラザロは、それぞれ誰を表していましたか。

い人たちは、「裕福な男性の食卓から落ちる」わずかな物でもほしいと思っていた「ラザロという物乞い」と同じ状況にありました。また、ラザロが潰瘍だらけだったように、神の目から見て病気のような状態にあるので神に喜ばれていない、と見なされていました。

そうした悲惨な状況はしばらくの間続いてきました。しかしイエスは、裕福な男性のような人々とラザロのような人々の立場が非常に大きく変化することを知っていました。

#### 裕福な男性とラザロの立場が逆転する

イエスは2人の男性の間の劇的な変化についてこう話します。「やがてラザロは死に、天使によってアブラハムのそばに運ばれました。また、裕福な男性も死んで葬られました。そして墓の中で苦しみながら目を上げると、遠くにアブラハムがいて、そのそばにラザロがいるのを見えました」。(ルカ 16:22, 23)

話を聞いていた人たちは、アブラハムがずっと昔に死んで葬られたことを知っています。聖書は、アブラハムを含め亡くなった人は全て、見ることも話すこともできないとはっきり教えています。(伝道の書 9:5, 10) では、イエスの例え話を聞いて、宗教指導者たちはどう思ったでしょうか。イエスは一般の人々と金を愛する宗教指導者たちについて、何を言おうとしているのでしょうか。



イエスはある変化が生じるについてこう言っていました。「律法と預言者の言葉が広められたのは[バプテストの]ヨハネの時まででした。それ以降は、神の王国が良い知らせとして広められて……います」。ですから、ヨハネとイエス・キリストが伝道を始めたことによって、ラザロも裕福な男性も以前の境遇つまり状態に関しては死に、神の前での立場が変わりました。

具体的に考えてみましょう。謙遜な人たちや貧しい



人たちはそれまでずっと神について知る機会を奪われてきました。しかし彼らは、最初はバプテストのヨハネによって、次にイエスによって伝えられた王国の知らせに良い反応を示し、助けられてきました。かつては、宗教指導者たちの食卓から落ちる、神についてのわずかなばかりの教えで何とかやっていくしかありませんでした。ところが今では、生きていくのに欠かせない聖書の真理で養われています。特に、イエスの素晴らしい教えを聞くことができます。ついに、エホバ神の前で恵まれた立場を得ることができたのです。

一方、裕福で影響力を持つ宗教指導者たちは、ヨハネとイエスが国中で伝えてきた王国の知らせを受け入れません。(マタイ 3:1, 2; 4:17) 神からの火のような裁きが間近に迫っていることを示すその知らせに、彼らは怒り、苦しんでいます。(マタイ 3:7-12) もしイエスと

弟子たちが伝道の手を緩めるなら、その苦痛は和らげられるでしょう。彼らは例え話の中でこう言っている裕福な男性のようです。「父アブラハム、私に憐れみを掛け、ラザロを遣わして、彼が指先を水に浸して私の舌を冷やすようにさせてください。私はこの燃え盛る火の中で苦悶しています」。(ルカ 16:24)

しかし、その願いは聞かれません。宗教指導者たちのほとんどは変化しようとしません。彼らは、イエスを神のメシアまた王として受け入れるよう導くはずの「モーセや預言者の言葉に」従ってきませんでした。(ルカ 16:29, 31。ガラテア 3:24) 謙遜にならず、イエスを受け入れて神からの恵みを得るようになった貧しい人々たちから学ぼうとしません。弟子たちの側が、宗教指導者たちを満足させたりなだめたりするために、妥協して真理を水で薄めることはありません。イエスはそのことを例えの中で、裕福な男性に対する「父アブラハム」の言葉として次のように話します。

「あなたが生きている間に良い物を満喫し、一方ラザロが悪い物を受けたことを思い出さない。しかし今、ラザロはここで慰められ、あなたは苦悶しています。しかも、私たちとあなた方との間には大きくて深い裂け目が設けられており、ここからあなた方の所に行きたいと思う者たちもそうできず、人々がそこから私たちの所に渡ってくることもできません」。(ルカ 16:25, 26)

こうした劇的な変化が起きるのは正しいことです。威張っていた宗教指導者たちと謙遜な人たちの立場が逆転したのです。謙遜な人たちはイエスと共に働くことを

受け入れ、ついに爽やかさを味わい、神について十分に学べるようになったのです。(マタイ 11:28-30) この変化は数カ月後、律法契約が廃止され新しい契約が有効になった時に、ますますはっきり見られるようになります。(エレミヤ 31:31-33。コロサイ 2:14。ヘブライ 8:7-13) 西暦33年のペンテコステの日に神が聖霊を注がれる時、神の恵みを受けるのはパリサイ派の人たちや他の宗教指導者たちではなく、イエスの弟子たちであるということが、疑う余地なく明らかになるのです。



- ◇ イエスは状況の変化をどのように描写しましたか。
- ◇ 宗教指導者たちはヨハネとイエスが伝えた知らせにどのように反応しましたか。イエスは彼らの反応をどのように描写しましたか。
- ◇ 宗教指導者たちはどんなことを期待しましたか。その願いが聞かれなかったのはなぜですか。
- ◇ 宗教指導者たちとイエスの弟子たちとの間にある深い裂け目が、一層大きくなるのはいつのことでしたか。



## ユダヤに行く前にペレアで教える

ルカ 17:1-10 ヨハネ 11:1-16

しばらくの間、イエスは「ヨルダンを渡<sup>わた</sup>」った所にあるペレアという地域で教えてきました。(ヨハネ 10:40) これから、南にあるエルサレムに行くつもりです。

イエスは1人ではなく、弟子たちや徴税人<sup>ちようぜいにん</sup>や罪人など大勢の人と一緒にいます。(ルカ 14:25; 15:1) イエスの言動を批判するパリサイ派の人たちや律法学者たちもいます。迷い出た羊<sup>いっしょ</sup>、いなくなっていた息子<sup>うしよ</sup>、裕福な男性とラザロの例え話を聞いた後なので、彼らは考えることがたくさんありました。(ルカ 15:2; 16:14)

イエスは、恐らくパリサイ派の人たちから批判されたり冷笑されたりしたことを考えながら、弟子たちに注意を向けます。そして、ガリラヤで教えた幾つかのことをもう一度話します。

「信仰<sup>しんこう</sup>の妨げとなるものが生じることは避けられませんが、その経路となる人は悲惨<sup>ひさん</sup>です! ……注意しなさい。兄弟が罪を犯すなら強く警告し、悔い改めるなら許してあげなさい。その人が1日に7回あなたに罪を犯し、7回戻<sup>もど</sup>ってきて『悔い改めます』と言うとしても、許さなければなりません」。(ルカ 17:1-4) この最後の言葉を聞いたペテロは、兄弟を許すのは7回までかと質問したことを思い出したでしょう。(マタイ 18:21)

弟子たちはイエスのこの言葉に従って行動できるのでしょうか。弟子たちが、「さらに信仰<sup>しんこう</sup>を与えてください」と言うと、イエスはこう保証します。「からの種ほどの信仰<sup>しんこう</sup>があったなら、この黒桑<sup>くろくわ</sup>の木に、『引き抜かれて海に根を下ろせ!』と言っても、この木は従うでしょう」。(ルカ 17:5, 6) ある程度の信仰<sup>しんこう</sup>があるなら、非常に大きな事柄<sup>ことばら</sup>を成し遂げられるのです。

さらにイエスは、謙遜<sup>けんそん</sup>であることと、自分自身に対するバランスの取れた見方をするの大切さを使徒たちに教えます。「あなたたちのうちの誰<sup>だれ</sup>が、畑を耕したり

羊の番をしたりする奴隷<sup>どれい</sup>が戻<sup>もど</sup>った時に、『すぐここに来て、食卓<sup>しょくたく</sup>に着いて食事をしなさい』と言うのでしょうか。そうではなく、『私の夕食のために何か用意<sup>まえ</sup>し、前掛けをして、私が食べたり飲んだりし終わるまで給仕しなさい。その後は、食べたり飲んだりして構いません』と言うではありませんか。奴隷<sup>どれい</sup>が割り当てられた事をしたからといって、ありがたく感じたりするでしょうか。あなたたちも、割り当てられた事を全部した時、『私たちは役に立たない奴隷<sup>どれい</sup>です。当然すべき事をしたまでです』と言いなさい」。(ルカ 17:7-10)

私たちは皆、生活の中で神に仕えることを最優先にしなければなりません。また、神の家族の1人として神を崇拝<sup>すうはい</sup>する機会<sup>あた</sup>を与えられていることに感謝すべきです。

イエスがこの点を教えたすぐ後のことと思われますが、ラザロの姉妹たちでユダヤのベタニヤに住むマリアとマルタの所から、使いがやって来ます。その人は、「主よ、あなたが愛情<sup>あいだ</sup>を抱いている者が病気で」という伝言をイエスに伝えます。(ヨハネ 11:1-3)

イエスはラザロが重病だと聞いても、ショックを受けてぼうぜんとするのではなく、こう話します。「この病気は死で終わるのではなく、神に栄光をもたらし、そして神の子も栄光を受けます」。イエスはそこにさらに2日滞在し、それから弟子たちに、「もう一度ユダヤに行きましょう」と言います。弟子たちは、「ラビ、ついこの間ユダヤ人たちに石打ちにされそうになったのに、また行くのですか」と反対します。(ヨハネ 11:4, 7, 8)

するとイエスはこう答えます。「昼間は12時間あるのではないのでしょうか。誰<sup>だれ</sup>でも昼間に歩くなら何にもぶつかりません。人々<sup>ひとびと</sup>のための光によって見ることができるからです。しかし、誰<sup>だれ</sup>でも夜歩くなら何かにぶつかります。光がその人の内にないからです」。(ヨハネ 11:9,

10) ここでイエスが言おうとしていたのは、神が定めたイエスの地上での伝道期間はまだ終わっていない、ということだったようです。ですから、イエスは残っている時間を最大限に活用する必要があります。

イエスはさらに、「友のラザロは眠<sup>ねむ</sup>っていますが、私は起こしに行きます」と話します。弟子たちは、ラザロが休んでいて、そのうち回復すると思ったようで、「主よ、

眠<sup>ねむ</sup>っているのであれば、良くなるでしょう」と言います。そこでイエスははっきりと、「ラザロは死にました。……さあ、行きましょう」と言います。(ヨハネ 11:11-15)

トマスは、イエスがユダヤで殺される危険があると知っていましたが、ぜひイエスを支えたいと思い、他の弟子たちに、「私たちも行こう。共に死ぬのだ」と呼びかけます。(ヨハネ 11:16)



- ◇ イエスはどこで教えてきましたか。
- ◇ イエスはどんなことをもう一度教えましたか。イエスは謙遜<sup>けんそん</sup>さについて教えるためにどんな例えを話しましたか。
- ◇ イエスはどんな知らせを聞きましたか。トマスがイエスと共に死のうと言ったのはなぜでしたか。

## 「私は復活であり、命です」

ヨハネ 11:17-37

イエスはペレア<sup>はな</sup>を離れ、エルサレムから東に3<sup>き</sup>ほどの所にあるベタニヤの村の外れに來ます。マリアとマルタは兄弟ラザロを亡くしたばかりで悲しみに暮れています。大勢の人が2人<sup>きづか</sup>を氣遣うためにやって來ます。

マルタはイエスが來ていると知ると、イエスの所に急ぎ、「主よ、もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょう」と言います。マルタもマリアも、ラザロの死後4日間ずっとそのことを考えていたので



しょう。しかし、マルタは希望を捨てず、「あなたが求めるどんなことも神がかなえてくださると今でも信じています」と言います。(ヨハネ 11:21, 22) イエスがラザロを助けてくれると思っているのです。

イエスは、「あなたの兄弟は生き返ります」と答えます。マルタは、アブラハムや他の人たちが抱<sup>いだ</sup>いていた希望、つまり将来の地上での復活についてイエスが話しているのだと考えます。そして、自分がそれを信じていることを表し、「彼<sup>かれ</sup>が終わりの日の復活の際に生き返ることは知っています」と言います。(ヨハネ 11:23, 24)

とはいえ、イエスならすぐに助けることができるので

はないでしょうか。イエスは神から死を制する力<sup>あた</sup>を与えられていることをマルタに思い出させ、こう言います。「私に信<sup>しんこう</sup>仰<sup>いだ</sup>を抱く人は死んでも生き返ります。そして、生きていて私に信<sup>しんこう</sup>仰<sup>いだ</sup>を抱く人は皆、決して死ぬことがありません」。(ヨハネ 11:25, 26)

これは、その時生きている弟子たちが決して死なないという意味ではありません。イエスが話してきた通り、イエス自身も死にます。(マタイ 16:21; 17:22, 23) しかし、イエスに信<sup>しんこう</sup>仰<sup>いだ</sup>を抱くなら永遠の命が得られるのです。多くの人は復活後にその命を得ますが、この体制の終わりに生きている忠実な人たちの中には、決して死を経験しない人がいます。いずれにせよ、イエスに信<sup>しんこう</sup>仰<sup>いだ</sup>を抱く人は皆、永遠の死を経験しないのです。

イエスは、「私は復活であり、命です」と言いましたが、死後4日たつラザロを助けられるでしょうか。イエスがマルタに、「このことを信じますか」と質問すると、マルタは、「はい、主よ。あなたがキリストで、神の子で、世に來ることになっていた方だと信じています」と答えます。マルタは、イエスがこれから何かしてくださるに違<sup>ちが</sup>いがないと思い、急いで家<sup>もと</sup>に戻ってマリアに、「先生が來ていて、あなたを呼んでいます」と言います。(ヨハネ 11:25-28) それを聞いてマリアは家を出ます。人々<sup>ひとびと</sup>は彼女がラザロの墓に行くのだらうと思い、付いていきます。

ところがマリアはイエスの所へ行きます。そして、足元にひれ伏<sup>ふ</sup>して泣き、マルタと同じように、「主よ、もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょう」と言います。マリアや大勢の人が泣いているのを見ると、イエスは深くうめいて苦<sup>く</sup>悩<sup>なみだ</sup>し、涙を流します。それを見た人たちは、イエスがラザロを深く愛していたことを知ります。しかしある人たちは、生まれつき目が見えない男性を癒<sup>い</sup>やしたイエスが、ラザロの死を防げなかつたのだらうか、と言います。(ヨハネ 11:32, 37)





- ◇ イエスがベタニヤの近くに到着した時、どんな状況でしたか。
- ◇ マルタはどんな復活の希望を抱いていましたか。その希望はどんな根拠に基づいていましたか。
- ◇ マルタが、イエスは何かしてくださるに違いないと感じたのはなぜですか。

## ラザロの復活

ヨハネ 11:38-54

イエスはベタニヤの村の外れで、まずマルタに、それからマリヤに会います。そしてラザロの墓へ行きます。墓は洞窟で、入り口は石でふさがれています。イエスは、「石をどけなさい」と指示します。マルタは、イエスが何をしようとしているのかよく分からず、「主よ、もう臭くなっているに違いありません。4日たっています」と心配します。しかしイエスは、「信じるなら神の輝かしい力を

目にする、とあなたに言いませんでしたか」と答えます。(ヨハネ 11:39, 40)

石がどけられると、イエスは天を見上げてこう祈ります。「父よ、私の願いを聞いてくださったことを感謝いたします。常に聞いてくださることは知っていました。しかし、周りに立つ人々のために言っています。あなたが私を遣わされたことをこの人々が信じるためです」。イエ





スはこの祈りにより、これから行うことが神の力によるということをもその場の人々に示しました。その後イエスは大声でこう叫びます。「ラザロ、出てきなさい!」すると、ラザロが出てきます。手と足、そして顔にも埋葬用の布が巻かれたままです。イエスは、「ほどこいて、歩けるようにしてあげなさい」と言います。(ヨハネ 11:41-44)

マリアとマルタを気遣って訪ねてきた大勢のユダヤ人たちは、この奇跡を見てイエスに信仰を持ちます。しかし、ある人々はパリサイ派の人たちの所へ行き、イエスがしたことを話します。パリサイ派の人たちと祭司長はユダヤ人の高等法廷サンヘドリンを招集します。大祭司カヤファもサンヘドリンの一員です。彼らの中にはこう言う人もいます。「この男が多くのしるしを行っているが、私たちはどうすべきだろうか。このまま放っておいたら、皆が彼に信仰を持ち、ローマ人がやって来て、私たちの神殿も国民も奪い去ってしまう」。(ヨハネ 11:47, 48) 彼らはイエスが「多くのしるしを行っている」という目撃証言を聞きましたが、神がイエスを通して行っている事柄を喜びません。自分たちの立場と権威を守ることしか考えていないからです。

サドカイ派の人たちはラザロの復活に激しく動揺します。復活を信じていないからです。そのサドカイ派のカヤファがこう発言します。「皆さんは何も分かっています。国民全体が滅ぼされるよりも1人の人が民のた

めに死ぬ方が皆さんの得になる、ということを考えていません」。(ヨハネ 11:49, 50。使徒 5:17; 23:8)

カヤファは「独自の考えで言った」のではありません。彼が大祭司だったので、神がそう語らせたのです。カヤファは、自分たちの権威と影響力がこれ以上弱まらないように、イエスを殺すべきだと言っていました。しかしカヤファの言葉は、イエスの死がユダヤ人だけでなく、「各地に散る神の子供たち」全てのための贖いになることを示す預言でした。(ヨハネ 11:51, 52)

カヤファはサンヘドリンがイエスの殺害を計画するよう仕向けることに成功します。その計画を、サンヘドリンの成員でイエスに友好的なニコデモがイエスに伝えたのでしょうか。いずれにせよイエスは、神が定められた時より前に殺されることを避けて、エルサレム地域をすぐに離れます。



- ◇ ラザロの復活を目撃した人たちはどのような反応をしましたか。
- ◇ サンヘドリンの成員たちのどんな反応に邪悪さが表れていますか。
- ◇ カヤファはそれと気付かずに、神によってどんな預言を語りましたか。



# 重い皮膚病を癒やされた1人の人が感謝を示す

ルカ 17:11-19

イエスは自分を殺そうとするサンヘドリンの計画を知り、エルサレムの北東の方にあるエフライムという町に逃れます。そして、敵から離れたその場所で弟子たちと一緒に過ごします。(ヨハネ 11:54) でも、西暦33年の過ぎ越しが近づいているのでまた移動を始め、サマリアを通して北のガリラヤに向かいます。イエスが亡くなる前にその地域を訪れるのは、これが最後です。

イエスが旅を始め、村から村に移動していると、重い皮膚病の男性10人に会います。この病気にかかると、手足の指や、耳などの器官が徐々に失われる場合があります。(民数記 12:10-12) 律法下では、重い皮膚病の人は、「汚れている、汚れている!」と叫ばなければならず、ほかの人から離れて生活しなければなりませんでした。(レビ記 13:45, 46)

それで10人の男性は離れた所からイエスに向かって大声でこう言います。「イエス、先生、憐れみをお掛けください!」するとイエスはその人たちを見て、「自分を祭司に見せに行きなさい」と言います。(ルカ 17:13, 14) イエスはそう指示することによって律法への敬意を表しました。律法では、祭司たちが重い皮膚病が治ったかどうか判断し、その人を清いと宣言することになっていたからです。そうなれば、健康な人たちと一緒に暮らせるようになります。(レビ記 13:9-17)

10人の男性は奇跡を行うイエスの力に確信を抱いています。それで、癒やされる前に、祭司に会いに行き

ます。その途中、彼らのイエスに対する信仰は祝福されます。体が健康になっていくのを自分の目で見、また感じたのです。

清くなった9人の男性はそのまま行ってしまいます。でも1人は違いました。この人はサマリア人でしたが、引き返してイエスを捜します。イエスに深く感謝していたのです。そして、これが神による奇跡であることを認め、「大声で神をたたえ」ました。(ルカ 17:15) イエスを見つけると、男性は足元にひれ伏して感謝します。

イエスは自分と一緒にいる人たちにこう言います。「10人全員が癒やされたものではありませんか。では、ほかの9人はどこにいますか。神をたたえるためにも戻ってきたのは、この他国のの人だけなのですか」。それからイエスはサマリア人の男性に言います。「立って、行きなさい。あなたが良くなったのは信仰があったからです」。(ルカ 17:17-19)

イエスは10人の男性を癒やし、エホバ神から力を与えられていることを示しました。そして、10人のうちの1人はイエスに癒やされただけでなく、命の道を歩み始めました。今の時代、神がイエスを通してそうした癒やしを行うことはありません。しかし、イエスに信仰を抱くなら、永遠の命への道を歩むことができます。では私たちは、サマリア人の男性のように、その道を歩む機会が与えられていることに感謝を表すでしょうか。

- 
- ◇ イエスは自分を殺そうとする計画を知ってどこに逃れましたか。
  - ◇ 10人の重い皮膚病の男性がイエスから離れた所にいたのはなぜですか。イエスが彼らに祭司の所へ行くようにと言ったのはなぜでしたか。
  - ◇ サマリア人の男性が経験したことから、どんなことを学べますか。



## 人の子が現れる

ルカ 17:20-37

イエスはサマリアかガリラヤにいます。パリサイ派の人たちはイエスに、王国が来ることについて質問します。かれ彼らは王国が華々しく堂々と登場すると期待しているのです。しかしイエスはこう言います。「神の王国は目立つ様子で来るのではなく、また人々が『ここを見なさい!』とか『そこを!』とか言うのでもありません。見なさい、神の王国はあなた方のただ中にあります」。(ルカ 17:20, 21)

このイエスの言葉を、王国は神に仕える人たちの心の中にある、という意味に取る人もいます。しかし、そうではありません。王国はイエスが話していた相手、つまりパリサイ派の人たちの心の中ではなく、**かれ彼らのただ中にある**のです。神の王国の王として選ばれたイエスが、まさに彼らの目の前にいたからです。(マタイ 21:5)

イエスは、恐らくパリサイ派の人たちが去ってから、王国が来ることについて弟子たちに詳しく話します。まず、自分が王国の権威をもって臨在することについて、注意すべき点を教えます。「あなたたちが人の子の時を1日でも見たいと願う時が来ます。しかし、見られません」。(ルカ 17:22) イエスは、人の子が王国で支配するのはまだ先であると言っています。ある弟子たちはその時が早く来てほしいと思うでしょう。しかし、神が定めた時が来るまでずっと待たなければなりません。

イエスの話は続きます。「人々が『ここを見なさい!』とか『ここを見なさい!』とか言います。出ていったり後を追いかけてたりしてはなりません。稲妻が天の一方から他方まで光り輝くように、人の子も自分の日にそのようになるからです」。(ルカ 17:23, 24) 弟子たちは偽のメシアを追いかける必要はありません。イエスは、本物のメシアは多くの場所から見える稲妻のようだ、と言いました。ですから、イエスが王国の権威をもって臨在していることの証拠は、注意深い人たち全てにはっきり見えるのです。

それからイエスはその時のことを昔の出来事と比較し、人々がどのような態度を取るかを話します。「人の子の時にはちょうどノアの時代のようなことが生じます。……同じく、ちょうどロトの時代のようなことが生じます。人々は食べたり、飲んだり、買ったり、売ったり、植えたり、建てたりしていました。しかし、ロトがソドムから出た日に天から火と硫黄が降って全ての人を滅ぼしました。人の子が現れる日も同様です」。(ルカ 17:26-30)

イエスは、ノアの時代とロトの時代の人々が、食べたり、飲んだり、買ったり、売ったり、植えたり、建てたりといった普段通りの生活を送っていたために滅ぼされた、と言っているではありません。ノアもロトもその家族も、そういうことはしていました。でも、ほかの人たちは





神の意志を全く気にせず暮らし、自分がどんな時代にいるかを考えようとしませんでした。ですからイエスは、神の意志によく注意を払い、それを熱心に行うよう勧めています。それが、神が滅びをもたらす時に保護され、生き続ける方法なのです。

弟子たちは世の事柄に気を散らされないようにすべきです。イエスはこう言います。「その日、屋上にいる人は、家の中に持ち物があっても取りに下りてはならず、畑に出ている人も、物を取りに帰ってはなりません。ロトの妻のことを思い出さないで」。(ルカ 17:31, 32) ロトの妻は塩の柱になってしまいました。

イエスは、人の子が王として支配する時に生じる状況をさらにこう説明します。「その夜、2人が1つの寝床にいて、一方は連れていかれ、他方は捨てられます」。(ルカ 17:34) ある人たちは救われますが、ある人たちは捨てられて命を失います。

すると弟子たちは、「主よ、どこですか」と質問します。それに対しイエスは、「死体のある所にはワシも集まります」と答えます。(ルカ 17:37) 弟子たちは鋭い視力を持つワシのように、本物のキリスト、つまり人の子の元に集まります。その時、イエスは信仰を抱く弟子たちを命を救う真理で養います。

- 
- ◇ 王国がパリサイ派の人たちのただ中にあるとはどのような意味ですか。
  - ◇ キリストの臨在が稲妻のようであるとはどういう意味ですか。
  - ◇ イエスの弟子たちが、人の子がいつ来るかに注意を払うべきなのはなぜですか。
- 



## いの けん そん 祈りと謙遜さは大切

ルカ 18:1-14

イエスは弟子たちに<sup>ねば</sup>粘り強く<sup>いの</sup>祈ることの大切さを例えて教えたことがあります。(ルカ 11:5-13) 今イエスはサマリアかガリラヤにいますが、<sup>いの</sup>祈のを<sup>あきら</sup>諦めてはならないことを、例えを使ってもう一度教えます。こう話します。

「ある町に、神への<sup>おそ</sup>畏れも人への敬意もない裁判官がいました。その町には1人のやもめもいて、しきりに<sup>かれ</sup>彼の元に来ては、『<sup>そしやう</sup>訴訟の相手との間で公正な裁判がなされるようにしてください』と言いました。裁判官は



しばらくは気が進みませんでしたが、その後、心の中で言いました。『私は神を<sup>おそ</sup>畏れず<sup>だれ</sup>誰も敬いはしないが、このやもめがうるさく言うてくるから、公正な裁判がなされるようにしてやろう。そうすれば、<sup>うった</sup>しつこく訴えて私を困らせることはないだろう』。(ルカ 18:2-5)

どんなことを学べますか。イエスは次のように話します。「正しくない人とはいえ、この裁判官が言ったことを聞きましたか。では神は、昼も夜もご自分に向かって<sup>さけ</sup>叫ぶ選ばれた者たちのために必ず公正が行われるようにしてくださらないでしょうか。神は彼らに対して<sup>かれ</sup>辛抱して<sup>しんぼう</sup>います」。(ルカ 18:6, 7) イエスは天の父について何を教えていたのでしょうか。

エホバ神がその裁判官に似ているというのではありません。<sup>ねば</sup>粘り強く<sup>たの</sup>頼まれると正しくない人間の裁判官でも応じるのであれば、神は間違いなくそうしてくださるということです。神は正しく善良なので、<sup>あきら</sup>諦めずに<sup>いの</sup>祈るなら聞き届けてくださいます。イエスの次の言葉からもそう確信できます。「[神は]速やかに公正が行われるようにしてくださるのです」。(ルカ 18:8)

権力を持つ人や裕福な人が<sup>ゆうふく</sup>優遇され、立場の低い人や貧しい人が公正に扱われないことはよくあります。でもそれは神の物事の扱い方とは違っています。時が来れば、神は<sup>じゃあく</sup>邪悪な人々を<sup>ばつ</sup>罰し、神に仕える人たちに永遠の命を与えます。そのようにして公正を行うのです。

では、このやもめのような<sup>しんこう</sup>信仰を抱き、神が「速やかに公正が行われるようにしてくださる」ことを本当に確信している人はどれくらいいるのでしょうか。イエスは<sup>ねば</sup>粘り強く<sup>いの</sup>祈るべきであると教えた後、<sup>いの</sup>祈りに対する<sup>しんこう</sup>信仰について話し、「人の子は来る時、このような<sup>しんこう</sup>信仰を地上で本当に見つけるのでしょうか」と言います。(ルカ 18:8) これは、キリストが来る時にそうした<sup>しんこう</sup>信仰はあまり見られないことを示しているようです。

イエスの話を聞いている人たちの中には、自分の<sup>しん</sup>信仰は<sup>こ</sup>大丈夫だと考えている人がいるようです。自分は正しいと思い込み、ほかの人を見下しています。イエスはそうした人々に対し、次のような例えを話します。

「2人の人が<sup>いの</sup>祈りをするために<sup>しんてん</sup>神殿に上りました。1人はパリサイ派の人、もう1人は<sup>ちやうぜいにん</sup>徴税人でした。パリサイ派の人は立って、心の中でこう祈り始めました。『神よ、私がほかの人々のように、<sup>ひとびと</sup>ゆすり取る者、不正な者、<sup>かん</sup>姦淫をする者ではなく、この<sup>ちやうぜいにん</sup>徴税人のようでもないことを感謝します。私は週に2回断食をし、得る物全ての10分の1を納めています』」。(ルカ 18:10-12)

パリサイ派の人たちは、自分が正しいことを見せつけ

ることで有名です。人に感銘<sup>かんめい</sup>を与えたいのです。彼ら<sup>かれ</sup>は月曜日と木曜日に断食<sup>だんしょく</sup>をすることにしています。それらの日は大きな市場が開かれてにぎわうので、大勢の人から注目<sup>ちゆもく</sup>してもらえます。彼らは小さな薬草<sup>かれ</sup>であってもきょうめんに10分の1を納め<sup>なめ</sup>ます。(ルカ 11:42) 数カ月前<sup>いくばく</sup>に、彼らは一般<sup>いっぱん</sup>の人たちを軽蔑<sup>けいべつ</sup>していることをはっきり示し、こう言いました。「律法<sup>りっぽう</sup>[つまり、律法に対するパリサイ派の解釈<sup>かいしやく</sup>]を知らないあの群衆<sup>ぐんしゆ</sup>は神に見放<sup>みはな</sup>されているのだ」。(ヨハネ 7:49)

イエスは続けます。「一方<sup>ちようぜいにん</sup>、徴税人<sup>はな</sup>は離れた所に立って、天を見上げようとせず、胸をたたきながら、『神よ、

罪人の私に慈悲<sup>じひ</sup>をお示<sup>し</sup>してください』と言いました」。<sup>ちよう</sup>徴税人<sup>ぜいにん</sup>は謙遜<sup>けんそん</sup>に自分の罪深さを認め<sup>め</sup>ます。イエスは最後にこう言います。「あなた方に言いますが、この人はパリサイ派の人より正しいことが明らかになり、家に帰っていき<sup>かへ</sup>ました。高慢<sup>こうまん</sup>になる人は皆辱め<sup>みなはずかし</sup>られますが、謙遜<sup>けんそん</sup>になる人は高く評価<sup>けふか</sup>されるのです」。(ルカ 18:13, 14)

このようにイエスは、謙遜<sup>けんそん</sup>であるようにとはっきり教えます。これは弟子たちにも大切な教訓です。当時の社会では、自分が正しいと信じて疑わ<sup>うたが</sup>ないパリサイ派の人たちが立場や地位を重視<sup>じゆし</sup>していたからです。もちろん、謙遜<sup>けんそん</sup>さはイエスに従<sup>したが</sup>う全ての人にとって重要です。



- ◇ イエスは、やもめの訴え<sup>うった</sup>を聞き入れた裁判官の例えでどんなことを教えていましたか。
- ◇ イエスは、自分が来る時にどんな信仰<sup>しんこう</sup>を見たいと思っていますか。
- ◇ イエスの弟子たちは、パリサイ派の人たちが示<sup>し</sup>していたどんな態度<sup>さうど</sup>を避けるべきですか。



# 離婚と子供たちへの愛について教える

マタイ 19:1-15 マルコ 10:1-16 ルカ 18:15-17

イエスと弟子たちはガリラヤを出発してヨルダン川を渡り、ペレアを南下します。イエスはこの前ペレアを訪れた際、パリサイ派の人たちに離婚に関する神の規準について話しました。(ルカ 16:18) 今回、彼らはイエスを試そうとして同じ話題を持ち出します。

モーセは、妻に「恥ずべき点」があれば夫は離婚できるとしました。(申命記 24:1) 離婚の根拠については、さまざまな意見があります。かなりささいな点も根拠になると考える人たちもいます。それでパリサイ派の人たちは、「どんな理由でも、妻を離婚してよいのでしょうか」とイエスに質問します。(マタイ 19:3)

イエスは巧みに答えます。一般の見方を引き合いに出すことなく、神の考えに人々の注意を向けたのです。「あなた方は読まなかったのですか。人間を創造した方は、初めから男性と女性に造り、『それで、男は父と母から離れて妻にしっかり付き、2人は一体となる』と言いました。それで、2人はもはや別々ではなく、一体です。ですから、神が結び合わせたものを、人が離してはなりません」。(マタイ 19:4-6) 神はアダムとエバを結婚させた時、結婚を解消する方法は定めませんでした。

パリサイ派の人たちは反論し、「では、なぜモーセは、離婚証書を与えて妻を離婚するように、と指示したのですか」と質問します。(マタイ 19:7) イエスはこう答えます。「モーセはあなた方の頑固さを考えて、妻との離婚に関して譲歩したのです。初めからそうになっていたわけではありません」。(マタイ 19:8) 「初め」というのは、モーセの時代のことではなく、神がアダムとエバを結婚させた時のことです。

それからイエスは重要な真理を教えます。「あなた方に言いますが、性的不道德[ギリシャ語、ポルネイア]以外の理由で妻を離婚して別の女性と結婚する人は、姦

淫をすることになります」。(マタイ 19:9) 聖書が離婚の正当な根拠としているのは、性的不道德だけです。

それで弟子たちは、「妻に関して男の立場がそのようなものであれば、結婚するのは良いことには思えません」と言います。(マタイ 19:10) 結婚を考えている人は、その絆が永遠のものであることを覚えておくべきです。

次にイエスは独身について話します。ある人は生まれつき障害があり、性関係を持ってないので結婚しません。また、障害を負わされて性関係を持てなくなったために結婚しない人もいます。さらに、王国に関連した事柄を十分に行いたいと思っているので、性関係を楽しむことを自制し、結婚しない人もいます。それでイエスはこう勧めます。「[独身]を受け入れることができる人は、受け入れなさい」。(マタイ 19:12)

この時、人々が幼い子供たちをイエスの所に連れてきます。しかし弟子たちはその人たちを叱ります。イエスに迷惑を掛けてはいけなそう考えたのでしょうか。イエスはそれを見て憤慨し、こう言います。「子供たちを私の所に来させなさい。止めようとしてはなりません。神の王国はこの子供たちのような人のものだからです。はっきり言いますが、幼い子供のように神の王国を受け入れる人でなければ、決してそこに入れません」。(マルコ 10:14, 15。ルカ 18:15)

これはとても大切な教訓です。神の王国に入るには、幼い子供のように従順で教えやすい人でなければなりません。イエスは子供たちが大好きです。それで、その子たちを抱き寄せて祝福し始めます。イエスはそのような優しい愛を、「幼い子供のように神の王国を受け入れる人」全てに対して抱いているのです。(ルカ 18:17)

- ・ イエスは離婚<sup>りこん</sup>についての神の見方を教える
  - ・ 独身の立場
- ・ 幼い子供<sup>こども</sup>のようではない



- ◇ パリサイ派の人たちは離婚<sup>りこん</sup>のことで、どのようにイエスを試しましたか。
- ◇ イエスは離婚<sup>りこん</sup>に関する神の規準についてどんなことを教えましたか。
- ◇ イエスの弟子のうち、ある人たちが独身でいるのはなぜですか。
- ◇ イエスは子供たちへの接し方を通してどんなことを教えましたか。

## 若くて裕福な支配者の質問に答える

マタイ 19:16-30 マルコ 10:17-31 ルカ 18:18-30

イエスはエルサレムを目指してペレアを旅しています。すると若くて裕福な支配者がイエスの所に走ってきてひざまずきます。この人は「ある支配者」と言われていますが、会堂の主宰役員かサンヘドリンの成員なのでしょう。こう質問します。「善い先生、永遠の命を受けるには何をしなければなりませんか」。(ルカ 8:41; 18:18; 24:20)

イエスは、「なぜ私のことを善いと呼ぶのですか。神以外に善い者は誰もいません」と答えます。(ルカ 18:19) この若い支配者はラビたちがしているように、「善い」という言葉を称号として使っているようです。イエスは優れた教師です。それでもイエスは、「善い」という称号にふさわしいのは神だけであると教えます。

イエスはその人に、「命を受けたいなら、おきてを絶えず守りなさい」と勧めます。男性は、「どのおきてですか」と尋ねます。イエスは十戒から、殺人、姦淫、盗み、偽りの証言、親を敬うことについての命令を引用します。それから、もっと重要な命令、「隣人を自分自身のように愛さなければならない」を付け加えます。(マタイ 19:17-19)

男性は、「その全てを守ってきました。まだ何が足りないのですか」と言います。(マタイ 19:20) 永遠の命を得るにはさらに何か華々しいことをしなければならないと考えていたのかもしれませんが。イエスは相手のひたむきさを感じ取り、その人に「愛を抱」きます。(マルコ 10:21) しかし、その人には1つ、障害となるものがありました。

所有物に強い愛着があったのです。それでイエスはこう言います。「あなたには1つのことが欠けています。行って、持っている物を全て売り、貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、天に宝を持つようになります。そ





れから来て、私の弟子になりなさい」。その人は、何のお返しもできない貧しい人たちにお金を与えて、イエスの弟子になることができたはずでした。しかしその人は悲しげに、その場を立ち去ります。イエスはそれを見て憐れみを感じたことでしょう。その人は「多くの資産」に愛着を抱いていたので、本物の宝が見えなくなっていたのです。(マルコ 10:21, 22) イエスはこう言います。「お金を持つ人々が神の王国に入っていくのは何と難しいのでしょうか」。(ルカ 18:24)

イエスは弟子たちを驚かせる言葉をさらに語ります。「実際、裕福な人が神の王国に入るよりは、ラクダが縫い針の穴を通る方が簡単です」。それで弟子たちは、「いったい誰が救われるのでしょうか」と尋ねます。救われるのは難し過ぎることなのでしょうか。イエスは弟子たちをじっと見てこう答えます。「人には不可能なことも神には可能です」。(ルカ 18:25-27)

ペテロはその裕福な男性とは違う生き方をしてきたことを示し、「見てください！ 私たちは全てのものを後にして、あなたに従ってきました。私たちは何を受け取るのでしょうか」と質問します。イエスはそれに答えて、正しい生き方がどんな結果になるかを教えます。「再創造の際、人の子が栄光の座に座する時に、私に従ってきたあなたたちも12の座に座り、イスラエルの12部族を裁きます」。(マタイ 19:27, 28)

イエスは、エデンの園に見られた状態が地上に再創

造される時のことを言っていました。将来ペテロや他の弟子たちは報いを受け、イエスと共に地上の楽園を支配するのです。その報いはどんな犠牲でも払う価値がある素晴らしいものです。

報いは将来だけでなく、今でも経験できます。イエスはこう言います。「神の王国のために、家、妻、兄弟、親、あるいは子供を後にした人は皆、この時期に何倍も得て、新しい体制で永遠の命を得ます」。(ルカ 18:29, 30)

弟子たちはどこへ行っても、仲間の崇拜者たちとの素晴らしい友情を楽しめます。それは家族よりも強く貴重な絆です。残念ながら、先ほどの若くて裕福な支配者は、そうした祝福や神の天の王国での命を得損なってしまったと言えるでしょう。

イエスはさらにこう話します。「しかし、多くの最初の人たちが最後に、最後の人たちが最初になります」。(マタイ 19:30) これはどういう意味でしょうか。

その若い支配者は、ユダヤ人の指導者たちと同じ「最初の人たち」に属していました。神の命令を守る人であり、イエスの弟子となって多くの良いことを行える見込みがありました。しかし、お金や所有物を第一にしていたのです。対照的に、地の民とされる一般の人たちはイエスの教えが真理であり、命に導くものであることを理解するようになりました。いわば「最後の人たち」が「最初」になったのです。彼らには、イエスと共に天で王座に座し、地上のパラダイスを支配する希望があります。

- ◇ どんな人がイエスの所にやって来ましたか。
- ◇ イエスが「善い」と呼ばれることを拒んだのはなぜですか。
- ◇ イエスは弟子たちにどんな報いを約束しましたか。
- ◇ 「最初の人たちが最後」に、「最後の人たちが最初」になるとはどういう意味ですか。

## ブドウ園の労働者の例え話

マタイ 20:1-16

イエスはペレアで、「多くの最初の人たちが最後に、最後の人たちが最初になります」と教えました。(マタイ 19:30) それから、その点を裏付けるため、ブドウ園の労働者の例え話を始めます。

「天の王国は、ある家の主人のよう……です。主人は、ブドウ園の労働者を雇うために朝早く出掛けました。労働者たちと1日1デナリで合意し、ブドウ園に行かせました。午前9時ごろにも出掛けると、仕事がなくて広場に立っている人たちがいました。そこで、『あなたたちもブドウ園に行きなさい。相応の賃金を払います』と言いました。それでその人たちは行きました。主人は昼の12時ごろと午後3時ごろにも出掛けて、同じようにしました。最後に、午後5時ごろに出掛けて、ほかにも立っている人たちを見つけ、言いました。『なぜ仕事をしないで一日中ここに立っていたのですか』。その人たちは言いました。『誰も雇ってくれなかったからです』。主人は言いました。『あなたたちもブドウ園に行きなさい』。(マタイ 20:1-7)

この話を聞いていた人々は、「天の王国」や「家の主人」という言葉を聞いてエホバ神について考えたことでしょう。聖書ではブドウ園の所有者はエホバを表しているからです。ブドウ園とはイスラエル国民のことでした。(詩編 80:8, 9。イザヤ 5:3, 4) イエスの話では、律法契約に入っている人たちがブドウ園の労働者に例えられています。しかしイエスが語っているのは、過去ではなく、その当時の状況です。

離婚の問題についてイエスを試そうとしたパリサイ派のような宗教指導者たちは、神への崇拜のために働き続けていると見なされています。ですから、丸1日働いて1デナリの賃金を期待している労働者のようです。

そのような宗教指導者たちは一般のユダヤ人を、ブ

ドウ園で短時間だけ働く労働者のように、神にそれほど奉仕していない人たちと見ています。イエスの例え話ではそれらの人たちは朝の9時ごろ、昼の12時ごろ、午後3時ごろ、午後5時ごろに雇われた人たちです。

イエスに従う人々は、「神に見放されている」と見なされています。(ヨハネ 7:49) 漁師などの仕事をしてきた人たちです。しかし、西暦29年の秋に「ブドウ園の主人」はイエスを遣わし、そのような立場の低い人たちに、弟子となって神のために働くよう呼び掛けました。彼らはイエスが述べた「最後の人たち」であり、午後5時ごろブドウ園に雇われた人に当たります。

イエスはこの例え話の最後で、1日の終わりごろのことを説明します。「夕方になった時、ブドウ園の主人は責任者に言いました。『労働者たちを呼んで、賃金を払いなさい。最後の人から順に最初の人までです』。午後5時の人たちが来て、それぞれ1デナリを受け取りました。それで、最初の人たちは来た時、もっと受け取れると考えましたが、やはり1デナリずつでした。それを受け取ると、家の主人に文句を言い始め、『この最後の人たちは1時間働いただけです。それなのに、焼け付く暑さの中で一日中働いた私たちと同じ扱いなのですか!』と言いました。しかし主人はその1人に言いました。『あなたに不当なことは何もしていません。1デナリで合意したではありませんか。自分の分を受け取って、行きなさい。この最後の人にもあなたと同じように与えたいのです。私は自分のもので望むことをしてもいいわけではありませんか。それとも、私が善良なので、あなたはねたむのですか』。このように、最後の人たちが最初に、最初の人たちが最後になります」。(マタイ 20:8-16)

弟子たちはその言葉の意味を知りたいと思ったこと



でしょう。自分のことを「最初の人たち」と考えていたユダヤ人の宗教指導者たちは、どのようにして「最後」になるのでしょうか。イエスの弟子たちは、どのようにして「最初」になるのでしょうか。

イエスの弟子たちは宗教指導者たちから「最後の人たち」と見られていましたが、1日分の賃金を受け取るにより「最初」になります。神はイエスの死とともにイスラエル国民を捨て、新しい国民として「神のイスラエル」を選びます。それは大きな変化でした。（ガ

ラテア 6:16。マタイ 23:38）バプテストのヨハネも、<sup>せい</sup>聖霊によるバプテストについて述べた時に、新しい「神のイスラエル」となる人たちのこと<sup>ふ</sup>に触れました。「最後の人たち」が最初になったのは、彼らが<sup>かれ</sup>聖霊によるバプテストを受け、「地上の最も遠い所にまで」イエスの証人になるという特別な仕事<sup>あた</sup>を与えられた時です。（使徒 1:5, 8。マタイ 3:11）イエスが述べた大きな変化の意味を理解した弟子たちは、「最後」になった宗教指導者たちからの激しい反対を予期したことでしょう。

- ◇ 「ブドウ園の主人」がエホバを表していると言えるのはなぜですか。ブドウ園の「労働者たち」は誰<sup>だれ</sup>ですか。
- ◇ イエスがこの例え話で述べている大きな変化とは何のことですか。
- ◇ その変化が明らかになるのはいつですか。



## 使徒たちは再び目立った立場を求める

マタイ 20:17-28 マルコ 10:32-45 ルカ 18:31-34

イエスと弟子たちは南のエルサレムを目指してペレアを旅してきました。その旅の終わりごろ、エリコ近辺のヨルダン川を渡ります。西暦33年の過ぎ越しを祝うため彼らと一緒に旅行する人たちもいます。

イエスは過ぎ越しの日までにエルサレムに着けるよう、しっかりした足取りで弟子たちの先頭を歩いています。しかし、弟子たちは不安です。少し前、ラザロが死んでイエスがペレアからユダヤに入ろうとした時、トマスは仲間の弟子たちに、「私たちも行こう。共に死ぬのだ」と言いました。(ヨハネ 11:16, 47-53) エルサレムに行くのは危険です。弟子たちの気持ちはよく分かります。

イエスはこれから起こる事柄に備えさせるため、使徒たちを脇に連れていき、こう言います。「私たちはエルサレムに上っていきます。人の子は祭司長と律法学者たちに引き渡され、死に値すると断罪されて異国のの人々に引き渡されます。人の子はあざけられ、むち打たれ、杭に掛けられて死にます。そして3日目に生き返ります」。(マタイ 20:18, 19)

イエスが自分の死と復活について弟子たちに語るのはこれが3度目です。(マタイ 16:21; 17:22, 23) でもこの時イエスは、自分は杭に掛けられて死ぬ、と言いました。弟子たちは聞いても意味が分かりません。恐らく、イスラエルの王国が地上に回復されるのを期待していたのでしょう。キリストと共に地上の王国で栄光と栄誉を受けたいのです。

使徒であるヤコブとヨハネの母親(サロメと思われる)も一緒に旅行していました。イエスはそれら2人の使徒たちに「雷の子たち」を意味する名前を与えました。2人の気性が激しかったからでしょう。(マルコ 3:17. ルカ 9:54) この使徒たちは以前から、キリストの王国で目立った立場を得たいという野心を抱いていま



した。母親はそのことを知り、息子たちの代わりにイエスに近づき、身をかがめてイエスに頼み事をします。イエスが「願いは何ですか」と聞くと、母親は、「この息子たちがあなたの王国で1人はあなたの右に、1人は左に座れるようにしてください」と答えます。(マタイ 20:20, 21)

実際のところ、これはヤコブとヨハネの願いでした。イエスはすでに、自分がこれから恥をかかされつらい経験をすると言っていました。それで2人に、「あなたたちは、自分が何を求めているか分かっていません。私が飲もうとしている杯から飲むことができますか」と質問します。2人は、「できます」と答えます。(マタイ 20:22) まだ自分の言っていることの意味が分かっていないようです。

それでも、イエスはこう言います。「確かに、あなたたちは私の杯から飲むでしょう。しかし、私の右また左に座ることは、私が決めることではありません。その場所には、そこに座る者たちのために、天にいる私の父によって用意されています」。(マタイ 20:23)

ヤコブとヨハネの願いを聞いて、他の10人の使徒たちは怒ります。以前に使徒たちの間で誰が一番偉いのかという口論があった時、思ったことをずばずば言った

のはヤコブとヨハネだったのかもしれませんが。(ルカ 9:46-48) それはともかく、この出来事から、より小さな者として行動するようにというイエスの教えを12使徒が当てはめていなかったことが明らかになりました。目立った立場を得たいという欲求は根深いものでした。

イエスは弟子たちの口論とその結果生じた陰険な雰囲気<sup>ふんいき</sup>を解決するために行動します。12人を呼び集め、愛を込めてこう助言します。「あなたたちは、諸国の支配者と見なされている人たちが威張り<sup>いば</sup>、偉い人たちが権威<sup>けんい</sup>を振るうことを知っています。あなたたちの間ではそうであってはなりません。偉くなりたい人は奉仕者<sup>ほうし</sup>でなければならず、1番でありたい人は皆の奴隷<sup>どれい</sup>でなければなりません」。(マルコ 10:42-44)

イエスは素晴らしい手本を残しました。それでこう言います。「ちょうど人の子が、仕えてもらうためではなく、仕えるため、また自分の命を、多くの人と引き換える贖い<sup>あがな</sup>として与えるために来たのと同じです」。(マタイ 20:28) 3年以上にわたり、イエスは他の人に仕えてきました。そして人類全体のために死ぬことまでです。弟子たちもキリストに倣い<sup>なら</sup>、仕えてもらうよりも仕えたい、目立った立場を求めるのではなく、より小さな者になりたいという気持ちを持たなければならないのです。

- 
- ◇ イエスはこれから生じる出来事に弟子たちを備えさせるため、どんなことをしましたか。
  - ◇ 2人の弟子はイエスにどんな頼み事をしましたか。他の弟子たちはどんな反応をしましたか。
  - ◇ 弟子たちが目立った立場を得たいという欲求を示した時、イエスはどうしましたか。

# 盲目の男性を癒やし、ザアカイを助ける

マタイ 20:29-34 マルコ 10:46-52 ルカ 18:35-19:10

イエスは一緒に旅をしている人たちと共にエリコに着きます。そこからエルサレムまでは歩いて1日で着きます。エリコは2つの町から成っていました。古い方のエリコは、ローマ時代に建てられた新しい方のエリコから1.6<sup>キロ</sup>ほどの所にありました。イエスと人々が片方の町から出てくると、2人の盲目の物乞いがざわめきを聞き付けます。その1人の名前はバルテマイです。

イエスがそばを通っていると聞くと、バルテマイともう1人の男性は、「主よ、憐れみをお掛けください、ダビデの子よ!」と叫び始めます。(マタイ 20:30) ある人たちは静かにしているようにと厳しく言いますが、2人はますます大声で叫びます。騒ぎに気が付いたイエスは足を止め、叫んでいる人たちを連れてくるようにと言います。人々は2人の所に行ってその片方に、「勇気を出して、立ち上がりなさい。あなたをお呼びだ」と伝えます。(マルコ 10:49) するとその人は大喜びし、外

衣を脱ぎ捨てて躍り上がり、イエスの所に行きます。

イエスは、「何をしてほしいのですか」と尋ねます。すると2人は、「主よ、目が見えるようにしてください」と頼み込みます。(マタイ 20:32, 33) かわいそうに思ったイエスは2人の目に触れます。そして1人に向かって、「行きなさい。あなたが良くなったのは信仰があったからです」と言います。(マルコ 10:52) すると2人とも目が見えるようになり、神をたたえ始めました。起きた出来事を見た人々も神を賛美します。そして、盲目だった2人はイエスの後に従い始めます。

非常に大勢の人に取り囲まれながらイエスはエリコの中を進んでいきます。盲目の2人を癒やした人を一目見たいと皆が思っています。イエスの元に前後左右から人が押し寄せているので、イエスの姿をちらりとさえ見ることができない人もいます。エリコとその周辺地域の徴税人の長であるザアカイもその1人です。背が低いザアカイには何が起きているか見えません。それで先の方に走って行って、エジプトイチジク(またはイチジクグワ)の木に登ります。そこからだと全てが見えます。近々に来たイエスは木の上にいるザアカイを見て、「ザアカイ、急いで下りてきなさい。私は今日あなたの家に必ず行きます」と言います。(ルカ 19:5) それでザアカイは下りてきて急いで家に戻り、大切な客を迎える準備をします。

このやりとりを見た人たちは文句を言い始めます。罪人と見なされているような男の所へイエスが客として行くのはふさわしくないと思っているのです。ザアカイは徴税の仕事の際、不正直な方法で人々からお金を巻き上げ、裕福になっていたからです。

イエスがザアカイの家に入ると人々は、「罪人の家に客として行った」と不平を言います。でもイエスはザア





カイが悔い改める可能性を見ていました。イエスの期待は裏切られませんが、ザアカイは立ち上がり、イエスにこう言ったのです。「主よ、持ち物の半分を貧しい人々に与えますし、ゆすり取ったものは何でも4倍にして返します」。(ルカ 19:7, 8)

本当に悔い改めていることがよく分かります。ザアカイは、誰からどのくらい巻き上げていたかを徴税帳簿から計算できたようです。そして4倍にして返すと誓いました。これは、律法で規定されている以上の額を払うことを意味していました。(出エジプト記 22:1。レビ記 6:2-5) それだけでなく、自分の持ち物の半分を貧しい人たちに与えるまで約束したのです。

イエスはザアカイが悔い改めたことがはっきり分かったのでうれしく思い、こう言います。「今日この家は救われました。この人もアブラハムの子だからです。人の子は、迷い出た人を捜して救うために来たのです」。(ルカ 19:9, 10)

最近イエスは、いなくなっていた息子についての例え話をし、迷い出た人の状況に注意を向けたばかりです。(ルカ 15:11-24) そして今、いなくなっていたも同然の人が見つかるという実例を示したのです。宗教指導者やその支持者たちはイエスに不平を言い、ザアカイのような人に注目したことでイエスを批判します。それでもイエスは、アブラハムの子で迷い出た人たちを捜し、連れ戻す努力を続けます。

- 
- ◇ イエスはどこで2人の盲目の男性に出会いましたか。  
イエスは2人のために何をしましたか。
  - ◇ ザアカイとはどんな人でしたか。ザアカイは本当に悔い改めていることをどのように示しましたか。
  - ◇ イエスのザアカイへの接し方からどんな教訓を学べますか。
- 



## 10ミナの例え話

ルカ 19:11-28

イエスはエルサレムに向かう途中<sup>とちゅう</sup>ですが、まだ弟子たち<sup>いっしょ</sup>と一緒にザアカイの家<sup>い</sup>にいます。弟子たちは、イエスが王となる「神の王国」がすぐにも設立<sup>し</sup>されると思<sup>こ</sup>い込んでいます。(ルカ 19:11) その誤解<sup>ご</sup>を解<sup>と</sup>くため、イエスは王国の設立<sup>し</sup>がまだ遠い将来であることを示す例え話を語ります。

「ある高貴な生まれの男性<sup>もど</sup>が、王権<sup>もど</sup>を確立<sup>もど</sup>して戻<sup>もど</sup>るために遠く<sup>もど</sup>の土地へ旅行に出ました」。(ルカ 19:12) そうした旅行は時間がかかります。「ある高貴な生まれの男性<sup>もど</sup>」とはイエスのことで、イエスは「遠く<sup>もど</sup>の土地」である天に旅をし、そこで天の父から王権<sup>もど</sup>を与えられます。

「高貴な生まれの男性<sup>もど</sup>」は旅に出る前に10人の奴隷<sup>どれい</sup>を呼び、それぞれに1ミナ分の銀貨<sup>あ</sup>を与えます。そして、「私が戻<sup>もど</sup>って来るまでこれで商売<sup>あ</sup>をせよ」と言います。(ルカ 19:13) ミナという単位は、かなりの高額です。1ミナは、畑仕事3カ月分の給料よりも多いのです。

弟子たちは10人の奴隷<sup>どれい</sup>が自分たちを表すと分かったでしょう。イエスは以前にも彼ら<sup>かれ</sup>を収穫<sup>しゅうかく</sup>のための働き手に例えたからです。(マタイ 9:35-38) もちろん、イエスは彼ら<sup>かれ</sup>に収穫<sup>しゅうかく</sup>した穀物<sup>ひとひと</sup>を持ってくるよう言っていたのではありません。人々<sup>ひと</sup>を弟子とし、神の王国で支配<sup>し</sup>を行う人を増やすように、と言っていたのです。弟子たちはその活動のために自分の時間や体力や資産を用います。

イエスは続きをこう話します。「市民は[高貴な生まれの男性<sup>もど</sup>]を憎<sup>にく</sup>み、使節団<sup>し</sup>を後から送って、『あなたが私たちの王になることは望みません』と言わせました」。(ルカ 19:14) 弟子たちは、ユダヤ人たちがイエスを受け入れないこと、イエスを殺そうとまでする人がいることを知っています。ユダヤ人の多くはイエスが亡くなり天へ行<sup>はくがい</sup>った後、その弟子たちを迫害<sup>はくがい</sup>することにより、イエスに対する敵対的な態度<sup>あ</sup>を明らかにします。彼らは、

イエスが自分たちの王になることを望んでいません。(ヨハネ 19:15, 16. 使徒 4:13-18; 5:40)

例え話の10人の奴隷<sup>どれい</sup>たちは、「高貴な生まれの男性<sup>もど</sup>」が「王権<sup>あ</sup>」を与えられて戻<sup>もど</sup>って来るまで、自分たち<sup>たく</sup>に託されたミナをどのように用いるのでしょうか。イエスはこう続けます。「やがて主人は王権<sup>もど</sup>を確立<sup>もど</sup>して戻<sup>もど</sup>った時、お金<sup>あ</sup>を与えておいた奴隷<sup>どれい</sup>たちを呼び寄せました。商取引<sup>あ</sup>でもうけたものを確かめるためでした。最初<sup>あ</sup>の人が進み出て言いました。『主よ、頂いた1ミナで10ミナをもうけました』。主人は言いました。『よく頑張りまし<sup>かんば</sup>た、あなたは良い奴隷<sup>どれい</sup>です! 非常に小さな事<sup>けんい</sup>において忠実であることを示したので、10の町に対する権威<sup>あ</sup>を与えましょう』。2番目の人が来て言いました。『主よ、頂いた1ミナで5ミナを得ました』。主人は言いました。『あなたも5つの町を受け持ちなさい』」。(ルカ 19:15-19)

これらの奴隷<sup>どれい</sup>のように、体力、時間、資産をフル活用して弟子を増やす努力をしているという自覚があるなら、イエスに喜んでもらえる<sup>あ</sup>と分かって安心<sup>あ</sup>できます。勤勉さは報われると確信<sup>あ</sup>できるのです。イエスの弟子が全員、同じ境遇<sup>きょうぐう</sup>にあるわけではありません。与えられている機会<sup>あ</sup>や能力<sup>あ</sup>もさまざまです。それでも「王権<sup>もど</sup>」を与えられたイエスは、一人一人が払<sup>はら</sup>った忠実な努力<sup>あ</sup>をきちんと認め、祝福<sup>あ</sup>します。(マタイ 28:19, 20)

イエスは例え話の最後で、対照<sup>どれい</sup>的な奴隷<sup>どれい</sup>について話します。「しかし、別の[奴隷<sup>どれい</sup>]が来て言いました。『主よ、頂いた1ミナがここに<sup>あ</sup>あります。布にくるんで隠<sup>かく</sup>しておきました。あなたが怖<sup>こわ</sup>かったのです。あなたは厳しい方で、預けなかったものを引き出し、まかななかったものを刈<sup>か</sup>り取られるからです』。主人は言いました。『私はあなた自身の言葉<sup>どれい</sup>によってあなたを裁<sup>あ</sup>きます。悪い奴隷<sup>どれい</sup>よ。私が厳しい人間で、預けなかったものを引き出し、まかななかったものを刈<sup>か</sup>り取ることを知っていたのです



ね。それなら、なぜ私の金を銀行に入れなかったのですか。そうすれば、私は戻って来た時に利息と一緒に受け取れたでしょう。そして、そばに立っている人たちに言いました。『この男からその1ミナを取って、10ミナを持っている人に与えなさい』。(ルカ 19:20-24)

この奴隷は主人の王国の資産を増やさなかったもので、持っているものさえ失います。使徒たちは神の王国でイエスが支配することを心待ちにしています。ですから、3人目の奴隷のことを聞いて、もし勤勉でないなら、

王国での立場は得られないことを理解したでしょう。

イエスの言葉は忠実な弟子たちの意欲に火を付けたに違いありません。イエスは例え話の結びにこう言います。「あなたたちに言います。持っている人は皆、さらに与えられますが、持っていない人は、持っているものまで取り上げられます」。加えて、イエスが「王となることを望まなかった敵たち」について、彼らは処刑されることになる、と話します。その後、イエスはエルサレムへの旅を続けます。(ルカ 19:26-28)

- ◇ イエスがミナの例え話をしたのはなぜでしたか。
- ◇ 「高貴な生まれの男性」とは誰ですか。その人が出掛けた「遠くの土地」とはどこでしたか。
- ◇ 奴隷たちは誰を表していますか。「高貴な生まれの男性」を憎んでいる市民とは誰のことですか。
- ◇ 報いを与えられた奴隷とミナを取り上げられた奴隷には、どんな違いがありましたか。









セクション

# 6

## 最後の伝道活動

「あなたの王がやって来る」。

マタイ 21:5

## ベタニヤのシモンの家で食事をする

マタイ 26:6-13 マルコ 14:3-9 ヨハネ 11:55-12:11

イエスはエリコを出てベタニヤに向かいます。途中、険しい山道を20<sup>き</sup>も歩いて登らなければなりません。エリコは海面より250<sup>メートル</sup>ほど低い所、ベタニヤは海面より600<sup>メートル</sup>以上高い所にあります。ラザロは2人の姉妹たちとベタニヤの小さな村で暮らしています。エルサレムから約3<sup>き</sup>離れた、オリーブ山の東斜面にある村です。

過ぎ越しを祝うため、多くのユダヤ人がすでにエルサレムに到着しています。死体に触ったりすると汚れてしまうので、「儀式上の清めをするために」早く来るのです。(ヨハネ 11:55。民数記 9:6-10) 早く着いて神殿に集まっている人たちは、イエスが過ぎ越しの祭りに来るかどうか予想し合っています。(ヨハネ 11:56)

いろいろな意見が飛び交います。宗教指導者の中には、イエスを捕まえて殺したいと思っている人もいます。実際彼らは、イエスの居場所が分かっていたなら通報するよう命令していました。「イエスを捕まえるため」です。(ヨハネ 11:57) 彼らは以前にも、ラザロを復活させた後にイエスを殺そうとしたことがあります。(ヨハネ 11:49-53) それで、そもそもイエスが人の大勢いる所に現れるかどうか分からない、と考える人もいます。

イエスは「過ぎ越しの6日前」の金曜日に、ベタニヤに到着します。(ヨハネ 12:1) 日没と同時に新しい日(ニサン8日、安息日)が始まるので、イエスは金曜の夕方までにこの旅を終えていました。金曜の日没から土曜の日没までは安息日であり、安息日の旅行はユダヤ人の律法で禁じられていました。ですから、イエスがその間にエリコからベタニヤまで旅をしたとは考えられません。ベタニヤでは、以前と同じようにラザロの家に行ったものと思われれます。

ベタニヤに住むシモンがイエスと友人たちを土曜の夕食に招待します。ラザロも招かれています。シモンは



「重い皮膚病だった」とされています。きっとイエスに癒やしてもらったのでしょう。働き者のマルタは、彼女らしく客たちにこまやかな心配りをしています。マリアはというと、イエスに特別な気遣いを示します。しかし、今回はそれがぎっかけで、ある議論を引き起こします。

マリアは、「香油、純粹のナルド[が]1ポンド」入っている雪花石こうの容器、つまり小さなつぼのふたを開けます。(ヨハネ 12:3) この香油は大変高価なもので、値段は1年分の給料(300デナリ)に相当します。その香油をマリアはイエスの頭と足に注ぎ、髪の毛で拭きます。すると家中に良い香りが広がります。

ところが弟子たちは腹を立てて、「この香油をどうして無駄遣いするのか」と言います。(マルコ 14:4) ユダ・イスカリオテも、「どうしてこの香油を300デナリで売って、貧しい人たちに施しをしなかったのか」と批判します。(ヨハネ 12:5) ユダがそう言ったのは、貧しい





人たちのことを本当に気に<sup>か</sup>掛けていたからではなく、自分が管理していた弟子たちの金箱からお金を盗ん<sup>ぬす</sup>でいたからです。

イエスはマリアをかばい、こう言います。「なぜこの女性を困らせようとするのですか。私に立派なことをしてくれたのです。貧しい人たちはずっといますが、私はずっといるわけではありません。この女性がこの香油<sup>こうゆ</sup>を私の体に付けたのは、私が葬<sup>ほうむ</sup>られる時のための準備です。はっきり言いますが、世界中どこでもこの良い知らせが

伝えられる所では、この女性がしたことも語られ、思い起こされます」。(マタイ 26:10-13)

イエスはベタニヤに1日以上<sup>たいざい</sup>滞在しているので、そのことが知れ渡<sup>わた</sup>り、大勢の人がイエスや「生き返らされたラザロ」を見るためにシモンの家にやって来ます。(ヨハネ 12:9) それを知ると祭司長たちは、イエスもラザロも殺そうと相談します。ラザロが活着していると、たくさんの人がイエスに信仰<sup>しんこう</sup>を抱いてしまうと考<sup>い</sup>えているのです。本当に邪悪<sup>じゃあく</sup>な人々たちです。

- 
- ◇ ユダヤ人たちは神殿<sup>しんでん</sup>で何について話していましたか。
  - ◇ イエスがベタニヤに到着<sup>とうちやく</sup>したのが土曜日ではなく金曜日だと言えるのはなぜですか。
  - ◇ マリアのどんな行動がきっかけで議論が起きましたか。イエスはマリアをどのようにかばいましたか。
  - ◇ 祭司長たちが非常に邪悪<sup>じゃあく</sup>だと言えるのはなぜですか。
-

## 子ロバに乗り、王としてエルサレムに入る

マタイ 21:1-11, 14-17    マルコ 11:1-11    ルカ 19:29-44    ヨハネ 12:12-19

イエスはシモンの家で食事をした翌日、ニサン9日の日曜日に、弟子たちとベタニヤを出発してエルサレムに向かいます。オリーブ山にあるベテパゲのそばに来た時、イエスは弟子2人にこう言います。

「向こうに見えるあの村に行きなさい。すぐに、1頭のロバが繋がれていて子ロバが一緒にいるのが見つかります。それらを解いて連れてきてください。何か言われたら、『主が必要としているのです』と言わなければなりません。そうすれば、すぐに行かせてくれます」。(マタイ 21:2, 3)

弟子たちはイエスの指示に預言が関係していることに気付いていません。でも後になって、その指示がゼカリヤの預言を実現させるものだったことを理解します。その預言では、エルサレムに来る、神によって約束された王は「謙遜で、ロバに乗っている。雌ロバの子である子ロバに」と予告されていました。(ゼカリヤ 9:9)

弟子たちがベテパゲにやって来て、雌ロバと子ロバを連れていこうとすると、そこに立っていた人たちから、「子ロバを解いたりして何をしているのだ」と言われます。(マルコ 11:5) でも、主が必要としていると説明すると、許可してくれます。それで弟子たちは外衣をロバの親子に掛け、イエスは子ロバの方に乗ります。

イエスがエルサレムに近づくにつれ、一緒に進んでいく人の数が増えていきます。多くの人たちが外衣を道路に敷いたり、「野原から葉の付いた枝」を切ってきて道に敷いたりします。そして、こう叫びます。「お救いください、この方を！ エホバの名によって来る方が祝福されますように！ 間もなく来る、私たちの父ダビデの王国が祝福されますように！」(マルコ 11:8-10) それを聞いたパリサイ派の人たちは腹を立て、「先生、あなたの弟子たちを叱ってください」と言います。するとイエスは、「あなた方に言いますが、この人たちが黙っている

なら、石が叫ぶでしょう」と答えます。(ルカ 19:39, 40)

イエスはエルサレムのそばまで来ると、その町を眺めて涙を流し、こう言います。「もしあなたが、そうです、あなたが、平和に関係する事をこの日に見分けていたならー。しかし今、それはあなたの目から隠されています」。エルサレムはどこまでも不従順でした。その代償は高くつきます。イエスはこう予告します。「敵があなたの周りに先のとがった杭で柵を築き、あなたを完全に包囲する時が来[ま]す。敵は、あなたとあなたの子供たちを滅ぼし尽くし、あなたの中で石を石の上に残したままにはしておきません」。(ルカ 19:42-44) その言葉通り、エルサレムは西暦70年に滅びます。

イエスがエルサレムに入ると、町中の人々が騒ぎ立ち、「これは誰か」と言います。それに対し人々は、「これは預言者イエス、ガリラヤのナザレから来た方だ！」と伝えていきます。(マタイ 21:10, 11) イエスがラザロを復活させるのを見た人たちは、そのことを広めていきます。パリサイ派の人たちは何一つうまくいっていないことを嘆き、「誰もが彼に付いていってしまった」と言います。(ヨハネ 12:18, 19)

イエスはエルサレムでそれまでしてきたように、神殿に行って人々を教えます。また、盲目の人や足の不自由な人を癒やします。祭司長と律法学者たちはその様子を見、男の子たちが神殿の中で、「お救いください、ダビデの子を！」と叫んでいるのを聞いて激怒します。そして、「子供たちが言っている事が聞こえるか」とイエスに言います。するとイエスは、『『あなたは子供や幼児の口から賛美を生じさせた』とあるのを読んだことがないのですか』と答えます。(マタイ 21:15, 16)

イエスは神殿の中を全て見て回ります。そして時間が遅くなったので、弟子たちと神殿を離れ、ニサン10日になる前にベタニヤに戻り、そこで晩を過ごします。





- ◇ イエスは王として、いつまたどのような仕方でエルサレムに入りましたか。
- ◇ イエスはエルサレムを眺めた時、どんな気持ちになりましたか。それからどんな預言を語りましたか。
- ◇ イエスが神殿に行くときどんなことがありましたか。



## 神殿を再び清める

マタイ 21:12, 13, 18, 19   マルコ 11:12-18   ルカ 19:45-48   ヨハネ 12:20-27

イエスと弟子たちはエリコを出てベタニヤに着き、そこに3泊します。そして、ニサン10日の月曜日の早朝にエルサレムに向かいます。イエスは空腹だったので、イチジクの木を見つけて近寄ります。実はあったでしょうか。

今は3月の終わりごろで、イチジクが実を付けるのは6月以降です。でも、この木は普通よりも早く葉を付けています。ですからイエスは、季節外れの食べ頃の实がなっているのではないかと思います。しかし、期待は外れました。葉が出ていたので実はあるはずなのに、一つもなかったのです。それでイエスは、「もう二度と実がならないように」と言います。(マルコ 11:14) すると、イチジクの木はすぐに枯れ始めます。その意味は次の日の朝に明らかになります。

しばらくして、イエスと弟子たちはエルサレムに到着します。イエスは前の日の午後、神殿をあちこち見て回りましたが、今度はそれだけでは終わりません。3年前の西暦30年の過ぎ越しの時と同じような行動を取ったのです。(ヨハネ 2:14-16) 「神殿で売り買いしている人たち」を追出し、「両替屋の台と、ハトを売る人の腰掛けを倒」します。(マルコ 11:15) 物を運ぶために近道して神殿の中庭を通ることも、許しません。

神殿で両替したり売り買いしたりしている人たちにイエスがこれほどの行動を取ったのはなぜですか。イエスは言います。「『私の家は全ての国の人々のための祈りの家と呼ばれる』と書いてあるではありませんか。それなのに、あなた方はそれを強盗の洞窟としました」。(マルコ 11:17) イエスは彼らを強盗と呼びました。彼らが、犠牲用の動物を買う必要のある人たちに途方もなく高額料金を請求していたからです。イエスはそういうやり方を、ゆすりや強盗と考えています。

祭司長、律法学者、民の主立った人たちは、イエスが

行ったことを聞いて、イエスを殺す決意をますます固めます。しかし、1つ問題がありました。どうしたらイエスを殺せるか、その方法が分かりません。イエスの周りには、話を聞こうとして人ばかりができています。

過ぎ越しの祭りには、ユダヤ人だけでなく改宗者、つまりユダヤ教の信者になった人たちもやって来ます。その中にはギリシャ人たちもいて、フィリポを通してイエスに面会を申し込みます。フィリポというギリシャ名が気に入ったのかもしれませんが。しかしフィリポは、彼らをイエスに会わせてよいかどうか判断がつかなかったようです。それでアンデレに相談し、2人でイエスに知らせに行きます。イエスはまだ神殿にいるはずですが。

イエスは自分が数日後に死ぬことを知っています。ですから、今は人々の好奇心を満足させたり人気集めをしたりする時ではありません。それでフィリポとアンデレに例えを使って、こう答えます。「人の子が栄光を受ける時が来しました。はっきり言っておきます。1粒の小麦は地面に落ちて死なない限り、ただ1粒のままです。しかし、死ぬなら、多くの実を結びます」。(ヨハネ 12:23, 24)

1粒の小麦はわずかな価値しかないように見えます。それでも、種が土に落ちて「死ぬ」なら、芽を出して成長し、やがて多くの実を結びます。完全であったイエスも1人の人間ですが、神に忠実を保って死ぬなら、多くの人に命を与える経路となります。イエスのように進んで自分を差し出す人たちに、永遠の命を与えることができるのです。それでイエスはこう語ります。「自分の命に執着する人はそれを失いますが、この世で自分の命を惜しまない人は、それを保って永遠の命を得ます」。(ヨハネ 12:25)

イエスは自分のことだけを考えて話していたのではありません。こう言ったからです。「私に仕えようと思う人

- イエスはイチジクの木に災いを宣告し、<sup>しんでん</sup>神殿を清める
- 多くの人に命を<sup>あた</sup>与えるために、イエスは死ななければならない

# 103



は、私の後に従いなさい。私がいる所にその人もいることになります。私に仕えようと思う人は、天の父に尊ばれます」。(ヨハネ 12:26) 素晴らしい報いです。天の父に尊ばれる人は、王国でキリストの仲間となるのです。

イエスは、間もなく経験する大きな苦しみと死について考え、「今私の心は騒ぎます。何と言えよいので

しょう。父よ、私をこの事態から救い出してください」と祈ります。でもイエスは、逃げたがっているのではありません。それで、「しかしやはり、私はまさにこのために来たのです」と言います。(ヨハネ 12:27) イエスは、神の目的全てに同意しており、自分が犠牲の死を遂げることも受け入れています。

- ◇ まだイチジクの実がなる季節ではなかったのに、イエスが実を期待したのはなぜですか。
- ◇ イエスが<sup>しんでん</sup>神殿で商売をしていた人を「強盗」と呼んだのは、なぜ正しいことですか。
- ◇ イエスはどのような意味で1粒の小麦<sup>つぶ</sup>のようですか。イエスは間もなく経験する自分の苦しみと死について、どう感じていましたか。

## ユダヤ人は神の声を聞いて信仰を示すか

ヨハネ 12:28-50

ニサン10日の月曜日、イエスは自分の死が迫っていることについて話します。神の評判に傷が付くことを心配したイエスは、「父よ、お名前を栄光あるものとしてください」とお願いします。すると天から大きな声がして、「私はすでにそれを栄光あるものとし、再び栄光あるものとする」と言います。(ヨハネ 12:27, 28)

そばにいた人々は動揺します。雷の音だと考えた人も、「天使が彼に話し掛けたのだ」と言う人もいます。(ヨハネ 12:29) しかし、人々が聞いたのはエホバの声でした。イエスに関して話す神の声を人間が聞いたのは、これが最初ではありません。

その3年半前、バプテストのヨハネも神の声を聞いています。イエスがバプテスマを受けた時に、「これは私の愛する子、私はこの子のことを喜んでいる」という声がしたのです。また、西暦32年の過ぎ越しの後、ヤコブとヨハネとペテロも、目の前でイエスの姿が変わった時に、神がこう言うのを聞きました。「これは私の愛する子、私はこの子のことを喜んでいる。彼の言うことを聞きなさい」。(マタイ 3:17; 17:5) しかし3度目の今回、エホバは大勢の人が聞けるように語っています。

イエスは、「この声がしたのは、私のためではなく、皆さんのためです」と言います。(ヨハネ 12:30) この神の声は、イエスがまさしく神の子、予告されたメシアであることの証拠です。

イエスの忠実な生き方により、人はどう生きるべきかが示されました。また、世の支配者サタンは滅ぼされるべきであることもはっきりしました。イエスは言います。「今、この世の裁きがなされています。もうこの世の支配者は追い出されます」。イエスの死は敗北ではなく勝利です。その理由は、「私の方は、地から上げられたなら、あらゆる人を私に引き寄せます」というイエスの言

葉から分かります。(ヨハネ 12:31, 32) イエスは杭に掛けられて死ぬことにより、人々を自分に引き寄せ、永遠の命への道を開きます。

人々は、「上げられ[る]」という言葉聞いてこう尋ねます。「私たちは、キリストが永久にとどまると律法にあるのを聞きました。人の子が上げられなければならないと言うのはなぜですか。人の子とは誰ですか」。(ヨハネ 12:34) イエスが本当に神の子であり、約束されたメシアである証拠はたくさんあります。神の声がしたのもその1つです。でも、ほとんどの人は信じません。

イエスは再び、自分は「光」であると言います。(ヨハネ 8:12; 9:5) そして人々にこう勧めます。「光はもうしばらく皆さんの間にあります。光があるうちに歩きなさい。闇に征服されないためです。……光があるうちに光に信仰を抱きなさい。光の子となるためです」。(ヨハネ 12:35, 36) そう言ってから、身を隠します。ニサン10日は死ぬべき日ではないからです。「上げられ[る]」、つまり杭にくぎ付けにされるのは、ニサン14日の過ぎ越しの日でなければなりません。(ガラテア 3:13)

イエスの伝道活動を振り返ると分かりますが、ユダヤ人がイエスに信仰を示さないことによって、預言が実現しています。イザヤの預言によると、人々は目を見えなくされ、心を固くされるので、生き方を変えて癒やされるということがありません。(イザヤ 6:10. ヨハネ 12:40) ほとんどのユダヤ人は頑固で、イエスが約束された救出者であり命の道である証拠を認めないのです。

しかし、ニコデモ、アリマタヤのヨセフ、そして多くの支配者たちがイエスに「信仰を持」ちます。では、その信仰を行動に表しますか。それとも、会堂から追放されることを恐れて、あるいは「人からの称賛を愛し」て、ためらうでしょうか。(ヨハネ 12:42, 43)



イエスに<sup>しんこう</sup>信仰を持つとはどういうことか、イエス自身が説明しています。「私に<sup>しんこう</sup>信仰を持つ人は、私だけでなく、私を<sup>つか</sup>遣わした方にも<sup>しんこう</sup>信仰を持ちます。また、私を見る人は、私を<sup>つか</sup>遣わした方をも見ます」。イエスが神から<sup>ひとびと</sup>教えられ、人々に伝えている真理は、非常に大切なものです。ですからイエスはこう語ります。「私を無視して私の言葉を受け入れない人には、その人を断罪するものがあります。私が話した言葉です。それが終わ

りの日に断罪するのです」。(ヨハネ 12:44, 45, 48)

それから、こう締めくくります。「私は自分の考えで話したのではなく、私を<sup>つか</sup>遣わした天の父が、何を言い何を教えるべきかを命じました。私は、永遠の命を得るには父のおきてに従う必要があることを知っています」。(ヨハネ 12:49, 50) イエスは、自分に<sup>しんこう</sup>信仰を<sup>いだ</sup>抱く人のために、間もなく自分の血を<sup>ぎせい</sup>犠牲として注ぎ出すことを知っているのです。(ローマ 5:8, 9)



- ◇ イエスに関して話す神の声が聞こえたことは3回ありました。どんな時ですか。
- ◇ どんな支配者たちがイエスに<sup>しんこう</sup>信仰を持ちましたか。彼らが<sup>かれ</sup>信仰を行動に表さなかったのはなぜですか。
- ◇ 人々は、何に基づいて「終わりの日」に断罪されますか。

# イチジクの木を使って信仰について教える

マタイ 21:19-27   マルコ 11:19-33   ルカ 20:1-8

イエスは月曜日の午後にエルサレムを出て、オリーブ山ひがしやめんの東斜面にあるベタニヤもとに戻ります。友人のラザロとマリアとマルタの家に泊とまるようです。

ニサン11日の朝むかを迎えました。イエスと弟子たちは再びエルサレムに向かいます。イエスが神殿しんてんで過ごすのは今回が最後です。また、人々ひとびとに伝道するのもこの日が最後です。その後しばらくして、過ぎ越しすこしを祝い、自分の死の記念式を制定し、裁判を受けて処刑しよけいされることになっています。

ベタニヤからオリーブ山を通してエルサレムに向かう途中とちゆう、ペテロがあのイチジクの木に気付きます。昨日の朝イエスから災いを宣告された木です。それで、「ラビ、見てください！ あなたが災いを宣告したイチジクの木が枯かれています」と大声で言います。（マルコ 11:21）

それにしても、どうしてイエスはこの木かを枯らしたのでしょうか。その理由は、次のイエスの言葉から分かります。「はっきり言います。信仰しんこうを持って疑われないなら、私がイチジクの木にしたようなことができるだけでなく、この山に、『持ち上がって海に入れ』と言っても、そうなります。信仰しんこうを持って祈いのり求めるもの全てを受けるのです」。（マタイ 21:21, 22）ここでイエスは、信仰しんこうは山をも動かせるという教訓をもう一度取り上げているのです。（マタイ 17:20）

イエスはイチジクの木を実際に枯らすことにより、神に信仰しんこうを持つことの必要性を教えました。こう言っています。「祈いのって求めることは皆すでに与えられたという信仰しんこうを持ちなさい。そうすれば、それを受けることになります」。（マルコ 11:24）イエスの弟子たち全てにとって大切な教えですが、使徒たちにとってはまさにタイムリーなものでした。間もなく試練に直面するからです。

さらに、枯れたイチジクの木は信仰しんこうの質について別のことも教えています。

イスラエル国民はこのイチジクの木のように、見掛みかけと中身ちがが違っていました。彼らは神と契約けいやくを結んでおり、律法を守っているように見えたが、国民全体としては信仰しんこうに欠け、良い実を結んでいませんでした。さらに神の子を退けることまでしました。ですからイエスは、実を結ばないイチジクの木を枯らすことにより、実を結ばない信仰しんこうに欠けた国民が最後はどうなるかを示したのです。

しばらくして、イエスと弟子たちはエルサレムに入ります。イエスはこれまでと同じように神殿しんてんに行き、人々ひとびとを教え始めます。すると、祭司長おそと長老たちがやって来ます。恐らく、前日イエスが両替屋りようがえやに対して行ったことを問題視しているのでしょう。こう詰め寄ります。「どんな権威けんいでこうしたことをするのか。こうしたことをする権威けんいを誰だれがあなたに与えたのか」。（マルコ 11:28）

イエスは答えます。「1つ質問します。それに答えるなら、私もどんな権威けんいでこれらのことを行うかを言いましょう。ヨハネによるバプテスマは天からのものでしたか、それとも人からのものでしたか。答えてください」。今度は反対者たちが答える番です。祭司長と長老たちはどう答えればよいか話し合います。『『天から』と言えば、『では、なぜ彼を信じなかったのか』と言うだろう。かといって、『人から』と言えるだろうか』。彼らは群衆おそを恐れていました。群衆は、「ヨハネは確かに預言者だったと思っていた」からです。（マルコ 11:29-32）

反対者たちは良い答えが思い付かず、「私たちは知らない」と言います。それでイエスは、「私も、どんな権威けんいでこれらのことを行うかを言いません」と答えます。（マルコ 11:33）





- ◇ ニサン11日が重要な日と言えるのはなぜですか。
- ◇ イエスはイチジクの木を<sup>か</sup>枯らすことにより、どんなことを教えましたか。
- ◇ イエスはどんな<sup>けんい</sup>権威でこれらのことを行うのかと質問された時、どのように答えましたか。



## ブドウ園についての2つの例え話

マタイ 21:28-46    マルコ 12:1-12    ルカ 20:9-19

イエスは神殿<sup>しんでん</sup>で、祭司長や長老たちの質問を上手にか  
わしました。彼らは、どんな権威<sup>けんい</sup>でこうしたことをするの  
か、とイエスに迫りましたが、答えを聞いて黙り込んでし  
まいました。それからイエスは例え話をします。彼らが  
本当はどんな人間かを暴くためです。

「ある男性に2人の子供がいました。その男性は年上  
の子の所に行き、『今日、ブドウ園に行って働きなさい』  
と言いました。その子は、『行きません』と答えましたが、  
後になって、後悔<sup>こうかい</sup>して出掛けていきました。父親は年下  
の子に近づいて、同じことを言いました。その子は、『行  
きます、父上』と答えましたが、出掛けていきませんでした。  
2人のうち、どちらが父親が望んだ通りにしました  
か」。(マタイ 21:28-31) 答えは明らかです。父親が望  
んだ通りに行動したのは年上の子です。

イエスは反対者たちにこう話します。「はっきり言い  
ますが、徴税人<sup>ちようぜいにん</sup>や娼婦<sup>しょうふ</sup>があなた方より先に神の王国に  
入りつつあります」。徴税人<sup>ちようぜいにん</sup>や娼婦<sup>しょうふ</sup>は最初、神に仕えよ  
うとしませんでした。しかし、年上の子のように後悔し、  
神に仕えるようになりました。対照的に、宗教指導者た  
ちは年下の子のように、神に仕えると言いながら、実際  
にはそうしていません。イエスは言います。「[バプテス  
トの]ヨハネが来て正しい道を示したのに、あなた方は  
ヨハネを信じ[ませんでした]。ところが、徴税人<sup>ちようぜいにん</sup>や娼婦<sup>しょうふ</sup>  
は信じました。あなた方は、それを見ても、後悔<sup>こうかい</sup>して信  
じるようにはなりませんでした」。(マタイ 21:31, 32)

イエスはさらに別の例え話をします。宗教指導者たち  
が神に仕えていないどころか、邪悪<sup>じゃあく</sup>であることを示す話  
です。「ある男性がブドウ園を作り、周りを柵<sup>さく</sup>で囲い、ブ  
ドウ搾り場用に大きな穴を掘り、塔を立てて、耕作人た  
ちに貸し出し、外国へ旅行に出ました。時期が来て、耕  
作人たちの元<sup>もと</sup>に奴隷<sup>どれい</sup>を遣わしました。ブドウ園<sup>ぶどうえん</sup>の収穫<sup>しゅうかく</sup>

を幾らか受け取るためです。ところが耕作人たちはその  
奴隷<sup>どれい</sup>を捕まえて殴り、何も持たせずに去らせました。再  
び別の奴隷<sup>どれい</sup>を遣わすと、耕作人たちは奴隷<sup>どれい</sup>の頭を殴り  
つけ、恥<sup>はじ</sup>をかかせました。それで別の人を遣わすと、耕  
作人たちはその人を殺してしまいました。ほかに多くの  
人を遣わしたのですが、耕作人たちはその人たちを  
殴<sup>なぐ</sup>ったり殺したりしました」。(マルコ 12:1-5)

聞いていた人々は、次のイザヤの非難の言葉を思い  
浮かべたかもしれません。「エホバのブドウ園はイスラ  
エルの家であり、神の大切な栽培地<sup>さいばい</sup>はユダの人たちな  
のである。神は公正さを期待したが、不公正が見られ  
た」。(イザヤ 5:7) イエスの例え話でも、よく似た表現  
が用いられています。ブドウ園の持ち主はエホバです。  
ブドウ園は、神の律法によって囲われ保護されているイ  
スラエル国民です。エホバはイスラエル国民を教えて、  
良い実を生み出すのを助けるために、預言者たちを遣  
わしました。

ところが「耕作人たちは、遣わされた「奴隷<sup>どれい</sup>」たち  
を虐待<sup>ぎゃくたい</sup>したり殺したりしました。イエスは話を続けま  
す。「ブドウ園の持ち主には、まだ1人、愛する息子がい  
ました。『私の息子なら尊敬するだろう』と言って、最後  
に息子を遣わしました。ところが、耕作人たちは互<sup>たが</sup>いに  
言いました。『これは相続人だ。さあ、殺してしまおう。  
そうすれば、相続財産はわれわれのものだ』。そして息  
子を捕まえて殺し……ました」。(マルコ 12:6-8)

ここでイエスは、「ブドウ園の持ち主はどうするでしょ  
うか」と質問します。(マルコ 12:9) 宗教指導者たちは  
こう答えます。「その邪悪<sup>じゃあく</sup>な者たちに恐ろしい滅び<sup>ほろ</sup>をも  
たらし、ブドウ園をほかの耕作人、実った物を納める人  
に貸し出すだろう」。(マタイ 21:41)

彼らはこの時、それと知らずに自分たちを罪に定めて



いました。彼らも、エホバの「ブドウ園」であるイスラエル国民の「耕作人たち」なのです。ですから、エホバが彼らに、神の子であるメシアを信じるよう期待するのは当然です。イエスは彼らを真っすぐ見て言います。「あなた方はこの聖句を読んだことがないのですか。『建築者たちの退けた石、それが主要な隅石となった。これはエホバから出たのであり、私たちの目には驚くべきものである』」。(マルコ 12:10, 11) それから、ずばりこう

言います。「それで、神の王国はあなた方から取られ、王国の実を生み出す国民に与えられます」。(マタイ 21:43)

律法学者と祭司長たちは、これが「自分たちのことを念頭に置いた例え」だと気付きます。(ルカ 20:19) それで、いよいよむきになって、正当な「相続人」であるイエスを殺そうと考えます。でも、イエスを預言者と考えている大勢の人々を恐れ、すぐには実行しません。

- 
- ◇ イエスの例え話に出てくる2人の息子は、それぞれ誰を表していますか。
  - ◇ 2つ目の例え話の中の「ブドウ園の持ち主」、「ブドウ園」、「耕作人たち」、「奴隷」たち、「相続人」はそれぞれ誰を表していますか。
  - ◇ 「耕作人たち」はどうなりますか。

## 王は披露宴に招いた人たちを呼ぶ

マタイ 22:1-14

イエスは伝道活動の終わりが近づいても引き続き例え話をし、律法学者と祭司長たちの誤りを暴いていきます。それで、律法学者と祭司長たちはイエスを殺そうとします。(ルカ 20:19) でも、イエスはやめず、別の例え話をします。

「天の王国は、息子のために結婚の披露宴<sup>ひろうえん</sup>を設けた王のようです。王は奴隷たちを遣わして、披露宴に招いた人たちを呼びましたが、その人たちは来たりませんでした」。(マタイ 22:2, 3) イエスは「天の王国は」と言ってから、例え話を始めました。ですから、「王」はエホバ神に違<sup>ちが</sup>いありません。王の息子と、披露宴に招かれた人たちは誰のことですか。もちろん、王の息子はこの話をしている、エホバの子です。招かれた人たちは、天の王国でその子と一緒<sup>いっしょ</sup>に支配する人たちです。

最初に招かれたのは誰ですか。イエスと使徒たちは王国についてどんな人たちに伝道してきましたか。ユダヤ人です。(マタイ 10:6, 7; 15:24) ユダヤ国民は西

暦<sup>れきぜん</sup>前1513年に律法契約<sup>けいやく</sup>を受け入れ、「祭司が治める王国」の一員となる見込み<sup>みこ</sup>を与えられました。そのような見込み<sup>みこ</sup>を与えられたのは、この国民が最初です。(出エジプト記 19:5-8) では、彼ら<sup>かれ</sup>が実際に「披露宴<sup>ひろうえん</sup>」に呼ばれたのは、いつですか。それは、西暦29年、イエスが天の王国について伝道し始めた時のことです。

では、大半のユダヤ人はその招待にどう応じましたか。「その人たちは来たりませんでした」とイエスは言います。宗教指導者とユダヤ国民の大部分は、イエスがメシアであり、神に王として指名されたことを認めませんでした。

それでもイエスは、ユダヤ人たちにもう一度チャンスが与えられることを示します。[「王は」再びほかの奴隷たちを遣わして言いました。『招いた客にこう言いなさい。「さあ、食事の準備ができました。雄牛<sup>お牛</sup>と肥えた動物の肉をはじめ、全て用意ができています。披露宴<sup>ひろうえん</sup>に来てください』。ところが、その人たちは関心を払わず、あ





る人は畑に、別の人は商売に出掛けていきました。ほかの人は、奴隷たちを捕まえて痛めつけ、殺してしまいました」。(マタイ 22:4-6) この状況は、クリスチャン会衆が設立された後の出来事に対応しています。クリスチャン会衆が設立された後、ユダヤ人にはまだ王国に入る機会が開かれていました。それなのに、ほとんどのユダヤ人はこの招待をはねつけ、王の奴隷たちを虐待することさえます。(使徒 4:13-18; 7:54, 58)

では、ユダヤ国民はどうなってしまいますか。「王は憤り、軍隊を送って殺人者たちを殺し、その町を焼きました」。(マタイ 22:7) ユダヤ人は西暦70年にその言葉通りのことを経験します。彼らの「町」エルサレムはローマ軍によって滅ぼされてしまいます。

彼らが王の招待を断ったということは、もう招かれる人はいないという意味ですか。そうではありません。イエスはさらにこう話します。「それから[王は]奴隷たちに言いました。『結婚の披露宴は用意ができています

が、招いた人たちはふさわしくありませんでした。それで、町の外に通じる道路に行き、見つけた人を誰でも披露宴に招きなさい』。そこで、奴隷たちは道路に出ていき、見つけた人を悪人も善人も皆集めました。こうして、結婚式の部屋は食事をする人でいっぱいになりました」。(マタイ 22:8-10)

その通りのことが生じます。何年後、使徒ペテロは異邦人(生まれつきユダヤ人ではない人や、ユダヤ教に改宗していない人)がクリスチャンになるよう助ける活動を始めます。西暦36年、ローマ軍の部隊の士官コルネリオとその家族が聖霊を受け、天の王国の一員となる見込みを持つようになりました。(使徒 10:1, 34-48)

イエスは、披露宴に来た人全てが「王」に受け入れられるわけではないことを示します。「王は、客を見るために入ってきた時に、結婚式の服を着ていない人を見つけ、言いました。『どうして結婚式の服を着ないで入ってきたのですか』。その人は何も言えませんでした。王は召し使いたちに言いました。『この人の手足を縛って外の闇に放り出さない。彼はそこで泣き悲しんだり歯ぎしりしたりします』。招かれる人は多いですが、選ばれる人は少ないです」。(マタイ 22:11-14)

宗教指導者たちはイエスの話の全てを理解できたわけではないでしょう。それでも気分を害し、こんな厄介な人間は殺してしまおう、とますます固く決意します。

- ◇ イエスの例え話に出てくる「王」、「息子」は誰のことですか。結婚の披露宴に最初に誰が招かれますか。
- ◇ ユダヤ人が披露宴に呼ばれたのはいつですか。その後誰が招かれますか。
- ◇ 招かれる人は多いが選ばれる人は少ない、とはどういう意味ですか。



## 仕掛けられたわなを見破る

マタイ 22:15-40 マルコ 12:13-34 ルカ 20:20-40

イエスの敵たちは動揺しています。イエスが彼らの邪悪さを暴く例え話をしたからです。そこでパリサイ派の人たちは、イエスをわなにはめようとたくらみます。人を雇ってイエスの所に派遣し、ローマ総督に引き渡す口実となることをイエスに言わせるのです。(ルカ 6:7)

その人たちはこう言います。「先生、私たちは、あなたが正しく話して教え、不公平な扱いをせず、真理に沿って神の道を教えることを知っています。カエサルに人頭税を払うのは良いことでしょうか、良くないことでしょうか」。(ルカ 20:21, 22) イエスはそういうお世辞にはだまされません。その裏に偽善やずる賢さがあることを見破ります。ここで、「良くありません」と答えれば、ロー

マに対する反逆の罪で訴えられるかもしれません。逆に、「良いことです」と言えば、ローマの支配を嫌っている人々は、イエスを誤解し、敵意を示すかもしれません。イエスはどうか答えるでしょうか。

イエスは、「なぜ私を試すのですか、偽善者たち。人頭税の硬貨を見せなさい」と言います。すると、デナリ硬貨が持ってこられたので、イエスは、「これは誰の像と称号ですか」と聞きます。「カエサルのです」という返事に対し、「それでは、カエサルのものはカエサルに、しかし神のものは神に返しなさい」と巧みに答えます。(マタイ 22:18-21)

その人たちはイエスの言葉に驚きます。答え方が見



事だったので言い返せず、その場を去ります。しかし、イエスをわなに掛けようとするたくらみはこれで終わりません。パリサイ派の人たちの計画は失敗しましたが、別のグループの指導者たちがイエスの所にやって来ます。

復活はないと主張するサドカイ派の人たちです。彼らは、復活と義兄弟結婚に関する質問を持ってきました。こう尋ねます。「先生、モーセは、『男が子供を持たずに死んだなら、彼の兄弟が残された妻と結婚して、兄弟のために子孫をもうけなければならない』と言いました。さて、私たちの所に7人の兄弟がいました。長男は結婚して死にましたが、子孫がおらず、妻を兄弟に残しました。次男、三男、結局7人全員が同じようになりました。最後にその女性が死にました。そうすると復活の際、この女性は7人のうち誰の妻なのでしょう。全員が妻にしたのです」。(マタイ 22:24-28)

イエスは、サドカイ派の人たちが受け入れているモーセの書を引用し、こう答えます。「そのような考え違いをするのは、聖書も神の力も知らないからではありません。生き返る時、男性も女性も結婚しません。天使のようになります。死者が生き返ることに關しては、モーセが書きたいばらの木に関する記述の中で、神がモーセに『私はアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』と言ったのを読まなかったのですか。この方は死んだ人の神ではなく、生きている人の神です。あなた方はひどく間違っています」。(マルコ 12:24-27。出エジプト記 3:1-6) 群衆はその答えに非常に驚きます。

パリサイ派の人たちもサドカイ派の人たちも、イエスに全く言い返せませんでした。そこで今度はイエスを試すためにこの2つのグループが一緒にやって来ます。その中の1人の律法学者が、「先生、律法の中で最大のおきてはどれですか」と質問します。(マタイ 22:36)

イエスは答えます。「第一はこうです。『聞きなさい、イスラエル、私たちの神エホバはただひとりのエホバであり、あなたは、心を尽くし、知力を尽くし、力を尽くし、自分の全てを尽くして、あなたの神エホバを愛さなければならない』。第二はこうです。『あなたは隣人を自分自身のように愛さなければならない』。これらより大きなおきてはほかにありません」。(マルコ 12:29-31)

律法学者はその答えを聞いて、こう言います。「先生、『神はただひとりであり、そのほかにはいない』と、真理に沿ってよく言われました。心を尽くし、理解力を尽くし、力を尽くして神を愛すること、また、隣人を自分自身のように愛することは、全焼の捧げ物と犠牲全部よりはるかに価値があります」。イエスは、この人が的確に答えたのを見て、「あなたは神の王国から遠くありません」と言います。(マルコ 12:32-34)

イエスは神殿で3日間(ニサン9日から11日)教えています。その間、この律法学者のようにイエスの話を喜んで聞いた人たちもいますが、宗教指導者たちは違います。彼らには「それ以上イエスに質問する勇氣は」ありません。

- ◇ イエスをわなにはめようとして、パリサイ派の人たちはどんなことをたくらみましたか。どんな結果になりましたか。
- ◇ イエスは、わなに掛けようとするサドカイ派の人たちの質問に、どのように巧みに答えましたか。
- ◇ ある律法学者の質問に対して、イエスは何を重要なものとして挙げましたか。



## イエスは敵対者たちを非難する

マタイ 22:41-23:24    マルコ 12:35-40    ルカ 20:41-47

敵対者たちは、イエスの信用を落とすことも、わなに掛けてローマ人に引き渡すこともできませんでした。(ルカ 20:20) それでイエスはニサンの11日、まだ神殿にいる時に形勢を逆転させます。自分が誰かを明らかにし、こう切り出します。「キリストについてどう考えますか。彼は誰の子ですか」。(マタイ 22:42) キリストつまりメシアがダビデの家系から生まれることはよく知られています。それで彼らは、ダビデの子であると答えます。(マタイ 9:27; 12:23。ヨハネ 7:42)

そこでイエスはさらに質問します。「では、どうしてダビデは、聖霊によって彼を主と呼んでいるのですか。こう言っています。『エホバは私の主に言いました。『私があなたの敵たちをあなたの足の下に置くまで、私の右に座っていないさい』』。ダビデが主と呼んでいるのであれば、どうしてダビデの子でしょうか」。(マタイ 22:43-45)

パリサイ派の人たちは黙っています。彼らは、ダビデの家系に生まれる人間がローマの支配から解放してくれると期待しているからです。しかしイエスは、詩編 110編1、2節のダビデの言葉を基に、メシアがただの人間の支配者ではないことを証明します。メシアとはダビデの主であり、神の右に座った後に支配を開始するのです。これを聞いた敵対者たちは沈黙してしまいます。

弟子たちを含め大勢の人が聞いています。そこでイエスは、律法学者やパリサイ派の人たちに関する警告を与えます。彼らは神の律法を教えることによって「モーセの座に座っています」。イエスはこう教えます。「その人たちが告げることは全て行い、守りなさい。しかし、その行いに倣ってはなりません。その人たちは言いしますが、実行しないからです」。(マタイ 23:2, 3)

そして彼らの偽善の例を取り上げ、「お守りとして身に着ける聖句箱を大きく」している、と話します。あるユ

ダヤ人たちは、律法の数節を記したものを小さい箱に入れ、額や腕に着けていました。しかしパリサイ派の人たちは、律法を守ることに熱心であるという印象を与えるため、その箱を大きくしています。さらに、「服の裾を長くしています」。イスラエル人は服の裾に飾りを付けなければなりませんでした。パリサイ派の人たちはその飾りをやたらと長くしていました。(民数記 15:38-40) 全ては「人に見せるため」でした。(マタイ 23:5)

弟子たちも目立ちたいという考え方の影響を受けていたようです。それでイエスはこう教えます。「あなたたちは、ラビと呼ばれてはなりません。あなたたちの先生はただひとりであり、あなたたちは皆、兄弟だからです。また、地上の誰をも父と呼んではなりません。あなたたちの父はただひとり、天にいる方だからです。また、指導者と呼ばれてもなりません。あなたたちの指導者はキリストひとりだからです」。では、自分についてどんな見方をし、どう行動すべきなのでしょう。イエスはこう続けます。「あなたたちの間で一番偉い人は奉仕者でなければなりません。高慢になる人は低く評価され、謙遜になる人は高く評価されるのです」。(マタイ 23:8-12)

次にイエスは、偽善的な律法学者とパリサイ派の人たちが悲惨であることを指摘します。「偽善者である律法学者とパリサイ派の人たち、あなた方は悲惨です！人の前で天の王国を閉ざすからです。自分自身が入らず、入ろうとする人をも入らせません」。(マタイ 23:13)

イエスは、彼らが神にとって重要なことを全く無視し、自分勝手な区別を設けていることを非難します。例えば彼らは、「神殿に懸けて誓っても、守らなくてよい。しかし、神殿の金に懸けて誓うなら、義務を負う」と言います。彼らは道徳的に盲目です。エホバを崇拜し、エホ



バに近づくための場所よりも、神殿<sup>しんでん</sup>の金の方を重視しているのです。そのようにして、「律法のより重大な事柄<sup>ことがら</sup>、すなわち公正と憐れみと忠実を無視して」います。(マタイ 23:16, 23。ルカ 11:42)

イエスはパリサイ派の人たちを「目が見えない案内人<sup>あんいん</sup>たち」と呼び、「あなた方は、ブヨはこし取りながらラク

ダをのみ込んでいます!」と言います。(マタイ 23:24) 彼ら<sup>かれ</sup>はぶどう酒からブヨをこし取りますが、それはブヨが儀式上汚れたものだからです。しかし、彼らは律法のより重大な事柄<sup>ことがら</sup>を無視しています。それは、ブヨと同じように儀式上汚れていて、しかももっと大きなラクダをのみ込んでいるようなものです。(レビ記 11:4, 21-24)

- ◇ イエスが詩編 110編にあるダビデの言葉を引用して質問した時、パリサイ派の人たちが黙っていたのはなぜですか。
- ◇ パリサイ派の人たちが聖句箱を大きくし、服の裾<sup>すそ</sup>の飾り<sup>かざり</sup>を長くしていたのはなぜですか。
- ◇ イエスは弟子たちにどんなことを教えましたか。

# イエスが神殿で過ごす最後の日

マタイ 23:25-24:2 マルコ 12:41-13:2 ルカ 21:1-6

イエスは神殿で過ごす最後の日に、律法学者たちとパリサイ派の人たちのことをはっきり偽善者と呼び、彼らの態度を非難します。比喻表現を用いて、こう言います。「あなた方は……杯と皿の外側は清めますが、内側は貪欲と放縦に満ちてい[ま]す。目が見えないパリサイ派の人たち、まず杯と皿の内側を清めて、外側も清くなるようにしなさい」。(マタイ 23:25, 26) パリサイ派の人たちは、儀式上の清さや自分の外面については大変きちょうめんですが、自分の内面については無関心で、心を清めることができていません。

預言者の墓を建てて飾り付けていることにも、彼らの偽善が表れています。しかしイエスが言う通り、彼らは「預言者を殺害した者たちの子」です。(マタイ 23:31) イエスを殺そうとしていること自体、その証拠です。(ヨハネ 5:18; 7:1, 25)

それでイエスは、宗教指導者たちが悔い改めないならどうなるかをこう話します。「蛇よ、マムシのような者たちよ、あなた方はどうしてゲヘナの処罰を逃れられるでしょうか」。(マタイ 23:33) ゲヘナとはヒンノムの谷のことです。そこはごみを燃やす所でした。ですからこの表現は、邪悪な律法学者たちとパリサイ派の人たちに永遠の滅びが待ち受けていることを示しています。

弟子たちは「預言者」、「賢人」、「教師」になります。どんな扱いを受けるでしょうか。イエスは宗教指導者たちにこう言います。「あなた方は[私の弟子]の中のある人を殺し、杭に掛け、ある人を会堂でむち打ち、あちこちの町で迫害します。こうして、正しい人アベルの血から……ゼカリヤの血に至るまで、地上で流された正しい人の血全てがあなた方に降り掛かります」。そしてこう警告します。「はっきり言いますが、その全てがこの世代に降り掛かります」。(マタイ 23:34-36) この言葉は、西暦70年にローマ軍がエルサレムを滅ぼ

し、何十万ものユダヤ人を殺害した時に実現しました。

イエスはその時の恐ろしい状況を考えて心を痛め、悲しみを込めてこう言います。「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、遣わされた人々を石打ちにする者よ、私はめんどりが翼の下にひなを集めるようにあなた方を集めたいと何度思ったことでしょう。しかし、あなた方はそれを望みませんでした。聞きなさい、あなた方は家を見捨てられます」。(マタイ 23:37, 38) これを聞いた人たちは、イエスが言った「家」とは何のことだろうと思ったに違いありません。神の保護があるように思える、エルサレムの立派な神殿のことでしょうか。

イエスの次の言葉はこうです。「あなた方に言いますが、あなた方は今後、『エホバの名によって来る方が祝福されますように!』と言う時まで、決して私を見ることはありません」。(マタイ 23:39) イエスは、詩編 118編 26節の、「エホバの名によって来る方が祝福されますように。私たちはエホバの家であなたたちのために祝福を願う」という言葉から引用しています。この聖句の「エホバの家」とは神殿のことです。神殿が滅ぼされると、誰もそこに神の名によって来ることはできません。

次にイエスは、神殿の寄付箱が見える場所に移動します。その箱の上部には小さな口があり、そこから寄付を入れる仕組みになっています。イエスは人々が寄付をする様子を見ています。裕福な人たちは「たくさんのごく硬貨を入れて」います。イエスは「ごく小額の小さな硬貨2つ」を寄付した、1人の貧しいやもめに注目します。(マルコ 12:41, 42) イエスは、そのやもめの寄付が神に喜ばれることを知っています。

イエスは弟子たちを呼ぶと、「はっきり言いますが、この貧しいやもめは、寄付箱にお金を入れたほかの人たち全てよりたくさん入れました」と話します。なぜそう言



- イエスは宗教指導者たちへの非難を続ける
- 神殿は滅ぼされる
- 貧しいやもめが小さな硬貨2つを寄付する

# 110

えるのでしょうか。イエスは、「彼らは皆、余っている中から入れましたが、この女性は乏しい中から自分が持つ全て、生活に必要な全てのものを入れたからです」と説明します。(マルコ 12:43, 44) この女性は内面も行動も、宗教指導者たちとは全く違っていたのです。

ニサン11日も過ぎていき、イエスは神殿を後にします。すると1人の弟子が、「先生、見てください。何と見事な石と建物なのでしょう」と叫びます。(マルコ 13:1) 神殿の壁に使われていた石の中にはとてつもなく大き

なものがあったため、建物は強固で不動な印象を与えました。ところがイエスは不思議なことを言います。「この立派な建物を見ているのですか。石がこのまま石の上に残って崩されないでいることは決してありません」。(マルコ 13:2)

そう言ってから、イエスは使徒たちとキデロンの谷を渡り、オリーブ山に登ります。そして、4人の使徒ペテロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネと一緒にになります。その場所からは壮麗な神殿が見えます。



- ◇ イエスは神殿で過ごす最後の日に、何をしましたか。
- ◇ イエスは神殿が将来どうなると予告しましたか。
- ◇ イエスが、やもめは裕福な人たちよりもたくさん寄付したと言ったのはなぜですか。



## 使徒たちはしるしについて<sup>たず</sup>尋ねる

マタイ 24:3-51    マルコ 13:3-37    ルカ 21:7-38



ニサン11日火曜日が暮れていきます。イエスの地上での忙しい活動期間にも終わりが近づいています。ここしばらくイエスは、昼は神殿で教え、夜はエルサレム市の外に泊まっていた。イエスは人々の関心の的となり、「神殿でイエスの話を聞こうとして朝早く来」る人も大勢いました。(ルカ 21:37, 38) しかし、そうした日々も終わりを迎えました。イエスは4人の使徒たち、ペテロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネと一緒にオリブ山に座っています。

4人は自分たちだけでイエスの所にやって来ます。神殿の石がこのまま石の上に残ることはないという予告を聞いて、神殿のことが気になっているのです。でも、知りたいことはほかにもあります。イエスは以前、「用意をしていなさい。思ってもいない時刻に人の子は来るからです」と言いました。(ルカ 12:40) また、「人の子が現れる日」について話したこともあります。(ルカ 17:30) そうした言葉も、神殿について先ほど聞いた事柄と何か関係があるのでしょうか。使徒たちは知りたくてうずうずしています。それでイエスにこう頼みます。「教えてください。そのようなことはいつあるのでしょうか。そして、あなたの臨在と体制の終結のしるしには、何がありますか」。(マタイ 24:3)

彼らは、目の前に見えている神殿が滅びる時のことを考えているようです。また、人の子の臨在についても質問しています。きっと、「ある高貴な生まれの男性が、王権を確立して戻るため」に旅行に出た、というイエスの例え話を思い出したのでしょうか。(ルカ 19:11, 12)

さらに、「体制の終結のしるし」にも関心があります。

イエスはそれらの質問に詳しく答えながら、エルサレムと神殿が終わる時を見分けるしるしを明らかにしていきます。しかし、そのしるしは、将来のクリスチャンにとっても重要です。それらクリスチャンが、イエスの「臨在」期間中に生きており、地上の体制全ての終わりが近いことを識別する助けになるからです。

やがて、使徒たちはイエスの預言が実現していくのを目撃します。彼らが生きている間に、予告されていた多くのことが起こり始めるのです。そのため、37年後の西暦70年に生きているクリスチャンたちは、ユダヤ人の体制と神殿が滅びる時に不意を突かれることなく、準備を整えていることができます。とはいえ、イエスが予告したこと全てが、西暦70年とそれまでの期間に実現するわけではありません。では、イエスが王国の支配を開始して臨在する時のしるしには、どんなものがあるのでしょうか。イエスは使徒たちの質問に答えながら明らかにします。

イエスの予告によると、「戦争のことや戦争の知らせ」があり、「国民は国民に、王国は王国に敵対して立ち上が」ります。(マタイ 24:6, 7) また、「大きな地震があり、あちこちで食糧不足や流行病があります」。(ルカ 21:11) イエスは弟子たちに、「人々はあなたたちを捕らえて迫害」する、とも警告します。(ルカ 21:12) さらに、偽預言者が現れ、多くの人を惑わします。不法なことが増え、大半の人の愛が冷えます。それからイエスは、「王国の良い知らせは、全ての国の人々が聞けるよ

- 
- ◇ 弟子たちが将来の出来事について質問するきっかけになったのはどんなことでしたか。その質問をした時、弟子たちはほかにもどんなことを考えていたかもしれませんか。
  - ◇ イエスの預言が実現し始めるのはいつですか。どのようにして実現し始めますか。
  - ◇ キリストの臨在の特徴となるのは、どんな状況ですか。



うに世界中で伝えられます。それから終わりが来ます」  
とも話します。(マタイ 24:14)

イエスの預言のうち幾つかの点は、ローマ軍によってエルサレムが滅ぼされる時や、その滅びが生じるまでの期間に実現します。しかし、イエスの預言はずっと後の時代に、もっと大きなスケールで実現します。では、この重要な預言が現代に実現しているという証拠がありますか。

イエスが自分の臨在のしるしとして挙げたものの1つに、「荒廃をもたらす極めて不快なもの」の出現があります。(マタイ 24:15) 西暦66年、この極めて不快なものはローマ人の「陣営を張った軍隊」として出現します。その軍には偶像視されていた軍旗がありました。ローマ軍はエルサレムを包囲し、城壁の土台を崩し始めます。(ルカ 21:20) ユダヤ人の「聖なる場所」に、立ってはならない「極めて不快なもの」が立っていたのです。

イエスはさらに、「世界の始めから今まで起きたことがなく、いえ、二度と起きないような大患難がある」と予告します。西暦70年、ローマ軍はエルサレムを滅ぼします。ユダヤ人の「聖都」は神殿もろとも破壊され、何十万もの人が殺害されたため、まさに大患難となります。(マタイ 4:5; 24:21) ユダヤ人とエルサレムの歴史上、これほど破壊的な出来事はありませんでした。それまで何百年も続いてきたユダヤ人の崇拜の体制も終わりを告げます。ですから、イエスの預言が将来もっと大規模に実現する時、それは恐ろしいものであるに違いありません。

## 体制の終結における確信

イエスが王として臨在するしるしと、体制の終結のしるしについて、イエスは話し続けます。イエスは「偽キリストや偽預言者」に振り回されないよう警告を与えます。彼らは、「できれば選ばれた者たちをさえ惑わそう」とするでしょう。(マタイ 24:24) しかし、選ばれた者た

ちは惑わされません。偽キリストは目に見えますが、イエスの臨在は目に見えないのです。

イエスは、現在の体制の終わりに生じる、もっと大規模な患難についてこう話します。「太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は天から落ち、天の力は揺り動かされます」。(マタイ 24:29) 使徒たちはこうした予告を聞いても、具体的に何が起きるのか分かりません。それでも、間違いなく恐ろしい時となるでしょう。

そうした患難は人間にどんな影響を与えますか。イエスはこう言います。「人々は、世界を襲う事柄に対する恐れと予想から気を失います。天の力が揺り動かされるからです」。(ルカ 21:26) イエスの言葉通り、人間がこれまで経験したことがないような悲惨な時を迎えるのです。

イエスは、「人の子が力と大きな栄光を帯びて」来る時に、全ての人が嘆くわけではない、と話して使徒たちを元気づけます。(マタイ 24:30) イエスは、「選ばれた者たちのために」神が行動を起こすと述べていました。(マタイ 24:22) では、イエスが話した衝撃的な予告が実現していく時、忠実な弟子たちは何をすべきでしょうか。イエスはこう勧めます。「これらの事が起き始めたら、真っすぐに立ち、頭を上げなさい。あなたたちの救出が近づいているからです」。(ルカ 21:28)

その期間に生きている弟子たちは、終わりが近いことをどのようにして知るのでしょうか。ここでイエスはイチジクの木の話例えを話します。「若枝が柔らかくなって葉を出すと、すぐに、夏が近いことが分かります。同じように、これら全てを見たら、人の子が近づいて戸口にいることを知りなさい。はっきり言いますが、これら全てが起きるまで、この世代は決して過ぎ去りません」。(マタイ 24:32-34)

弟子たちは、しるしのさまざまな特色が実現するのを見る時、終わりが近いことに気付かなければなりません。イエスは、将来その重要な時代を生きる弟子たちに向けてこう語ります。

「その日と時刻については誰も知りません。天使たちも子も知らず、父だけが知っています。人の子の臨在の時ちょうどノアの時代のようになります。洪水前のその時代、ノアが箱舟に入る日まで、人々は食べたり飲んだり、結婚したりしていました。そして、洪水が来て全ての人を流し去るまで注意しませんでした。人の子の臨在の時もそのようになります」。(マタイ 24:36-39) イエスは話を聞いている人たちに、地球全体に影響を与えた、ノアの時代の大洪水のことを思い起こさせています。

オリーブ山でイエスの話を聞いていた使徒たちは、注意を払い続けなければならないと気付いたはずでした。イエスはこう言います。「食べ過ぎや飲み過ぎや生活上の心配事で心が圧迫されないよう注意していなさい。そうでないと、その日が全く突然に訪れます。わなのようにです。その日は地上の全ての人に訪れます。それで、必ず起きるこの全ての事を逃れて人の子の前に立つことができるよう、常に祈願をしつつ、ずっと目を覚ましていなさい」。(ルカ 21:34-36)

イエスはここ数十年の間に起きる出来事や、エルサレムの都市またはユダヤ国民だけに影響を及ぼす出来事を預言していたわけではありません。もっとスケールの大きなこと、「地上の全ての人に訪れ」る変化について話していたのです。

イエスは、弟子たちが注意を払い、見張っていて、用

意を整えていなければならないと教えます。そして、そのことを別の例えで強調します。「1つのことを知っておきなさい。家の主人は、泥棒がどの夜警時に来るかを知っていたなら、目を覚ましていて、家に押し入らせはしなかったでしょう。ですから、あなたたちも、用意ができていることを示しなさい。人の子は予期しない時刻に来るからです」。(マタイ 24:43, 44)

イエスはここで、弟子たちに心配し過ぎないでよい理由を示します。それは、これまで話してきた預言が実現する時、注意を払いつつよく働く「奴隷」がいる、ということです。イエスは使徒たちがイメージしやすい次のような場面を話します。「主人が、時に応じて召し使いたちに食物を与えるため、彼らの上に任命した、忠実で思慮深い奴隷はいったい誰でしょうか。主人が来て、そうしているところを見るなら、その奴隷は幸せです！ はっきり言いますが、主人は自分の全ての持ち物を管理させるためにその奴隷を任命します」。しかし、もしその「奴隷」が邪悪な態度を表し、他の人をひどい仕方であつかうなら、主人は「最も厳しく彼を罰し」ます。(マタイ 24:45-51。ルカ 12:45, 46と比較。)

イエスは、弟子たちのあるグループが邪悪な態度を示すようになっていたのではありません。では、どんな教訓を弟子たちに残したかったのでしょうか。それは、注意を払いつつよく働くべきであるということです。そのことをさらに別の例えで教えます。

- 
- ◇ 「極めて不快なもの」はどのようにして出現しますか。その後、どんな出来事が生じますか。
  - ◇ イエスの預言が実現するのを目撃する人たちはどんな反応を示しますか。
  - ◇ 終わりの時が近いことを知る方法について、イエスはどんな例えを話しましたか。
  - ◇ イエスの預言が世界規模で実現すると言えるのはなぜですか。
  - ◇ 体制の終結が近い時代に生きる弟子たちに、イエスはどんな大切な教訓を与えましたか。

## おとめ 乙女たちの例え話から学ぶ

マタイ 25:1-13

イエスは、自分の臨在と体制の終結のしるしについて使徒たちから質問され、それに答えているところです。そして、もう1つの例え話をして大切な教訓<sup>あた</sup>を与えます。イエスの臨在期間中に生きている人たちは、その例え話<sup>はなむこ</sup>が実現するのを見ることになります。

例え話はこう始まります。「天の王国は、ランプを持<sup>はなむこ</sup>て花婿<sup>むか</sup>を迎えに出<sup>おとめ</sup>た10人の乙女<sup>おとめ</sup>のようです。そのうち5人は愚<sup>おろ</sup>かで、5人は思慮<sup>しりょ</sup>深い人でした」。(マタイ 25:1, 2)

イエスは、天の王国を受け継<sup>つ</sup>ぐ弟子たちのうち半分が愚<sup>おろ</sup>かで、もう半分が思慮<sup>しりょ</sup>深いと言っていたのではありません。弟子たち各自には、王国の事柄<sup>ことがら</sup>にしっかり注意<sup>おこた</sup>を払<sup>はら</sup>うという選択肢<sup>せんたくし</sup>と、注意<sup>おこた</sup>を怠<sup>せんとくし</sup>るという選択肢<sup>せんたくし</sup>があ

ると教えていたのです。しかしイエスとしては、弟子たちが忠実であり続け、天の父の祝福を受けるということを確認<sup>たずさ</sup>していました。

10人の乙女<sup>おとめ</sup>は全員、花婿<sup>はなむこ</sup>を迎<sup>むか</sup>えて結婚式<sup>けっこんしき</sup>の行列に加<sup>で</sup>わるために出<sup>で</sup>掛けていきます。花婿<sup>はなむこ</sup>が到着<sup>とうちゃく</sup>し、準備を整<sup>はなよめ</sup>えた家に花嫁<sup>おとめ</sup>を連れていく時、乙女<sup>おとめ</sup>たちは道をランプで照<sup>はなむこ</sup>らします。そのようにして、花婿<sup>はなむこ</sup>に対し敬意を表<sup>おとめ</sup>すのです。では、話はどう展開<sup>たずさ</sup>するでしょうか。

「愚<sup>おろ</sup>かな乙女<sup>おとめ</sup>たちはランプを持<sup>たずさ</sup>ちましたが、油<sup>あぶら</sup>を携<sup>たずさ</sup>えていかず、一方、思慮<sup>しりょ</sup>深い乙女<sup>おとめ</sup>たちは、ランプと共に、油<sup>あぶら</sup>を瓶<sup>びん</sup>に入れて持<sup>はなむこ</sup>っていきま<sup>おく</sup>した。花婿<sup>はなむこ</sup>が遅<sup>おそ</sup>れている間に、皆、眠<sup>みな</sup>くなって眠<sup>ねむ</sup>り込んでしま<sup>こ</sup>いました」。(マタイ





25:3-5) 花婿は予想していた時間に到着しません。乙女たちが眠り込んでしまったことからすると、かなり遅れているようです。これを聞いた使徒たちは、ある高貴な生まれの人の例え話を思い出したでしょう。その人は旅行に出、「**やがて**……王権を確立して戻った」とイエスは話しました。(ルカ 19:11-15)

さて、花婿がついに到着した時のことを、イエスはこう話します。「真夜中に、『さあ、花婿だ！ 迎えに出なさい』と叫ぶ声がしました」。(マタイ 25:6) 乙女たちは用意ができていますか。

イエスはこう続けます。「そこで、乙女は皆起きて、ランプを確認しました。愚かな乙女たちは思慮深い乙女たちに言いました。『油を分けてください。今にもランプが消えそうです』。思慮深い乙女たちは答えました。『みんなの分はなさそうです。それより、油を売る人たちの所で自分の分を買ってくるのはどうですか』」。(マタイ 25:7-9)

5人の愚かな乙女は注意を怠り、花婿を迎える用意ができていません。ランプのための油が足りないのので、何とか手に入れる必要があります。話は続きます。「その5人が買いに行っている間に花婿が来て、用意ができていた乙女たちは結婚の披露宴のために花婿と一緒に中に入り、戸が閉められました。その後、残りの乙女たちも来て、『旦那さま、旦那さま、開けてください』と

言いました。花婿は答えました。『はっきり言って、あなたたちのことは知りません』」。(マタイ 25:10-12) 何と残念なのでしょう。注意を怠り用意ができていなかった結果です。

使徒たちは、例え話の中の花婿とはイエスのことだと分かったでしょう。イエスは以前にも自分を花婿に例えたことがあったからです。(ルカ 5:34, 35) では、思慮深い乙女とは誰ですか。イエスは王国を受け継ぐ「小さな群れ」について話した時、「身支度を整え、ランプをともしていなさい」と言いました。(ルカ 12:32, 35) ですから使徒たちは、今回の例えに出てくる乙女とは、自分たちや小さな群れを構成する他の人たちを指していると理解したでしょう。イエスはこの例え話で何を教えようとしていたのでしょうか。

イエスは教訓をあいまいにせず、例え話の最後でははっきりこう言います。「ずっと見張っていなさい。あなたたちは、その日も時刻も知らないからです」。(マタイ 25:13)

イエスは自分の臨在について忠実な弟子たちに話した際、「ずっと見張って」いるべきだと教えました。イエスが来る時、弟子たちは5人の思慮深い乙女のように、注意を払っていて用意ができていなければなりません。そのようにして、貴重な希望を見失ったり報いを得損なったりすることがないようにすべきです。

- ◇ 注意を払い用意ができていたという点で、5人の思慮深い乙女と5人の愚かな乙女とではどんな違いがありますか。
- ◇ 花婿とは誰のことですか。また乙女たちとは誰のことですか。
- ◇ 10人の乙女の例え話でイエスが教えていた教訓とはどのようなものですか。

## タラントの例え話から学ぶ

マタイ 25:14-30

イエスはオリーブ山の上で4人の使徒たちから自分の臨在と体制の終結のしるしについて質問され、その答えとして、もう1つの例え話を語ります。数日前にエリコにいた時、イエスはミナの例え話をして、王国が設立されるのはまだ遠い将来であると説明しました。この2つの例え話には似ている点がたくさんあります。この章で考える例え話は、使徒たちはイエスから委ねられた持ち物を扱う際に勤勉でなければならないということを教えています。

イエスはこう話し始めます。「それはちょうど、外国へ旅行に出る際に、奴隷たちを呼び寄せて、自分の持ち物を委ねた男性のようです」。(マタイ 25:14) イエスは自分を「王権を確立」するために旅行に出た男性に例えたことがあるので、使徒たちは今回の例え話に出てくる「男性」もイエスであるとすぐに分かります。(ルカ 19:12)

その人は外国に旅行に出る前に、奴隷たちに自分の貴重な持ち物を委ねます。イエスは3年半の伝道期間中、神の王国の良い知らせを伝えることに全力を傾け、弟子たちが伝道活動を行えるよう訓練しました。自分は間もなく去っていきますが、訓練した通りに弟子たちが伝道活動をしていくと確信しています。(マタイ 10:7。ルカ 10:1, 8, 9。ヨハネ 4:38; 14:12と比較。)

例え話の男性は自分の持ち物をどのように委ねたでしょうか。イエスはこう話します。「その男性は、ある人には5タラント、別の人には2タラント、さらに別の人には1タラントと、各自の能力に応じて与えてから、外国へ行きました」。(マタイ 25:15) では、奴隷たちは委ねられたもので何をしますか。主人の期待に沿って委ねられたものを勤勉に用いるのでしょうか。イエスはこう続けます。

「5タラントを受け取った人はすぐに<sup>で</sup>出掛け、それで商

売をして、さらに5タラントを手に入れました。2タラントを受け取った人も同じように、さらに2タラントを手に入れました。しかし、ただ1タラントを受け取った奴隷は、出掛けていって地面を掘り、主人のお金を隠しておきました」。(マタイ 25:16-18) さて、主人が戻ってきた時にどうなりますか。

イエスはこう話します。「長い時がたち、主人が来て、奴隷たちと清算をしました」。(マタイ 25:19) 最初の2人の奴隷は「各自の能力に応じて」ベストを尽くしました。委ねられたものを使って勤勉に熱心に働き、利益を生み出しました。5タラントを受け取った人も2タラントを受け取った人も、委ねられたものを2倍にしたのです。(当時、1タラントを稼ぐには19年ほどかかりました。) 主人はその2人の奴隷に同じ褒め言葉を掛けます。「よく頑張りました、あなたは忠実な良い奴隷です! わずかなものに忠実でした。多くのものを管理させる



ためにあなたを任命しましょう。主人である私と共に喜びなさい」。(マタイ 25:21)

しかし、1タラントを受け取った奴隷<sup>どれい</sup>はこう言います。「ご主人さま、あなたが厳しい方で、まかなった所で刈り取り、脱穀<sup>だっこく</sup>しなかった所で集めることを知っていました。それで怖<sup>こわ</sup>くなり、行って、あなたの1タラントを地中に隠<sup>かく</sup>しておきました。さあ、お返しいたします」。(マタイ 25:24, 25) この奴隷<sup>どれい</sup>はお金を銀行家に預けることもしませんでした。そうしていれば、少なくとも幾<sup>いく</sup>らかの利息が付いたでしょう。この奴隷<sup>どれい</sup>は主人の期待を裏切ったのです。

当然のこととして、主人はその奴隷<sup>どれい</sup>を「怠惰<sup>たいだ</sup>な悪い奴隷<sup>どれい</sup>」と呼び、委ねていたものを取り上げ、喜んで勤勉に働く人にそれを与<sup>あた</sup>えます。そしてこう言います。「持っている人は皆<sup>みな</sup>、さらに与<sup>あた</sup>えられて満ちあふれます。しかし、持っていない人は、持っているものまで取り上げられます」。(マタイ 25:26, 29)

イエスの弟子たちはこの例え話を聞いて、さまざまなことを考えさせられたでしょう。彼らはイエスから何を委ねられたか知っています。それは人々<sup>ひとびと</sup>を弟子とするという大変価値のある立派な仕事です。イエスは、弟子たち全てが同じ仕方でその仕事をし、同じ成果を上げるよう期待しているわけではありません。弟子たちは



「各自の能力に応じて」働くべきなのです。「怠惰<sup>たいだ</sup>」になり、主人の持ち物を増やすためにベストを尽くさないなら、イエスが喜ぶことは決してありません。

「持っている人は皆<sup>みな</sup>、さらに与<sup>あた</sup>えられ[る]」とイエスが約束した時、使徒たちはとてもうれしかったに違いありません。

◇ タラントの例え話に出てくる主人とは誰<sup>だれ</sup>のことですか。奴隷<sup>どれい</sup>たちとは誰<sup>だれ</sup>ですか。

◇ イエスは弟子たちにどんな教訓<sup>あたら</sup>を与えましたか。



## キリストは王として羊とヤギを裁く

マタイ 25:31-46

イエスは、オリーブ山の上で10人の乙女<sup>おとめ</sup>とタラントの例え話を語ったところです。自分の臨在と体制の終結のしるしについての質問に答えていたイエスは、最後に羊とヤギの例え話をします。

その話はこう始まります。「人の子が栄光を帯びて来て、全ての天使が共に来ると、その時、人の子は栄光の座に座ります」。(マタイ 25:31) この例え話の中心人物はイエスです。イエスはこれまで何回も自分のことを、「人の子」と呼んでいるからです。(マタイ 8:20; 9:6; 20:18, 28)

この例え話はいつ実現しますか。イエスが天使たちと一緒に「栄光を帯びて来て」、「栄光の座に」座る時です。イエスは少し前にも、天使たちと一緒に「人の子が力と大きな栄光を帯びて天の雲に乗って来る」と話したことがあります。それはいつのことでしょうか。「患難<sup>かんなん</sup>のすぐ後」のことです。(マタイ 24:29-31。マルコ 13:26, 27。ルカ 21:27) ですからこの例え話は、将来イエスが栄光を帯びて来る時に実現します。その時、イエスは何をするのでしょうか。

イエスはこう説明します。「人の子が栄光を帯びて来[ると、]全ての国の人々が彼の前に集められ、人の子は、羊飼いが羊をヤギから分けるように、人々<sup>ひとびと</sup>を分けます。そして羊を自分の右に、ヤギを自分の左に置きます」。(マタイ 25:31-33)

羊はどうなりますか。イエスはこう言います。「それから王は、右にいる人たちに言います。『さあ、私の父に祝福された人たち、世が始まって以来あなたたちのために用意されている王国を受けなさい』。(マタイ 25:34) 羊が王からの恵<sup>めぐみ</sup>を受けるのはなぜでしょうか。

王は次のように説明します。「私が飢えたと食べ物<sup>う</sup>を与え、喉<sup>のど</sup>が渴くと飲み物<sup>かわ</sup>を与えてくれたからです。よそか



ら来ると温かく迎え、裸でいると服を与えてくれました。病気になる世話をし、牢屋にいと訪問してくれました。それを聞いた羊つまり「正しい人たちは、自分たちがいつ王にそのようなことをしたか尋ねます。すると王は、「これら私の兄弟のうち最も目立たない人の1人にしたのは、それだけ私にしたのです」と答えます。(マタイ 25:35, 36, 40, 46) 正しい人たちは、そうした良いことを天で行ったのではありません。天では病気になるか飢えたりしないからです。ですから王は、羊が地上にいるキリストの兄弟たちにしたことを言っているのです。

では左に置かれたヤギはどうなりますか。イエスの説明はこうです。「それから王は、左にいる人たちに言います。『災いを宣告された人たちは、私から離れ、悪魔と邪悪な天使たちのために用意された永遠の火に入きなさい。私が飢えても食べ物を与えず、喉が渇いても飲み物を与えてくれなかったからです。よそから来ても温かく迎えず、裸でいても服を与えず、病気であったり牢屋にいたりしても世話をしてくれませんでした』。(マタイ 25:41-43) ヤギは地上にいるキリストの兄弟たちに親切であるべきでしたが、そうしなかったの、このような裁きを受けるのも当然です。

使徒たちは、将来行われるこの裁きが1回限りで、その結果は永遠に続くものであることを知ります。イエス



は彼らに次のように話します。「その時、王は[言い]ます。『実のところ、これら最も目立たない人の1人にしなかったのは、それだけ私にしなかったのです』。この人たちは永遠の死を迎え、正しい人たちは永遠の命を受けます」。(マタイ 25:45, 46)

使徒たちの質問に対するイエスの答えから、イエスの弟子である全ての人は多くのことを学べます。そして、自分の態度や行動がどのようなものか考えさせられます。

- ◇ 羊とヤギの例え話に出てくる「王」とは誰のことですか。この例え話の実現するのはいつのことですか。
- ◇ 裁きの時に羊が王からの恵みを得るのはなぜですか。
- ◇ ある人たちがヤギとして裁かれるのはなぜですか。羊とヤギにはそれぞれどんな結果が待っていますか。

## 最後の過ぎ越しが近づく

マタイ 26:1-5, 14-19   マルコ 14:1, 2, 10-16   ルカ 22:1-13

イエスはオリーブ山の上で4人の使徒からの質問に答え、自分の臨在と体制の終結のしるしについて多くのことを教えました。

それにしてもニサン11日はとても忙しい日でした。その夜を過ごすためベタニヤに向かっている途中でのことと思われませんが、イエスは使徒たちにこう言います。「知っての通り、今から2日後に過ぎ越しが行われます。そして、人の子は引き渡され、杭に掛けられて死にます」。(マタイ 26:2)

イエスは翌日のニサン12日水曜日を、使徒たちと静かに過ごしたようです。火曜日には人々の前で宗教指導者たちを非難し、彼らの真の姿を暴きました。彼らから命を狙われているので、水曜日は人前に出ません。ニサン14日が始まる木曜日の晩に使徒たちと過ぎ越しを祝うのを誰にも邪魔されないためです。

しかし、祭司長と民の長老たちは穏やかでいられません。過ぎ越しの日が来る前に、大祭司カヤファの家の中庭に集まります。なぜでしょうか。自分たちの偽善を暴かれたことが許せないのです。それで、イエスを「うまく捕らえて殺そうと相談」します。いつどのように実行するのでしょうか。かれらは、「祭りの時はやめておこう。民の間に騒動が起きないようにするためだ」と言います。(マタイ 26:4, 5) イエスが大勢の人たちから慕われているので、ためらっているのです。

そうしているところへ、ある人物がやって来ます。何とイエスの使徒の1人ユダ・イスカリオテです。サタンは主人を裏切るという考えをユダに植え込んでいました。ユダは宗教指導者たちに、「イエスを裏切って渡したら、何をくれますか」と尋ねます。(マタイ 26:15) 彼らは喜び、「銀を与えることで合意」します。(ルカ 22:5)





その値段は幾らでしたか。銀30枚です。これは恐らく30シケルに相当し、奴隷1人当たりの値段です。(出エジプト記 21:32) 宗教指導者たちはイエスを軽蔑し、ほとんど価値のない人間と見なしていたのです。この時以降、ユダは「群衆がいない時にイエスを裏切って渡す良い機会をうかがうように」なります。(ルカ 22:6)

水曜日の日没後からニサンの13日が始まります。イエスがベタニヤで過ごす最後の晩となりました。夜が明けて木曜日の朝になれば、過ぎ越しのための最後の準備をしなければなりません。子羊を手に入れ、夕方にニサン14日が始まってからほふり、丸ごと焼く必要があります。その食事はどこで行うのでしょうか。誰がその準備をするのでしょうか。イエスがこのことで特に何も指示を出さないため、ユダはイエスを裏切って祭司長たちに渡す良い機会をつかめません。

木曜日の昼すぎと思われるが、イエスはペテロとヨハネをベタニヤから送り出すことにし、こう言います。「行って、過ぎ越しの食事を用意しなさい」。2人は、「どこに用意したらいいのでしょうか」と尋ねます。それでイエスはこう指示します。「町に入ると、水がめを運んでいる男に会います。付いて行って、その人が入る家に入りなさい。そして、家主にこう言いなさい。『先生が、過ぎ越しの食事を弟子たちとできる客室はどこでしょうか』と言っています』。その人は整った大きな階上の部



屋を見せてくれます。そこに用意しなさい」。(ルカ 22:8-12)

この家主はイエスの弟子であるに違いありません。イエスがこの過ぎ越しを祝うために自分の家を使うことを予想していたようです。ペテロとヨハネがエルサレムに着くと、全てイエスが話した通りになります。それで2人は子羊の準備を見届け、イエスと12使徒たちが過ぎ越しを祝うのに必要なものがそろうようにします。

- ◇ イエスはニサン12日水曜日をどう過ごしたようですか。それはなぜですか。
- ◇ 宗教指導者たちが集まったのはなぜですか。ユダがそこへ行ったのはなぜですか。
- ◇ イエスは木曜日に誰をエルサレムに送り出しましたか。彼らは何をしましたか。

## 最後の過ぎ越しで謙遜さを教える

マタイ 26:20 マルコ 14:17 ルカ 22:14-18 ヨハネ 13:1-17

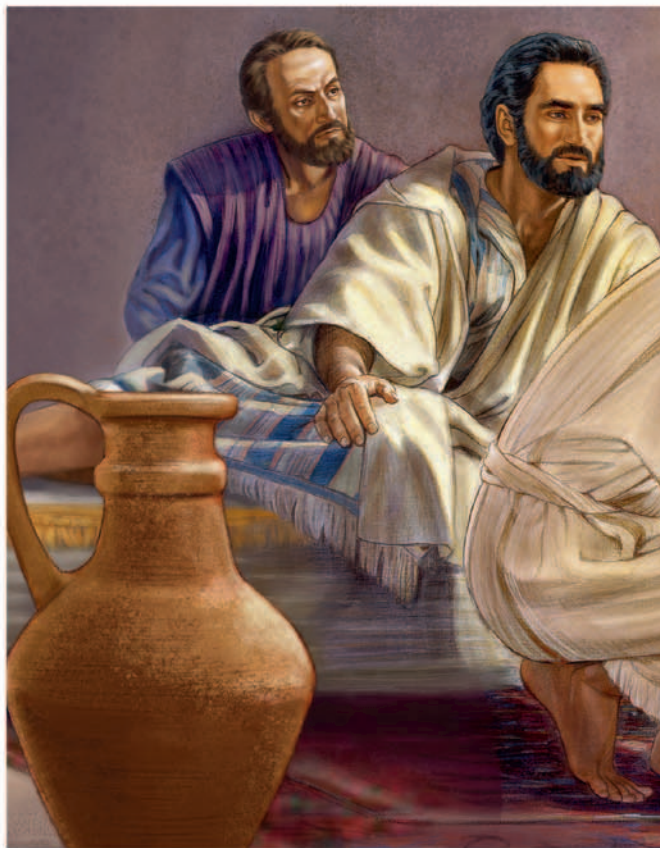
ペテロとヨハネはエルサレムに着き、イエスの指示に従って過ぎ越しを祝う準備を整えます。イエスと残りの10人の使徒たちもベタニヤを出発します。木曜日の午後、西の空に太陽が沈んでいく中、イエスと使徒たちはオリーブ山を下りていきます。復活する前に、この風景を昼間に見るのは、イエスにとってこの時が最後です。

エルサレムに着いたイエスと使徒たちは、過ぎ越しの食事をする家に向かいます。階段を上り、大きな部屋に入ると、そこには自分たちだけで食事をする準備が整っています。イエスはこの時をずっと待っていました。それでこう言います。「私は苦しみを受ける前にぜひあなたたちと一緒にこの過ぎ越しの食事をしたい、と思っていました」。(ルカ 22:15)

過ぎ越しの食事の際にぶどう酒の入った杯を回すという習慣は、ずっと昔に取り入れられたものです。イエスは杯を受け取り、感謝の祈りをしてからこう言います。「これを取って、順番に回しなさい。あなたたちに言いますが、今後、神の王国が来るまで私はブドウからできたものを二度と飲みません」。(ルカ 22:17, 18) イエスの死がもうそこまで迫っているのです。

皆が食事をしていると、イエスが席を立ちます。外衣を脇に置いて拭き布を取り、すぐそばにあったたらいに水を入れます。普通なら、召し使いが客の足を洗うよう家の主人が取り計らいます。(ルカ 7:44) でもこの時は、主人がいなかったのも、イエスが自分で世話をします。使徒たちもその仕事を買って出ることができたはずですが、誰もそうしようとしませんでした。彼らの間にはまだライバル意識が残っていたのかもしれませんが。いずれにせよ、弟子たちはイエスが自分たちの足を洗おうとするのを見てまごつきます。

ペテロはイエスが自分のところに来ると、「足を洗っていただくことなどできません」と言います。イエスは、



「私が洗わないとしたら、あなたは私の仲間ではありません」と答えます。それでペテロは、「主よ、足だけでなく、手も頭もお願いします」と言います。しかし、次のイエスの言葉を聞いてペテロは驚いたことでしょう。「水浴びした人は全身が清く、足以外は洗う必要がありません。あなたたちは清いのです。しかし全員ではありません」。(ヨハネ 13:8-10)

イエスはユダ・イスカリオテを含む12人全員の足を洗います。そして外衣を着てから、再び食卓に着いて横になり、使徒たちにこう質問します。「あなたたちにすることが理解できますか。あなたたちは私を『先生』や



- イエスは使徒たちと一緒に、最後の過ぎ越しの食事をする
- 使徒たちの足を洗って大切な教訓を与える



『主』と呼びます。それは正しいことです。私はそういう者だからです。それで、主また先生である私があなたたちの足を洗ったのであれば、あなたたちも足を洗い合うべきです。私はあなたたちのために模範を示しました。あなたたちも同じようにするためです。はっきり言っておきますが、奴隷は主人より偉くなく、遣わされた人は遣わした人より偉くありません。あなたたちはこうした事を知っており、それを行うとき、幸せです」。(ヨハネ 13:12-17)

謙遜に仕えることを教える何と素晴らしい教訓でしょう。イエスの弟子は、自分は重要な存在だから仕えて

もらうのが当然と考えて、最優先されることを期待すべきではありません。むしろ、イエスの手本に倣うべきです。実際に誰かの足を洗うということではなく、謙遜に、偏見を持たずに進んで仕えるということです。

- ◇ 過ぎ越しの食事をしている時、イエスは自分の死が近いことを示すどんなことを言いましたか。
- ◇ 使徒たちの足を洗うというイエスの行動が普通では考えられなかったのはなぜですか。
- ◇ イエスは使徒たちの足を洗うことによって、どんな教訓を与えましたか。



## 主の晩餐

マタイ 26:21-29    マルコ 14:18-25    ルカ 22:19-23    ヨハネ 13:18-30

イエスは使徒たちの足を洗って、謙遜さ<sup>けんそん</sup>についての大切な教訓<sup>あたら</sup>を与えました。過ぎ越し<sup>すこし</sup>の食事が終わってからのことと思われますが、イエスは、「私が信頼<sup>しんらい</sup>していた親しい友<sup>いっしょ</sup>、一緒にパンを食べていた人が私に敵対するようになった」というダビデの預言的な言葉を引用して話します。それから、「あなたたちの1人が私を裏切ります」とも言います。(詩編 41:9。ヨハネ 13:18, 21)

使徒たちは顔を見合わせて口々に、「主よ、まさか私ではありませんね<sup>たず</sup>と尋ねます。ユダ・イスカリオテもそう質問します。ペテロはイエスの隣<sup>となり</sup>にいたヨハネに、誰のことを言っているのか質問するように促<sup>うなが</sup>します。それでヨハネはイエスに体を近づけて、「主よ、それは誰ですか」と聞きます。(マタイ 26:22。ヨハネ 13:25)

イエスは、「私がパン切れを鉢<sup>はち</sup>に浸<sup>ひた</sup>して与<sup>あた</sup>えるのがその人です」と答えます。そしてパンを食卓<sup>しょくたく</sup>の上にあっ

た鉢<sup>はち</sup>に浸<sup>ひた</sup>してユダに渡<sup>わた</sup>し、「人の子は書かれている通り去っていきますが、人の子を裏切るその人は悲惨<sup>ひさん</sup>です! 生まれてこなかった方がよかったでしょう」と言います。(ヨハネ 13:26。マタイ 26:24)すると、サタンがユダに入ります。ユダはすでに心が邪悪<sup>じゃあく</sup>になっていましたが、この時に悪魔<sup>あくま</sup>の意志を行うようになり、「滅<sup>ほろ</sup>び」に突き進んでいったのです。(ヨハネ 6:64, 70; 12:4; 17:12)

イエスはユダに、「あなたがしている事をもっと早くしなさい」と言います。それを聞いた使徒たちはユダが金箱を管理しているので、「『祭りのために必要な物を買いなさい』とか、貧しい人たちに何か<sup>あた</sup>を与えるように」という意味だろうと思っています。(ヨハネ 13:27-30)しかし、ユダはイエスを裏切るために出ていきます。

その後、イエスは全く新しい祝いを始めます。パンを



取って感謝の<sup>いの</sup>祈りをし、それを割って使徒たちに<sup>わた</sup>渡します。そして、「これは、あなたたちのために与えられる私の体を表しています。このことを行っていき、私のことを思い起こしなさい」と言います。(ルカ 22:19) 使徒たちはそのパンを順番に回し、それを食べます。

次に、イエスはぶどう酒の<sup>さかずき</sup>杯を取り、感謝の<sup>いの</sup>祈りをしてから使徒たちに<sup>わた</sup>渡します。使徒たちは皆その<sup>みな</sup>杯から<sup>さかずき</sup>飲みます。イエスは、「この杯は私の血による新しい<sup>けい</sup>契約を表しています。それはあなたたちのために注ぎ出されることになっています」と言います。(ルカ 22:20)

このようにして、イエスは自分の死の記念式を取り決

めました。そして弟子たちは毎年ニサンの14日にその記念式を開きます。その式は、人間を罪と死の有罪宣告から救うためにイエスと天の父が行ったことを思い起こす機会となります。この祝いは、ユダヤ人の<sup>すこ</sup>過ぎ越しよりも重要なものです。信仰を持つ人全てに永遠の自由を<sup>あた</sup>与えるイエスの死に注意を向ける式だからです。

イエスは自分の血が「罪の許しのため、多くの人のために注ぎ出されることになってい[る]」と話します。その許しを受ける大勢の人には、忠実な使徒たちや他の弟子たちが<sup>ふく</sup>含まれています。その人たちは天の父の王国でイエスと共に支配します。(マタイ 26:28, 29)

- 
- ◇ イエスは聖書のどの預言を引用しましたか。その聖句をどのように説明しましたか。
  - ◇ イエスはユダに何をするよう言いましたか。弟子たちはその言葉をどのように理解しましたか。
  - ◇ イエスはどんな式を始めましたか。それはどんな機会になりますか。



## だれ えら 誰が一番偉いかで口論が起きる

マタイ 26:31-35 マルコ 14:27-31 ルカ 22:24-38 ヨハネ 13:31-38

使徒たちと一緒に過ごす最後の晩です。先ほどイエスは、使徒たちの足を洗うことによって謙遜に仕えることの大切さを教えたばかりです。なぜその必要があったのでしょうか。使徒たちに弱点があったからです。彼らは神に献身していますが、誰が一番偉いかということに強い関心を抱いていました。(マルコ 9:33, 34; 10:35-37) その弱さがまた出てしまいました。

使徒たちの間で「誰が一番偉いのか」について「激しい議論」が起きたのです。(ルカ 22:24) イエスはともがっかりしたはずですよ。どうするのでしょうか。

イエスは彼らの態度や行動を叱らず、根気強く接し、考えさせます。「諸国の王は威張り、権威を持つ人たちは功労者と呼ばれます。しかし、あなたたちはそうであってはなりません。……というのは、食事をしている人と給仕している人では、どちらが偉いのですか」。そして、自分が示してきた手本を思い出させ、「しかし私は、あなたたちに仕える人です」と言います。(ルカ 22:25-27)

使徒たちは不完全ですが、困難な時期にイエスとずっと一緒にいました。それでイエスは、「私は、天の父が私と契約を結んだように、あなたたちと王国のための契約を結ぶ」と言います。(ルカ 22:29) 彼らはイエスに忠節な人たちです。イエスは契約を結ぶことにより、彼らが王国に入り、共に支配することを保証します。

そうした素晴らしい希望があっても、使徒たちは弱点を持つ不完全な人間です。イエスは、「サタンはあなたたちを渡すよう要求しました。小麦をふるいにかけるように試すためです」と話します。(ルカ 22:31) そして、こう警告します。「今夜、あなたたちは皆、私を見捨てます。『私は牧者を打つ。すると、群れの羊は散り散りになる』と書いてあるからです」。(マタイ 26:31。ゼカリヤ 13:7)

するとペテロは自信満々な態度で、「ほかのみんながあなたを見捨てても、私は決して見捨てません!」と主張します。(マタイ 26:33) そこでイエスは、今夜おんどりが2度鳴く前にあなたは私を知らないと言う、と話します。しかしイエスはこうも言います。「私は、あなたの信仰が尽きないように祈願しました。立ち直った後は、兄弟たちを力づけなさい」。(ルカ 22:32) それでもペテロは、「たとえ一緒に死ぬことになるとしても、あなたを知らないとは決して言いません」と言い張ります。(マタイ 26:35) 他の使徒たちも同じことを言います。

イエスはこう話します。「私はもうしばらくあなたたちと一緒にいます。あなたたちは私を捜すようになります。私はユダヤ人たちに、『私が行く所へあなた方は来ることができない』と言いましたが、今はあなたたちにも同じように言います。そしてさらにこう言います。「新しいおきてを与えます。それは、あなたたちが互いに愛し合うことです。私があなたたちを愛した通りに、あなたたちも互いを愛しなさい。あなたたちの間に愛があれば、全ての人は、あなたたちが私の弟子であることを知ります」。(ヨハネ 13:33-35)

ペテロは、イエスがもうしばらくの間だけ一緒にいると聞いて、「主よ、どこへ行くのですか」と尋ねます。イエスは、「あなたは私が行こうとしている所へ今は付いてくることはできません。しかし後で来ることになります」と答えます。ペテロはその意味が分からず、「主よ、どうして今は付いていけないのですか。あなたのためには命もなげうちます」と言います。(ヨハネ 13:36, 37)

次にイエスは、使徒たちをガリラヤの伝道旅行に送り出した時のことを話します。その時、彼らは財布や食物袋を持たずに出かけました。(マタイ 10:5, 9, 10) イエスが、「何にも不足しなかったのではありませ



- イエスは偉さ<sup>えら</sup>について教える
- ペテロはイエスを否定すると予告される
- イエスの弟子は愛し合わなければならない

# 118



んか」と尋ねると、使徒たちは、「はい、何にも!」と答えます。しかし、これからはどうなのでしょう。イエスは言います。「財布がある人はそれを持ち、食物袋<sup>しょくもつぶくろ</sup>も同じようにしなさい。剣<sup>つるぎ</sup>を持っていない人は、外衣<sup>わいぎ</sup>を売ってそれを買いなさい。というのは、書かれている事、すなわち『彼は不法な者たちと共に数えられた』という言葉は、私に関して必ず成し遂げられるからです。これは私に関して実現しつつあります」。(ルカ 22:35-37)

イエスは、自分が不法な者たち、つまり犯罪者と並んで杭<sup>くい</sup>にくぎ付けにされる時のことを話しています。その後、弟子たちはひどい迫害<sup>はくがい</sup>に遭うでしょう。使徒たちは、その準備ができていますと考え、「主よ、ご覧ください、ここに剣<sup>つるぎ</sup>が2本あります」と言います。イエスは、「それで十分です」と答えます。(ルカ 22:38) その後間もなく、イエスはこの剣<sup>つるぎ</sup>に関係した教訓<sup>あたら</sup>を与えることになります。

- ◇ 使徒たちが口論をしたのはなぜですか。イエスはその問題<sup>あつか</sup>をどう扱いましたか。
- ◇ イエスが忠実な使徒たちと結んだ契約<sup>けいやく</sup>により、どんなことが可能になりますか。
- ◇ ペテロが自信満々<sup>まんまん</sup>の態度を示した時、イエスは何と言いましたか。

## イエスは道、真理、命

ヨハネ 14:1-31

記念式の食事が終わり、イエスは使徒たちをこう力づけます。「心を騒<sup>さわ</sup>がせてはなりません。神に信仰<sup>しんこう</sup>を抱<sup>いだ</sup>き、私にも信仰<sup>しんこう</sup>を抱<sup>いだ</sup>きなさい」。(ヨハネ 13:36; 14:1)

イエスは自分が去っても心を騒<sup>さわ</sup>がせるべきでない理由をこう説明します。「私の父の家には住む所<sup>むか</sup>がたくさんあります。……行って場所を整えたら、再び来てあなたたちを私の所に迎えます。私がいる所にあなたたちもいるようにするのです」。しかし使徒たちは、イエスが天に行くことを話しているということが分かりません。トマスはこう尋<sup>たず</sup>ねます。「主よ、あなたの行こうとしている所<sup>ところ</sup>が分からないのに、どうしてその道<sup>みち</sup>が分かるでしょうか」。(ヨハネ 14:2-5)

イエスは、「私は道であり、真理であり、命です」と答えます。イエスとその教えを受け入れ、イエスの生き方に倣<sup>なら</sup>う人だけが、天の父の家に入ることができます。それでイエスは、「私を通してでなければ、誰<sup>だれ</sup>も父の元に来ることはできません」と言います。(ヨハネ 14:6)

すると、熱心に聞いていたフィリポが、「主よ、私たちは父を見せてください。それで十分です」と頼みます。モーセやエリヤやイザヤに与えられたような幻<sup>まぼろし</sup>で神を見たいと思っているようです。でも使徒たちには、幻<sup>まぼろし</sup>よりもずっと良いものがあります。イエスはその点をこう強調します。「こんなに長い間一緒に過<sup>いっしょ</sup>ごしてきたのに、フィリポ、あなたはまだ私を知らないのですか。私を見た人は、父をも見たのです。天の父を100%反映したイエスと一緒に暮<sup>いっしょ</sup>らし、イエスを観察するのは、いわば神を見るようなものでした。とはいえ、父は子より上位の方なので、イエスは、「あなたたちに言うことは、独自の考えで言っているものではありません」と話します。(ヨハネ 14:8-10) そのことは使徒たちにもよく分かりました。

使徒たちは、イエスが素晴らしい行いをするのを見たり、神の王国の良い知らせを伝えるのを聞いたりしてきました。それでイエスは、「私に信仰<sup>しんこう</sup>を抱<sup>いだ</sup>く人も、私がし



ていることを行います。しかも、もっと大きなことを行います」と話します。(ヨハネ 14:12) これはイエスより偉大な奇跡<sup>きせき</sup>を行うという意味ではありません。弟子たちがイエスよりも、もっと長い期間、もっと広い範囲<sup>はんい</sup>で、もっと多くの人に伝道するということです。

イエスは去っていきますが、使徒たちを見捨てるわけではありません。イエスは、「あなたたちが私の名によって何か求めるなら、私はそれを行います」と約束します。また、こうも言います。「私は天の父にお願いします。父は別の援助者<sup>えんじょしゃ</sup>を与えて、あなたたちと共に永久にいらっしゃるにしてください。それは真理を伝える聖霊<sup>せいれい</sup>です」。(ヨハネ 14:14, 16, 17) 別の援助者<sup>えんじょしゃ</sup>、つまり聖霊<sup>せいれい</sup>を与えるという約束は、ペンテコステの日に実現します。

また、こう続けます。「もうしばらくすれば、世の人々<sup>ひとびと</sup>は二度と私を見ません。しかしあなたたちは見ます。私は生きていて、あなたたちも生きるからです」。(ヨハネ 14:19) イエスは復活後に人間の姿で使徒たちに現れ、さらに彼ら<sup>かれ</sup>を復活させ天で一緒<sup>いっしょ</sup>になるようにします。

次にイエスはシンプルな真理を話します。「私のおきてを受け入れてそれに従う人は私を愛しています。さらに、私を愛する人は父に愛されます。そして私はその人を愛して、自分のことをはっきり知らせます」。この時、タダイとも呼ばれるユダが、「主よ、私たちには自分のことをはっきり知らせようとし、世の人々<sup>ひとびと</sup>にはそうしようと

しない、というのはどういうことですか」と質問します。イエスはこう答えます。「私を愛する人は私の言葉を守ります。私の父はその人を愛し……ます。私を愛さない人は私の言葉を守りません」。(ヨハネ 14:21-24) 世の人々<sup>ひとびと</sup>は、イエスが道、真理、命であることを認めません。

イエスが去ってしまった後、弟子たちは教わったことをどのようにして思い出せばよいのでしょうか。イエスは説明します。「父が私の名によって遣わす援助者<sup>えんじょしゃ</sup>つまり聖霊<sup>せいれい</sup>が、あなたたちに、全てのことを教えるとともに、私が話した全てのことを思い起こさせます」。使徒たちは聖霊<sup>せいれい</sup>がどれほど強力に働くかを知っていたので、安心したでしょう。イエスはさらにこう言います。「私が与<sup>あた</sup>える平和はあなたたちの元にとどまります。……心を騒<sup>さわ</sup>がせてはならず、弱気になってもなりません」。(ヨハネ 14:26, 27) ですから、心を騒<sup>さわ</sup>がせる必要はありません。イエスの父から指示と保護<sup>あた</sup>が与えられるからです。

神からの保護は間もなく明らかになります。イエスはこう言います。「世の支配者が来ようとしてい[ま]す。もっとも、その者は私に対して何の力もありません」。(ヨハネ 14:30) 悪魔<sup>あくま</sup>はユダの中に入り、彼<sup>かれ</sup>をコントロールできました。しかしイエスには罪深い弱さが全くないので、イエスを神に反逆させることはできません。イエスを死<sup>ふう</sup>に封じ込<sup>こ</sup>めておくこともできません。イエスは「父が命じた通りにして」おり、父が自分を復活させてくださるという確信があります。(ヨハネ 14:31)

- 
- ◇ イエスはどこに行こうとしていましたか。トマスはそこへの道<sup>みち</sup>について尋ねた時、イエスからどんなことを言われましたか。
  - ◇ フィリポはイエスに何をしてほしいと思っていたようですか。
  - ◇ イエスの弟子たちがイエスより大きなことを行うとはどういう意味ですか。
  - ◇ イエスは天の父が自分よりも偉大<sup>いだい</sup>なので、どんなことを確信できましたか。



## 枝として実を結び、イエスの友であり続ける

ヨハネ 15:1-27

イエスは心に響く話をして使徒たちを励ましています。時刻は遅く、真夜中を過ぎていると思われます。イエスはここで、使徒たちの意欲を高める別の例えを話します。

イエスは、「私は真のブドウの木、私の父は耕作者です」と話し始めます。(ヨハネ 15:1) このイエスの例えは、数百年前にイスラエル国民について語られた事柄と似たところがあります。当時は、イスラエル国民がエホバのブドウの木と呼ばれていました。(エレミヤ 2:21。ホセア 10:1, 2) しかし、エホバは彼らを捨て去ります。(マタイ 23:37, 38) ですから、イエスがこの例えで教えるのは別のことです。ブドウの木はイエスで、天の父は西暦29年に聖霊でイエスに油を注いだ時からずっとこの木を育ててきました。しかしイエスは、自分1人がその木を表すのではないことを示し、こう言います。

「父は、この木で実を結んでいない枝を全て切り落とし、実を結んでいる枝を全て手入れして、さらに実を結ぶようにします。……枝がブドウの木に付いていなければ実を結べないように、あなたたちも私と結び付いていなければ実を結べません。私はブドウの木、あなたたちはその枝です」。(ヨハネ 15:2-5)

イエスは自分が去った後、援助者である聖霊を忠実な弟子たちに送ると約束しました。その時から51日後、使徒たちと他の弟子たちはその聖霊を受け、ブドウの木の枝になります。全ての「枝」はイエスと結び付いていなければなりません。なぜでしょうか。

イエスはこう説明します。「私と結び付いていて、私が結び付いている人、その人は多くの実を結びます。あなたたちは私から離れては何も行えません」。忠実な弟子たちという「枝」は、イエスの特質に倣い、他の人に神の王国について積極的に伝え、もっと多くの人を弟子とすることにより、多くの実を結びます。イエスと結び付いたままでいなかったり、実を結ばなかったりするな

ら、どうなりますか。イエスは、「私と結び付いたままでいない人は……投げ捨てられて……しまいます」と話します。しかし、こうも言います。「あなたたちが私と結び付いたままでいて、私が言ったことがあなたたちの心にとどまっているなら、自分が願うどんなことでも求めなさい。それはかなえられます」。(ヨハネ 15:5-7)

ここでイエスは、すでに2度話した、おきてを守ることについて話します。(ヨハネ 14:15, 21) 「私のおきてを守るなら、いつも私に愛されます。私が父のおきてを守っていつも父に愛されるようにしているのと同じです」。それから、イエスのおきてを守っていることを示す大切な方法について、次のように教えます。「私があなたたちを愛した通りにあなたたちが互いを愛すること、これが私のおきてです。友のために自分の命をなげうつことより大きな愛はありません。私が命じていることを行うなら、あなたたちは私の友です」。(ヨハネ 15:10-14)

もう少しすれば、イエスは自分に信仰を抱く人全てのために命を差し出して、愛を示します。弟子たちはイエスの模範を考える時、同じように自分を犠牲にするほどの愛を示したいと思うはずです。この愛はイエスの弟子であることの証明になります。イエスが言った通りです。「あなたたちの間に愛があれば、全ての人は、あなたたちが私の弟子であることを知ります」。(ヨハネ 13:35)

使徒たちはイエスが自分たちを「友」と呼んだことに気付いたでしょう。イエスはそう呼ぶ理由について話します。「私はあなたたちを友と呼びました。天の父から聞いた事を全てあなたたちに知らせたからです」。イエスの親しい友になり、イエスが父から聞いた事柄を教えてもらえるというのは何と素晴らしいのでしょうか。しかし使徒たちがその友情を保つには、「実を結び続け」なければなりません。もしそうするなら、「あなたたちが

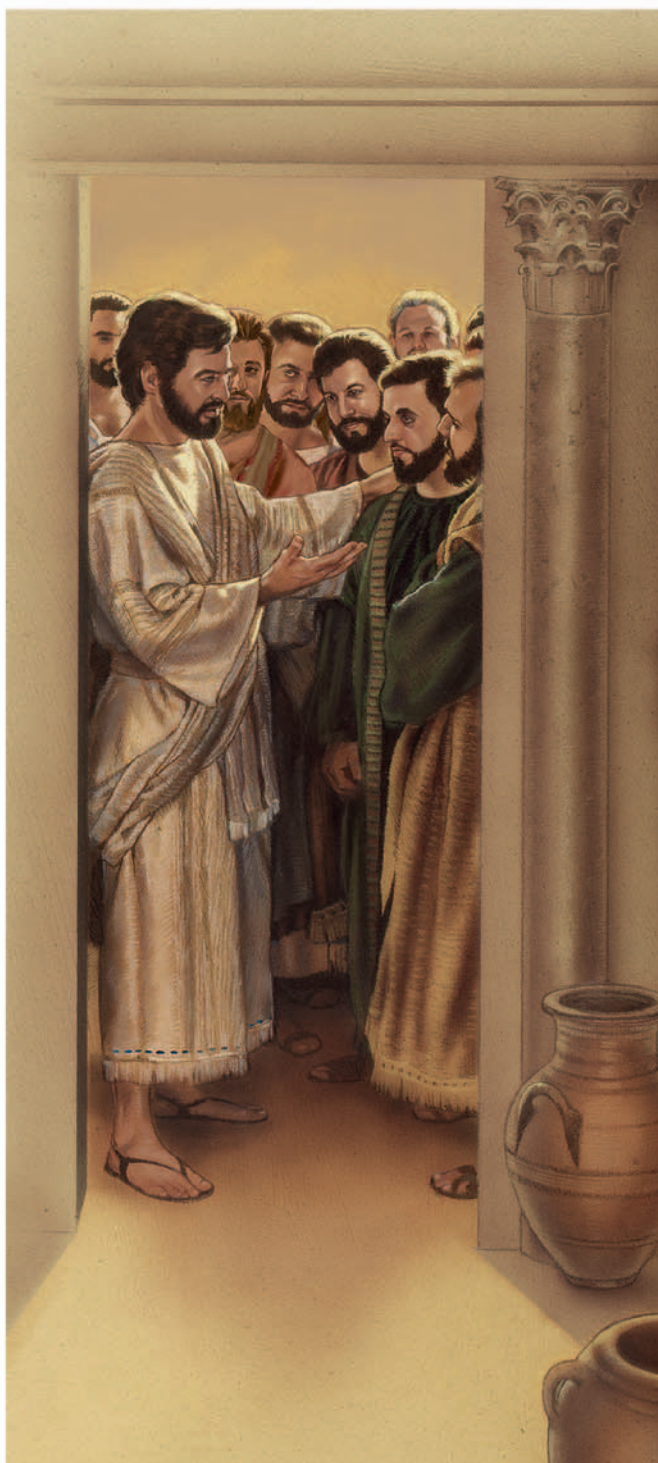
私の名によって父に何を求めても、父が<sup>あた</sup>与えてくださる」とイエスは保証します。(ヨハネ 15:15, 16)

「枝」であるイエスの弟子たちの間の愛は、<sup>かれ</sup>彼らが今後直面する出来事<sup>にんたい</sup>を忍耐するために必要です。イエスは、弟子たちが世から憎まれるという現実<sup>にく</sup>に注意を向けるとともに、こう言って<sup>はげ</sup>励まします。「もし世があなたたちを憎むなら、あなたたちを憎む前に私<sup>にく</sup>を憎んだということ<sup>ひとひと</sup>をあなたたちは知ります。あなたたちが世の人々のようだったら、世から好まれることでしょう。ところが、あなたたちは……世の人々のようではないので、世から憎まれます」。(ヨハネ 15:18, 19)

イエスは、世が弟子たちを憎む理由について、さらにこう言います。「世の人々<sup>ひとひと</sup>は、私の名のためにあなたたちをこのようにひどく扱います。私を<sup>あつか</sup>遣わした方<sup>つか</sup>を知らないからです」。イエスの奇跡<sup>きせき</sup>はイエスを憎む者たちを断罪します。イエスはこう説明します。「私は、ほかの誰<sup>だれ</sup>もしなかった事<sup>ひとひと</sup>を世の人々の間で行いました。もし私がそうしていなかったなら、<sup>かれ</sup>彼らには何の罪もないでしょう。しかし今、<sup>かれ</sup>彼らは私を見た上で憎み、私の父をも憎みました」。世から憎まれるのは預言の実現でもあります。(ヨハネ 15:21, 24, 25。詩編 35:19; 69:4)

イエスは聖霊<sup>せいれい</sup>という援助者<sup>えんじょしゃ</sup>を送るともう一度約束します。イエスの弟子たち全ては、この強力な力の助けに頼りつつ「証言し」、実を結びます。(ヨハネ 15:27)

- ◇ イエスの例えに出てくる耕作者、ブドウの木、枝とはそれぞれ誰<sup>だれ</sup>のことですか。
- ◇ 神は枝がどんな実を結ぶことを期待していますか。
- ◇ 弟子たちはどうすればイエスの友でいられますか。  
世からの憎しみに立ち向かうには何が必要ですか。



# 「勇気を出しなさい！ 私は世を征服したのです」

ヨハネ 16:1-33

イエスと使徒たちは過ぎ越しの食事をした階上の部屋を出ようとしています。イエスは大切な事柄をたくさん話してきましたが、さらにこう言います。「私がこれらの事を言ったのは、あなたがたが信仰を失わないためです」。この言葉は適切でした。なぜですか。イエスはこう説明します。「人々はあなたたちを会堂から追放します。実際、あなたたちを殺す人が皆、自分は神に神聖な奉仕をしたと思う時が来ます」。(ヨハネ 16:1, 2)

使徒たちは動揺したでしょう。世から憎まれるとイエスから聞きましたが、殺されるとは初耳です。イエスは、「これらの事を最初に話さなかったのは、あなたたちと一緒にいたからです」と説明します。(ヨハネ 16:4) しかし今、イエスは去っていくので、使徒たちをこれから先に備えさせようとしているのです。後になって、彼らが信仰を失うことのないためです。

イエスはこう続けます。「私は自分を遣わした方の元に行こうとしています。それでも、あなたたちの誰も、『どこに行くのですか』とは尋ねません」。その晩、使徒たちはイエスがどこに行こうとしているのか尋ねました。(ヨハネ 13:36; 14:5; 16:5) でも今、迫害されると聞いて動揺し、悲しみに沈んでしまったため、イエスが受ける栄光や、それが神の真の崇拜者にどんな意味を持つかについて質問できません。イエスはその様子を見て、「私がこれらの事を話したために、悲しみに暮れています」と言います。(ヨハネ 16:6)

それから、「私が去っていくことはあなたたちのためになります。私が去らなければ、援助者はあなたたちの元に来ませんが、去ったら、私はその者を遣わすからです」と言います。(ヨハネ 16:7) イエスが死に、天に行って初めて、弟子たちは聖霊を受けるようになります。イエスは自分の弟子たちが地上のどこにしようと、その援助者を遣わすことができます。

聖霊は、「罪に関し、正しさに関し、裁きに関して、納得のいく証拠を世に与えます」。(ヨハネ 16:8) 聖霊により、世が神の子に信仰を抱かなかった罪が暴露されます。そして、イエスが天へ昇ることによって、イエスの正しさに関する納得のいく証拠が与えられ、「この世の支配者」サタンが不利な裁きに値する理由も明らかになります。(ヨハネ 16:11)

イエスは話を続け、「あなたたちに言うべきことがまだたくさんありますが、あなたたちは今はそれを理解できません」と言います。将来イエスが聖霊を注ぐ時、弟子たちは「真理を十分に理解できる」よう導かれ、真理に沿って生きることが可能になります。(ヨハネ 16:12, 13)

使徒たちはイエスの次の言葉を聞いて戸惑います。「しばらくしたら、あなたたちはもう私を見ません。でも、しばらくしたら、あなたたちは私を見ます」。彼らは、これはどういう意味だろうと話し合います。イエスは彼らが質問したがっていることに気づき、こう説明します。「はっきり言っておきますが、あなたたちは泣き叫びますが、世は喜びます。あなたたちは深く悲しみますが、悲しみは喜びに変わります」。(ヨハネ 16:16, 20) イエスがこの日の午後に殺されると、宗教指導者たちは喜び、弟子たちは深く悲しみます。しかしその悲しみは、イエスが復活すると喜びに変わります。そして、イエスが彼らに聖霊を注ぐため、喜びは続きます。

イエスは使徒たちの状況を陣痛に例えます。「女性は、出産の時が来ると苦しみます。しかし、子供を産み終えると、人が世に生まれた喜びのためにもう苦痛を覚えていません」。それからこう励まします。「あなたたちも今は悲しんでいますが、再び私に会い、心から喜びます。誰もその喜びを奪えません」。(ヨハネ 16:21, 22)

この時まで、使徒たちはイエスの名によって祈ったことがありませんでした。しかし今イエスは、「その日、あ





なたたちは私の名によって父に願い求めます」と言います。これは天の父が祈りをあまり聞きたがらない、ということでは決してありません。イエスはこう言います。「父はあなたたちに愛情を抱いているのです。あなたたちは、私に愛情を抱き、私が神の代理として来たことを信じているからです」。(ヨハネ 16:26, 27)

イエスの励ましにより使徒たちは勇気づけられたでしょう。「あなたが神の元から来たことを信じます」と言い、確信を表します。しかしその確信は間もなく試されます。イエスは何が待ち受けているかを話します。「あ

なたたちが散らされてそれぞれ自分の家に帰り、私を独りにする時が来ます。いえ、もう来ています」。しかし、保証も与えます。「これらの事を言ったのは、あなたたちが私によって平和な気持ちになるためです。あなたたちは世で苦難に遭いますが、勇気を出しなさい！ 私は世を征服したのです」。(ヨハネ 16:30-33) イエスは彼らを見捨てません。イエスは使徒たちも世を征服できると確信していました。使徒たちはサタンとその世が自分たちの信仰を砕こうとしても、神の意志を忠実に果たしていくことにより、必ず世を征服できるのです。

- ◇ 使徒たちはイエスのどんな言葉を聞いて動揺しましたか。
- ◇ 使徒たちがイエスに質問できなくなったのはなぜですか。
- ◇ イエスは使徒たちの悲しみが喜びに変わる様子をどんなことに例えましたか。

# 階上の部屋でイエスがささげた最後の祈り<sup>いの</sup>

ヨハネ 17:1-26

イエスは使徒たちへの深い愛に動かされ、別れを前にして彼らに心の準備をさせてきました。ここでイエスは天を見上げ、父にこう祈ります。「あなたの子に栄光をお与えください。子によってあなたが栄光を受けるためです。あなたは全人類に対する権威<sup>けんい</sup>を子にお与えになりました。子が、自分に委ねられた人全てに永遠の命<sup>えいめい</sup>を与えるためです」。(ヨハネ 17:1, 2)

イエスにとって最も重要なのは、神が栄光を受けることです。しかし、イエスがこの祈りで述べた永遠の命の希望は、素晴らしいものです。イエスは「全人類に対する権威<sup>けんい</sup>」を与えられているので、贖い<sup>あがな</sup>による祝福を全ての人に差し伸べることができます。しかし、祝福を受けるには条件があります。イエスの次の言葉通りにしなければなりません。「永遠の命を得るには、唯一<sup>ゆいいつ</sup>の真の神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストのことを知る必要があります」。(ヨハネ 17:3)

エホバとイエスをよく知って強い絆<sup>きずな</sup>を育むべきです。エホバやイエスと同じ感覚を身に付け、エホバとイエスに倣<sup>なら</sup>った仕方<sup>かた</sup>で他の人に接するよう努力することも大切です。さらに、自分が永遠の命を得るより、神が栄光を受ける方が重要であることも覚えておかなければなりません。次にイエスは、もう一度その点を話します。

「私は、あなたから委ねられた事を成し遂<sup>と</sup>げて、地上であなたをたたえました。父よ、人類が誕生する前に私があなた<sup>あなた</sup>のそばで栄光を受けていたように、今、私をそばに置いて栄光をお与えください」。(ヨハネ 17:4, 5) イエスは、復活して天で栄光を得たいと願っているのです。

とはいえイエスは、伝道活動で成し遂<sup>と</sup>げたことを忘れていません。こう祈ります。「私は、あなたが世から取<sup>たく</sup>って託<sup>たく</sup>してくださった人たちにあなたのお名前を明らかに

しました。この人たちはあなたのものでしたが、私に託<sup>たく</sup>してくださいました。彼らはあなたの言葉を守っています」。(ヨハネ 17:6) イエスは伝道の際、エホバという名前を発音する以上のことを行いました。その名前が表すもの、つまり神がどんな方で、どのように人間と接するかが理解できるよう、使徒たちを助けました。

使徒たちは、エホバについて、イエスの役割について、またイエスが教えた他の事柄<sup>ことば</sup>について知るようになりました。それでイエスは謙遜<sup>けんそん</sup>にこう言います。「あなたが告げてくださった言葉を私が彼らに告げ[ました]。彼らはそれを受け入れて、私があなたの代理として来たことを本当に知り、あなたが私を遣わされたことを信じた」。(ヨハネ 17:8)

それからイエスは、弟子たちと世の違<sup>ちが</sup>いについてこう言います。「彼らに関してお願いします。世に関してはなく、私に託<sup>たく</sup>してくださった人たちに関してです。彼らはあなたのものだからです。……聖なる父よ、あなたは私にあなたのお名前を託<sup>たく</sup>してくださいました。そのお名前のためにこの人たちを見守ってください。私たちが一つであるように、彼らも一つになるためです。……私は彼らを守り、誰も滅<sup>ほろ</sup>びていません。あの者だけは滅<sup>ほろ</sup>びましたが」。あの者とは、イエスを裏切るユダ・イスカリオテのことです。(ヨハネ 17:9-12)

イエスはさらに祈ります。「世の人々は彼らを憎<sup>にく</sup>みしました。……この人たちを世から取り去ることではなく、邪悪<sup>じゃあく</sup>な者から守ってくださることをお願いします。私が世の人々<sup>ひとびと</sup>のようではないのと同じように、彼らも世の人々<sup>ひとびと</sup>のようではありません」。(ヨハネ 17:14-16) 使徒たちも他の弟子たちもサタンの支配する社会で生活しています。しかし、世とその悪<sup>はな</sup>から離れていなければなりません。どうすればよいのでしょうか。

聖なる人でなければなりません。ヘブライ語聖書に記されている真理と、イエスが教えた真理を当てはめることによってそうできます。イエスはこう<sup>いの</sup>祈ります。「真理によって彼ら<sup>かれ</sup>を神聖なものとしてください。あなたの言葉は真理です」。(ヨハネ 17:17) 後に、ある使徒たちは聖書の一部を書き記します。その書も、人を神聖なものとするのに役立つ「真理」<sup>ふく</sup>に含まれることになります。

「真理」を受け入れる人たちがさらに現れるので、イエスはこう<sup>いの</sup>祈ります。「この人たち[11人の使徒たち]だけでなく、彼らの言葉によって私に<sup>しんこう</sup>信仰を持つ人々についてもお願いします」。イエスの願いは何でしょうか。「彼ら全員が一つになり、父よ、あなたと私が結び付いているように、彼らも私たちと結び付いているため……です」。(ヨハネ 17:20, 21) 天の父とイエスは、全ての点で同意しているという意味で、一つです。イエスは弟子たちも同じように一つになることを<sup>いの</sup>祈っているのです。

イエスはその少し前、ペテロや他の使徒たちに、あなたたちのために場所を整えに行く、と言いました。天の場所のことです。(ヨハネ 14:2, 3) イエスはその点を再び取り上げて<sup>いの</sup>祈ります。「父よ、私に<sup>たく</sup>託して下さった人々<sup>ひとびと</sup>が私のいる所<sup>いっしょ</sup>に一緒にいるようにと願います。世が始まる前に私を愛して<sup>あた</sup>与えて下さった栄光<sup>かれ</sup>を彼らが見るためです」。(ヨハネ 17:24) ここでイエスは、ずっと昔から、アダムとエバに子供ができる前から、自分が神に愛されてきたことを示しました。

イエスは<sup>いの</sup>祈りの最後に、父の名前と神の愛を再び強調します。その愛は、使徒たちと、これから「真理」を受け入れる他の弟子に対するものです。「私はあなたのお名前<sup>かれ</sup>を彼らに知らせました。これから<sup>かれ</sup>も知らせます。あなたが私を愛して下さったように彼らが愛を示し、私が彼らと結び付いているためです」。(ヨハネ 17:26)



- ◇ 神とイエスを知るとはどういう意味ですか。
- ◇ イエスはどのように神のお名前を明らかにしましたか。
- ◇ 神とイエスと<sup>すうはいしや</sup>真の崇拝者たち全ては一つである、とはどういう意味ですか。



## 深い悲しみの中で祈る<sup>いの</sup>

マタイ 26:30, 36-46    マルコ 14:26, 32-42    ルカ 22:39-46    ヨハネ 18:1

イエスは忠実な使徒たちとの<sup>いの</sup>祈りを終えます。そして、「皆で<sup>みな</sup>賛美の歌を歌ってから、オリーブ山に出て」いきます。(マルコ 14:26) イエスは使徒たちと東に向かい、よく時間を過ごしたゲッセマネと呼ばれる園に行きます。

オリーブの木に囲まれた気持ちの良いこの場所に着くと、イエスは<sup>おそ</sup>恐らく園の入り口付近に、使徒たちのうち8人を残します。そして、「私が向こうに行って祈りをする間、ここに座<sup>いの</sup>っていないさい」と言います。それから、ペテロとヤコブとヨハネを連れてさらに進んでいきます。イエスはひどく<sup>くのう</sup>苦悩し、3人にこう言います。「私は悲しみのあまり、死んでしまいそうです。ここにとどまって、私と共にずっと見張<sup>いの</sup>っていないさい」。(マタイ 26:36-38)

イエスは少し<sup>はな</sup>離れた所に行き、地面に伏して祈り始めます。この<sup>きんぱく</sup>緊迫した状況で何を<sup>いの</sup>祈るのでしょうか。イエスはこう言います。「父よ、あなたには全てのことが可能です。この<sup>さかずき</sup>杯を私から取り除いてください。それでも、私が望むことではなく、あなたが望まれることを」。(マルコ 14:35, 36) これはどういう意味でしょうか。贖いになるという役割を果たせないということですか。そうではありません。

イエスは、ローマ人が人々をむごい仕方<sup>ひとびと</sup>で殺すのを天から見てきました。今、イエスは地上にいる人間です。<sup>おそ</sup>恐れや不安といった感情があり、痛みも感じます。ですから<sup>せま</sup>迫りくる死を楽しみにしているはずがありません。しかしイエスを一番苦しめているのは、<sup>ひれつ</sup>卑劣な犯罪者として殺されるなら、天の父の名に非難が浴びせられるのではないかということです。あと数時間もすれば、神を<sup>ぼうとく</sup>冒瀆したとして<sup>くい</sup>杭に掛けられるのです。

イエスが長い<sup>いの</sup>祈りを終えて戻ると、使徒たちは3人とも眠<sup>ねむ</sup>っています。イエスはペテロにこう言います。「私と共に1時間見張<sup>いの</sup>っていることもできなかったのですか。

ずっと見張<sup>いの</sup>っていて絶えず<sup>いの</sup>祈り、<sup>ゆうわく</sup>誘惑に負けないようにしていなさい」。しかしイエスは、彼らが大きなストレスを感じていて、夜も<sup>おそ</sup>遅いことを考え、「もっとも、心は強く願<sup>いの</sup>っていても、肉体は弱いのです」と言います。(マタイ 26:40, 41)

イエスはもう一度<sup>はな</sup>離れた所に行き、「この<sup>さかずき</sup>杯」を自分から取り去ってくださるよう神に<sup>いの</sup>祈ります。それから戻ってくると、<sup>ゆうわく</sup>誘惑に負けないよう祈っているべき3人が<sup>ねむ</sup>まともや眠<sup>か</sup>っています。彼らはイエスから話し掛けられても、「何と<sup>いの</sup>言っていないか分<sup>はな</sup>か」りません。(マルコ 14:40) イエスは3度目にそこを<sup>ひざ</sup>離れ、<sup>いの</sup>膝をついて祈ります。

イエスがとても心配しているのは、犯罪者として死ぬば父の名に非難をもたらすかもしれないということでした。エホバはイエスの<sup>いの</sup>祈りを聞いていました。それで、天使を<sup>はけん</sup>派遣してイエスを力づけます。その後もイエスは父に<sup>き</sup>祈願をし、「さらに<sup>しんけん</sup>真剣に<sup>いの</sup>祈り続け」ます。とてつもないストレスです。イエスの肩には<sup>かた</sup>重圧がのしかかっています。自分自身の永遠<sup>しんこう</sup>の命と、イエスに<sup>いだ</sup>信仰を抱く全

**イエスの<sup>あせ</sup>汗は血のように<sup>したた</sup>滴った** 医師のルカはどのようにイエスの「<sup>あせ</sup>汗が血のようになって地面に<sup>したた</sup>滴り落ちた」かを説明していません。(ルカ 22:44) ルカは、汗が滴る様子を傷から血が滴る様子に例えたのかもしれませんが。別の見方もあります。「アメリカ医師会ジャーナル」(JAMA)誌(英語)の中でウィリアム・D・エドワーズ博士はこう述べています。「ごくまれな現象ではあるが、感情が非常に高ぶった場合……、血液の混じった汗(<sup>あせ</sup>血汗<sup>けっかん</sup>症)が出ることもある。汗腺に血液が入り込むことで、皮膚は破れやすくなる」。



ての人の永遠の命がかかっているのです。「汗が血のようになって地面に滴り落ち」ます。(ルカ 22:44)

イエスが3度目に使徒たちの所に戻ってくると、使徒たちはやはり眠っています。それでこう言います。「この

ような時に、あなたたちは眠って休んでいます！ さあ、人の子が裏切られて罪人たちに引き渡される時が近づきました。立ちなさい。行きましょう。見なさい、私を裏切る人が近づいてきました」。(マタイ 26:45, 46)

- 
- ◇ イエスは階上の部屋を出た後、使徒たちとどこへ向かいましたか。
  - ◇ イエスが祈っている間、3人の使徒たちは何をしていましたか。
  - ◇ イエスの汗が血のように滴り落ちたことから、イエスの感情についてどんなことが分かりますか。

# キリストは裏切られ逮捕される

マタイ 26:47-56    マルコ 14:43-52    ルカ 22:47-53    ヨハネ 18:2-12

真夜中をかなり過ぎています。祭司長たちは、イエスを裏切ることを条件にユダに銀30枚を支払うことに合意していました。ユダは祭司長たちとパリサイ派の人たちを大勢率い、イエスを捜しています。ローマ軍の軍司令官と兵士の一隊も一緒にいます。

ユダは過ぎ越しの食事の際にイエスから出ていくよう言われた後、真つぐ祭司長たちの所へ行ったようです。(ヨハネ 13:27) 祭司長たちは下役たちと兵士の一隊を招集します。ユダはまず、彼らをイエスと使徒たちが過ぎ越しを祝った部屋に連れていったのでしょう。それからキデロンの谷を渡り、ゲッセマネの園に向かいます。人々は武装し、たいまつやランプを持ってイエスを絶対に見つけようとしています。

ユダは先頭に立ってオリーブ山を登っていきます。イエスの居場所はあそこだという自信があります。先週、イエスと使徒たちはベタニヤとエルサレムを何度も往復した際、よくゲッセマネの園で休憩しました。しかし今は夜ですし、オリーブの木々のせいでイエスを見つけにくいかもしれません。イエスを一度も見ただけの兵士たちは、誰がイエスかどうしたら分かるのでしょうか。それでユダは合図を決めてこう言います。「私が口づけするのがその人だ。捕まえて、しっかりと引いていけ」。(マルコ 14:44)

ユダが人々を率いて園に入っていくと、イエスと使徒たちが見えます。それでユダは真つぐイエスの所に行き、「こんばんは、ラビ」と言って、優しく口づけします。それに対しイエスは、「何のためにここにいますか」と言います。(マタイ 26:49, 50) 続けて、「ユダ、口づけして人の子を裏切るのですか」と言います。(ルカ 22:48) でも、ユダとこれ以上関わる必要はありません。

イエスはたいまつやランプの光の中に進み出て、「誰

を捜しているのですか」と尋ねます。人々は、「ナザレ人イエスだ」と答えます。イエスは勇敢にも、「それは私です」と言います。(ヨハネ 18:4, 5) 人々は意表を突かれ、地面に倒れます。

イエスはこの時とばかりに闇に紛れて逃げるのではなく、もう一度彼らに、誰を捜しているのかと質問します。人々は、「ナザレ人イエスだ」と答えます。イエスは穏やかに、「それは私だと言いました。私を捜しているのであれば、この人たちは行かせてあげなさい」と言います。イエスはこのような状況でも、私は1人も失わないという、以前に語った言葉を実現させます。(ヨハネ 6:39; 17:12) イエスはこれまでずっと忠実な使徒たちを守ってきました。しかし、「あの者[ユダ]だけは滅びました」。(ヨハネ 18:7-9) それで、イエスは忠節な弟子たちを行かせるよう求めます。

兵士たちは立ち上がりイエスに近づきます。使徒たちは状況を察知し、「主よ、剣で切り掛かりましょうか」と言います。(ルカ 22:49) イエスが答えるよりも先に、ペテロが自分たちで持っていた2本の剣の1つを振り下ろします。そして、大祭司の奴隷であるマルコスの右の耳を切り落とします。

イエスはマルコスの耳に触れて傷を癒やします。それからペテロに次のように命じて、大切な教訓を与えます。「その剣をさやに収めなさい。剣を取る人は皆、剣で滅びます」。イエスは逃げる気は全くありません。それで、「必ずこうなると述べる聖書の言葉はどうして実現するのでしょうか」と言います。(マタイ 26:52, 54) また、「私は父が与えてくださった杯を飲むべきではありませんか」と話します。(ヨハネ 18:11) イエスは、死に至るまで天の父の意志に従う覚悟でいるのです。

イエスは人々にこう言います。「私を捕らえるために、強盗対するよう剣やこん棒を持ってきたのですか。



- ユダは園でイエスを裏切る
- ペテロはある男性の耳を切り落とす
- イエスが逮捕される

# 124

私は毎日<sup>しんでん</sup>神殿で座って教えていたのに、あなた方は私を捕ま<sup>つか</sup>えませんでした。しかし、この全ては、預言者たちの記した事が実現するために起きたのです」。(マタイ 26:55, 56)

兵士たちと軍司令官とユダヤ人の下役たちは、イエ

スを捕ら<sup>と</sup>えて縛<sup>しば</sup>ります。これを見た使徒たちは逃<sup>に</sup>げていきます。でも、弟子のマルコと思われる「若者」は人々<sup>ひとびと</sup>の後に付いていきます。(マルコ 14:51) ところが人々<sup>ひとびと</sup>に気付かれ、捕<sup>つか</sup>まりそうになったため、亜麻布<sup>あまめ</sup>の服を残して逃<sup>に</sup>げていきます。



- ◇ ユダがイエスを<sup>さが</sup>捜すためにゲツセマネの園に行ったのはなぜですか。
- ◇ ペテロはイエスを守ろうとして何をしましたか。しかしイエスは何と言いましたか。
- ◇ イエスは天の父の意志に従<sup>かくご</sup>う覚悟でいることをどのように示しましたか。
- ◇ 使徒たちがイエスを見捨てた時、すぐ<sup>に</sup>に逃げ<sup>なれ</sup>なかったのは誰ですか。その人はどうなりましたか。

## まずアンナスの所へ、その後カヤファの所へ

マタイ 26:57-68   マルコ 14:53-65   ルカ 22:54, 63-65   ヨハネ 18:13, 14, 19-24

イエスは普通の犯罪者のように縛られ、アンナスの所へ連れていかれます。アンナスは、少年イエスが神殿で教師たちを驚かせた時に大祭司を務めていた人物です。(ルカ 2:42, 47) 彼の息子たちの何人かは大祭司になり、現在は義理の息子カヤファが大祭司です。

イエスがアンナスの家にいる間に、カヤファはサンヘドリンを招集します。サンヘドリンは71人で構成されている法廷で、大祭司や大祭司の職に就いたことのある人たちが含まれています。

アンナスはイエスに「弟子たちや教えについて」質問します。イエスはただこう答えます。「私は皆の前で話してきました。全てのユダヤ人が集まる神殿や会堂でい

つも教え、何もひそかに話したりはしませんでした。なぜ私に質問するのですか。私が話した事を聞いた人たちに質問しなさい」。(ヨハネ 18:19-21)

すると、そばに立っていた下役がイエスの顔を平手打ちし、「祭司長にそんな答えをするのか」と言います。しかしイエスは、何も間違ったことをしてこなかったもので、こう答えます。「私が間違ったことを言ったなら、何が間違っているのかを言いなさい。しかし、正しいなら、なぜたたくのですか」。(ヨハネ 18:22, 23) それでアンナスはイエスを義理の息子カヤファの家に送ります。

この時までには、サンヘドリン全体、つまり現在の大祭司と民の長老たちと律法学者たちが集合していまし



た。カヤファの家に集結したのです。過ぎ越しの晩に裁判を行うのは違法なことです。しかし、邪悪な目的を遂げようとする彼らは全く気にしません。

彼らは公正ではありませんでした。イエスがラザロを復活させた後、イエスを殺すことにしました。(ヨハネ 11:47-53) そして数日前、イエスを捕らえて殺そうと相談しました。(マタイ 26:3, 4) ですから裁判が始まる前に、イエスの死罪は確定していたのです。

集まりが違法だっただけではありません。彼らはイエスが不利になるうその証拠を提出できる証人を探しています。大勢の証人を見つめますが、彼らの証言は一致していません。最後に2人の証人が進み出て、こう言います。「この者が、『人手によるこの神殿を壊し、人手によらない別のものを3日で建てる』と言うのを聞きました」。(マルコ 14:58) しかしこの2人の証言も、完全に一致しているわけではありません。

カヤファはイエスにこう質問します。「何も答えないのか。この人たちがあなたに不利な証言をしているが、どうなのか」。(マルコ 14:60) うその告発をする証人たちの発言を聞いても、イエスは黙ったままです。そこでカヤファは別の手を使います。

カヤファは、自分は神の子だと主張する人物に対してユダヤ人が過敏な反応を示すことを知っています。以前イエスが神のことを父と呼んだ際にも、ユダヤ人た

ちは「自分を神のような者としている」としてイエスを殺そうとしたことがありました。(ヨハネ 5:17, 18; 10:31-39) カヤファはそうした事情を知っていたので、イエスに巧みにこう詰め寄ります。「生きている神に懸けて誓って言え、あなたは神の子キリストなのか」。(マタイ 26:63) これまでイエスは自分が神の子であると認めてきました。(ヨハネ 3:18; 5:25; 11:4) もし今黙ったままでそのことを認めないなら、自分が神の子またキリストであることを否定しているような印象を与えています。それでイエスはこう言います。「その通りです。あなた方は、人の子が強力な方の右に座り、また天の雲と共に来るのを見ます」。(マルコ 14:62)

これを聞いたカヤファは大きげに服を引き裂き、こう叫びます。「この者は冒瀆した! これ以上、証人が必要でしょうか。皆さんは今、冒瀆の言葉を聞きました。どう思いますか」。サンヘドリンは、「この者は死に値する」と答え、公正とは真逆の判決を言い渡します。(マタイ 26:65, 66)

それから彼らはイエスをばかにし、こぶしで殴り始めます。イエスを平手打ちし、顔に唾を吐き掛けます。さらに、イエスの顔を覆ってから殴り、「預言してみろ! おまえを打ったのは誰か」という皮肉を言います。(ルカ 22:64) 違法な裁判にかけられた晩、神の子はこうした侮辱を受けたのです。

- 
- ◇ イエスはまずどこに連れていかれましたか。そこでどんなことがありましたか。
  - ◇ 次にイエスはどこへ連れていかれましたか。カヤファはサンヘドリンがイエスを死罪に定めるよう、どのように仕向けましたか。
  - ◇ 裁判の時、イエスはどのような仕打ちを受けましたか。



## ペテロはイエスのことを知らないと言う

マタイ 26:69-75    マルコ 14:66-72    ルカ 22:54-62    ヨハネ 18:15-18, 25-27

ゲッセマネの園でイエスが逮捕されると、使徒たちはイエスを見捨て、恐れ<sup>おそ</sup>のあまり逃げ<sup>に</sup>てしまいます。でも、彼らのうち2人は逃げ<sup>に</sup>るのを途中<sup>とちゅう</sup>でやめます。ペテロと「もう1人の弟子<sup>おそ</sup>」、恐らくヨハネと思われ<sup>はな</sup>ます。(ヨハネ 18:15; 19:35; 21:24) 2人はイエスがアンナスの家に連れていかれる時に追い付いたのでしょう。アンナスが大祭司カヤファの所へイエスを送る時<sup>はな</sup>にも、2人は離れて付いていきます。彼らは自分の命を心配する気持ちと、イエスに何が起きるのか不安に思う気持ちの間で揺れていたでしょう。

ヨハネは大祭司に知られていた<sup>はな</sup>ので、カヤファの家の中庭に入ります。ペテロは外で戸口の所に立っています。すると、ヨハネが戻<sup>もど</sup>ってきて戸口番の女性に話してくれたため、中に入ることを許されます。

寒い晩なので、中庭にいる人たちは炭火をおこします。ペテロはイエスの裁判の「成り行きを見ようとして」、その人たちと一緒<sup>いっしょ</sup>に座り、体を温めます。(マタイ 26:58) その時、ペテロを中に入れた戸口番の女性が火に照らされたペテロの顔を見て、「あなたもこの人の弟子ではないでしょうね」と言います。(ヨハネ 18:17) 周りの人たちもペテロに気付<sup>いっ</sup>き、あなたはイエスと一緒にいた、と言<sup>い</sup>い<sup>っ</sup>だします。(マタイ 26:69, 71-73。マルコ 14:70)

ペテロはこの状況<sup>じょうきよう</sup>にひどく動揺<sup>どうよう</sup>します。そこでペテロは、「その人を知らないし、あなたが何を話しているのかも理解できない」と言<sup>い</sup>います。(マルコ 14:67, 68) それだけでなく、「うそなら神罰<sup>しんばつ</sup>を受けてもいいと誓<sup>ちか</sup>い始め」ます。(マタイ 26:74)

その間も、イエスの裁判は進んでいます。裁判はカヤ

ファの家の中庭の上にある階で行われていたようです。下で待つペテロや他の人たちは、さまざまな証人が出たり入ったりするのを見<sup>み</sup>たでしょう。

ペテロのガリラヤなまりを証拠<sup>しょうこ</sup>に、人々はペテロの主張がうそであると見破ります。さらに、そこにはペテロが耳を切り落としたマルコスの親族もいました。その人はペテロに対しはっきりと、「私は見た。庭園で彼と一緒<sup>いっしょ</sup>にいたではないか」と言<sup>い</sup>います。ペテロがそのことを3度目に否定すると、イエスが語っていた通り、おん<sup>お</sup>どりが鳴きます。(ヨハネ 13:38; 18:26, 27)

この時ちょうど、イエスは中庭を見下ろすバルコニーにいたようです。イエスは振り向き、ペテロを真<sup>ま</sup>っすぐに見ます。その視線はペテロの心に突き刺<sup>つ</sup>さ<sup>さ</sup>ったに違<sup>ちが</sup>いありません。ほんの数時間前に、イエスが階上の部屋で言った言葉がよみがえります。自分がしてしまったことの重大さに気付<sup>き</sup>き、ペテロがどれほど打ちのめされたか想像できるでしょうか。ペテロは外に出て激しく泣きます。(ルカ 22:61, 62)

どうしてこうなってしまったのでしょうか。あれほど自分の信仰<sup>しんこう</sup>と忠節に自信を持っていたペテロが、なぜイエスを知らないと言<sup>い</sup>ってしまったのでしょうか。イエスは自分の言葉を曲解され、卑<sup>いや</sup>しい犯罪者のように見なされています。無実のイエスに忠実であるべき時に、「永遠の命の言葉を持<sup>も</sup>って」いる、まさにその人に背を向けてしまったのです。(ヨハネ 6:68)

ペテロの悲惨<sup>ひさん</sup>な経験から、どれほど強い信仰<sup>しんこう</sup>と忠節を示してきたとしても、突然生<sup>とつぜん</sup>じる試練や誘惑<sup>ゆうわく</sup>に立ち向かう準備をしていなければ、倒<sup>たお</sup>れてしまう危険があると学べます。これは神に仕える人全てにとって大切な教訓です。



- ◇ ペテロとヨハネはカヤファの家の中庭にどのようにして入ることができましたか。
- ◇ ペテロとヨハネが中庭にいる間、家の中で何が行われていましたか。
- ◇ マタイ 26章74節によると、ペテロは何をしましたか。
- ◇ ペテロの失敗からどんな大切な教訓を学べますか。

## サンヘドリンでの裁判の後、ピラトの所へ連れていかれる

マタイ 27:1-11 マルコ 15:1 ルカ 22:66-23:3 ヨハネ 18:28-35

ペテロがイエスを知らないと言ったのは、夜明けごろでした。サンヘドリンは形だけの裁判を終え、解散しています。しかし金曜の朝、彼らは再び集まります。それは、昨晚の違法な裁判を合法的に見せ掛けるためなのでしょう。イエスはサンヘドリンの前に連れ出されます。

彼らはもう一度、「もしあなたがキリストなら、そう言いなさい」と命じます。それに対しイエスは、「たとえ言っても、あなた方は全く信じないでしょう。また、質問しても、あなた方は答えないでしょう」と言います。しかしイエスは勇敢にも、自分がダニエル 7章13節で予告されていた人物だと明言します。「今後、人の子は強力な神の右に座ります」。(ルカ 22:67-69。マタイ 26:63)

すると彼らは、「では、あなたは神の子なのか」と念を押します。イエスは、「あなた方自身が私のことをそう言っています」と答えます。これを根拠にしてイエスを

冒瀆の罪で死刑にできそうです。そこで彼らは、「どうしてこれ以上、証言が必要でしょうか」と言います。(ルカ 22:70, 71。マルコ 14:64) それからイエスを、ローマ総督ポンテオ・ピラトの所へ引いていきます。

ユダ・イスカリオテはイエスがピラトの所へ連れていかれるのを見たのでしょう。イエスが有罪とされたのを知り、後悔と絶望の気持ちに襲われます。しかし、心から悔い改めて神に許しを求めることはせず、銀30枚を返すため祭司長たちの所へ行きます。そして、「私は無実の人を裏切って罪を犯した」と言います。すると彼らは冷酷な態度で、「私たちの知ったことではない。あなたが始末すべきことだ!」と答えます。(マタイ 27:4)

それでユダは銀30枚を神殿へ投げ込みます。そして自殺を図り過ちを重ねます。首をつろうとしますが、縄を結んだ木の枝が折れたようです。ユダは岩の上に落ち、体が裂けてしまいます。(使徒 1:17, 18)





- ・朝に行われたサンヘドリンでの裁判
- ・ユダ・イスカリオテは首をつって死のうとす
- ・イエスはピラトの所へ連れていかれ、訴えられる

イエスは朝早くポンテオ・ピラトの邸宅<sup>ていたく</sup>に連れていかれます。しかし、イエスを連れてきたユダヤ人たちは中に入ろうとしません。異邦人<sup>いほうじん</sup>と接するなら身を汚してしまおうと考えているからです。身を汚すなら、無酵母<sup>むこうぼ</sup>パンの祭りの初日であるニサン15日の食事ができなくなるのです。その日も過ぎ越し<sup>すこし</sup>の期間とされていました。

それでピラトは出てきて、「どんな理由でこの人を訴えるのか」と尋ねます。ユダヤ人たちは、「この男が悪事をしていなければ、あなたに引き渡したりはしません」と言います。ピラトは圧力を感じたようで、こう言います。「彼を連れていき、自分たちの律法に従って裁きなさい」。すると彼らは、「私たちが人を殺すことは許されていません」と言います。彼らがイエスを殺したいと思っていることは明らかです。(ヨハネ 18:29-31)

もし祭りの期間に、尊敬されているイエスを殺せば、大騒ぎ<sup>おおさわぎ</sup>になるでしょう。それで、ユダヤ人たちは責任を免れようとして、ローマ人に彼らの権限でイエスを政治犯として処刑<sup>しよけい</sup>させようと考えます。

宗教指導者たちは、自分たちがイエスを冒瀆<sup>ぼうとく</sup>の罪で有罪にしたことは話しません。別の罪状をでっち上げ、こう言います。「この男は[1]私たちの民を惑わし、[2]カエサルに税を払<sup>はら</sup>うことを禁じ、[3]自分が王キリストだと言っていました」。(ルカ 23:2)

ローマを代表する総督としてピラトが知りたいのは、イエスが自分を王だと名乗ったという罪状です。ピラトは邸宅<sup>ていたく</sup>に入ってイエスを呼び、「あなたはユダヤ人の王

なのか」と尋ねます。つまり、あなたはカエサルに反抗<sup>はんこう</sup>して自分が王であると名乗ることでローマ帝国の法を破ったのか、ということです。ピラトがどの程度のことを耳にしているのか知るために、イエスは、「自分の考えでそう尋ねているのですか。それとも、ほかの人が私について告げたのですか」と質問します。(ヨハネ 18:33, 34)

ピラトはイエスについて何も知らないことを認めつつ、知りたいという気持ちを表し、こう言います。「私がユダヤ人だとしても言うのか。あなたの国の人々と祭司長<sup>ひとびと</sup>たちがあなたを私に引き渡したのだ。あなたは何をしたのか」。(ヨハネ 18:35)

イエスは自分が王なのかどうかという問題をはぐらかそうとはせず、ピラトがとても驚くような答えをします。

**血の土地** 祭司長たちは、ユダが神殿<sup>しんでん</sup>に投げ込んだ銀をどうすればよいかわかりません。彼らは、「これを聖なる宝物庫に入れることは許されない。血の代価だからだ」と言います。それで、そのお金で、見知らぬ人たちを葬る墓地として陶芸家の土地を買います。そこは「血の土地」と呼ばれるようになりました。(マタイ 27:6-8)



- ◇ サンヘドリンが金曜の朝にもう一度集まったのはなぜですか。
- ◇ ユダはどのようにして死にましたか。銀30枚はどうなりましたか。
- ◇ ユダヤ人たちはピラトがイエスをどんな罪状で処刑<sup>しよけい</sup>するよう仕向けましたか。

# ピラトもヘロデもイエスが無実であると認める

マタイ 27:12-14, 18, 19    マルコ 15:2-5    ルカ 23:4-16    ヨハネ 18:36-38

イエスは自分が王であることをピラトに隠そうとはしません。しかし、自分の王国がローマにとって危険な存在ではないことを、次のように説明します。「私の王国はこの世のものではありません。もし世のものだったら、私に付き従う者たちは、私をユダヤ人たちに渡さないように戦ったでしょう。しかし実際は、私の王国はこの世からのものではありません」。(ヨハネ 18:36) イエスの王国は地上のものではないのです。

ピラトはイエスの言葉から、イエスが王であることを理解します。しかし、もう一度、「それでは、あなたは王なのだな」と質問します。イエスはピラトが正しいことを認め、こう答えます。「あなた自身が、私が王だと言っています。真理について証言すること、このために私は生まれ、このために私は世に来ました。真理の側にいる人は皆、私の声を聞きます」。(ヨハネ 18:37)

以前イエスはトマスに、「私は道であり、真理であり、命です」と語ったことがあります。そしてピラトも、イエスが地上に来たのは、「真理」について証言するためだということを知りました。その真理とは、特にイエスの王国についての真理です。イエスは命を失うとしても、その真理に忠実であることを決意しています。ピラトは、「真理とは何か」と言います。でも、それ以上の説明を聞こうとはしません。裁きを下すのに必要なことはもう十分聞いたと感じたのです。(ヨハネ 14:6; 18:38)

ピラトは外で待っているユダヤ人たちの所に戻ります。そして、恐らくイエスを自分の横に立たせ、祭司長たちとその支持者たちに、「この男は犯罪など犯してはいない」と言います。すると彼らは怒り、「彼はユダヤ全土で教えて民をあおっています。ガリラヤから始めてここまで来たのです」と強く言い張ります。(ルカ 23:4, 5)

ユダヤ人たちが狂ったように抗議するのを見てピラトはあっけにとられたに違いありません。そこでイエス

に、「この人たちがあなたに不利な証言をこんなに多く行っているのが、聞こえないのか」と尋ねます。(マタイ 27:13) でもイエスは何も答えません。怒り狂った人々を前にしても穏やかなイエスを見てピラトは驚きます。

ユダヤ人たちが、イエスは「ガリラヤから始め」た、と言うのを聞いてピラトは、イエスがガリラヤ人であると知ります。そして、イエスを裁かずに済む良い方法を思い付きます。ちょうど、ガリラヤの支配者ヘロデ・アンテパス(ヘロデ大王の子)が過ぎ越しの時期にエルサレムに来ていたのです。それでピラトはイエスをヘロデの所に送ります。ヘロデ・アンテパスはバプテストのヨハネの首をはねた人物です。イエスが奇跡を行っているという話を聞いたヘロデは、ヨハネが生き返ったのではないかと不安に思っていました。(ルカ 9:7-9)

ヘロデはイエスに会えるので喜びます。イエスを助けたいとか、イエスの罪状が事実かどうか本気で知りたいとか思っているわけではありません。ただ好奇心があるだけです。「イエスが行うしるしも見たいと思って」います。(ルカ 23:8) しかし、イエスはヘロデの好奇心を満たすことは何もしません。ヘロデから質問されても何も答えません。がっかりしたヘロデは、兵士たちと一緒に「イエスを侮辱」します。(ルカ 23:11) さらに、イエスにきらびやかな服を着せてあざけった後、ピラトの所にイエスを送り返します。それまでヘロデとピラトは敵同士でしたが、この時以降、親しくなります。

ピラトはイエスが送り返されてくると、祭司長と支配者たち、また民を呼び集め、こう言います。「あなたの方で取り調べたが、あなた方が訴えているような罪は全く見つからなかった。それはヘロデも同じだ。彼を私たちに送り返してきた。彼は死に値するとは何もしていないのだ。それで、彼を懲らしめてから釈放する」。(ルカ 23:14-16)



ピラトは何とかイエスを釈放しゃくほうしたいと思っています。祭司長たちがねたまゆえにイエスを引き渡わたしたことに気付いたからです。そうしているうちに、イエスを釈放しゃくほうしようという気持ちを強める別の出来事が生じます。ピラトが裁きの座に座っている間に、妻から次のような伝言

が届いたのです。「その無実の人に関わらないでください。私は今日、その人のことで[神からのものと思われる]夢の中でとても苦しんだのです」。(マタイ 27:19)

ピラトは釈放しゃくほうすべき無実の人をどうしたら釈放しゃくほうできるでしょうか。

- ◇ イエスは自分が王であるという「真理」をどのように話しましたか。
- ◇ ピラトはイエスについてどんな結論に至りましたか。ピラトの意見に人々はひとびとどう反応しましたか。それでピラトはどうしましたか。
- ◇ ヘロデ・アンテパスがイエスに会えることを喜んだのはなぜですか。しかし、イエスに会った時、ヘロデはどうしましたか。
- ◇ ピラトがイエスを釈放しゃくほうしたいと思ったのはなぜでしたか。



## ピラトは「見なさい、この人だ!」と宣言する

マタイ 27:15-17, 20-30 マルコ 15:6-19 ルカ 23:18-25 ヨハネ 18:39-19:5

ピラトはイエスの死を望む人々にこう言います。「あなた方が訴えているような罪は全く見つからなかった。それはヘロデも同じだ」。(ルカ 23:14, 15) そして、イエスを助けようとして別の方法を試み、人々にこう尋ねます。「あなた方の習慣に従って、過ぎ越しの時に1人を釈放することになっている。ユダヤ人の王を釈放してほしいか」。(ヨハネ 18:39)

ピラトは、強盗、扇動家、殺人犯として有名なバラバという囚人を知っています。それでこう質問します。「どちらの人を釈放してほしいのか。バラバか、それともキリストといわれるイエスか」。祭司長たちにあおられた人々はバラバを釈放するよう求めます。ピラトはもう一度、「2人のうちどちらを釈放してほしいのか」と質問します。人々は、「バラバを」と叫びます。(マタイ 27:17, 21)

ピラトは動揺し、「では、キリストといわれるイエスの方はどうしたらよいか」と聞きます。人々は、「杭に掛けろ!」とわめきます。(マタイ 27:22) 彼らは無実の男性の死を求めたのです。ピラトはさらにこう訴えます。「この男がどんな悪事をしたというのか。死に値することは何も見つからなかった。それで、彼を懲らしめてから釈放する」。(ルカ 23:22)

ピラトは何度も粘りますが、怒り狂った群衆は、「杭に掛けろ!」と叫び続けます。(マタイ 27:23) 人々は宗教指導者によってあおられ、狂ったようにイエスを殺そうとします。犯罪者や殺人犯の死を求めているではありません。無実の男性、しかもたった5日前には王としてエルサレムに迎え入れられた人を殺そうとしているのです。もしイエスの弟子たちがその場にいたなら、黙って目立たないようにしていたでしょう。

ピラトはいくら訴えても無駄であることに気がきます。それで、叫び声が大きくなる中、そばにあった水で人々の前で手を洗い、「この人の血について私は潔白だ。あなた方自身が責任を負わなければならない」と言います。その言葉を聞いても、人々は静まりません。むしろ彼らは、「彼の血はわれわれとわれわれの子に降り掛かってもよい」とまで言います。(マタイ 27:24, 25)

ピラトは何が正しいかは分かっていますが、民を満足させたいという気持ちに負けてしまいます。彼らの声に従ってバラバを釈放し、イエスの服を剥いでむちで打たせます。

残酷なむち打ちが終わると、兵士たちはイエスを総督の邸宅に連れていきます。そして全部隊が集まり、イ

**むち打ち** ウィリアム・D・エドワーズ博士は「アメリカ医師会ジャーナル」(英語)の中で、ローマのむち打ち刑についてこう述べています。

「よく使われた刑具は、長さが不ぞろいの何本かの革ひもや、ねじり合わせた革ひもの付いた短いむち棒だった。その革ひもには小さい鉄球や尖った羊骨が所々にくくり付けられていた。……ローマの兵士が受刑者の背中を繰り返し力一杯打つと、その鉄球によって深い挫傷が生じ、革ひもと羊骨は皮膚や皮下組織に食い込んだことだろう。そしてむち打ちが続くにつれ、裂傷は深部の骨格筋にまで及び、ひも状に裂けて垂れた血のにじむ肉が震えていたであろう」。



- ・ピラトはイエスを釈放しようとする
- ・ユダヤ人たちはバラバを釈放するよう求める
- ・イエスはばかにされ虐待される

イエスにさらに虐待を加えます。まず、いばらで編んだ冠をイエスの頭に押し付けます。そしてイエスの右手にアシを持たせ、王が着るような紫の長い衣を着させます。それからばかにして、「ごあいさつ申し上げます、ユダヤ人の王よ!」と言います。(マタイ 27:28, 29) またイエスに唾を掛け、顔を平手打ちします。イエスが持っている丈夫なアシを取ってイエスの頭をたたきます。イエスを侮辱する冠の鋭いとげは、頭皮を突き破って深く刺さったでしょう。

こうした虐待を受けてもイエスが威厳と強さを保っていることにピラトはとても感銘を受けます。そしてイエスを処刑する責任を何とか免れようとして別の手を試し、ユダヤ人たちにこう言います。「さあ、彼をあなた方の前に連れ出す。何の過失も見つけれないのだ」。傷だらけで血まみれになったイエスを見れば、彼らも少しはおとなしくなるとピラトは思ったのでしょうか。ピラトはイエスを非情な民の前に連れ出し、「見なさい、この人だ!」と宣言します。(ヨハネ 19:4, 5)

ピラトのその言葉には敬意と同情心が感じられます。イエスは痛めつけられ傷だらけになっても、ピラトが認めざるを得ないほど、静かな威厳と穏やかさを保っていたのです。

- 
- ◇ 処刑する責任を免れるためイエスを釈放しようとして、ピラトはどんなことをしましたか。
  - ◇ むち打ち刑とはどのようなものでしたか。
  - ◇ イエスはむち打ちの後、さらにどんな虐待を受けましたか。
- 



# イエスは引き渡され、処刑場所へ連れていかれる

マタイ 27:31, 32    マルコ 15:20, 21    ルカ 23:24-31    ヨハネ 19:6-17

イエスは残酷な虐待を受けてばかにされます。ピラトは何とかイエスを釈放しようとしします。しかし、祭司長とその支持者たちの態度は変わりません。何としてでもイエスを殺したいと思っています。それで、「杭に掛けろ! 杭に掛けろ!」と叫び続けます。ピラトは、「自分たちで連れていって杭に掛けなさい。私は彼に何の過失も見つけられない」と答えます。(ヨハネ 19:6)

ユダヤ人たちは、政治犯としてイエスを殺させるのが難しいと知ると、今度は宗教上の罪状で訴えます。その罪状とは、彼らがサンヘドリンの裁判で持ち出した冒瀆の罪です。こう言います。「私たちには律法があり、その律法によれば、彼は死に値します。自分を神の子としたからです」。(ヨハネ 19:7) ピラトにとっては初耳です。

ピラトは邸宅の中に戻ります。そして、厳しい虐待を耐えているこの男性、また妻が夢で見たこの男性を何とか釈放する道はないかと考えます。(マタイ 27:19) 自分を「神の子」としたという耳新しい罪状についてはどうでしょうか。ピラトはイエスがガリラヤ出身であることを知っています。(ルカ 23:5-7) それでもピラトはイエスに、「あなたはどこから来たのか」と質問します。(ヨハネ 19:9) イエスは人間になる前から生きている神かもしれない、と思ったのでしょうか。

イエスはピラトに対し、自分は王だが自分の王国はこの世のものではない、とすでに話しました。さらに説明する必要はありません。それでイエスは黙っています。ピラトはイエスが答えないのでプライドを傷つけられ、腹を立ててこう言います。「黙っているつもりか。あなたを釈放する権限も処刑する権限も私にあることを知らないのか」。(ヨハネ 19:10)

イエスはこう答えます。「天から与えられていなかったのなら、あなたは私に対して何の権限もないでしょう。そ

れで、私をあなたに引き渡した人の方が罪が重いのです」。(ヨハネ 19:11) イエスはここで、誰か1人のことを言っていたのではないようです。ピラトよりも、カヤファやその支持者たちやユダ・イスカリオテの方に重い責任があると言っていたのです。

ピラトはイエスの態度と言葉に心を動かされ、イエスは神ではないか、という恐れのがちが強まってきたこともあり、イエスを釈放する方法を再び探し始めます。ところが、ユダヤ人たちはピラトに恐れを抱かせる別の点を挙げ、こう脅します。「この男を釈放するなら、あなたはカエサルの友ではありません。自分を王とする者は皆、カエサルに逆らっているのです」。(ヨハネ 19:12)

ピラトはイエスをもう一度連れ出し、裁きの座に座って、「見なさい、あなた方の王だ!」と民に言います。しかし彼らはそれを無視し、「殺せ! 殺せ! 杭に掛けろ!」と叫びます。ピラトは、「あなた方の王を私が処刑するのか」と反論します。ユダヤ人はこれまでローマの支配にいら立ちを募らせてきました。ところが祭司長たちもこの時だけは、「私たちにはカエサルのほかに王はいません」と平気な顔で言います。(ヨハネ 19:14, 15)

ピラトはユダヤ人たちのしつこさに耐え切れなくなり、要求通りイエスを処刑するために引き渡します。兵士たちはイエスから紫の衣を剥ぎ取り、もともと着ていた外衣を着せます。イエスは引いていかれる際、自分で苦しみの杭を担いでいかなければなりません。

今はニサン14日金曜日の正午近くです。イエスは木曜日の早朝から一睡もしていません。しかも、苦しみに満ちた経験の連続でした。イエスは杭を引きずりながら進み始めますが、その重みに耐える力が尽きてしまいます。そこへ、アフリカのキレネから来たシモンという男性が通り掛かります。それで兵士たちはシモンに杭を





処刑場所まで運ばせます。大勢の人がその後についていきます。胸をたたいて悲しむ人たちもいます。

イエスは悲しむ女性たちにこう言います。「エルサレムの女性たち、私のために泣くのをやめなさい。むしろ、自分と自分の子供たちのために泣きなさい。人々が、『子供ができない女性、また子供を産まなかった女性や乳を飲ませなかった女性は幸せだ!』と言う時が来るからです。その時人々は、山に向かって、『われわれにかぶさってくれ!』と言い、丘に向かって、『われわれを覆ってくれ!』と言いだします。木に生氣がある時にこう

したことがなされるのであれば、枯れた時には何が起きるでしょうか」。(ルカ 23:28-31)

イエスはユダヤ国民のことを話しています。彼らは枯れていく木のように、まだ生氣が残っています。イエスも、イエスに信仰を抱くたくさんの人たちもいるからです。しかし、イエスが殺され、神が弟子たちをユダヤ国民から取り去ると、同国民は神の目から見ただけの木のような状態になります。そして、ローマ軍が神からの刑を彼らに執行する時、大きな悲しみが生じるでしょう。

- ◇ 宗教指導者たちはイエスをどんな罪状で訴えましたか。
- ◇ ピラトがイエスに恐れのおその気持ちを抱いたのはなぜですか。
- ◇ 祭司長たちはイエスを処刑させるため、ピラトをどのように脅しましたか。
- ◇ イエスは「生氣」があってもその後「枯れ」る木について話した時、何を言おうとしていましたか。

## 無実の王が杭<sup>くい</sup>の上で苦しむ

マタイ 27:33-44    マルコ 15:22-32    ルカ 23:32-43    ヨハネ 19:17-24

イエスは都からあまり遠くない所にある処刑<sup>しよけい</sup>場所へ連れていかれます。他の2人の強盗<sup>ごうとう</sup>もそこで処刑<sup>しよけい</sup>されることになっています。そこはゴルゴタ、つまりどくろの場所とも呼ばれており、「離れた所<sup>はな</sup>」からもよく見えます。(マルコ 15:40)

有罪とされた3人は服<sup>ぬ</sup>を脱がされます。それから、鎮痛<sup>ちんどう</sup>剤<sup>ざい</sup>として没薬<sup>もつやく</sup>と胆汁<sup>たんじゅう</sup>を混ぜたぶどう酒<sup>あ</sup>が与えられます。エルサレムの女性たちが準備したようで、ローマ人の兵士もそれが与えられるのを止めません。でもイエスは少し味見した後、それ以上飲もうとしません。なぜでしょうか。重要な試練の間、感覚<sup>にぶ</sup>を鈍らせることなく、死ぬまで意識をはっきりと保って忠実でありたいと思っているのです。

イエスは杭<sup>くい</sup>の上に寝<sup>ね</sup>かされます。(マルコ 15:25) 兵士たちがイエスの手と足にくぎを打ち込みます。くぎは肉と靱帯<sup>じんたい</sup>を貫通<sup>かんつう</sup>し、イエスの体に激痛が走ります。杭が垂直に起こされると、傷口が体の重みで裂けるため、痛みはもっと耐え難いものになります。しかし、イエスは兵士たちを大声でののしることなく、こう祈ります。「父よ、彼ら<sup>かれ</sup>をお許してください。自分たちが何をしているのか知らないのです」。(ルカ 23:34)

ローマ人には犯罪者の罪状<sup>かか</sup>を掲げる習慣があります。それでピラトは、「ナザレ人イエス、ユダヤ人の王」と書いたものを掲げます。大勢の人が読めるよう、ヘブライ語、ラテン語、ギリシャ語で書かれています。イエスを殺すよう強く求めたユダヤ人をピラトがいかに軽蔑<sup>けいべつ</sup>していたかが分かります。罪状<sup>どうよう</sup>を見て動揺した祭司長たちは、『ユダヤ人の王』ではなく、『自称<sup>じしやう</sup>ユダヤ人の王』と書いてください」と抗議します。ところが今回、ピラトは言いなりにならず、「私が書いたことだ」と答えます。(ヨハネ 19:19-22)

怒<sup>おこ</sup>った祭司長たちはサンヘドリンでの裁判でしたと同じ、うその証言を繰り返します。それで通行人たちも頭を振<sup>ふ</sup>ってあざけり、次のような暴言<sup>は</sup>を吐きます。「おやおや、神殿<sup>しんでん</sup>を壊<sup>こわ</sup>して3日で建てる者よ、苦しみ<sup>く</sup>の杭<sup>くい</sup>から下りてきて自分を救ってみろ」。祭司長たちや律法学者たちも、「イスラエルの王キリストに、いま苦しみ<sup>く</sup>の杭<sup>くい</sup>から下りてきてもらおうではないか。そうしたら信じよう」と言います。(マルコ 15:29-32) イエスの両脇<sup>りやうわき</sup>で杭に付けられている犯罪者たちまでが、ただ1人無実であるイエスのことを非難し始めます。



ローマの4人の兵士たちもイエスをからかいます。彼らは恐らくぶどう酒を飲んでいたのでしょう。それでイエスにも飲ませるまねをします。さらに、イエスの頭上にある罪状を見てばかにし、「ユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ」と言います。(ルカ 23:36, 37) 考えてもみてください。道、真理、命である方が、不当<sup>ぎやうぐたい</sup>な虐待<sup>ぎやくたい</sup>と侮辱<sup>ぶじやく</sup>全てにじっと耐えているのです。自分を見ているユダヤ人<sup>りやうわき</sup>たち、ばかにしてくるローマの兵士たち、両脇

- イエスは苦しみの<sup>くい</sup>杭にくぎ付けにされる
- 頭上<sup>かか</sup>に掲げられた罪状ゆえにイエスはばかに<sup>あた</sup>される
- イエスは地上のパラダイスで生きる希望を与える

# 131

いる犯罪者たちを非難することは決してありません。

4人の兵士はイエスの外衣を取り、4つに分けます。そして、くじを引いて分配します。しかし內衣は「縫い目<sup>ぬいめ</sup>がなく、上から下まで織った」上等のものでした。それで彼らは、「これは裂<sup>かれ</sup>かないで、誰<sup>だれ</sup>のものにするかをくじで決めよう」と言います。そのようにして、次の預言が実現します。「彼らは私の外衣<sup>かれ</sup>を自分たちの間で分け、私の衣服のためにくじを引いた」。(ヨハネ 19:23, 24。詩編 22:18)

しばらくすると、犯罪者の1人がイエスは本当に王であると認めるようになります。その人はもう1人の犯罪者<sup>しか</sup>を叱<sup>おそ</sup>ってこう言います。「神を少しも畏<sup>おそ</sup>れないのか。同じ処罰<sup>しよばつ</sup>を受けているのに。われわれの場合は当然だ。自分がした事の報いを受けているのだから。しかしこの人は何も悪い事はしていない」。それから、「イエスよ、王国に入る時に私を思い出してください」と言います。(ルカ 23:40-42)

するとイエスは、「今日あなたに言います。あなたは私と共にパラダイスにいることになります」と言います。王国ではなくパラダイスです。(ルカ 23:43) これは、王国でイエスと一緒<sup>いっしょ</sup>に王座に座するという使徒たちに対する約束とは違<sup>ちが</sup>います。(マタイ 19:28。ルカ 22:29, 30) とはいえこのユダヤ人の犯罪者は、エホバがアダムとエバに与<sup>あた</sup>えた地上のパラダイスについては聞



いたことがあったでしょう。それで、この男性は死ぬ前に、地上のパラダイスで生きるという希望<sup>いだい</sup>を抱くことができました。

- ◇ 用意されたぶどう酒をイエスが飲まなかったのはなぜですか。
- ◇ イエスの頭上<sup>かか</sup>にはどんな罪状が掲げられましたか。ユダヤ人たちはそれを見てどう反応しましたか。
- ◇ イエスの服について、どんな預言が実現しましたか。
- ◇ イエスは犯罪者の1人にどんな希望<sup>あたい</sup>を与えましたか。



## 「確かにこの人は神の子だった」

マタイ 27:45-56    マルコ 15:33-41    ルカ 23:44-49    ヨハネ 19:25-30

「昼の12時」になりました。不気味な闇が「全土に垂れ込めて、午後3時にまで及<sup>およ</sup>びます。(マルコ 15:33) これは日食によるものではありません。日食は新月の時しか生じません。しかし、今は過ぎ越しの時期で満月です。また日食の際の闇は数分しか続きませんが、今回はもっと長く続きます。ですからこの闇は神が生じさせたものです。

イエスをばかにしていた人たちはこの闇を見てどう思ったでしょうか。この時、4人の女性が苦しみの杭<sup>くい</sup>のそばに来ます。イエスの母親とサロメ、マリア・マグダレネと使徒の小ヤコブの母親マリアです。

使徒ヨハネは、「苦しみの杭<sup>くい</sup>のそば」でイエスの母親マリアと一緒にいます。マリアは自分が生んで育てた息子が杭<sup>くい</sup>に掛けられ、もだえ苦しんでいる姿を見つめています。「長い剣<sup>つるぎ</sup>」で貫かれていたような気持ちだったでしょう。(ヨハネ 19:25。ルカ 2:35) イエスは鋭い痛みがあるにもかかわらず、母親の今後のことを考えています。そして、ヨハネの方を顎<sup>あご</sup>で示し、母親に、「見なさい、あなたの子です!」と言います。次に母親の方を顎<sup>あご</sup>で示し、ヨハネに、「見なさい、あなたの母親です!」と言います。(ヨハネ 19:26, 27)

**「杭<sup>くい</sup>に掛けろ!」** イエスの敵たちは、「杭<sup>くい</sup>に掛けろ!」と叫びました。(ヨハネ 19:15) 福音書の中で「杭<sup>くい</sup>」と訳されているギリシャ語はスタウロスです。「十字架<sup>じゅうじ</sup>の歴史」(英語)の解説にはこうあります。「スタウロス<sup>か</sup>は『まっすぐな杭<sup>くい</sup>』、丈夫な杭<sup>くい</sup>、農場で塀<sup>へい</sup>や柵<sup>さく</sup>として地中に打ち込むようなものを指し、それ以上の意味はない」。

イエスは、今ではやもめになっている母親の世話を、特別に愛していた使徒に託<sup>たく</sup>します。イエスがそうしたのは、自分の異父兄弟たちがまだイエスに信仰<sup>しんこう</sup>を抱いていなかったからです。それで、マリアを身体面で世話し、神への崇拜<sup>すうはい</sup>の面で支えるよう頼<sup>たの</sup>んだのです。これは立派<sup>もはん</sup>な模範<sup>もはん</sup>です。

午後3時ごろ、イエスは「喉<sup>のど</sup>が渴<sup>かわ</sup>いた」と言います。こうしてイエスは聖書の預言を実現させます。(ヨハネ 19:28。詩編 22:15) イエスは、自分の忠誠を極限まで試すために父が保護を取り去ったと感じます。イエスはアラム語のガリラヤ方言と思われる言葉で、「エリ、エリ、ラマ サバクタニ」と大声で叫<sup>さけ</sup>びます。これは、「私の神、私の神、なぜ私をお見捨てになったのですか」という意味です。近くに立っていた人たちは勘違<sup>かんちが</sup>いし、「ほら、エリヤを呼んでいる」と言います。そのうちの1人が走っていき、酸味の強いぶどう酒を含ませた海綿をアシの先に付けて、イエスに飲ませようとします。他の人たちは、「このまま、エリヤが下ろしに来るかどうかを見よう」と言います。(マルコ 15:34-36)

その後イエスは、「成<sup>と</sup>し遂<sup>と</sup>げられた!」と叫<sup>さけ</sup>びます。(ヨハネ 19:30) イエスは地上で行うよう父から命じられたこと全てを成し遂げたのです。最後にイエスは、「父よ、私の命をあなたの手<sup>て</sup>に託<sup>たく</sup>します」と大きな声で言います。(ルカ 23:46) そして、エホバが自分を復活させてくださるという確信<sup>いだい</sup>を抱きながら、頭を垂れて息を引き取ります。

その瞬間<sup>しゅんかん</sup>、強い地震<sup>じしん</sup>が起き、岩が割れます。揺れが大きかったのでエルサレムの外にある墓<sup>こわ</sup>が壊れ、死体が投げ出されます。人々はその死体を見て「聖都<sup>ひとびと</sup>」つまりエルサレムに入り、起きた事を他の人たちに話します。(マタイ 27:51-53)

イエスが亡くなると、神殿<sup>しんでん</sup>の聖所と至聖所とを仕切っていた長くて重い幕が上から下まで2つに裂<sup>さ</sup>けます。この驚<sup>おどろ</sup>くべき出来事は、神の子を殺害した人たちに対する神の大きな怒<sup>いか</sup>りを表すものでした。それだけでなく、その時以降、人間が至聖所つまり天に行けるようになったことを示すものでした。(ヘブライ 9:2, 3; 10:19, 20)

当然ながら、人々<sup>ひとびと</sup>はとてもおびえます。処刑<sup>しよけい</sup>に当たった士官は、「確かにこの人は神の子だった」と言います。(マルコ 15:39) 士官は、ピラトの前で行われた裁判でイエスが神の子かどうか話し合われた時、そこにいたのかもしれませんが。そして今、イエスが正しい人であり、まさに神の子であると確信したのです。

他の人たちも、起きた不思議な出来事に圧倒<sup>あつとう</sup>されて、深い悲しみや恥<sup>は</sup>ずかしさのため「胸をたたきながら」家に帰ります。(ルカ 23:48) 離れた所<sup>はな</sup>に立って見ていた人々<sup>ひとびと</sup>の中には、イエスと一緒に時々<sup>いつしよ ときどき</sup>旅をしていた大勢の女性の弟子たちもいます。その人たちも、これらの重大な出来事を見て心を大きく動かされます。

- 
- ◇ 3時間続いた闇<sup>やみ</sup>が日食によるものではないと言えるのはなぜですか。
  - ◇ 高齢の親を世話する点で、イエスはどんな立派な手本を示しましたか。
  - ◇ 地震<sup>じしん</sup>によってどんな事が起きましたか。神殿<sup>しんでん</sup>の幕が2つに裂<sup>さ</sup>けたことは何を表していましたか。
  - ◇ イエスの死とその時に生じた出来事を見た人たちは、どんな影響<sup>えいきやう</sup>を受けましたか。
- 



## イエスは葬<sup>ほうむ</sup>られる

マタイ 27:57-28:2    マルコ 15:42-16:4    ルカ 23:50-24:3    ヨハネ 19:31-20:1

ニサン14日金曜日の夕方になりました。日が沈<sup>しず</sup>めばニサン15日の安息日が始まります。イエスはすでに亡くなっています。でも、イエスの両脇<sup>りょうわき</sup>で杭<sup>くい</sup>に掛けられている2人の犯罪者はまだ生きています。律法によれば、死体を「夜通<sup>くいい</sup>し杭<sup>か</sup>に掛けたままにすべきでは」なく、「その日のうちに」葬<sup>ほうむ</sup>らなければなりません。(申命記 21:22, 23)

また、金曜日は準備の日と呼ばれています。人々<sup>ひとびと</sup>は食事の準備をし、安息日の後では間に合わない用事を済ませました。日が沈<sup>しず</sup>むと、「大安息日」が始まります。(ヨハネ 19:31) ニサン15日は7日間の無酵母パンの祭りの初日です。祭りの初日は何曜日であっても安息

日になります。(レビ記 23:5, 6) 今年のニサン15日は、週ごとの通常の安息日とも重なっています。それで、このように2つの安息日が重なると、「大安息日」となるのです。

こうした事情で、ユダヤ人たちはピラトにイエスと2人の強盗<sup>ごうとう</sup>の死を早めるよう頼みます。どのようにしてでしょうか。両脚<sup>りょうあし</sup>を折ることによってです。そうすると、息をしようとしても体を持ち上げられず、窒息<sup>ちっそく</sup>してしまいます。兵士たちはやって来て2人の強盗<sup>ごうとう</sup>の脚<sup>あし</sup>を折りますが、イエスはすでに死んでいるようなので、脚<sup>あし</sup>を折りません。こうして詩編 34編20節の、「神はその人の骨を





- イエスの体が<sup>くい</sup>杭から下ろされる
- 遺体<sup>ほうむ</sup>を葬るための準備をする
- 女性たちは墓が空になっていることに気付く

# 133

全て守る。1本も折られることはなかった」という預言が実現します。

しかし1人の兵士が、イエスが本当に死んでいるのか確かめるためにイエスの<sup>わきばら</sup>脇腹をやりで<sup>つ</sup>突き<sup>さ</sup>刺します。やりは心臓の辺りにまで達します。「すると、すぐに血と水が出」ます。(ヨハネ 19:34) これは、「<sup>かれ</sup>彼らは自分たちが<sup>さ</sup>刺し通した人を見つめ」る、という預言の実現です。(ゼカリヤ 12:10)

<sup>しよけい</sup>処刑場所には、サンヘドリンの評判の良い一員で、アリマタヤの町から来たヨセフという<sup>ゆうふく</sup>「裕福な男性」もいます。(マタイ 27:57) 聖書はヨセフについて、「正しくて善い人」また「神の王国を待つ人」で、「ユダヤ人<sup>おそ</sup>たちを恐れてひそかにイエスの弟子となっていた」と述べています。ヨセフはイエスに関する判決を支持しませんでした。(ルカ 23:50。マルコ 15:43。ヨハネ 19:38) ヨセフは勇気を出してピラトの元に行き、イエスの体を頂きたいと願い出ます。それでピラトは、イエスの死を確認した士官を呼び寄せて確かめた後、ヨセフに遺体を引き取る許可を<sup>あた</sup>与えます。

ヨセフはきれいな上等の<sup>あまぬの</sup>亜麻布を買います。そして、イエスの体<sup>くい</sup>を杭から下ろし、遺体<sup>ほうむ</sup>をその亜麻布で包みます。「以前、夜にイエスの所に来た」ニコデモも、<sup>ほうむ</sup>葬る準備を手伝います。(ヨハネ 19:39) ニコデモは<sup>もつやく</sup>没薬と<sup>じんこう</sup>沈香を混ぜ合わせた高価なものを30<sup>き</sup>ほど持ってきます。イエスの遺体はユダヤ人の習慣に沿って、これらの<sup>こうりよう</sup>香料<sup>ふく</sup>を含ませた布で包まれます。

ヨセフはそこから近い場所に、岩をくりぬいた新しい墓を所有していました。それで、イエスの遺体をその墓に横たえ、墓の入り口に大きな石を転がします。安息日が始まるので、これらは急いで行われます。マリア・マグダレネと小ヤコブの母親マリアはイエスの遺体<sup>ほうむ</sup>を葬る準備を手伝ったでしょう。そして、安息日が終わった後にも遺体の処理に必要な<sup>こうりよう</sup>香料と<sup>こうゆ</sup>香油を準備しに」急いで家に<sup>もと</sup>戻ります。(ルカ 23:56)

安息日である翌日、祭司長たちとパリサイ派の人たちはピラトの所に行き、こう言います。「あの<sup>さぎし</sup>詐欺師がまだ生きていた時に『3日後に私は生き返る』と言ったのを思い出しました。それで、3日目まで墓を警備するように命令してください。弟子たちがやって来て<sup>かれ</sup>彼を<sup>ぬす</sup>盗み出し、『彼は生き返った!』などと民に言いふらす恐れがあります。この最後の欺きは、最初のものより悪い結果を生じさせてしまいます」。ピラトはこう答えます。「警備隊を使ってよい。行って、知る限りの方法で警備しなさい」。(マタイ 27:63-65)

日曜日の朝とても早くに、マリア・マグダレネとヤコブの母親マリア、ほかの何人かの女性たちは、イエスの体<sup>くい</sup>に付けるための香料<sup>こうりよう</sup>を持って墓に向かいます。行く途中<sup>ちゆう</sup>、「墓の入り口から誰<sup>だれ</sup>が石を転がしてどけてくれるでしょうか」と話し合います。(マルコ 16:3) ところが到着<sup>ちやく</sup>してみると、地震<sup>じしん</sup>が起きた後でした。そして、石は神の天使によって転がしてどけられており、警備隊はいなくなっています。しかも、墓は空っぽです。

- ◇ 金曜日が準備の日と呼ばれているのはなぜですか。今年の安息日が「大安息日」なのはなぜですか。
- ◇ ヨセフとニコデモはイエス<sup>ほうむ</sup>を葬るためにどんなことをしましたか。2人はそれぞれイエスとどんな<sup>あいだがら</sup>間柄でしたか。
- ◇ 祭司長たちはピラトにどんなことを頼<sup>たの</sup>みましたか。でも日曜日の朝にどんなことが起きましたか。

# イエスは生きている！

マタイ 28:3-15   マルコ 16:5-8   ルカ 24:4-12   ヨハネ 20:2-18

イエスの墓が空なのに気づき、女性たちはショックを受けたでしょう。マリア・マグダレネは、「ペテロ、およびイエスが愛情を持っていたもう1人の弟子」ヨハネの所へ走っていきます。(ヨハネ 20:2) しかし、墓のそばにいた他の女性たちは天使を見ます。さらに墓の中にも、「白くて長い服を着た」天使がいます。(マルコ 16:5)

すると天使の1人がこう言います。「<sup>おそ</sup>恐れることはありません。<sup>くい</sup>杭に<sup>か</sup>掛けられて死んだイエスを<sup>さが</sup>捜していることは分かっています。イエスはここにはいません。<sup>かれ</sup>彼が言った通り、生き返りました。さあ、横たわっていた場所を見なさい。それから急いで行って、イエスが生き返ったことを弟子たちに告げなさい。<sup>かれ</sup>彼は先にガリラヤに行っています」。(マタイ 28:5-7) これを聞くと、女性たちは「<sup>おそ</sup>恐れと大きな喜びを抱きつつ」、弟子たちに報告するため走っていきます。(マタイ 28:8)

マリアはペテロとヨハネを見つけ、息を切らしながら、「<sup>だれ</sup>誰かが主を墓から取り去りました。どこに置いたのか分かりません」と報告します。(ヨハネ 20:2) ペテロとヨハネは墓へ走ります。ヨハネの方が足が速く、先に着きます。中をのぞくと布が見えますが、中には入りません。

ペテロは<sup>とうちやく</sup>到着すると、ためらわず中に入ります。すると、<sup>あまめの</sup>亜麻布とイエスの頭を包んでいた布が目に入ります。ヨハネも入って来て、マリアの報告を信じます。しかし、以前にイエスから教えられていたにもかかわらず、ペテロもヨハネもイエスが復活したことを理解しません。(マタイ 16:21) 2人は<sup>とまど</sup>戸惑いながら家に戻ります。墓に<sup>もど</sup>戻ってきたマリアは、そこに残ります。

他の女性たちはイエスが復活したことを弟子たちに伝えるため走っています。すると<sup>とちゅう</sup>途中でイエスが現れ、



「おはよう」と声を掛けます。女性たちはイエスの足元にひれ伏し、「敬意を表し」ます。イエスはこう言います。「恐れることはありません！ 行って、私の兄弟たちに報告し、彼らがガリラヤに行けるようにしなさい。そこで私に会えます」。(マタイ 28:9, 10)

少し前に地震が起きた時、墓を警備していた兵士たちは現れた天使たちを見て、「震えて死人のようになって」いました。意識を取り戻した彼らは町に行き、「起きたこと全てを祭司長たちに報告」します。祭司長たちはユダヤ人の長老たちと協議します。そして兵士たちに金を渡し、この件をもみ消すため、「夜中に彼の弟子たちが来て、私たちが眠っている間に死体を盗んだ」というそを言わせることにします。(マタイ 28:4, 11, 13)

ローマの兵士は、持ち場に就いている時に居眠りをすると死刑になる可能性がありました。でも祭司長たちは、「もしこれが総督の耳に入ったら、私たちが説明するから、心配しなくてよい」と約束します。つまり万が一の時は、兵士たちが眠っていたというのはいささかである。とピラトに説明するので、死刑にはならないだろう、というわけです。(マタイ 28:14) それで兵士たちは金を受け取り、言われた通りにします。こうして、イエスの遺体は盗まれたというデマがユダヤ人の間に広がります。

マリア・マグダレネは墓の所で悲しんでいます。彼女が前かがみになって墓の中をのぞくと、何と、イエスの体が置いてあった所に、白い衣服の天使2人が見えま

す。1人は頭の所に、もう1人は足の所に座っています。天使たちはマリアに、「なぜ泣いているのですか」と尋ねます。マリアは、「誰かが私の主を取り去り、どこに置いたのか分からないのです」と答えます。その時彼女が振り返ると、別の人が立っています。その人も天使たちと同じ質問をしてから、「誰を捜しているのですか」と尋ねます。マリアはてっきり庭師だと思って、「もし主を移動させたのでしたら、どこに置いたのか教えてください。私が引き取ります」と言います。(ヨハネ 20:13-15)

その人は復活したイエスでしたが、マリアは気づきません。それでも、「マリア!」と言われた途端、その聞き慣れた口調からイエスだと分かり、喜びのあまり、「ラボニ!」(「先生」という意味)と叫びます。イエスがすぐにも天に昇ってしまうのではないかと心配し、イエスをしっかりつかみます。イエスはこう言います。「私にすがり付くのはやめなさい。私はまだ父の元へ上っていません。でも、私の兄弟たちの所に行き、こう伝えなさい。『私は、私の父であなたたちの父である方、私の神であなたたちの神である方の元へ上る』」。(ヨハネ 20:16, 17)

マリアは使徒たちや他の弟子たちが集まっている場所へ走ります。そして、「主を見ました!」と伝えます。他の女性たちの報告に加えて、また別の報告が届いたのです。(ヨハネ 20:18) しかし、使徒や他の弟子たちにとっては「あり得ないことに思え」ます。(ルカ 24:11)

- 
- ◇ マリア・マグダレネは墓が空なのに気づき、どうしましたか。他の女性たちはどんなことを経験しましたか。
  - ◇ ペテロとヨハネは空になった墓を見てどのように反応しましたか。
  - ◇ 他の女性たちが弟子たちの所へ行く途中、どんな出来事がありましたか。マリア・マグダレネが墓の所に戻ると、どんなことがありましたか。
  - ◇ 弟子たちは女性たちからの報告を聞いてどのように反応しましたか。



## 復活したイエスがさらに大勢の人に現れる

ルカ 24:13-49 ヨハネ 20:19-29

ニサン16日の日曜日、弟子たちは元気がありません。イエスの墓がなぜ空っぽになってしまったのか分からないのです。(マタイ 28:9, 10。ルカ 24:11) その日、クレオパともう1人の弟子がエルサレムを出発し、約11<sup>き</sup>離れたエマオへ向かいます。

2人が起きた出来事を話しながら歩いていると、見知らぬ人が一緒に歩き始めます。その人は、「歩きながら何のことを論議しているのですか」と質問します。クレオパは、「あなたはよそからエルサレムに来て1人で住んでいるために、最近そこで起きた事を知らないのですか」と言います。その人は、「どんな事ですか」と尋ねます。(ルカ 24:17-19)

2人は、「ナザレ人イエスに関する事です」と言い、「私たちは、この人がイスラエルを救出する方だという希望を抱いていました」と話します。(ルカ 24:19-21)

そして、まさにその日に起きた出来事について話します。仲間の女性たちがイエスの墓に行くと墓が空っぽだったこと、信じられないことにそれらの女性たちに天使が現れてイエスは生きていと話したこと、墓に行った他の人たちも「女性たちが言った通りなのを見た」ことを伝えます。(ルカ 24:24)

2人の弟子は起きた事の意味が分からず困っています。それでその見知らぬ人は、彼らがイエスの復活を確信できるようにするため、こう言います。「ああ、無分別で心が鈍い人たち! どうして預言者たちが語った全ての事を信じないのですか。キリストはこうした苦しみを経て栄光を受ける必要があったのではありませんか」。(ルカ 24:25, 26) そして、キリストに関係のあるたくさんの聖句を2人に解き明かします。

ついに3人はエマオの近くにやって来ます。弟子たちはその人の話をもっと聞きたいと思い、「一緒に泊まっ

てください。そろそろ夕方で、1日ももう終わりですから」と勧めます。それで、その人は泊まることにし、彼らと一緒に食事を始めます。その人が祈り、パンを割って弟子たちに渡します。その時、彼らは目の前にいるのがイエスであることに気付きます。しかし、イエスの姿は見えなくなります。(ルカ 24:29-31) イエスは生きているのです! 2人はそれを確信します。

弟子たちは興奮し、互いにこう言います。「あの方が道中、話してくれた時、聖書をはっきり説明してくれた時、私たちの心は燃えていなかっただろうか」。(ルカ 24:32) 彼らは急いでエルサレムに戻り、使徒たちや他の弟子たちがいる所に行きます。しかし2人は、そこにいた人たちから、「主は本当に生き返って、シモンに現れたのだ!」と聞かされます。(ルカ 24:34) それで2人は自分たちにもイエスが現れたことを話します。

その時、驚くようなことが生じます。何とイエスが部屋の中に現れたのです。とても信じられません。彼らはユダヤ人たちの恐れて戸に鍵を掛けていました。でもイエスは彼らの真ん中に立っています。そして落ち着いた声で、「あなたたちに平和がありますように」と言います。しかし彼らは凍り付いています。以前と同じように、「自分たちは幻影を見ているのだ」と思っています。(ルカ 24:36, 37。マタイ 14:25-27)

イエスは自分が幻影などではなく、人間の体でそこにいることを示すため、彼らに手と足を見せてこう言います。「なぜ動揺しているのですか。なぜ心に疑いを抱くのですか。私の手と足を見なさい。間違いなく私です。私に触り、見てみなさい。幻影であれば、あなたたちが見ているような肉体はありません」。(ルカ 24:36-39) 彼らは喜び、驚きます。でもまだ100%は信じられません。

- イエスがエマオへの道で現れる
- イエスは弟子たちに聖書をはっきり説明する
- トマスは疑うのをやめる

# 135

それで、イエスは彼らが信じられるようにするため、「そこに何か食べ物がありますか」と尋ねます。イエスは焼き魚を受け取り、それを食べます。それからこう言います。「[死ぬ前に]まだあなたたちと一緒にいた時、私はこう話しました。私について、モーセの律法の中、また預言者と詩編の書の中に書いてある事は全て必ず実現する、と」。(ルカ 24:41-44)

イエスはクレオパたちが聖書を理解できるよう助けました。そして、そこに集まっている弟子たちに対しても、こう話します。「このように書いてあります。キリストは苦しみを受け、3日目に生き返り、その名によって、罪の許しのために悔い改めるようにとの知らせが、エルサレムから始めて全ての国の人々に伝えられます。あなたたちはこれらの事の証人となります」。(ルカ 24:46-48)

使徒のトマスは何かの理由でそこにいませんでした。別の日に弟子たちがトマスに、「私たちは主を見た!」とうれしそうに話すと、彼はこう言います。「その手にくぎの跡を見て、私の指をくぎの跡に入れ、手をその脇腹に入れてみない限り、決して信じない」。(ヨハネ 20:25)

8日後、今度はトマスも弟子たちと一緒に鍵の掛かった部屋の中にいました。するとイエスが人間の姿で現れて彼らの真ん中に立ち、「あなたたちに平和がありますように」と言います。そしてトマスの方を向き、「指



でここを触り、私の手を見て、私の脇腹に手を入れなさい。そして、疑うのをやめ、信じなさい」と言います。するとトマスは、「私の主、私の神!」と叫びます。(ヨハネ 20:26-28) トマスはもう、エホバ神の代表者であるイエスが生きていることを疑いません。

それでイエスは、「私を見たので信じたのですか。見なくても信じる人は幸福です」と言います。(ヨハネ 20:29)

- ◇ エマオに向かっていた2人の弟子に、ある人がどんなことを尋ねましたか。
- ◇ 弟子たちの心が燃えるようになったのはなぜですか。
- ◇ クレオパともう1人の弟子はエルサレムに戻り、どんな知らせを聞きましたか。その後どんなことがありましたか。
- ◇ トマスはイエスが生きていることをどのようにして確信するようになりましたか。

## ガリラヤの海<sup>はま べ</sup>の浜<sup>べ</sup>で

ヨハネ 21:1-25

使徒たちと過ごした最後の晩、イエスは、「私は、生き返らされた後、先にガリラヤに行きます」と言いました。(マタイ 26:32; 28:7, 10) それで大勢の弟子がガリラヤに旅をします。でも、そこで何をすればよいのでしょうか。

しばらくして、ペテロが、「漁に行ってくる」と言うと、他の6人の使徒たちも、「私たちも行く」と答えます。(ヨハネ 21:3) しかし、一晩かけても何も<sup>と</sup>捕れませんが、夜明けごろに、イエスが<sup>はま べ</sup>浜<sup>べ</sup>に現れますが、彼らはそれがイエスだとは気付きません。イエスは、「友よ、食べる物がありません」と<sup>か</sup>声<sup>かれ</sup>を掛けます。彼らは「ありません!」と答えます。イエスは、「舟の右側に網を投げなさい。そうすれば捕れます」と言います。(ヨハネ 21:5, 6) すると、あまりに大漁で、<sup>あみ</sup>網<sup>あみ</sup>を引き寄せることができません。

ヨハネがペテロに、「主だ!」と言います。(ヨハネ 21:7) ペテロは、漁の間は脱いでいた服をすぐに着て海に飛び込み、<sup>はま</sup>浜<sup>べ</sup>まで90<sup>ふね</sup>ほど泳ぎます。他の使徒たちも、魚でいっぱい<sup>あみ</sup>の網<sup>あみ</sup>を引きながらゆっくりやって来ます。

弟子たちが岸に着くと、「炭火の上に魚が置いてあり、パンもあ[り]」ます。イエスは、「今<sup>と</sup>捕った魚を少し持てきなさい」と言います。ペテロは<sup>あみ</sup>網<sup>あみ</sup>を岸に引き上げますが、大きな魚が153匹も入っています。「さあ、朝食を取りなさい」とイエスが言います。「あなたは誰ですか」とあえて尋ねる人はいません。イエスだと分かっていたからです。(ヨハネ 21:9-12) 弟子たちが<sup>いっしょ</sup>一緒にいる所にイエスが現れるのは、これで3度目です。

イエスはパンと魚を取って弟子たちに<sup>わた</sup>渡します。そして、捕れた魚を見ながらと思われませんが、ペテロに、「ヨハネの子シモン、これら以上に私を愛していますか」と質問します。これは、漁の仕事より、あなたにしてほしい活動の方を愛していますか、という意味です。ペテロは、「はい、主よ、私があなたに愛情を抱<sup>いだ</sup>いていることをあなたは知っています」と答えます。それでイエスは、

「私の子羊を養いなさい」と言います。(ヨハネ 21:15)

イエスは再び、「ヨハネの子シモン、私を愛していますか」と尋ねます。ペテロは戸惑<sup>たず</sup>いつつも気持ちを込めて、「はい、主よ、私があなたに愛情を抱<sup>いだ</sup>いていることをあなたは知っています」と答えます。イエスは、「私の小さな羊を世話しなさい」と言います。(ヨハネ 21:16)

イエスは3度目に、「ヨハネの子シモン、私に愛情を抱<sup>いだ</sup>いていますか」と質問します。さすがにペテロも、忠節が疑われているのだらうかと思ったかもしれません。今度は力強く、「主よ、あなたは全てのことに気付いています。私があなたに愛情を抱<sup>いだ</sup>いていることを知っています」と答えます。イエスはペテロがすべきことを再び強調し、「私の小さな羊を養いなさい」と言います。(ヨハネ 21:17) 会衆で指導している人たちは、神の羊の囲いに引き寄せられた人たちに仕えなければならないのです。

イエスは神から委ねられた活動を行ったために縛られ<sup>しば</sup>処刑<sup>しよけい</sup>されました。イエスは、ペテロも同じ経験<sup>しよけい</sup>をすることをこう明らかにします。「あなたはもっと若かった時、いつも自分で服を着て、歩きたい所を歩き回りました。しかし年を取ると、手を伸ばし、服を着せられ、望まない所に連れていかれます」。それでも、こう勧めます。「引き続き私の後に従いなさい」。(ヨハネ 21:18, 19)

ペテロは使徒ヨハネの方を見ながら、「主よ、この人はどうなりますか」とイエスに質問します。イエスが特別の愛情を抱<sup>いだ</sup>くヨハネにはどんな将来が待ち受けていますか。イエスは、「私が来る時まで彼がいることが私の願いだとしても、あなたにどんな関係があるのですか」と答えます。(ヨハネ 21:21-23) ペテロは他の人の将来がどうであろうと、イエスの後に従うべきなのです。イエスは、ヨハネが他の使徒たちよりも長生きし、イエスが王として来る<sup>まほろし</sup>幻<sup>あ</sup>を与えられることも示していました。

イエスが行ったことはほかにもたくさんあります。それら全てを巻物に書き記すことなど到底<sup>とうてい</sup>できません。



- イエスがガリラヤの海の<sup>はまべ</sup>浜辺に現れる
- ペテロと他の弟子たちは羊を養うことになる

136



- ◇ ガリラヤで何をすればよいかわからなかった使徒たちはどうしましたか。
- ◇ 使徒たちが、ガリラヤの海の<sup>はまべ</sup>浜辺にいるのはイエスだと気付いたのはなぜですか。
- ◇ 会衆で指導する人たちは何をしなければならないとイエスは強調しましたか。
- ◇ イエスはペテロが将来どんな経験をすると言いましたか。

# ペンテコステの前に数百人の人がイエスに会う

マタイ 28:16-20 ルカ 24:50-52 使徒 1:1-12; 2:1-4

イエスは復活した後、指定していたガリラヤの山で11人の使徒に会います。他の500人ほどの弟子たちも来ています。しかし、その中には、イエスを見てもイエスが生きていることを疑う人がいます。(マタイ 28:17。コリント第一 15:6) でも、イエスがこれから話すことを聞けば、イエスは本当に生きていると確信できるはずです。

イエスは、自分が神から天と地における全ての権威<sup>けんい</sup>を<sup>あた</sup>与えられていることを説明します。そして弟子たちにこう命じます。「行って、全ての国の人々<sup>ひとびと</sup>を弟子とし、父と子と聖霊の名においてバプテスマを<sup>ほどこ</sup>施し、私が命令した事柄<sup>ことがら</sup>全てを守るように教えなさい」。(マタイ 28:18-20) イエスは確かに生きており、復活後も良い知らせを伝える活動に注意を払っています。

イエスの弟子である人には、男性にも女性にも子供にも、人々を弟子とするという任務があります。反対者たちは、弟子たちが伝道したり人々を教えたりするのをやめさせようとするでしょう。しかしイエスは、「私には天と地における全ての権威<sup>けんい</sup>が<sup>あた</sup>与えられています」と言って安心させます。この言葉から、弟子たちはどんなことを確信できるでしょうか。イエスは、「私は体制の終結までいつの日もあなたたちと共にいるのです」と言います。イエスはこの時、良い知らせを伝える活動に参加する全ての人が奇跡<sup>きせき</sup>を行う、とは言いませんでした。それでも、彼らは聖霊による支援<sup>せいれい しえん</sup>を期待できるのです。

イエスは復活後、「40日にわたって」何度も弟子たちに現れます。弟子たちがそれに気付かないこともありましたが、イエスは「自分が生きていることを多くの確かな証拠<sup>しょうこ</sup>によって使徒たちに示し」、「神の王国について」教えました。(使徒 1:3。コリント第一 15:7)

使徒たちがガリラヤにいる間のことと思われませんが、イエスは彼らにエルサレム<sup>かれ</sup>へ<sup>もと</sup>戻るよう指示します。そし

て、エルサレムで彼らと会った時、こう話します。「エルサレムを離れないで、天の父が約束したもの、私から聞いたものを待っていないさい。ヨハネは水でバプテスマを<sup>ほどこ</sup>施しましたが、あなたたちは何日もしないうちに聖霊<sup>せいれい</sup>でバプテスマを<sup>ほどこ</sup>施されます」。(使徒 1:4, 5)

その後、イエスは再び使徒たちと会い、「弟子たちをベタニヤまで連れていき」ます。そこはオリブ山の東側の斜面にある村です。(ルカ 24:50) イエスはこれまで、自分の旅立ちについていろいろ話してきました。それでも使徒たちは、イエスの王国が地上のものだと思い込んでいます。(ルカ 22:16, 18, 30。ヨハネ 14:2, 3)

それで彼らは、「主よ、今イスラエルに王国を回復するのですか」と質問します。するとイエスは、「天の父の権限で定められた時や時期について、あなたたちが知る必要はありません」とだけ答えます。それから、行くべき活動にもう一度彼らの注意を向け、こう言います。「聖霊<sup>せいれい</sup>があなたたちに下る時、あなたたちは力を受け、エルサレムで、ユダヤとサマリアの全土で、また地の最も遠い所にまで、私の証人となります」。(使徒 1:6-8)

使徒たちとオリブ山にいる時、イエスは天に昇り始めます。そして、雲で姿が見えなくなります。イエスはもう人間の体ではなくなり、天へ<sup>のぼ</sup>昇っていきます。(コリント第一 15:44, 50。ペテロ第一 3:18) 忠実な使徒たちが天を見つめていると、彼らのそばに「白い服を着た2人の人」が現れます。その人たちは人間の体をした天使で、使徒たちにこう言います。「ガリラヤの人たち、なぜ空を眺めて立っているのですか。空へ上げられたこのイエスは、空に入っていくのをあなたたちが見たのと同じ仕方です」。(使徒 1:10, 11)

イエスが天に昇る時、盛大なセレモニーはありませんでした。その様子<sup>ようす</sup>を目撃したのは忠実な弟子たちだ

けでした。イエスは王国の王として「同じ仕方」で来ます。つまり、イエスの臨在は忠実な弟子たちにしか分からないのです。

使徒たちはエルサレムに帰り、その後しばらくの間、他の弟子たちと集まっています。「イエスの母マリア、イエスの兄弟たち」も一緒にいます。(使徒 1:14) 彼らはひたすら祈り続けています。ユダ・イスカリオテの代わりを選び、使徒の数を元通り12人にするためにも祈ります。(マタイ 19:28) 選ばれる人は、イエスの活動と復活の目撃証人でなければなりません。神の意志を確かめるためにくじが引かれます。こうした目的でくじを引いたという記述は、これ以後聖書にありません。(詩編 109:8。箴言 16:33) 結局、イエスが伝道に派遣した70人の1人だったと思われるマッテヤがくじに当たり、「11人の使徒に加えられ」ます。(使徒 1:26)

イエスが天に昇ってから10日後、西暦33年のペンテコステの祭りが始まります。エルサレムで120人ほどの弟子たちがある家の階上の部屋に集まっています。すると突然、激しい風が吹き付けるような音が家全体に響き渡ります。そして炎のような舌が幾つも現れ、そこにいた一人一人の上に1つずつとどまり、全員がさまざまな言語で話し始めます。これこそ、聖霊を注ぎ出すというイエスの約束の実現です! (ヨハネ 14:26)

- 
- ◇ イエスがガリラヤのある山で教えた時、そこには誰がいましたか。イエスはどんなことを話しましたか。
  - ◇ イエスは復活後どのくらいの期間にわたって弟子たちに現れましたか。その間、イエスは何をしましたか。
  - ◇ イエスが天に昇った時の様子から、イエスが王として来る時のことについて、何が分かりますか。
  - ◇ 西暦33年のペンテコステの時、どんなことが起きましたか。
- 





## 神の右にいるキリスト

使徒 7:56

イエスが天に昇<sup>のぼ</sup>ってから10日後のペンテコステの日に聖霊<sup>せいれい</sup>が注ぎ出されたことは、イエスが間違<sup>まちが</sup>いなく天にいることの証<sup>しょうこ</sup>拠<sup>こ</sup>です。しかし、その後も証<sup>しょうこ</sup>拠<sup>こ</sup>は増えていきます。大胆<sup>だいたん</sup>に証言した弟子のステファノは石打ちにされる直前、大きな声でこう言いました。「見てください。天が開いて、人の子が神の右に立っているのが見えます」。(使徒 7:56)

イエスは天に昇<sup>のぼ</sup>った後、聖書で予告されている、ある特別な指示がエホバから出るのを待っています。ダビデが聖霊<sup>せいれい</sup>に導かれて書いた記述にはこうあります。「エホバは私の主[イエス]に告げた。『私の右に座っていなさい。私があなたの敵たちをあなたの足台として置くまで』」。そして待つ期間が終わると、イエスは「敵の中に入っていき、敵<sup>せいふく</sup>を征服<sup>せいふく</sup>」するのです。(詩編 110:1, 2) しかし、敵に対して行動を起こすまでの間、イエスは天で何をするのでしょうか。

西暦<sup>せいれき</sup>33年のペンテコステの日、クリスチャン会衆が誕生しました。その時に、イエスは聖霊<sup>せいれい</sup>で油を注がれた弟子たちに対する支配を開始しました。(コロサイ 1:13) そして、弟子たちの伝道活動を導き、将来に役割を担えるよう訓練しました。それはどんな役割でしょうか。かれ<sup>かれ</sup>彼らは死ぬまで忠実<sup>ちゅうじ</sup>を貫<sup>つらぬ</sup>くなら、その後復活し、王国でイエスの仲間の王となるのです。

将来王となる人の中で特に優れた模範<sup>もはん</sup>を残したのは、サウロです。この人は後に、ローマ名のパウロでよく知られるようになりました。サウロはユダヤ人で、長い間律法を熱心<sup>ねっしん</sup>に守ってきた人でした。しかし、ユダヤ人の宗教指導者たちから誤った考えを教えられていたため、ステファノを石打ちにすることを支持しました。さらに、「主イエスの弟子たちを脅<sup>おど</sup>し、殺そうと意気込<sup>こ</sup>んで」、ダマスカスに向かいます。この時サウロは、イエス

の弟子たちを逮捕<sup>たいほ</sup>してエルサレムに連行する許可を大祭司カヤファからもらっていました。(使徒 7:58; 9:1) しかし、ダマスカスに向かう途中、天からの明るい光がサウロの周りを照らし、彼<sup>かれ</sup>は地面<sup>ちめん</sup>に倒<sup>たお</sup>れます。

すると、「サウロ、サウロ、なぜ私を迫害しているのですか」という声がどこからか聞こえます。サウロが、「主よ、あなたはどなたですか」と尋ねると、「イエスです。



- ・ イエスは神の右に座る
- ・ サウロが弟子になる
- ・ 私たちは何を喜べるか

あなたは私を<sup>はくがい</sup>迫害しています」という答えがあります。  
(使徒 9:4, 5)

イエスはサウロに、ダマスカスへ行って指示を待つようにと命じます。サウロは<sup>き せきてき</sup>奇跡的な光によって視力を失ったため、町まで<sup>だれ</sup>誰かに連れていってもらわなければなりません。次にイエスは、ダマスカスに住む弟子の1人アナニアに<sup>まぼろし</sup>幻の中で現れます。そして、ある場所へ行ってサウロに会うようにと言います。しかしアナニアが<sup>おそ</sup>恐れたので、イエスはこう言って安心させます。「この人は私が選んだ器であり、異国の<sup>ひとびと</sup>人々に、また王たちやイスラエルの民に私の名を知らせるからです」。その後、サウロは視力を回復し、ダマスカスで「イエスについて、この方こそ神の子だと伝え始め」ます。(使徒 9:15, 20)

パウロはイエスの支えを得ながら他の福音伝道者と<sup>いっしょ</sup>一緒に、イエスが始めた伝道活動を行っていきます。そして、神の祝福によって大成功を収めます。イエスがダマスカスに向かうパウロに現れてから25年ほどたった時、パウロは良い知らせが「天の下の至る所で伝えられ」たと書きました。(コロサイ 1:23)

さらに何年もたってから、イエスは愛する使徒ヨハネに、一連の<sup>まぼろし</sup>幻を見せます。それは聖書の「<sup>けいじ</sup>啓示」の書に記録されています。ヨハネはこの<sup>まぼろし</sup>幻の中で、イエスが王国の王として来る様子を見ることになりました。(ヨハネ 21:22)「[ヨハネ]は<sup>せいれい</sup>聖霊によって主の日に連れて

いかれ」たのです。(啓示 1:10)「主の日」とはいつのことなのでしょう。

聖書の預言を注意深く研究するなら、「主の日」が始まったのは現代であると分かります。1914年、第1次世界大戦が起き、その後の数十年間に、戦争、流行病、飢<sup>き</sup>餓、地震などが激増しました。これは、イエスが弟子たちに話した自分の「臨在」と「体制の終結」の「しるし」が大規模に実現していることの証拠です。(マタイ 24:3, 7, 8, 14) 王国の良い知らせを伝える活動が、ローマ帝国が<sup>ていこく</sup>あった地域に限らず世界中で行われています。

ヨハネは<sup>せいれい</sup>聖霊に導かれて、こうした出来事が何を意味しているのかを次のように説明します。「今や、私たちの神の救いと力と王国、またキリストの<sup>けんい</sup>権威が実現しました!」(啓示 12:10) イエスが<sup>はんい</sup>広い<sup>ひとびと</sup>範囲で人々に伝えた神の天の王国は、支配を開始したのです。

これはイエスの忠節な弟子たち全てにとって素晴らしい知らせです。彼らは次のヨハネの言葉を重く受け止めます。「それで、天とそこに住む者たち、喜びなさい! 地と海には災いが降り掛かります。悪魔<sup>あくま</sup>が、自分に残された時が短いことを知り、大きな怒りを抱いてあなた方の所に下ったからです」。(啓示 12:12)

イエスはもう、天の父の右に座って待っているわけではありません。王として支配しており、間もなく自分の敵たち全てを<sup>ほろ</sup>滅ぼします。(ヘブライ 10:12, 13) では、胸の躍るどんな将来が待っているのでしょうか。

- ◇ イエスは天に<sup>のぼ</sup>昇った後、何をしましたか。
- ◇ 「主の日」が始まったのはいつですか。その後どんなことが起きましたか。
- ◇ 私たちはどんなことを喜べますか。

## イエスはパラダイスを回復し、神からの任務を全て果たす

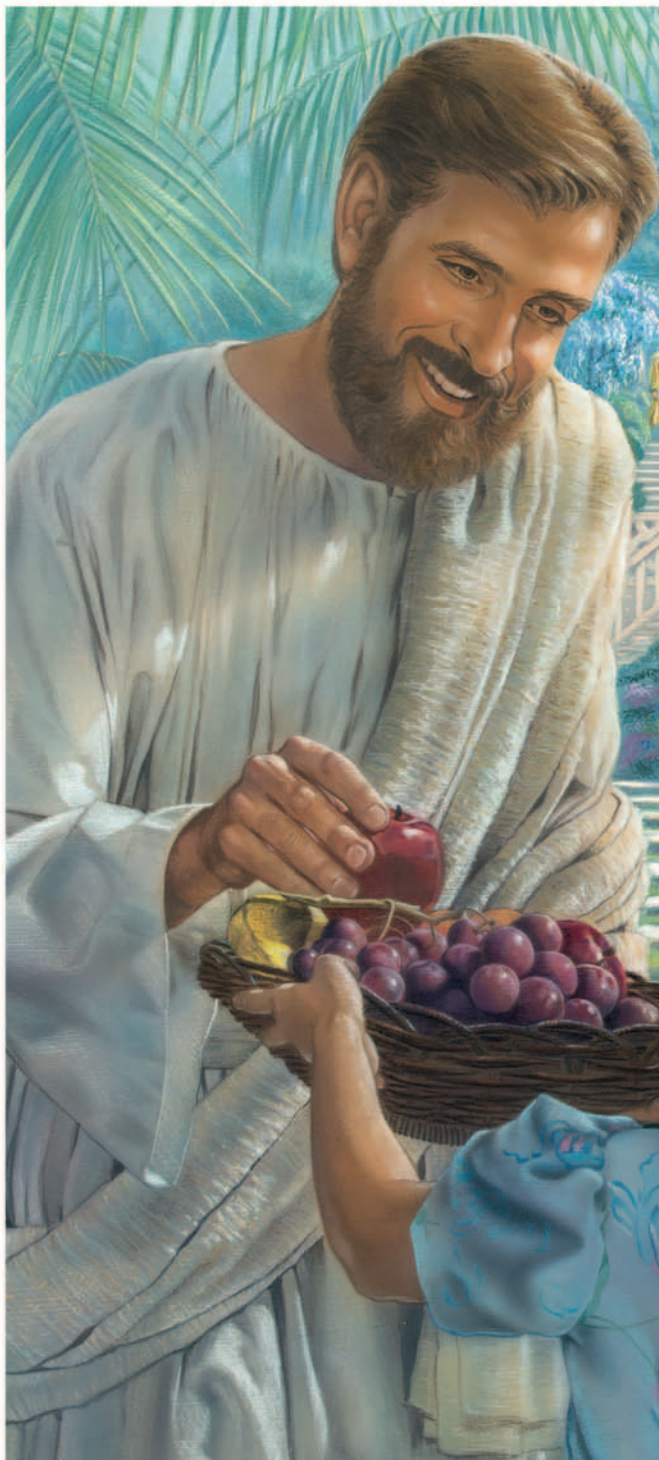
コリント第一 15:24-28

イエスはバプテスマを受けた後すぐ、敵に立ち向かいました。その敵はイエスが伝道を始める前から、何とかイエスに失敗を犯させようとしていました。その敵つまり悪魔<sup>あくま</sup>は、何度もイエスを誘惑<sup>ゆうわく</sup>しようとしたのです。しかし、後にイエスは悪魔<sup>あくま</sup>についてこう言いました。「世の支配者が来ようとしてい[ま]す。もっとも、その者は私に対して何の力もありません」。(ヨハネ 14:30)

使徒ヨハネ<sup>まぼろし</sup>は幻<sup>まぼろし</sup>を見、<sup>たつ</sup>「大きな竜……あの初め<sup>へび</sup>の蛇<sup>へび</sup>で、悪魔およびサタン」の将来には何が待ち受けているかを知りました。人類のこの卑劣<sup>ひれつ</sup>な敵は天から追い出されます。そして、「自分に残された時間が短いことを知り、大きな怒りを抱[き]」ます。(啓示 12:9, 12) 現代のクリスチャンは、サタンに「残された時間が短い」ということを確信しています。そして間もなく、<sup>へび</sup>「初め<sup>へび</sup>の蛇<sup>へび</sup>である竜<sup>たつ</sup>」が底知れぬ深みに投げ込まれ、イエスが神の王国で支配する1000年間は無力になることを知っています。(啓示 20:1, 2)

では、1000年の間、この地上ではどんなことが起きますか。誰<sup>だれ</sup>がそこで暮らし、どんな社会になるのでしょうか。羊とヤギの例え話の中で、イエスがそのことを説明しています。イエスは羊のような正しい人たち、イエスの兄弟たちに協力し親切を示す人たちにどんな将来が待っているかを話しました。また、羊とは真逆の、ヤギのような人たちの将来についても語っています。こう言いました。「この人たち[ヤギ]は永遠<sup>とわい</sup>の死<sup>くわい</sup>を迎え、正しい人たち[羊]は永遠<sup>とわい</sup>の命<sup>めい</sup>を受けます」。(マタイ 25:46)

この言葉は、イエスが自分の隣で杭<sup>こと</sup>に掛けられていた犯罪者に語った事柄<sup>こと</sup>を理解する上で役立ちます。イエス<sup>こと</sup>がその男性にした約束は、天の王国<sup>いつしよ</sup>で一緒に支配するという、忠実な使徒<sup>く</sup>たちに対する約束とは別のものでした。イエスはその悔い改めた男性に、「今日あなたに言います。あなたは私と共にパラダイスにいることに





- 羊とヤギはそれぞれどうなるか
- 大勢の人が地上のパラダイスでの暮らしを楽しむ
- イエスは道、真理、命



なります」と言いました。(ルカ 23:43) ですから、この人に与えられたのは、美しく広々とした庭園であるパラダイスで生きるという希望だったのです。将来、イエスが人々を裁く時に羊と見なされる人たちも、そのパラダイスで「永遠の命を受け」ます。

この点は、使徒ヨハネが描いた将来の地球全体の様子とぴったり重なります。こう説明しています。「神の天幕が人々と共にあり、神は彼らと共に住み、彼らは神の民となる。神が人々と共にいるようになるのである。また、神は彼らの目から全ての涙を拭い去る。もはや死はなくなり、悲しみも嘆きも苦痛もなくなる。以前のものは過ぎ去ったのである」。(啓示 21:3, 4)

イエスの隣で杭に掛けられていた男性がパラダイスでの暮らしを楽しむには、まず復活しなければなりません。復活するのはその人だけではありません。イエスははっきりこう言いました。「記念の墓の中にいる人が皆、彼の声を聞いて出てくる時が来るのです。良いことをした人は命の復活へ、忌まわしいことを行っていた人は裁きの復活へと出てきます」。(ヨハネ 5:28, 29)

忠実な使徒たちを含む、天へ行く限られた人数の人たちはどうなるのでしょうか。聖書には、「彼らは神とキリストの祭司となり、1000年の間キリストと共に王として支配する」とあります。(啓示 20:6) イエスのこれら共同支配者たちは、地上で人間として生きていました。

ですから彼らは、地上にいる人たちのことをよく理解し、思いやり深い仕方ちがで支配を行うに違いありません。(啓示 5:10)

イエスは自分の贖いを人類に適用し、彼らを受け継いだ罪による苦しみから自由にします。そして共同支配者たちと一緒に、忠実な人々に完全さを回復させます。その時、神がもともと人間に楽しんでほしいと思っていた暮らしができるようになります。それは、アダムとエバに子供を増やして地上をいっぱいにするようにと命じた時、神が人類のために考えていた暮らしです。さらに、アダムあがなの罪に由来する死も、もう存在しません。

こうしてイエスはエホバからの任務を全て成し遂げます。1000年の支配の終わりに、イエスは王国と完全になった人類を父に返します。イエスの非常に謙遜なこの行動について、使徒パウロはこう書いています。「全てのものがキリストに服従する時には、神の子キリスト自身も、全てのものを自分に服従させた方に服従します。こうして、神が誰にとっても全てのものとなるのです」。(コリント第一 15:28)

神の壮大な目的を成し遂げる上で、イエスは確かに重要な役割を果たします。神の目的はこれからも、永遠にわたって明らかにされていくでしょう。どんなことが明らかにされるとしても、イエスは「道であり、真理であり、命」であり続けるのです。(ヨハネ 14:6)

- 
- ◇ 人類最大の敵である悪魔にはどんな将来が待ち受けていますか。
  - ◇ パラダイスでの暮らしを楽しむのは誰ですか。どんな社会になりますか。
  - ◇ イエスは1000年間の支配の終わりまでにどんなことを成し遂げますか。その後、何をしますか。



## なら 倣<sup>なり</sup>いたいイエスの魅力<sup>みりょく</sup>

### 思いやり深い

イエスは完全だったので、ほかの人が抱<sup>かか</sup>えているような悩<sup>なや</sup>みや不安はありませんでした。それでも、他の人の気持ちをとても大切にしました。自分のことを二の次にして、自分から行動しました。思いやりに動かされてそうしたのです。こうした模範<sup>もはん</sup>は次の章で取り上げられています。32, 37, 57, 99

### 親しみやすい

子供から大人まで、いろいろな人がイエスのそばにいたいと思いました。イエスとの距離<sup>きょり</sup>を感じたり、見下されていると感じたりしなかったのです。イエスが気遣<sup>きづか</sup>ってくれていることが伝わったので、一緒<sup>いっしょ</sup>にいと落ち着きました。この点は、次の章で学べます。25, 27, 95

### よく祈<sup>いの</sup>る

イエスはいつも天の父に頼<sup>たよ</sup>りました。頻繁<sup>ひんぱん</sup>に、真剣<sup>しんけん</sup>に祈<sup>いの</sup>ったのです。独りでいる時も、仲間の崇拜者<sup>すうはいしや</sup>と一緒にいる時も祈<sup>いの</sup>りました。食事の時だけでなく、いろいろなタイミングで祈<sup>いの</sup>りました。天の父への感謝と賛美を祈<sup>いの</sup>りの中で言い表し、大事な決定をする前に助けを祈<sup>いの</sup>り求めました。イエスの祈<sup>いの</sup>りについては次の章で学べます。24, 34, 91, 122, 123

### 人に<sup>に</sup>尽くした

イエスは、休みたい、リラックスしたいと思った時にも、他の人のことを優先しました。自分中心ではありませんでした。これも、ぜひ倣<sup>なり</sup>いたい点です。次の章でこの手本をじっくり考えてみましょう。19, 41, 52

### 快く許<sup>ゆる</sup>す

イエスは、許<sup>ゆる</sup>すことの大切さを教えただけではありません。弟子たちや他の人たちと接する時に、許<sup>ゆる</sup>すとはどういうことかを実際に示しました。次の章を読んで許<sup>ゆる</sup>しについて考えましょう。26, 40, 64, 85, 131

### 熱心さ

聖書の予告によると、メシアはユダヤ人のほとんどから受け入れられず、敵によって殺されることになっていました。ですからイエスは、地上での活動で手<sup>て</sup>を抜<sup>ぬ</sup>くこともできました。でもそうはせず、熱意<sup>こ</sup>を込めて真<sup>ま</sup>の崇拜<sup>すうはい</sup>を推進しました。無関心や反対に直面する弟子たちにとって良い手本です。次の章をご覧ください。16, 72, 103

### けんそん 謙遜<sup>けんそん</sup>さ

イエスは知識や知恵など非常に多くの点で、不完全な他の人とは比べ物にならないほど優れていました。身体面でも精神面でも完全でした。周囲の人と圧倒的な差があったのです。それでも謙遜<sup>けんそん</sup>に他の人に仕えました。謙遜<sup>けんそん</sup>さについては次の章で学べます。10, 62, 66, 94, 116

### しんぼう 辛抱<sup>しんぼう</sup>強さ

イエスは、使徒たちや他の人たちがイエスの手本<sup>なら</sup>に倣<sup>なり</sup>えなかったり教えを实践<sup>じっせん</sup>できなかったりしても、一貫<sup>いっかん</sup>して辛抱<sup>しんぼう</sup>強さを示しました。大切な教訓を何度も教え、エホバを身近に感じられるよう助けました。その点については、次の章で取り上げられています。74, 98, 118, 135





さくいん  
聖句索引

聖句の後の数字は章番号です。

マタイ

1:18-25	4	19:16-30	96
2:1-12	7	20:1-16	97
2:13-23	8	20:17-28	98
3:1-12	11	20:29-34	99
3:13-17	12	21:1-11	102
4:1-11	13	21:12, 13	103
4:12	18	21:14-17	102
4:13-22	22	21:18, 19	103
4:23-25	24	21:19-27	105
5:1-7:29	35	21:28-46	106
8:1-4	25	22:1-14	107
8:5-13	36	22:15-40	108
8:14-17	23	22:41-23:24	109
8:18	44	23:25-24:2	110
8:19-22	65	24:3-51	111
8:23-27	44	25:1-13	112
8:28-34	45	25:14-30	113
9:1-8	26	25:31-46	114
9:9-13	27	26:1-5	115
9:14-17	28	26:6-13	101
9:18-22	46	26:14-19	115
9:18, 23-26	47	26:20	116
9:27-34	48	26:21-29	117
9:35-10:15	49	26:30	123
10:16-11:1	50	26:31-35	118
11:2-15	38	26:36-46	123
11:16-30	39	26:47-56	124
12:1-8	31	26:57-68	125
12:9-14	32	26:69-75	126
12:15-21	33	27:1-11	127
12:22-32	41	27:12-14	128
12:33-50	42	27:15-17	129
13:1-53	43	27:18, 19	128
13:54-58	48	27:20-30	129
13:55, 56	9	27:31, 32	130
14:1-12	51	27:33-44	131
14:13-21	52	27:45-56	132
14:22-36	53	27:57-28:2	133
15:1-20	56	28:3-15	134
15:21-31	57	28:16-20	137
15:32-16:12	58		
16:13-27	59		
16:28-17:13	60		
17:14-20	61		
17:22-18:5	62		
18:6-20	63		
18:21-35	64		
19:1-15	95		

マルコ

1:1-8	11
1:9-11	12
1:12, 13	13
1:14, 15	20
1:16-20	22
1:21-34	23
1:35-39	24

1:40-45	25
2:1-12	26
2:13-17	27
2:18-22	28
2:23-28	31
3:1-6	32
3:7-12	33
3:13-19	34
3:19-30	41
3:31-35	42
4:1-34	43
4:35-41	44
5:1-20	45
5:21-34	46
5:22-24	47
5:35-43	47
6:1-6	48
6:3	9
6:6-11	49
6:12, 13	50
6:14-29	51
6:17-20	18
6:30-44	52
6:45-56	53
7:1-23	56
7:24-37	57
8:1-21	58
8:22-38	59
9:1-13	60
9:14-29	61
9:30-37	62
9:38-50	63
10:1-16	95
10:17-31	96
10:32-45	98
10:46-52	99
11:1-11	102
11:12-18	103
11:19-33	105
12:1-12	106
12:13-34	108
12:35-40	109
12:41-13:2	110
13:3-37	111
14:1, 2	115
14:3-9	101
14:10-16	115
14:17	116
14:18-25	117
14:26	123

14:27-31	118
14:32-42	123
14:43-52	124
14:53-65	125
14:66-72	126
15:1	127
15:2-5	128
15:6-19	129
15:20, 21	130
15:22-32	131
15:33-41	132
15:42-16:4	133
16:5-8	134

ルカ

1:5-33	1
1:34-56	2
1:56	4
1:57-79	3
2:1-20	5
2:21-39	6
2:40-52	10
3:1-18	11
3:19, 20	18
3:21, 22	12
4:1-13	13
4:14, 15	20
4:16-31	21
4:31-41	23
4:42, 43	24
5:1-11	22
5:12-16	25
5:17-26	26
5:27-32	27
5:33-39	28
6:1-5	31
6:6-11	32
6:12-16	34
6:17-49	35
7:1-10	36
7:11-17	37
7:18-30	38
7:31-35	39
7:36-50	40
8:1-3	41
8:4-18	43
8:19-21	42
8:22-25	44
8:26-39	45

8:40-48	46
8:40-42	47
8:49-56	47
9:1-5	49
9:6	50
9:7-9	51
9:10-17	52
9:18-26	59
9:27-36	60
9:37-43	61
9:43-48	62
9:49, 50	63
9:51-62	65
10:1-24	72
10:25-37	73
10:38-11:13	74
11:14-36	75
11:37-54	76
12:1-34	77
12:35-59	78
13:1-21	79
13:22-14:6	82
14:7-24	83
14:25-35	84
15:1-10	85
15:11-32	86
16:1-13	87
16:14-31	88
17:1-10	89
17:11-19	92
17:20-37	93
18:1-14	94
18:15-17	95
18:18-30	96
18:31-34	98
18:35-19:10	99
19:11-28	100
19:29-44	102
19:45-48	103
20:1-8	105
20:9-19	106
20:20-40	108
20:41-47	109
21:1-6	110
21:7-38	111
22:1-13	115
22:14-18	116
22:19-23	117
22:24-38	118
22:39-46	123

22:47-53	124	ヨハネ	6:25-48	54	11:38-54	91	18:13, 14	125	
22:54	125	1:6-8, 15-28	11	6:48-71	55	11:55-12:11	101	18:15-18	126
22:54-62	126	1:29-51	14	7:1	56	12:12-19	102	18:19-24	125
22:63-65	125	1:32-34	12	7:2-10	65	12:20-27	103	18:25-27	126
22:66-23:3	127	2:1-12	15	7:11-32	66	12:28-50	104	18:28-35	127
23:4-16	128	2:12-22	16	7:32-52	67	13:1-17	116	18:36-38	128
23:18-25	129	2:23-3:21	17	8:12-36	68	13:18-30	117	18:39-19:5	129
23:24-31	130	3:22-4:3	18	8:37-59	69	13:31-38	118	19:6-17	130
23:32-43	131	4:3-43	19	9:1-18	70	14:1-31	119	19:17-24	131
23:44-49	132	4:43-54	20	9:19-41	71	15:1-27	120	19:25-30	132
23:50-24:3	133	5:1-16	29	10:1-21	80	16:1-33	121	19:31-20:1	133
24:4-12	134	5:17-47	30	10:22-42	81	17:1-26	122	20:2-18	134
24:13-49	135	6:1-13	52	11:1-16	89	18:1	123	20:19-29	135
24:50-52	137	6:14-25	53	11:17-37	90	18:2-12	124	21:1-25	136

## 例え(例え話)の索引 さくいん 数字は章番号です。

新しいぶどう酒と古い革袋 <small>かわぶくろ</small>	28	狭い門 <small>せま</small>	35	ブドウ園の労働者	97
家の土台	35	正しくない管理人	87	ブヨはこし取り、ラクダはのみ込む <small>こ</small>	109
イチジクの木	79	種をまく人	43	古い外衣に新しい布切れを使う	28
市場にいる子供たち	39	種をまく人が眠る <small>ねむ</small>	43	放蕩息子 <small>ほうとう</small>	86
いなくなった羊	63	タラント	113	貧しい人を食事に招く	83
いなくなっていた息子が戻ってくる <small>もど</small>	86	父は快く与えてくださる <small>あた</small>	35	ミナ	100
岩の上に建てられた家	35	地の塩	35	麦粉と混ぜたパン種	43
王が巨額の借金を取り消す <small>きょがく</small>	64	忠実な管理人	78	めんどりがひなを集める	110
王が戦いの前に考える	84	徴税人とパリサイ派の人 <small>ちようぜいにん</small>	94	持ち主の息子を殺した耕作人たち	106
王が設けた披露宴 <small>ひろうえん</small>	107	塔を建てる <small>とう</small>	84	最も目立つ場所を取る	83
お金を借りていた2人の人	40	ドラクマ硬貨が見つかる <small>こうか</small>	85	やもめと裁判官	94
からしの種、王国	43	鳥とユリ	35	裕福な男性とラザロ <small>ゆうふく</small>	88
からしの種、信仰 <small>しんこう</small>	89	奴隷(主人の帰りを待って <small>どれい</small>		ラクダが縫い針の穴を通る <small>ぬいはり</small>	96
兄弟の目の中にあるわら	35	見張っている)	78	立派な羊飼 い	80
倉を建てた裕福な人 <small>ゆうふく</small>	77	奴隷(外から戻ってきた) <small>どれい</small>	89	労働者たちにデナリを払う	97
高価な真珠 <small>しんじゆ</small>	43	奴隷(忠実で思慮深い) <small>どれい</small>	111		
耕作人たちが人を殺す <small>どれい</small>	106	奴隷(許そうとしない) <small>どれい</small>	64	囲みの索引 <small>さくいん</small>	
小麦と雑草	43	なくなったドラクマ硬貨 <small>こうか</small>	85	「自分たちを清める時が来る」	6
小麦の粒が死んで実を結ぶ <small>つぶ</small>	103	縫い針の穴 <small>ぬいはり</small>	96	楽しい旅	10
さまざまな場所に落ちた種	43	野原に隠された宝 <small>かく</small>	43	サマリア人とは?	19
執拗な友人 <small>しつよう</small>	74	パリサイ派のパン種	58	邪悪な天使に取りつかれる <small>じゃあく</small>	23
邪悪な天使が戻ってくる <small>じゃあく</small>	42	引き網 <small>ひきあみ</small>	43	断食についての例え	28
10人の乙女 <small>おとめ</small>	112	羊とヤギ	114	繰り返し教える <small>く</small>	35
食事の招待を断る	83	人を集める漁師	22	イエスの汗は血のように滴った <small>あせ</small>	123
親切なサマリア人	73	豚に真珠 <small>ぶた しんじゆ</small>	35	血の土地	127
真のブドウの木	120	ブドウ園に行くよう言われた		むち打ち	129
すきに手を掛ける <small>か</small>	65	2人の子供 <small>こい</small>	106	「杭に掛ける!」	132

## メシアについての預言

出来事	預言	実現	章
ベツレヘムで生まれる	ミカ 5:2	ルカ 2:1-6	5, 7, 67
エジプトへ逃げ、そして戻る	ホセア 11:1	マタイ 2:13-15, 19, 20	8
幼いイエスを殺そうとする計画で 息子を亡くした母親たちが泣く	エレミヤ 31:15	マタイ 2:17, 18	8
捕らわれている人に釈放を伝える	イザヤ 61:1, 2	ルカ 4:17-21	21
ガリラヤのカペルナウムに住む	イザヤ 9:1, 2	マタイ 4:13-17	22, 67
多くの病人を癒やす	イザヤ 53:4	マタイ 8:16, 17	23
大通りで言い争わない	イザヤ 42:1-4	マタイ 12:16-21	33
例えを使って教える	詩編 78:2    イザヤ 6:9, 10	マタイ 13:13-15, 34, 35	43
子ロバに乗り、エルサレムに入る	ゼカリヤ 9:9	マタイ 21:1-9	102
多くの人は信じない	イザヤ 6:10; 53:1	ヨハネ 12:37, 38	104
信頼していた友に裏切られる	詩編 41:9	ヨハネ 13:18, 21	117
弟子たちはイエスを見捨てて散り散りになる	ゼカリヤ 13:7	マタイ 26:31, 54-56	118, 124
理由もなく憎まれる	詩編 35:19; 69:4	ヨハネ 15:24, 25	120
兵士たちが外衣を分ける	詩編 22:18	ヨハネ 19:23, 24	131
杭の上で喉が渇く	詩編 22:15	ヨハネ 19:28	132
死んだ後に体を刺し通される	ゼカリヤ 12:10	ヨハネ 19:34, 37	133
骨が折られることなく死ぬ	詩編 34:20	ヨハネ 19:36	133

詳しい情報を得たい方は [www.jw.org](http://www.jw.org) をご覧になるか、エホバの証人 (Jehovah's Witnesses) にご連絡ください。